



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	特別支援教育と地域支援プログラムの展開 第1報
Author(s)	吉藤, さゆり; 北川, 和博; 内田, 雅志 他
Citation	発達・学習支援ネットワーク研究, 4, 1-180
Issue Date	2005-09-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87925
Type	departmental bulletin paper
File Information	vol_4.pdf

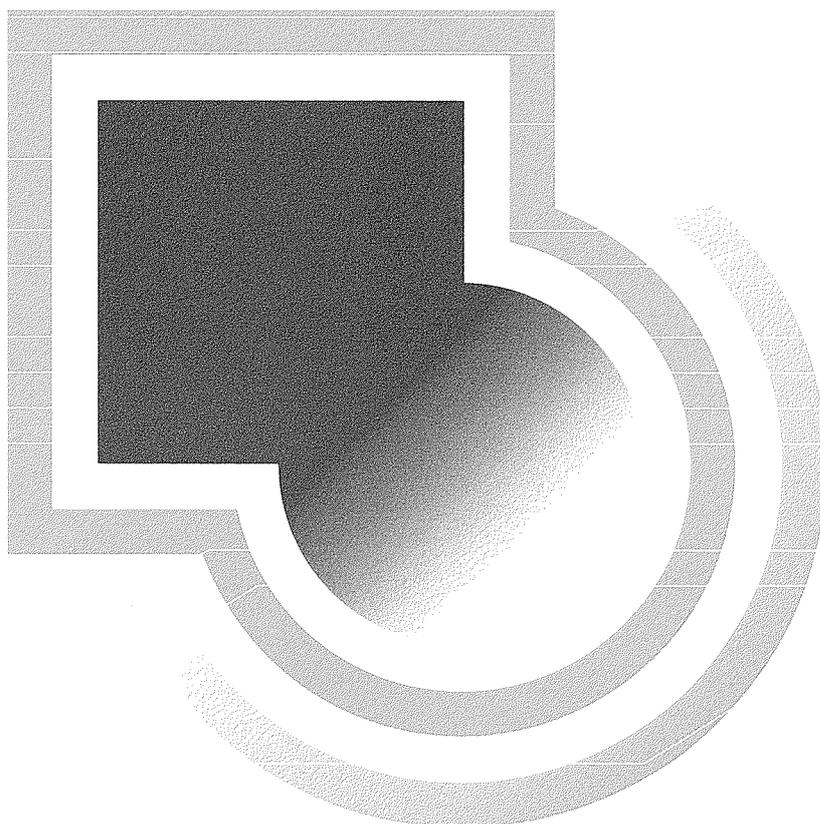


発達・学習支援ネットワーク研究

特別支援教育と地域支援
プログラムの展開

－第1報－

第4号
2005年9月



北海道大学大学院教育学研究科

特別支援教育と地域支援プログラムの展開



目 次

1. はじめにー研究プロジェクトの目的	1
2. シンポジウム	5
2.1. 第1回シンポジウム	6
『特別支援教育を具体化するために～人・地域・ネットワーク形成～』2004.11.23	6
シンポジウム1（午前）	8
1. 学校内外での組織作り	
～教育現場における実情と校内外組織の連携を考える種まく人たちへ～	10
2. 学校現場から、そして地域へ	24
3. 学校と他職種との連携を考える	43
4. 地域でネットワークを作り出すコツ	55
シンポジウム2（午後）	67
「特別支援教育を具体化するために」 総合討論	67
2.1.1. 第1回シンポジウムの解説	93
2.1.2. 地域のあり方、支援のあり方	95
2.2. 第2回シンポジウム	107
『特別支援教育と地域連携～実践現場からの報告～』2005.2.12	109
シンポジウム1（午前）	111
1. 幼児期から就学へ・その後の連携の試み	
～特別支援教育を意識した、事例実践をとおして～	112
2. 特別支援教育 石狩市の取り組み	125
3. 地域連携の困難性について	136
シンポジウム2（午後）	150
「特別支援教育を具体化するために」 総合討論	150
2.2.1. 第2回シンポジウムの解説	174
2.2.2. あたらしい時代の<人・地域・ネットワーク>形成	176

1. はじめにー研究プロジェクトの目的

たたけよ、されば開かれん

北海道大学大学院教育学研究科 教育臨床講座 田中康雄

北海道大学大学院教育学研究科では、「特別支援教育と地域支援プログラムの展開」というテーマで、2004年度研究プロジェクトを始動させた。

基本的なスタンスは、第1回シンポジウムで、逸見科長（当時）が述べたように、文部科学省による政策的提起である特別支援教育を展開するうえでは、地域・学校・行政の総合的結びつき、つまり連携というテーマを無視することはできない、という点にある。

理念とタイムリミットが先行された政策である特別支援教育をめぐるっては、各市町村、都道府県レベルにおいていまだ試行錯誤の状態というのが実態ではないだろうか。時に先駆的と呼べる活動をしている地域展開も、数年のモデル事業で精鋭部隊により展開したもので、メンバー変更により容易にシステムが変容する危惧を抱かせるものが少なくない。

そこにおいて、われわれのプロジェクトの行き先は、子どもの成長、発達に広く「教育学」がどのような貢献ができるのかという自問自答である。かすかな一条の光は、これまで高等教育のあり方から、障害児教育、発達障害に関する基礎的な研究を長年推し進め、加えて教育臨床学あるいは臨床心理学との融合を推進しようとしている教育学研究科に内在している地力であろう。

その力と特色をどのように生かすべきかが、今回のプロジェクトで少しでも明確になればよいと思い、シンポジウムを組んだ。

主たるシンポジストは、学内だけではなく、学外の他職種の方々も含め、当然明らかに実践者と呼べる方ばかりを結集させた。

初年度は、まず多くの他職種の方々を招いての現場からの声に耳を傾けようとしたものである。高名な方々ばかりではなく、地域に根ざし、真摯に子どもの未来を担い、己に責任を課している方の実践を聴くことで、間接的に経験したいという願いがある。

将来、北大ネットと呼べるような、開かれた結びつきを拓く一步になればと、学際的な連携も試みた、教育学研究科の臨床知への冒険と実務化への挑戦でもある。

すこし自画自賛的ではあるが、この企画進行中に、さまざまな邂逅があり、すこしずつではあるが、学部内に地殻変動の予感が起きている。

私たちは、ようやく大きく重い扉に、内外で手は携えながら、触れることができたといえるかもしれないという、ささやかな感触を持つことができた。

第1回

特別支援教育を前にして、ひと、地域、
そしてネットワークを考えるシンポジウム

北海道大学教育学研究科主催

(「特別支援教育と地域支援プログラムの展開」研究プロジェクト)

特別支援教育を前にして、ひと、地域、そしてネットワークを
考えるシンポジウム

特別支援教育を具体化 するために ～人・地域・ネットワーク形成～

シンポジウム1 (午前) 司会：田中康雄 (教育臨床心理 G)

1. 学校内外での組織作り ～教育現場における実情と校内
外組織の連携を考える 種まく人たちへ～
吉藤さゆり (新得町立佐幌小学校 養護教諭)
2. 学校現場から、そして地域へ
北川和博 (幕別町立白人小学校教諭)
3. 学校と他職種との連携を考える
内田雅志 (帯広大谷短期大学 社会福祉科講師)
4. 地域でネットワークを創り出すコツ
佐々木浩治 (足寄町役場福祉課福祉係長)

シンポジウム2 (午後) 司会：田中康雄 (教育臨床心理 G)

「特別支援教育を具体化するために」 総合討論

吉藤さゆり 北川和博 内田雅志 佐々木浩治
青木 紀 (教育福祉 G) 坪井由実 (教育行政 G)

11月23日 10時～3時

文系合同教育研究棟 1階 W103

連絡先 北海道大学教育学研究科教育臨床講座 田中康雄

2.1. 第1回シンポジウム

『特別支援教育を具体化するために～人・地域・ネットワーク形成～』2004.11.23

2004年、11月23日の午前10時から夕方4時近くまで開かれた。第1回シンポジウムは、企画者である田中の十勝における人脈によるものであった。

「特別支援教育を具体化するために ～人・地域・ネットワーク形成～」とうたったタイトルは、結局は人と人のつながりこそがネットワークの第一歩であるという、ささやかな経験原則からきている。

演者は、それぞれ全人格を賭けて、現場で向き合っている方ばかりである。札幌の地で十勝パワーが会場を席卷した時であった。

個人的なことであるが、ネットワーク形成には欠かせない事柄ではないだろうかと思ひ、演者とのつながりと講演内容への期待について少し記させていただく。

吉藤さんに最初に出会ったのは、帯広の児童相談所企画による虐待の講演会場であった。講演終了後、つかつかと近づいてきた彼女は、「あなたが本当に信用のできる医師であるかどうか、確認したい」と話された。その後、学校の子どもたちを巡り、あるいは同僚教員のメンタルヘルスを巡り、様々な場面で、吉藤さんは私の動きを確認していたのだろう。いつのまにか、わずかな信頼を得たのであろうか、今は互いに人として支え合える関係に成長した。彼女の闘いは、しかし、そこに子どもがいる限り止むことなく、持続していくのだろう。血気盛んで、しかし情緒豊か故の傷つきやすさが、気がかりでありながらも、終始エールを送り続けたい人の一人である。彼女のあつい思いを、多くの方に体感して頂きたいと願う。

北川さん、通称キタさんとは、1週間程度のアメリカLD（学習障害）研修ツアーで一緒になった。教員独特の律儀さ、まじめさに加え、折り紙という得意技と、人を飽きさせない話芸と歌唱力をもつ、多芸な人である。アメリカで意気投合したわれわれは、その後、互いの職場を行き来した。私は彼のいる特殊学級に足を入れ、彼は私の診察室や指導場面に同席した。教育と医療の小さな融合をしてきた。多くの子どもたちが日常の守り人であるキタさんに救われた。感謝している。キタさんは、その後独り立ちして今の職場に欠かせない指導者として力を発揮しているだけでなく、独自の視点で地域のなかで人々のたまり場を作り続けている。日常の市井の教育実践者となりつつある。頼もしい人である。

講演では、いいたいことが山ほどあり、時間内に纏まるのが、まずない。次から次に、湧いてくる思いは、彼の熱意とともに、いまだ底をみせない。恐ろしい男である。

内田さん、通称ウッチャンは、私の師匠である。彼が児童相談所にいた時に私は嘱託医であった。発達評価のイロハから、親との面接の仕方、すべてを彼から伝授され、彼の点検の目を通して、鍛えられてきたように感じている。

職業人としての養成課程から生じた着目点に微妙な差異があることで、よき刺激をいただき、多面的に物事を見る力を鍛えられたように思う。私が誇れる点は決断の早さだけで、それも後先考えないこともあり、利点ばかりではない。ウッチャンは、先走りする私を常に諫め、より発展的な広がりをもたらしてくれる。私の外部実行機能というべき存在でもある。

ウッチャンに感謝をこめて長所を追加するとしたら、これいじょうに人の出会いを作り出す、タイミングの天才ということである。後に述べる佐々木さんとの出会いのお膳立てをしてくれたのは、彼である。

講演では、母校への凱旋という気持ちと、逡巡しては丁寧に記述しようとする彼の人柄から、本当に伝えたい部分が半端になってしまったのではないだろうか。十分に時間を設けることの出来なかったことを詫びたい。次回には、十分に時間を作り、思い切り話をしてほしいと思う。

さて最後は、佐々木さんである。役場の人間というよりも、生涯支援の雄である。彼に支えられ、救われ、癒された人はどのくらいいるのだろうか。粘り強く、懐も深く、やさしさにあふれた配慮と気配りの人である。

ウッチャンの紹介で出会ったわれわれは、その日のうちに楽しく酔い、生涯の同士として今がある。公私ともに大切な人であり、私自身が彼にいかほど助けられ、支えられたかと思うと、感謝でいっぱいである。

よく二人で「倒れても前向きで」といっていたが、最近の二人の忙しさでは、倒れたときの姿勢までは、きっと気持ちが行き届かないだろうと、思っている。そうならないように、都度手を抜き、息抜きしていこうね。

個人的な原稿で申し訳ないと思う。日頃からあまりにも近くにいる人たちばかりで、実はこんな個人的なメッセージも伝え切れていない。今回は、そういった意味でもよい機会を得たと思っている。

第1回のシンポジストとして、十分に力を発揮し、以後の道筋を作ってくれたと思っている。
ありがとう。まだまだ、これからだよ。

田中 康雄

シンポジウム1 (午前)

(司会：室橋) 特別支援教育という文言が登場して、各地でさまざまな展開が行われ、かつ企画されています。しかし、単なる学内システムの構築だけでなく、地域との連携の在り方が問われていると思われまふ。しかし、地域といつてもさまざまでしょう。いろいろな意味で、過密・過疎の状態がまだあるだろうと思ひます。札幌の課題もいろいろありますが、しかし、むしろ地域で、地方で、この特別支援教育をいかに立ち上げていくかということが重要な課題になってくるのではないかと思ひます。

今日は、十勝でずっと児童精神科医としてお仕事をされ、そこでネットワークを作り上げてこられ、そしてこの4月から私たちの教育学研究科と一緒に仕事をしておられる田中康雄先生をコーディネーターとして、シンポジウムを開くことにいたしました。

今年から私たち教育学研究科では「特別支援教育と地域支援プログラムの展開」研究プロジェクトというのを立ち上げまして、田中先生を代表にして、この課題に教育学研究科として取り組んでいこうという試みも始めております。

今日は、田中先生にこの後、司会をバトンタッチしまして、特別支援教育を具体化するためにどうしたらいいかということ、皆さんと一緒に深く考えていきたいと思ひます。まず最初に教育学研究科長の逸見先生からごあいさつをいただきたいと思ひます。

(逸見) おはようございます。教育学研究科科長・学部長の逸見でございます。一言ごあいさつを申し上げたいと思ひます。本日は、教育学研究科研究プロジェクト「特別支援教育と地域支援プログラムの展開」の下に開催しましたシンポジウム、「特別支援教育を具体化するために」にご参加くださりありがとうございます。特に遠路ご参加くださりましてありがとうございます。

特別支援教育という文部科学省による政策的な提起は、LD、AD/H D(注意欠陥・多動性障害)など障害の概念が広がりを持って把握されつつある今日、総合的な施策を期待させる、我が国の特殊教育の歴史における画期的な出来事だろうと思ひます。一方、障害別に区分されていた教育法を特別支援教育と包括的にくくった瞬間に、それぞれの領域で積み上げてきた実際の細部が見失われるようなことがあつてはならないとも考えます。

特別支援教育が総合的な概念であるなら、その具体化も総合的であるべきでしょう。障害児教育、発達障害に関する基礎的な研究を進めてきた教育学研究科は、直接実際に携わる人々に学び、交流を深めることで、地域・学校・行政との連携、あるいは総合的な結び付きを得たいと考えております。

今日のシンポジウムが、今後遭遇するであろう諸課題に、共に立ち向かつていける重要な契機となることを期待してやみません。今日のシンポジウムをみんなで一緒に僕も勉強したいと思ひます。ありがとうございます。(拍手)

(司会) 早速、シンポジウムを始めていきたいと思ひます。司会の田中先生にバトンタッチをいたします。

(田中) おはようございます。室橋先生と逸見科長の格調高いあいさつの中で始まりましたが、

今日来ていただいたシンポジストは、以前から私の仲間で、十勝のメンバーを4人そろえました。おそらく格調はここで途切れまして、ここからはもうざっくばらんな会になるというふうに思っております。そのつもりでご参加いただければありがたいと思ひますし、シンポジストの方々も、その方がやりやすいだろうというふうに思ひます。

特別支援教育ということで、今回こういうタイトルをいただきました。われわれも学校関係者の方々や保育教育の方々とお話をする機会を持ちますが、ここまで悪い評価はないと思うぐらい、現場の方々から、さまざまなご批判をいただいている政策でもあります。しかし、科長もおっしゃっていたように、これはもう作動することになっております。その中でこれまで積み上げてきたもの、われわれの実践に大きな誤りがないということと、今後行っていく現場の流れの何らかの道筋というものが見えればよいというふうに思ひまして、今回の企画をいたしました。

私自身は、札幌に来てからまだわずかな期間しかないので、十分に掌握しているわけではありませんが、札幌の中でも、すでに特別支援教育についての原理・原則というようなお話は何度か開かれて、多くの方々に参加されていると思ひしております。今回は、それを前提にして、人、地域、そしてネットワークを考えるという形にさせていただきました。

何を置いても制度を動かすのは人です。ですから、地域で展開されている実践者の話を聞くということは、とても大事なことであろうと考えています。そういった意味で以前から活動ぶり、活躍ぶりというのを私自身が承知しておりますの方々、影や日向に立ってコーディネーターをする立場として、実践されている4人を自信持って取り揃えた次第です。

それでは、今日の流れを説明しておきます。だいたい1人30分以内。十勝のメンバーは時間をほとんど無視してしゃべりますので、どこかでみんなが石を投げるとか、やめろとか言わないと止まらないような方々がいますが、とりあえず30分ということで伝えてあります。1人30分以内ということで端からお話をしていただこうと思ひしております。

それで午前中、とりあえずは情報をインプットしていただいて、午後それを基に会場に来ていただいている多くの方々と意見交換ができればうれしいと思ひしておりますし、教育学部の方でも指定討論ということで、2人の先生に登壇していただくことを予定しております。

それでは早速始めたいと思ひます。最初は吉藤先生にお話ししていただきますので、3人の方はどうぞお飲み物を持ってお引き揚げください。

最初は吉藤さゆりさんです。「学校内外での組織づくり。教育現場における実情と校内外組織の連携を考える。種まく人たちへ」というテーマでお話をさせていただきます。簡単に吉藤さんの略歴をお話ししておこうと思ひます。

吉藤さんは、北海道教育大学旭川校で養護教諭養成課程看護学専攻を学び卒業されまして、その後、新得の新得町立新得中学校、清水町立御影小学校、清水町立清水小学校を経て、現在は新得町立佐幌小学校で養護教諭をなされております。養護教諭の職業のほかに学校心理士、CAPスペシャリストというお立場でも、さまざまな活躍をされている方です。

十勝にありますAD/HD&LD懇話会という当事者と家族と関係者の合同の会がありまして、そこの代表もなされております。私自身は、学校を前から後ろから支えている陰の校長先生と呼んでいる方です。いろいろなお話が聞けると思ひます。では吉藤先生、お願いいたします。

1. 学校内外での組織作り

～教育現場における実情と校内外組織の連携を考える 種まく人たちへ～

吉藤さゆり（新得町立佐幌小学校 養護教諭）

（吉藤） おはようございます。過分なご紹介をありがとうございます、吉藤と申します。この場に立つのが適切なのかどうか分かりませんが、機会をいただきましたので、私は一介の養護教諭の保健室の先生ですので、そこで出会った子どもたち、親御さん、教師の皆さんの代弁者として、何かしら現状をお伝えできればというふうに思っております、よろしくお願いいたします。

学校を今、語っていくときに、どのような状況の中でという状況を説明するだけではなくて、その状況が何によって生み出されているかという価値観といったものを検証していく必要があるだろうというのは、保健室にいてずっと感じてきました。

国立精神・神経センターにいらした先生が書いていらした本の中に、私が非常に考えていたこととマッチした価値観がございます。学校の中だけではなくて生活の中全般で、何でも早く、いっばいもっとできるように、間違いは少なく、みんな同じだというような価値観が、教師も親御さんも、何よりもお子さんたちを生きづらくさせているのではないかということ、この20年ばかり養護教諭をやってきて感じておりました。

ここで保健室の機能について、少しだけ触れたいのですが、学校組織の中で養護教諭という職種があるのは、歴史的にも100年は経っておりません。イギリスやアメリカにもスクールナースという形はあるのですが、このような動きをしているのは日本だけという独自性があると思います。

トラコーマというのが昔あったころには、その目の洗浄や、うみが発生すれば、それを駆除するというような働きがあったかと思うのですが、その時代の背景、疾病構造を反映したものが私たちの仕事になってきました。ある意味、教育課程というものがないので、非常にその時々合ったことができていたし、その時々課題が出てきました。

ですから、今ですと保健室登校から、トイレの掃除から、果ては薬物依存から、アルコール中毒の親御さんの相談から、DV（ドメスティック・バイオレンス：家庭内暴力）からという、何でもありの保健室の状況です。保健室の中で、通常学級のお子さんとおおかた会うという形にもなるのですが、私は中学校に勤務したときには、ちょうど校内暴力が大荒れのときで、最初に保健室登校の子を経験したのも新卒の2年目のときでした。

おおかた通常学校として勤務してきたわけですが、シンナー中毒の子どもたちと一緒にいたりとか、内容的にはこれが通常なのかというあたりでは、非常にあいまいであったし、保健室に来るお子さんを見ていて感じるのですが、もう幻想だろうというふうに思っています。

何が普通で何が普通ではないかと、子どもたちは非常に行きづらい中で課題を持たされていて、教師たちも苦しんでいて、親御さんも苦しんでいてという状況があるかと思っておりますので、通常学級というくりとか、特殊学級（以下、特学）というくりというのが、果たして意味のあることなのだろうかというふうにずっと考えていました。

今、小学校だけに目を向けてみると、保健室で出会う子どもたちというのは、例えば思いもよらないけがをするお子さんがいたりとか、例えば利き腕を切る、右利きなのに右の親指の先を切って、その先をごみ箱から探し出して病院に持っていくというような状況があったりとかですね。

それから、体育が非常に苦手で、縄跳びをさせるとなぜか首が痛くなったり、肩が痛くなったりする。音楽が苦手なお子さんもいて、中にはリコーダーの音が嫌だというお子さんもいたりするわけです。教科的に苦手なものがあるお子さんもいらっしゃる。あるお子さんは、割り算の説明を聞いているときには、割り算というのはこんなものなのかと分かるが、割るという記号と、割り算の今の説明というところが、なかなか一致しないというお子さんに会ったりもしています。

けんかが絶えない子もいるのですが、そのけんかをいさめていくということだけではなくて、なぜけんかになったのかとか、どうしてそういうコミュニケーションの取り方がうまくいかなかったのかというところを考えていくと、今度からけんかをしたらいけないよ、という話で終わらない、そういう状況も見えてきます。

それから、保健室へ来たからといって、何かを訴えるでもなく何も言わずに黙って座っているお子さんもいらっしゃった。それから、逆むけ1つをとってでも、例えば逆むけをしてきた、カットパンを張って済むようなことなのですが、そのお子さんの日常を学校で知っていたら、今の勉強は何だったのと聞いてみると算数だった。ちょっと分からなくて大変だったかな、うん、ということで、逆むけ1つがその子のいろいろなSOSだったりすることもあるのです。そのところに感性を持っていけないと、ただやり過ごしてしまって、丁寧にお子さんの様子を見ていくことができないであろうというふうに感じています。

これはもうあちこちで見られていると思うのですが、文科省の調査研究者協力者会議の最終報告の中に出ていて、今、お話しした通常学級というのはいったいあり得るのかというような自分の実感があって、数年後にこれが出てきたときに、ああ、やはりな、別に驚きもしなかったという数字だし、今、6.9%という画像が出ていていると思うのですが、実際にはもっといるだろうというふうに感じています。

私は、実はおととい学習発表会が終わった極小規模校の、今、全校生徒が8人というところで勤務をしているのですが、初めてへき地校に入って、今までやってきた仕事とまた少し変わるのかと思ったのですが、もちろん力仕事は非常に増えましたし、雑務といわれるような部分も非常に増えたのですが、課題は同じだなというのを1年半勤務して思っていますし、へき地校同士ですので山奥のお子さんたちとも交流をするのです。そうすると、発達について検討が必要なお子さんがいっぱいいるのです。クマが出てくるようなところの山奥にいるのです。

ですから、この課題は大都市だけの課題ではなくて、本当に郡部の山奥の2級、3級という数字が付くところでの子どもたちの課題でもあるのです。それを北海道ではどうしていくのかというのが、まだ見えてきていないというのがあるかと思えます。

ここで、実は私が前任校で仕事をしていたときに、特別支援教育が叫ばれる以前の、もう5年以上前です。現場の現実として生じたことがありました。とにかく子どもは大事にしなければいけない。どうしていったらいいのかという動きをしてきました。その動きを振り返ってみると、今、特別支援教育の中で言われてきていることをすべてやってきているのです。その報告を少ししたいというふうに思っています。

ここで注意をしてほしいのですが、学校現場におけるAD/HDとともにある子の理解という発想が必要だと思います。AD/HD児ではないのです。お子さんにはお名前がありますし、その人生や生活がありますし、ご家庭もあります。AD/HDがすべてその子を表すわけではない。だか

ら、その子が落ち着きがない、AD/HDだ。AD/HDだから落ち着きがないという見方をすれば、その子は救えないというふうに思っております。

そのお子さんの理解の中で言うと、教師の経験値とか価値観によって見方が全然変わってくると思うのです。例えば、子どもっぽいというふうに見られる先生もいれば、わがままでという先生もいらっしゃるし、幼いと言う先生もいれば、子どもらしくていいじゃない、楽しいよね、人懐こくて明るい、と言うのだが、あれは人の話をよく聞いていないし、忘れっぽいしと。低学年のうちは、こういう見方を意外とされるのです。だけど学年が上がってくると、子どもっぽくて何でも言う子だ、かわいいと言っていて、何も手だてを講じないでいて5年生になったら、あの子、わがままでということになるのです。

ここで、今までかかわってきたお子さんのことを、少し脚色もしながらお話をしますが、Aさんというのは、例えば、こういう状況があった。これを見たらAD/HDかというふうな思われ方もすると思うのですが、自閉のお子さんとか、広汎性発達障害の方もこんな雰囲気は出すと思うのですが、そのお子さんが、自分はいつもばかだと保健室で言っていました。教室はうるさいし、俺はばかだし、頭が痛い、おなかが痛いとただただ言うのです。

そのころの学校の理解というのは、わがままで、落ち着きがなく、だからこういう子には繰り返しの指導をして、何でもみんなと同じにしていればいいのだというふうに伝えようとしていたのです。ですが、あることがあって、これはわがままなのではなくて、落ち着くことが難しい子なのだという気ができました。そして、Aさんに分かりやすく伝わりやすい方法で、かかわっていきこうということで、学校全体に気運が出来上がってきました。

それから、養育者の方への理解ですが、最初はしつけ不足で努力不足で放任している親だと学校は見ておりました。そういうときには、親御さんに困った行動を繰り返し連絡しようとする。こんなことがありました。あんなことがありました、と。みんなと同じように、親御さんなのだからしっかりしてください、というやり方をしていくわけです。それを保育所、幼稚園のときからずっとされ続けているわけです。ですから、親はかなり学校というか、指導をする立場にいる人に背を向けている状態が出来上がっていました。

あることがあって、育てるのが大変だった子だし努力が反映しにくい子だったのだね、ということに気付いていきます。そうすると、対応が、これまで悪いことばかりの連絡だったのが、大変でしたねというねぎらいが一番大事だというところに教師たちは気付いていきます。

それぞれの対応が出てきて、親御さんにとっても安心な場所や、人をあちこちに配慮しようというような動きが出てきます。実は、このAさんの育ちを支えたのは、子ども中心の校内研修を実施していきましようという動きがたまたまその年にあったのです。私は、これを研修の中でしたいと思っていましたし、他の教師たちもそう思っていたので、私も研修部の中に入れていただいて、やり始めていたときにこのような状況が出てきました。

それから、担任を孤立させない情緒的風土づくりもなければいけない。知識だけを詰め込んでもだめなのです。もしその通りにならなかつたらどこかを責めますので、孤立させない情緒的風土づくりをしましょうという動きが、検証を通しながらできてきます。そして、その中で養育者と担任を支えるチームがつくられていって、またそれに対して管理職も尽力していただいた。

ここを全部支えてくれること、全てに少しずつかかわっていただいたことが、医療機関との連携

だったのです。医療機関は田中先生だったのですが、あと当時児童相談所に勤務されていた内田先生にもお世話になりましたし、療育センターの方にもお世話になったりしています。

それで、「校内で連携するために」と題してお話ししていきたいのですが、これは研修を始める前の状況の説明です。まず教師たちは立ちすくんでいたし、戸惑っていました。ここで思うのですが、教師にとって立ちすくむことや戸惑うことはいいことなのです。もし、ここで自己検証をしたとしたら、自分のやっているかかわりの中でこの子は出しているわけです。関係性の中で子どもの様子は見えているわけですから、この子が悪い、親が悪いという見方だけをしていたら、いつまでたっても発展性はないのです。

ところが、立ちすくんで戸惑った教師たちの中には、自分を検証し出すということが生まれてくると思うのです。ですから、立ちすくむ・戸惑うことは、私は大事なことだというふうに思っています。

ここに書いていることが、そのときの教師たちの思いです、本当の言葉です。大事にしたいけど時間がないし、次々といろいろなことは起きるし、親御さんに伝えても、なかなかうまく伝わらないし、逆には問いただされちゃうし、うまくいかなかったら親御さんを責めちゃう自分もいるし、自分を責める自分もいるし。周囲は、先生がそんなのだからうまくいかないという評価しかくささないし、かといって、自分に権威や裁量権があるかといったらなくて、責任だけが他人なんだからと取らされる。どうも自分の理解を超えていることと出会っているのだとなるわけです。

これまでの子どもの見方や、支援の発想そのものを見直しする必要があるということを感じてきました。その中で確認してみたところ、これまでは、子どもの育ちを点でとらえて、成長するという見方をしなかった。担任の先生にすれば1～2年を持ったら2年で交代ですので、私は、非常に嫌な言い方なのですが、2年で仕上げるという発想もあるのです。それから、子どもや担任とのそれぞれの関係をつなげるという発想がなくて、非常に分断していて、家庭は勝手、学校は勝手、それは家の仕事だから、学校の仕事だから、つながり合うという発想がどうだったのだろう。

それから、最初に田中先生に学校に来ていただくのは非常に難しかったのです。何で？ という形です。学校のことは学校にやらせろという発想です。今はもう当たり前みたいに言って、これは少し心配なのは、最近は何でもお医者さんに任せればいいという発想もあるのです。そうではないでしょう、現場は現場として仕事を作り出していくわけで、そのヒントはいただく、アドバイスはいただくが、お医者さんに国語の教科の教え方まで聞こうといったってそれは無理な話で、何でもそうです。誰かに責任を任せ聞いて終わりにしようということはないだろうかと、そこは現場として自分を持っていただきたいし、医療現場ができないこともあるということなのです。

研修が非常に不足していますので、現職教育という内容が、私は非常に貧困だというふうに思っています。それで、養護教諭の学びも深めたかったし、それだけでは足りないと思ったので、学校心理士という道も少し開いてみたいというふうに自分で思ったのです。養成課程上の問題もあるだろうというふうに思っています。もっと研修の内容を考えるべきだろうと思います。それから現職教育で、ここは北大ですので、リカレント教育や市民講座等を充実したものを今後も期待したいと思っています。

それから、校内研修の発想も、発問をどうしましょう、質問をどうしましょう、という話になって、子どもの話になってこないときがあるのです。ですから『ごんぎつね』を教えようといったと

きに『ごんぎつね』はこういう物語だと話をするのだが、うちのクラスのこの子の物語の理解というのはこういう力で、こういう切り口でいけば理解をするのだという話にはなかなかできていない。ですから当然、ケースの話をするということは難しいのです。

それから、情緒的には理解をしようと思います。担任の先生は本当に子どもが大事だと思っています。それがうまく親御さんに伝わらないときもあると思いますし、間違った方法もあるかと思いますが、子どもをだめにしようと思っている教師はいないと、私は思っているのです。ただ、方法が間違っていて理解が間違っている。

その中で、意外と情緒的には、あの子のうちはこれで大変だからという寄り添い方はするのだが、たとえば例で言うと、あの子はよく話を聞いていないという様子があったときや、あの子のうちはなかなか落ち着きがなく、だから話を聞かないのだというような感じで情緒的に理解をしようとするのだが、もしかしたら聴覚的な理解の部分落ちているかもしれない。だから、聞いていないのではなくて、聞いているのだが理解ができないかもしれないという話はなかなかできないのです。ここら辺というのは、研修の中身の問題もあると思うのです。

前任校でやってきたこれまでの実践で考えると、何をやっていこうと考えたとき、実はこれは特別支援教育が始まる前のことですから研修部はすごく悩みました。資料が全然ないのです。それと、これをやろうとするときに、周りで理解をしていただくのが非常に難しかったのです。夜中の12時、1時まで研修部会をやったという日々を繰り返しながら数年前にやっていました。

ここにも書いてありますので見ていただきたいのですが、苦肉の策で何でもいからとにかくやってみようというような、できるものをやってみようというような企画です。その中で、例えば学校の先生たちと一緒にお話をしているようで、こういうことが起きたときに子どもにどうにかかわり方をしているのかというのは、自分のやり方をみんなやっているとと思っているのですが、そうではないのです。

ですから、そういう交流の仕方も必要だろうということで、グループワークを入れたりとか、それから、ただお話をするだけではなくて、例えば自分はこういう課題がありました、これに対して先生どうしますかというのはメモを1人書き、例えば吉藤が書く、次は佐々木が書く、内田が書くみたいな形で、ワークシートを1つ作って、それを交換すると、先生はこんなやり方をするの、僕たちは違うとか、視点が違うとか、そういうものを研修の中で企画をしていったりしました。

あとここら辺の研修会なのですが、二宮先生とかも、とても仲よしでいいお友達ですが、お話の中で一目ぼれしてしましまして、非常に学校現場に役に立つお話だと思しまして、思った瞬間、10日後に研修をするので札幌に行ったのです。YMCAの民間の教育団体です。その発想を学校に入れるというのが、実は学校の中にはあまりない発想だったと思うのです。でもそれを入れていくことは非常に役に立ちました。

あとはPTAの中で、親御さんにLDの学習会を企画するとか、そういうものもやっていると、あらゆるところで情報を入れるということを努力します。それで確認できたことが、教師のこれまでの経験値とか知識では立ち行かないものがあるということが分かってきましたし、その中で子どもたちの育ちを信じることができるという情緒的なものが教師たちにできてきたというふうに思っています。そして、困っている担任を受け止めるという風土が出来上がってきた。これが非常に大事だと思います。

望まれる校内研修の在り方なのですが、この言葉は全部前任校の教師たちの言葉です。この言葉の中から思うのは、子どもとの関係に希望が持てるというふうに先生たちが思い出したことなのです。ある先生が転勤してこられて、先生は前の学校では、何かなかなか私の力では及ばない子がいたら、この子にはいつかいい先生に会ってね、と思っていた。けどこの学校に来たら、私もできることがあるかもしれないと思うようになったということ、非常に若い教師が言っていました。そういうように、子どもとの関係に希望を持てるということは、そういう先生とかかわるわけですから、子ども自身も安心と意欲が出てくるのです。

そんなこんなで校内研修を進めていって、こんなことをしました。これは特別支援教育の流れの中で話が出てくる前にその学校で取り組んでいたことです。ですから、特別支援教育といたら、その枠でやらなければならないような発想になるかもしれないが、ご自分が関係しているお子さんに対して何ができるかを、そのそばにいる大人が誠意を持って一生懸命工夫をしていくということが当たり前になれることで、それを特別支援教育と名付けるのであれば、特別支援教育であろうというふうに思っています。

校内研修を進めるときの留意事項なのですが、まず目の前の子どもありきということです。ですから、たとえいくら偉い先生がAD/HDについて語り、広汎性の発達障害について語ったとしても、それはとても大事な情報ではあるが、それで、今日の前の子どもが分かるわけではない。常に子どもに返っていくという発想が必要だろうと思います。なおかつ科学的であるということです。なぜかという、科学というのは平等性があると思うのです。

それから、そのことが日常的に返っていくことであること。具体的に言うということはすごく大事だと思うのですが、例えば実話ですが、子どもが帽子を落とし、それを後ろにいた子が拾ってあげたら、俺の帽子を取ったとたたたく。そのときに、その子の様子を見て分かっていたら、だめでしょう、たたいたら、と言うことも1つの方法ではあるが、この子は、今あなたに帽子を取ってくれたのよ、ということを言葉として付けなければならないのです。してはいけないことと、理由も付けてあげなければならない子のかかわりがあります。

そういうような日常性とか、その子が分かってあげるということ、そして目の前の子どもありきであるということが、日常的に出てくるような校内研修であることが望ましいと思っています。その中で一人一人のかかわりはさまざまなのだが、その中に普遍的に大事にしなければならないことと、これは特殊なことなのかというような検討というのがあって、私も課題なのですが、この普遍性の特殊性というものを、もう少し考えてみたいというふうに自分は思っているのですが、何か校内研修の中では、この4点について考えていく。

それから、私たち研修部が進めていくときに非常に気を付けたのは、研修の前にこれを何度も確認しました。科学的にというか認知の勉強をしていくと、何かそこだけで語っていく危険性というのもあるのです。そうすると、目の前の子どもはいなくなってしまうのです。ですから、目の前の子どものことを話しますということを、研修の中に必ず確認をしていって、路線がどうも子どもの姿がなくなってきたら戻しますというやり方をしていったりとか、そこら辺の修正をかなりしたという覚えがあります。

学校と連携するためということで、これはまだいい図だと思うのです。なぜかという子どもがここにいるから。ここに親御さんもいるべきだったし、いて当然なのです。このサークルの中に

親御さんが入ってもいいと思います。入ってはいけないということではないし、いるべき人が正しい。力を貸してもらえなことだと思うのですが、あえてこういう図にすると、こういう形の中に、時に子どもがいないという場合もあるかと思うのですが、何か自分がこれを考えていったときに思ったのは、大きな手のひらの上にお子さんが乗っているようなイメージ。その手のひらの中に養育者の方がいて、担任がいて、専門機関がいてというような形をイメージしました。

その担任には、教職員が支えてくれているという、何かそういうイメージがあるととてもいいというふうに思ったりしました。校外の部分の組織との連携を考えると、教育・福祉・医療との関係というのがあると思うのですが、ここも大事だと思うのです。このにじんんでいるところ。離れてはだめなのです。なぜかという、例えば、教育で、先ほどお話ししたように医療機関との連携を図ろうとか、研修の中にお医者さんに来てもらってお話をしようという発想が出てなくなるのです。

これは、この後お話ししますが、自分の専門は専門と知っていて、できないが、こういう専門があって、そこに委ねることができるというような、にじむような関係性というのを勉強しているとか、学んでいるのも必要であろうと思うのです。そのためにはこのコーディネーターが非常に必要で、結び付け合うためのコーディネーターが必要です。

これは特別支援教育の中では、特別支援教育コーディネーターという言われ方をしたりすると思うのですが、非常に大事なポイントにいらっしゃる方と思うと同時に、非常に難しい仕事だろうというふうに思っています。私もある程度この部分をやってきたわけですが、全体を見るということと、それから人間関係の調整をしたりとかする部分もあったり、自分がネットワークを持っているかどうかというのがあたりしますので、そこのところは非常に難しい。でもそこがうまくいくと、ずいぶんいろいろなことが進むだろうと思っております。

他職種、他機関への期待ということですが、担任の先生が、最初AD/HDを持っているであろうというお子さんとかかわったときに、いろいろ感じたことをお話を聞いていて、田中先生のところへ行って、お話を聞いたときに言った言葉が、非常に安心をした。自分の感じていたことが間違っていなかったし、それが明確に整理整頓されたということで、後ろ盾ができたし確認ができた。だから自分で自信を持っていける。してはいけないことはしなくて済むし、できそうなことが少しイメージできるというようなことをおっしゃっていたのを思い出します。

ですから、これは精神科医だけに望むことではなくて、他職種、他機関へも、そこは期待したいことだというふうに思っているのです。どういうところという話になると思うのですが、その地域の中で使える人は使うという感じというふうに思っています。それから、学校関係者ではない方は1度フィールドを見ていただきたい。

文科省のツゲさんもフィールドへ行った方がいいとおっしゃっていて、その通りだと思ったのですが、現場を知らない絵に描いたもちなのです。現場は非常に困っています。私が田中先生と10年前に会って言っていた言葉が、危機的状況だといつも電話で言っていたのです。そのときは軽度発達障害うんぬんとか、特別支援という発想ではなくて、子どもたちは本当に生きづらいし、担任の先生たちも本当に困っているし、親御さんたちも困っている。

確かに総論的な話で理論的なお話を聞いて、そうだと思うこともあるし、それは勉強しなければならない欠かせないところなのだが、もっと現場を知っていただくと、お話の中身が現場にもっと近づいてくるということもできるのではないかと思いますので、ぜひフィールドへ行っていただき

たいというふうに思います。

生活感を大事にというのは、今のフィールドにかかわるのですが、子どもは生活をしているので、そして担任も学校生活というところに生活をしているので、そこに近い言葉掛けになってくると、非常にありがたいというふうに思っています。ここで子どもへの教えを阻むものということで、特別ということですが、特別支援教育の特別と付いているがために、これが異質というようなとらえ方はあるようで、私は、特別というのは、人はどなたも特別に大事にされるべき存在で、その人に合った特別な扱い方があるというか、され方があると思うのです。

そのためにされていることは、決してその人が、ほかの子と異質でどうのこうのという話ではなくて、当たり前のことであると思うのですが、そういう発想ではなくて、異質というとらえ方があるようです、教職員の中にもあります。ですから、ここが特別支援教育という名前自体が、それと入り込むことがなかなか難しくさせているかもしれない。

あと先生たちは、集団と個別ということを非常にこだわります。集団の中で育つと思っていますから、この中にいることだけでいいと思っている方もいらっしゃいます。でもそうではない。

それから専門性ということですが、実は専門にとらわれ過ぎていつってしまった知り合いもいるために、さっき言ったようににじむことができないということもあると思うのです。ですから、あることを専門とするなりわいをその専門にしているのだが、それがありながら人です。人としてかかわっていくという発想もほしいというふうに思います。

それから障害観と、札幌は今、「しょうがい」とひらがなで書いていると思うのですが、このところもきっと子どもの支援を阻むものにかかわってくると思います。ここら辺は北川先生がしゃべってくれると思います。

教師の持つ原罪とかなりハードなことを書いたのですが、別に教師が悪いという意味ではないのですが、教師になったときに持つであろう原罪みたいなものが、私はあるような気がするのです。なぜかという指導者であるので、親御さんや子どもさんにしてみたらかなわないという部分もないだろうか。こちらがそうはしていないのだが、そういうふうになってしまうという状況を作り出していないだろうか。

それから、どうしてもできるできないというところを見つめなければなりませんので、そのことが子どもさんの自己評価を下げるということにもなり得るかもしれないです。ここを心しながら、かかわりを持たせていただかなければならないというふうに思っています。

私は、この数年、種まく人だというふうに思っているのです。レイチェル・カーソンという『沈黙の春』などを書いた人ですが、書かれている言葉が好きで、こんなものを載せてみました。「事実というものは、後になって知識や知恵というものを生み出していく種子だとすれば、情緒や感覚がとらえるさまざまな印象。そこに種子が育つべき土壌がある」何かこういうことを種まく、今、皆さんが思っただけたらというか、非常にうがった話で申し訳ないのですが思ったりもします。

それから、出会う子どもたちの事実というのは、私も想像を超えている。親御さんの歴史の想像を超えていることはいっぱいあります、ほとんどです。そこを想像してイメージして、今度クリエートしていかなければならないということで考えたときに、ワクテルという方が書いていたというのを村瀬先生の本を読んでいて、私は非常に感銘したのですが、読むと時間を少しオーバーするのですがいいですか。

「探索的解釈的心理的療法に於いては、実質的には患者のあらゆる発言はマニュアルにはない。治療者は個々の特定性に対するあらゆる感受性を発揮する必要がある、今、それが出現している特定の形態と、情動的、歴史的文脈に於いては、いまだかつて聞いたことのないものを理解する必要があるということである。その上で初めて治療者はそれをかつて聞いたことがあるものの一例と見なす、創造的選択を行うことができるのである」ということが、日々の実践の中で感じていると言いたいのです。

私は、種をまく人であろうというふうに思っていますので、子どもたちの代弁者として、できるだけ子どもたちの声を伝えたいと思っていますし、先ほどお話ししたように、人としてどうなのかというところも忘れないでいたいと思いますし、ただただ情熱だけでは、子どもを愛しているよと叫んだって、認知的なものはどうもなるわけではありませんので、やはり科学と情熱。それを哲学の上に立って実践できるような者になりたいと思っています。

かといって、何でもかんでもできると思っていないので、できることから少しずつやって、お子さんの未来を想像したときに1つのジグソーパズルだとしたら、一つ一つのピースは、私が持っているのはたった1個で、あといくつものピースがいろいろな方が持っていらっしゃるのです。ですから、そのお子さんの周囲にいる方はどの人も大切です。

それと自分も思うのですが、自分自身を大切にしないとなかなかたない仕事になってきていますので、種まく人たちの方は、一番は養育者の方からねぎらってほしいというふうに思うのですが、自分も大事にさせていただきたいというふうに思っています。ありがとうございました。(拍手)

学校内外での組織作り

～教育現場における実情と校内外組織の連携を考える 種まく人たちへ～

上川郡新得町立佐根小学校
養護教諭 吉藤さゆり

子供・養育者・教師を取り巻く価値観

- S～スピード(はやく・はやく)
- S～生産性(いっぱい、もっと)
- K～管理化(まちがいを少なく)
- K～画一性(みんな同じに)

吉川武彦著「今、こころの育ちが危ない」

「保健室」の機能

・学校看護婦～学校看護婦執務指針(大正12年)
・衛生室 ～小学校令(昭和9年)

トラコーマ流行時の目の洗浄・保健指導から
保健室登校まで

社会的背景(社会・家庭の環境の変化、疾病構造の変化など)を受け、変化してきた保健室・養護教諭

～ 子どもとともに～

「通常学級」という幻想

保健室という場で出会う子ども達

～思いもよらないけがをする子(ex. 利き腕を切る)
～体育がにがて(ex. なわとび・たかどび)
～音楽がにがて(ex. リコーダー・音)
～算数がにがて(ex. 割り算の意味と「÷」)
～けんかが絶えない子(ex. 誤解とコミュニケーション)
～何も言わず座っている子(ex. 表情・隠れる)

丁寧な検討・関わりがなければ見過ごされる子ども達

文部科学省 調査研究協力者会議 最終報告
今後の特別支援教育のあり方

- ・ 特殊教育諸学校(盲・聾・養護学校)もしくは特殊学級に在籍する、
- ・ または通級による指導を受ける児童生徒の比率の増加傾向

(平成5年度0.965%→平成14年度 1.477%)

通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査
全国の通常学級4238学級41579人対象の調査

学業面か行動面で著しい困難を示す	6.3%	学習面
行動面	4.5%	学業面と行動面ともに
学業面	2.9%	
学業面と行動面ともに	1.2%	

知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示す担任、教師が回答した児童生徒の割合
3% = 16人に1人、32人に2人

学校現場におけるADHDとともにある子の理解 ～その両極～

- ・ 子どもっぽい
- ・ おさない
- ・ 子どもらしい
- ・ 楽しい
- ・ 人なつこい
- ・ 明るい

- ・ わがまま
- ・ 人の話を良く聞いていない
- ・ 嘘つき
- ・ 忘れっぽい
- ・ じぶんのすきなことしか考えない
- ・ だらしない
- ・ 落ち着きがない

教師の経験値・価値観のみで判断されていないか？

Aさんの学校生活

- ・ 離席、教室を抜け出す
- ・ いすを常に揺さぶる
- ・ 列に並んでいることがむずかしい
- ・ 思いつくと、授業中でも周囲・教師に話しかける
- ・ 国語は苦手、説明文・物語文どちらも苦手
- ・ 算数がすき、しかし、文章題は苦手
- ・ 図工など、ものを作るのがすき、発想のユニークさ、できあがりは雑
- ・ 音楽が苦手、特定の音がきらい
- ・ 特定のにおいがきらい
- ・ 奇声

自分を「バカだ」というAさん

Aさんの保健室での訴え

- ・ 教室はうるさい
- ・ 俺はバカ
- ・ 頭が痛い
- ・ おなかが痛い（朝食の欠食）

Aさんの学校の理解・対応

【理解】わがままな子・落ち着きのない子
 【対応】繰り返しの指導(言って聞かせる)
 等質性を求める(みんなと同じに。同じ方法・同じことを)

↓

【理解】わがままな子ではない・落ち着くことがむずかしい子
 【対応】Aさんにわかりやすい・伝わりやすい方法で
 (ex. プリントの工夫)

習得できるように。
 自己評価を上げる

Aさんの養育者への学校の理解・対応

【理解】しつけ不足・努力不足・放任
 【対応】困った行動の繰り返しの連絡
 等質性を求める(みんなと同じに。同じ方法・同じことで)

↓

【理解】育てるのがたいへんだった子・努力が反映しにくい子
 【対応】ねぎらい
 Aさんにわかりやすい・伝わりやすい方法を伝える。
 具体的関わり方を伝える
 自己評価を上げる
 安心の場所・人をあちこちに

Aさんのそだちをささえたもの

- ①子ども中心の校内研修の実施
- ②担任を孤立させない情緒的風土作り
- ③養育者と担任を支えるチーム作り
 (その子の育ちに必要な人集め～コーディネーター)
- ④行政の支援(管理職の尽力)

■上記4点には、医療との連携は欠かされた

校内で連携するために

(①担任の理解)

「立ちすくむ教師達」「とまどう教師達」

- ・ひとり一人だいたいにして
- ・物理的な時間の拘束
- ・同時に起こる学級の様々な課題処理に追われる
- ・個々の児童の保護者との連携をはかる時間の確保に困難
- ・養育者に児童の様子がなかなか伝わらない。伝えられない
- ・養育者を責める
- ・自分を責める
- ・周囲の評価を気にする
- ・権威や裁量権はないが責任はとられる
- ・自分の理解を超えていることとの出会い

校内で連携するために

②これまでの子どもの見方・支援の発想の見直しの必要

- ①子どもの育ちを点でとらえ、成長する(ライフステージ)という見方をしていた。
- ②子ども・親・担任とのそれぞれの関係をつなげるといふ発想がなく、分断した関係の中で、その場限りの関わり手であった。
- ③医療機関との連携の必要を考えなかった
- ④研修の不足。(現職教育・養成課程・校内研修)
※特殊教育・普通教育間での情報交流の不足
- ⑤情緒的に理解しようとするが、認知的つまづきについて検討がなかった。

望ましい校内連携のために

①望まれる校内研修のあり方

これまでの実践から

- ・ 子どものもつ課題について、教師サイドから感じていることについてアンケートの実施、結果の交流。
- ・ 支援を必要とする子ども達・担任の様子を公開することにより、本校において現実的に必要な研修であることの確認。
- ・ 学校が子ども達にとってどんな場所になっているか知るために、子ども達の回答による「ほっとする場所、時間」のアンケート実施及び交流。
- ・ 落ち着きのなさを見せる子どもの理解のためにADHDについて学ぶ
- ・ 研修会の企画・実施
- ・ ビデオによる学習会
- ・ 子どもの実態交流(教師がどのようにかわればよいかなど、子どもにとって何になる情報の交流)
- ・ 様々な方についての研修(研修部で、医療機関を訪問し実態場面を見学し選別する)
- ・ 認知に困難を持つ子の理解のためにLDについて学ぶ
- ・ LD資料による学習会(東京都教育委員会発行資料)
- ・ 子どもの発達発達について、精神医学的な観点から学ぶ。

望ましい校内連携のために

②望まれる校内研修のあり方

- ・ 子どもとの関わり方についての交流学習
- ・ 子どもと関わりを必要とする場面を設定し、原因・望ましい関わり方などを小グループにより交流しあう。
- ・ 研修会への参加
- ・ 北海道情緒教育研修会、精神保健学会講演会
- ・ 札幌YMCAのLDクラス訪問と講習及び全校への交流
- ・ 支援を必要とする学級へのサポートについて検討(これは後に教育相談委員会へと発展)
- ・ 保護者へ教師の子どものとらえについて広める。
- ・ 全教師が参加し、保護者との交流を図るための研修会実施

<確認できたこと>

教師のこれまでの経験知でない学び、工夫が必要ということ。
子どもの育ちを促す情緒的風土の必要。
「立ちすくみ」「とまどう」担任の受け止め。

望ましい校内連携のために

③望まれる校内研修のあり方

- ・ 全体ではなく、個人としてみる目が養われた。
- ・ 子どもの言動をいろいろな面から見て、考えるようになった。
- ・ 子どもの失敗を責めなくなった。
- ・ 教師の決めた目標に到達させるより、その子を知り、受け入れることが大切であるという気持ちにさせてくれた。
- ・ 子どもへの接し方について迷いが軽減された。
- ・ 待つようになった。
- ・ これまでは、「がんばってね」という思いでみていたのが、教師サイドががんばらなくて、と思うようになった。
- ・ 学級担任がすべての責任をひとりで抱えなくてもよいということがわかった。
- ・ 学級のみでなく学校全体を見ようという姿勢ができた。

(教師の言葉より)

子どもとの関係に希冀がもてる
ことが大事。

子ども自身の安心
と意欲

校内研修

～その後～

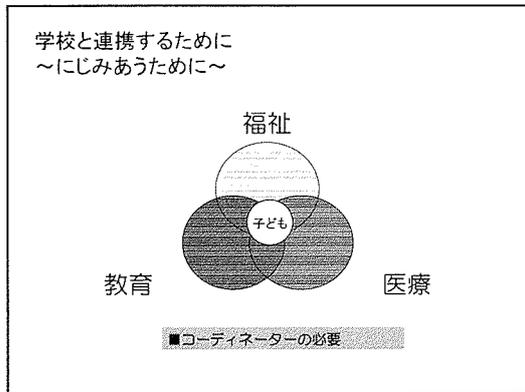
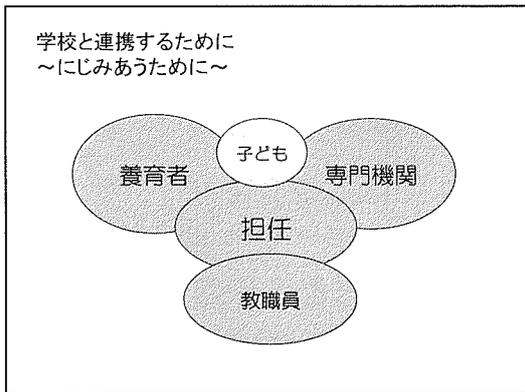
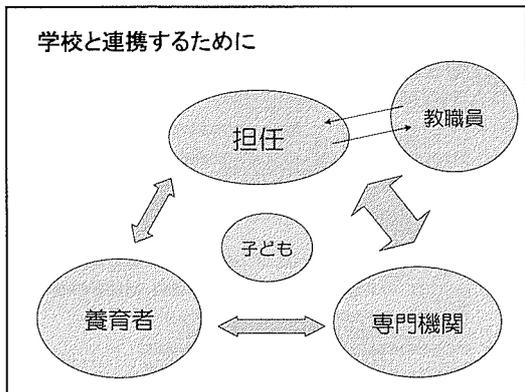
- ・ 教育相談委員会の設置
- ・ 苦労しながらの協力体制の創出
- ・ 放課後指導
- ・ 少人数による学習の工夫
- ・ オープンな学級経営 ex 朝の会、教科
- ・ 特殊学級との連携
- ・ 子どもとの居場所の創出 ex 校長室、職員室、保健室、空き教室
- ・ 養育者とのチーム面談 ex 担任、子どもと関わりのある教師、養護教諭
- ・ 他職種との学校訪問

支え合いの風土ができあがる

校内研修を進めるに当たっての留意事項

- ・ 目の前の子どもありき。
- ・ 科学的であること。
- ・ 日常的であること。
- ・ 普遍性と特殊性。

繰り返し何度も確認しあうこと。



他職種・他機関への期待

- ・連携による安心(後ろ盾・確認・指針・・・)
- ・フィールドへ(現場主義)
- ・生活感をだいに(言葉かけ・日常の工夫)

子どもへの支援を阻むもの

- ・「特別」ということ
- ・「集団」と「個別」
- ・「専門性」
- ・障害(しょうがい)観

教師の持つ原罪

- ・指導者であるということ。
- ・「できる」「できない」という点を見つめなければならないこと。

種まく人へ

「私は、子どもたちと、子どもたちをどう育てるか、
心くたく親たちのために『感じる』ということが『知る』事よりも
ずっと、ずっと大切なものだと伝えていたい。
もしも、事実というものが、後になって知識や知恵というものを
生み出してくる種子だとすれば、情緒や感覚がとらえる様々な印象
そこに種子が育つべき土壌がある。」
(レイチェル・カールソン)

種まく人へ

- 想像により、今を理解し、何ができるかを創造しなければならない。

探索的解釈的心理的療法に於いては、実質的には患者のあらゆる発言はマニユアルにはない。…治療者は個々の特定性に対するあらゆる感受性を発揮する必要があり、今、それが出現している特定の形態と情動的、歴史的文脈に於いては、未だかつて聞いたことのないものを理解する必要があるということである。

その上で初めて治療者はそれがかつて聞いたことがあるものの一例と見なす創造的選択を行うことができるのである。

ワクトル Wachtel, p., 1997

種まく人へ

- 子ども達の「代弁者」として
- 「専門家」から「専門と生活を大切にする人」へ
- 哲学の上に立つ、科学と情熱を。
- できることから
- どの人も大切
- あなた自身を大切に

ご静聴ありがとうございました。

(田中) ありがとうございました。だいたい今日の大きな流れのガイドラインのような話になったと思います。後に続く3名の者もおそらくこのような趣旨で話が進むというふうに思っております。それでは2人目として、北川先生にお話をさせていただきたいと思います。

北川さんの資料は別に北川さんが刷ってきて、はるばる持参していただいたものです。「学校現場から、そして地域へ」というA4判の資料がありますが、お手元に皆さんありますか、もしなかったら言ってください。では先ほどと同じように北川さんの紹介を簡単にさせていただこうと思います。

「学校現場から、そして地域へ」副題としては、「育っていく子どもたちの姿から教えられ、そして始めたこと」というものになっています。現在、幕別町立の白人(ちろっと)小学校で特殊教育の先生として頑張られている方です。略歴といたしましては、北海道教育大学の釧路校を卒業されまして、その後、帯広に教師として着任されまして、帯広市立緑ヶ丘小学校、帯広市立森の里小学校、この2つは帯広の小学校の中でも通級の情緒学級があるところですが、その通級の情緒学級でずっとお仕事をされておりました。

5年前に幕別町立の白人小学校に来られ、幕別町の小学校だけではなくて、学校という枠を越えて幕別の地域に足を運び、現在では引きこもりの青年を支援したり、長く不登校をされている生徒を担任の枠を越えて訪問したり、今日、ビデオでも簡単に紹介されますが、「おかゆの会」という会がございます。テレビなどでも少し紹介されたので、ご存じの方もおいでと思いますが、おかゆの会というたまり場的な地域活動を展開しております。その辺も含めて、地域の中でどういう手を組んでいくのかというお話が聞けるとと思います。よろしく願いいたします。

2. 学校現場から、そして地域へ

北川 和博(幕別町立白人小学校教諭)

(北川) 皆さん、おはようございます。十勝の幕別町立白人小学校というところに、今、勤務しています北川といいます。どうぞよろしく願いします。今、十勝の1番バッターとして、十勝のイチローみたいな人が出てしまって、私は2番手なのですが、ここでうまい具合に送りバントをきちんと、次の3番、4番に送らなければならないのですが、どうやら緊張をしまして、うまくバントができるのかと、「うまいことを言うな」と自分でも思っていますが、この間、キャッチャーフライになって、後続がどんどん撃沈していくようにならないように頑張りたいと思います。ここで格調高い話が本当にもう崩れ去るといってしまうのかもしれませんが、頑張りたいと思います。

私は、最初から特殊教育を頑張るみたいな感じで先生になったわけではありません。平成元年というときに先生になりまして、そのころは今みたいにすごく先生になりにくい時代ではなくて、もう先生になれてすごかったのです。今の人たちには非常に申し訳ないのです。

私たちが退職するころにまたピークが来るので、そのときにまた先生になりやすいのかと。その波に乗って私も先生になった1人なのです。ですから、緑ヶ丘小学校に今では信じられない5名の新卒が入るのです、そのときに男性は私1人でした。

それで体格もいいし、君は特殊教育をやってみないかというので、情緒学級を頼むと言われたのですが、情緒と言われた瞬間に、何のことを言われているのか分からなくて、ただ大学に行ったらと

きに、養護学校教諭というものの資格がありまして、その資格は取っていたのですが、情緒学級と言われたときに何のことかとちょっとぴんとこなかったというのが本当に印象に残っていますが、これだけ特殊教育というものが、知的や情緒や肢体不自由や言葉など、いろいろ細分化されているものだということがまったく知らないで入るわけです。特殊教育はもっと総括的なものなのではないかということを思って入ったのですが、それがどうやら支援教育になるのではないかというふうに感じたのですが、その当時はまだ細分化されていて、そんなことも知らないという自分でした。

平成元年に先生になって、数えやすいですが16年目です。今、3つ目の学校にいまして、この16年の中でも時代の流れというのでしょうか、本当に子どもたちが変わってきた。情緒学級にいと、何か時代、時代に出てくるお子さんたちに、かかわっていく状況というのが本当に変化していくと思う。

だから、僕が平成元年に最初にかかわったときの子どもたちは、いわゆる登校拒否という言葉がまだあったわけです。平成3年ぐらいから不登校という言葉に変わるのでありますが、あのころは登校拒否と言っていたのです。ですから、問題行動の1つであるというとなえを、どの人たちもしていたような流れがあって、ですから、アプローチとしても学校に戻すのだとか、そういうアプローチでして、強引にでも子どもたちを連れてこいというようなものがまだ少し残っていて、でも僕たちのところに来ている子どもたちは、一応、学校の一角にある教室なので毎日来ていたのです。これは何なのだろうということですが。

何か居場所というものがあると、この人たちは来るのだというのをその辺から少し感じていたのです。ですから、そういう文言に対して、このころから僕も非常に敏感になっていくのです。登校拒否というのが何で僕のところに。僕のところにも学校で教育している1つのフィールドの中において、その子たちは来ている。でも、何でこの子たちのことを登校拒否とか不登校と呼ぶのかというのは、自分にとってまったく訳が分からなくなっていくのです。

そんなところを何か自分は本当に知らないとか、そういうことがどんどん出てきて、先生になったきっかけもそういう感じですから自分自身が戸惑うのです。何が何だか分からないという感じがあって、平成5年に森の里小学校に入る前に、旭川の特殊教育特別専攻科というのがあるのですが、そこに1年修業に行つてこいということで行ってくるのです。

そこでもまったく知らないものがいっぱいあって、知らない人たちの出会いがある、作業所に行かせていただいたり、養護学校、盲・聾学校全部行くのですが、そこで行われている教育活動もすごく刺激的だったのです。自分が知らない教育活動をしていて、教育というのはこんなに広いものがある、僕らがやっているのは本当に通常教育なんていうのは、その中の1つなのだ。

そして特殊教育というものもいっぱいあって、先生方が実践しているのだというのが本当に思い知らされて、平成5年になって森の里というところに入りますが、森の里に入ったときに、文言がLDとかAD/HDという言葉がどんどん入ってくるようになってきて、不登校もどんだんうなぎ上りになっていくわけです。

僕もそんなに増えていくとは思わなかったのですが、どんどん増えていった。自分自身も、そういうお子さんたちとかかわって、孤立無援になっていったりする瞬間があって、仲間づくりというのが必要に迫られるのです。どうしても1人でやっていけない。

自分に限界があるというのは目に見えていますから、自分の教育というフィールドの中では、自

分がやっていけないというのは思い知らされてきていて、どんどん何となくじわじわといろいろな人と会合に出たり、研究会に行くようになって、そうすると、そういう思いの人たちが、同じ感じの人が同じような顔触れになってみたりとかしてきて、だんだん顔見知りになっていくというような感じがありました。

大きなきっかけがアメリカに行くのです。そのときに康雄先生とか、そこに内田さんとかいるのですが、そこら辺の人たちと一緒に、そこら辺というのは非常に失礼なのですが、その方々と一緒に行くわけなのです。そこでまた十勝の中にこんなにすごい人たちがいるのだというのを思えて、今でも覚えているのは、十勝でチルドレンファーストの会をつくろうというような動きで、まずTシャツを作るのです。

十勝というのは必ず形から入るのです。内容よりもまず形なのだと。Tシャツを作って、そのときにうちの娘がまだ2～3歳だったので、その絵を使って、子どもの絵なのですが頭足人の絵を使っただいて、今でも着ているのですが、そういうものも思い出に残ってしまっていて、懇話会ができていって仲間づくりが始まるのです。

平成12年に白人小学校に入って、今までは通級の情緒学級だったので、それぞれ通常学級にいるお子さんも来ている。違う学校のお子さんも来ていましたから、自分の校内の中の子どもも救うのですが、他校のお子さんたちをサポートしていこうという動きが帯広では主だったのですが、平成12年から幕別の白人小学校に入った瞬間に、その校内とか地域の子どもたちを救うという使命感に燃えるわけです。そんなに広域ではなくて、取りあえず白人校区の子どもたち、その地域にいる子どもたちを何とかしていきたいと燃えるのですが、いきなり地域格差というのをそこで感じるのですが、特殊教育というものが、本当に地域によって認識というのでしょうか、それが違います。

そうなってくると、例えば僕がいきなり行ったときに、白人小学校の特学が何年ぶりにできたという瞬間だったらしくて、今までは特殊教育がないところに白人小学校は入るものですから、今まで全然先生方もどうしていいのかわからないし、僕もぼんやり行って、今でも覚えているのですが、そのときに与えられた教室が図書室の一角なのです。ちゃんとした教室なんてなかったのです。

急きょ造ったような教室ですから、図書室の間借りみたいな感じで、ベニヤ板で仕切ってあるのです。そういうところから教育をスタートしたというのが、実は白人小学校のスタートなのです。でも、ベニヤ板を見た瞬間にやりがいがあるなと思いました。真っさらな状況というか、何か伝統のある特殊教育、特学に入るのではなくて何もないのです。みんな全然知らないという中で、僕だけが知っていて来た世界なもので、僕が言ったことは、そうなのかみたいな話になるので、口もうまい感じなので、どんどん何か。

校長先生とか教頭先生も、そういうものなのだという話になるわけです。そういう地域もいかにせんあるというのが、まだ残っているのではないかと思うのですが、そういう中で活動をしてきて、今、5年目を迎えます。おかゆの会の話は後で出てくるのですが、子どもの育ちや学びを支えるためにということで、1番に学校教育の中で、どういう子どもたちがいるのかと思うし、サポートを必要としているお子さんたちがいるのかというのを、自分なりの言葉で書いてみました。

これは通級時代から出会ったお子さんや、今、目の前の学校区の日常空間の中で目にする中で、子ども自身が困っていたり、周囲の人たち、先生や保護者の方々がどうしていいのかわからないという状況で困っている。いろいろな文言なり状況みたいなものを書き出してみたわけです。

これは、中にはLDやAD/HDや広汎性発達障害というものを器質的に持っているお子さんもいれば、そうでもない、何とかなるか、何かちょっとしたかわりに変化していくお子さんもいたし、例えば先生と相談をしておんぶに抱っこみたいな話をしている、でも今までおんぶに抱っこみたいな実践というか、そういうことがあまり学校教育に、僕らの学校の白人の中にもあまりなくて、僕はこの特学の中でおんぶに抱っこに肩ぐるまみたいな、その当時は肩ぐるまの弥七と言っていたのですが、そういう実践をちょっとしていたのです。

そうすると、先生方も、「あつ、いいんだ」と。そういうかわりをしていくと子どもが変わっていくのです。通常学級の先生方も、「あれって、ありなの」という、甘やかしているのではないのだと。それなりの理屈があって北川はやっていたのだというふうに、時間がかかってみると分かってきたみたいなので、そうなってくると、先生方もそんなにおんぶに抱っこという状況をあまり嫌がらずにやるというか、今なら本当に1年生の先生方がおんぶとか抱っこというのを、いいよという感じで受け入れるという状況が、今、少しあるのですが、そういうものも学校の中で何か変化していくのです。それが面白いと思っていました。

ですから、そういう雰囲気も少しずつ学校の中で変わっていった。吉藤先生は校内体制のことをがんがんしゃべりましたので、僕はそこら辺を、あまりがんがんやるタイプではないもので、後ろから、そういうものですよみたいな、うっかり八兵衛みたいな感じでいく方なので、そういう何かバーッと、ちょっと冷静ではないのです。それでじわじわ子どもたちのかかわりをわざとらしくというのでしょうか、見せるという感じでやっていくのです。

その中でも学校も雰囲気も少し変わった。あと気づきからサポートまでのプロセスというのを、白人とか前の帯広の中でやってきたことを自分なりにやってきていて、支援過程への気づきみたいなものは、どこら辺からかというのを少し書いてみたり、あと具体的なサポートというのも、僕は特殊教育というものを担当している者として、どういうサポートの在り方があるのかと考えたときに、例えば間接的という、僕にはなじまないような言葉ですが、今まで自分がやってきた中で、間接的に遠目からサポートをするというやり方が1つあるのかと。あとは直接的に一生懸命やっていくというやり方がある、大まかに分けると2つのサポートの在り方があったのかと。

間接的なサポートの在り方として、見守っていたりとか、担任への情報提供とか、保護者や先生方との相談活動です。今は、お母さん方の相談がかなり多くなっていきまして、幼児期のお母さん方もかなりいらっしゃってくれるようになって、僕も今週帰ったら、毎日3時から相談が入るのですが、明日からの相談というのは、来年1年生になるお母さん方がやって来るのです。

白人ではどういうことをやってくれるのでしょうかとか、あとはうちの子はやっていけるのだろうかとか、不安になっているお母さん方が来て、その頃白人で僕がやっていることや、特学に入ることのメリット、デメリットも全部お伝えしようと思っています。そこら辺を選択肢の1つとして、ただサポートとしてやれることはやりますということは、お伝えしてあげたいと思うのですが、そういう形です。

あとは校内研修で今年は、白人小学校で画期的だったのは、研修の項目の中に児童理解という項目を入れていただいて、それがちゃんと定期的に話を、僕がそういうLDとかさっき研修の中で吉藤先生が使ったような資料とかを提示したり、僕が説明をしたり、今まで出会ったお子さんの話をしたりという時間を設けていただいています。

あとは関係機関との紹介や仲介ということで、僕が知り得る関係機関であればご紹介をしていて、僕がまったく知らないところでは僕が最初に行って、いろいろ顔合わせをして仲介をしていくということをやっています。十勝で言えば、医療機関では緑ヶ丘病院とか、虐待関係であれば十勝子ども家庭支援センターや児童相談所とかです。

今年の1学期は、そういう虐待のことで動いたのですが、児童相談所や十勝の子ども家庭支援センターを、今年の1学期は本当に奔走したという思いを持っています。担任の先生もそういうところを使った経験がないし、外部の関係機関との連携といっても、自分で実際動いたことのない先生方がほとんどですので、ですから一緒に僕も児童相談所や家庭支援センターの方に行っているいろいろ話を聞いて、次のことを考えるというのをやってみたのです。

あとは、直接的なサポートとしては、僕らの柔軟な学級を活用してもらおう。うちの白人小学校には、今、知的・情緒・肢体不自由・言語障害の特殊学級の4つを設置したわけですが、これも帯広という広い地域では、なかなかその子のために特学をつくりましょうという話にはならないのですが、十勝の単なる町村だと、この子のためにつくります。この子の地域にこの学級をつくりますという地域が多くて、ですから白人小学校もそういう学校なので、この子のために情緒学級をつくったり、知的学級をつくったりということがあるのです。

十勝というのは、そういうものが多くて、そういう実践で可能な限り通常学級に行きながらこっちにいるとか、こっちを主体的にしながら行けるとかに行くとか、いろいろなやり方があると思うのですが、そういう拠点みたいな感じ、居場所だったり活動拠点として特殊学級というものを今、利用してもらっています。その中で個別的なサポートをしたり、学びや育ちを見守りながらやっているという感じが、今の白人でやっているところです。

学校教育については、これぐらいにしようかと思っています。吉藤先生にかなり言っていたので、そこら辺で皆さんも握り拳を上げたような形で、納得できる話もあったと思います。僕はこれからは地域の中でということで、少しお話をしていきたいと思います。

今、康雄先生の方から、おかゆの会というのを紹介していただいたのですが、会の設立の経緯とかを2ページの後半あたりから載せていったのです。このきっかけは、僕が幕別町の研究所員に1回なったことがあるのです。そのときに、たまたま最後の打ち上げの飲み会のときに、隣りに教育長が座ったのです。今で言えばそこが大きなすごいスタートラインなのです。

そのときに、たまたまその教育長という方が福祉畑を歩かれてきた方で、僕が障害児教育をやっていたのを、遠くの方からかなり見ていてくれたらしいのです。君は、特学をやっている北川というやつなんだとかという話になって、どういうことをやっているのだという話をしたときに、僕は自分が今かかわっているお子さんの話や、実は不登校のお子さんを特学の中で対応していた経緯があったので、不登校のお話をしたときに、あなたは、そういうことまでやるのかという話になったのです。

2時間その飲み会があったのですが、僕の話をして2時間ずっと聞き続けてくれたのです。また私が口が下手なものですから、ばんばんしゃべるわけです。その中で、芦別に星槎(せいさ)高校というのがあって、僕が担当をしていた子が実は行っていたりしているという話をして、その話をしたときに、ちょっと目が輝いて「行かせろ」という話に。本当に行かせるわけにはいかないのに、何とかならないのかといううちに、視察に出してくれたのです。それも、その教育長も一緒に行くと

いう話になって一緒に行ったのです。

今日、時森先生も来ているのですが、時森先生と僕と、あと教育委員会の方が3名行ったのです。僕も教育委員会の方とそんなに接点はなかったのですが、そのときに初めて公用車というのに乗って、幕別町の公用車まで出していただいて、公用車を運転するのが教育委員会の課長さんだったのです。そんな人たちに何か申し訳ないと思いながら乗っていきながら星槎高校まで行きました。

帯広から星槎までは3時間ぐらいかかるのです。その車の中でも、僕と時森先生がまたしゃべるわけです。子どもたちの話や、そういういろいろな積る話を聞いてもらいたいというのもあったのですが、ざっくばらんに本当に話すことができたのです。そしてたまたまその日は平日でした。土日に普通行くのかと思っていたのですが、平日に行かせてくれたのです。たまたまちょうど星槎では、ちゃんと授業をやっておられる風景が見られて、すごくラッキーだったのです。

僕が担当していたお子さんもいて久しぶりに再会したりとか、そこで活動する風景を見て、本当にすごいと思いました。何でここに来るのだろうという驚きと、それぞれのお子さんたちがここまで来るまでの話も、風景を見ただけでも伝わってくるような感じで、だから何かそういうものを見て圧倒されて、そういう中に僕と教員という立場の2人と、あとは教育委員会の方がいたということなのです。

はっきり言って教育委員会の方もびっくりしていました。こういうところがあるのかと、何でここに来るのだという驚きです、何でなのだと。何でこんな山奥のこんなところに来るのだ。町じゃないのにとかという話なのです。帰りがけにまた話をするわけです。何で来るんだとこういう話をして、そこに僕らが居場所の話をするのです。居場所というものが重要だとか、そういうものをしたときに車の中でまた目が輝くわけです。

実は幕別町に一軒家があるから使ってみないかという話になるのです。そこでその一軒家を使えるときに使うという構想が浮かび上がってくるのです。そこが、今、思えば、おかゆの会の原点みたいな感じでした。

そこで家を見せていただいたときに、元地主さんが住んでいたおうちで、幕別町には100年記念ホールやパークゴルフ場など、すごく大きいのがありますが、その土地の一角を町が買い取るときに地主さんが置いていった家で、それぐらいすごく大きいわけです。見たこともないような屋敷で、入るのが恐れ多いみたいな感じなのですが、入ってみたときに、僕と時森先生は絶句するのです、こんなすごいところがあったと。

教育委員会の方々は、こんなところでいいのかいという話で、まったくそこでもう僕らは驚いて、ぜひ使わせてほしいと。こんなところでいいのかいみたいなところがまた擦れ違いますが、そこら辺がまた面白いのです。そこで僕らも知っている町内のお母さん方ですが、そのお母さんもまたすごい人で、幕別町に親の会を作り上げて、組織づくりをしていた方なのです。

十勝でも懇話会のメンバーになったり、積極的に出ていたお母さんに話し合いの席と一緒に入ってもらって、この家をどうやって使おうかという話をしていて、クリスマス会をやるという話になって、まずはクリスマス会をやったというのがきっかけでした。そのときに幕別町内から、あのとき子どもと親御さんと関係者で40名ぐらい集まりました。

1回きりでは面白くないからもっとやろうという話が必然的に出てくるわけです。こういう物件を借りる、物件というのでしょうか、そういう建物を借りる時の打ち上げ花火的ではなくて、ちょっ

とした会をつくって貸してくれませんかという方が、筋としてはいいという話になったときに、おかゆの会という名前が出てくるわけです。

おかゆの由来について話していると、また時間を取ってしまうので、おかゆの会というのをつくるわけです、趣意書を作ろうという話なのです。趣意書を作るときに参考になったのが、十勝のAD/HD&LD懇話会で作った趣意書なのです。趣意書を懇話会でも作ったのですが、そのいい部分をいただいて、あとは僕らが切り張りをして作ったものが、実はこの趣意書です。

そのときには僕も趣意書を作るときに、不登校や障害のあるお子さんなどという文言を、実は最初のスタートラインに入れていたのです。こういうものを作ってみたがどうだと、お母さん方とか関係者に出したときに、僕の背景としては、軽度発達障害のLDやAD/HDなどのお子さんたちも、その文言に入っていたのですが、地域にはダウン症のお子さんがいたりとか、肢体不自由のお子さんがいたときも、お母さん方も入ってきていたのですが、うちの子はだめですかという話になるわけです。

そうやってきたときに、趣意書を作っていく段階で障害のあるとかないかではなくて、子どもなのだという話に落ち着くのです。障害や不登校などそういう文言ではなくて、子どもなのだという話になったりとか、あと育ち合うとか個性や夢や希望というものが、その趣意書の中に盛り込まれていくのです。ここも3回ぐらい役員会を開いて作っていったのですが非常に面白かったです。

その中で一歩外に出たらもっとやらなければならないことがあると実感したのは、そこなのです。そういう役員会を開きながら、地域の中にある課題というものを、お母さん方とか関係者の人たちに言ってもらったのです。その中に、例えば障害のある子どもたちの活動拠点が本当に少ないのだという話になったときに、放課後、例えば休日、長期休業中どうしているのだろうと、そういう話が出てくるのです。

あとは、不登校や引きこもりを経験しているお子さんたち、実際そうになっているお子さんたちの居場所というものがないという話が出たりとか、でも障害があってもなくても、どのお子さんも育ち合うとか学び合うという放課後のスペースとか、休日というものが本当に今はないという話になったり、例えば社会に出ていく前の活動拠点、高等養護とかを出てすぐに就職ではなくて、ワンクッション置いてほしいのだという話が出てきたり、そこら辺が僕も非常に勉強になりました。

あとは未来に向かってということで、義務教育終了後というのは、どの地域にとっても非常に大きな課題ですが、作業所は幕別町に1つしかないとなってきたときに、私たちの子どもはどうなるのだという話になったときに、もう少ししたら作業所を造るかみたいな話になるのです。

あとは星槎というものを十勝にもいろいろ作っていききたいのだという、サポート校みたいなものができればいいみたいな夢みたいな話です。あとは、いろいろな役員会なども開かれるうちに、どんどん人が増えていったのですが、その中にはことばの教室の先生がいたり、幼児にかかわっている先生方がいたり、小学校、中学校とだんだんそろってきたときに、関係機関が集まってくると、これが俺のステージだとかそういう話になっていくのです。そういう中でやってきました。

そして、今ということで、ああいうことをよしよしと実現していく夢ということで、少し紹介をしたいのですが、ここで1回ビデオを。UHBで『北海道NOW』という番組があるのですが、誰も見たことがないと思うのです。僕も見たことがなかったのですが、金曜日の夜10時52分から55分の3分間の行政番組で、北海道のいろいろなそういう活動をしている人たちを集めて収録してくれ

ていて、それを受けて、今、3分間ぐらいですが見てください。

<ビデオ>

これが幕別町の家の前にある芝生なのです。あれが家なのです。後ろにさりげなくいるのが私なのです(笑)。ここは子ども広場をやった後のミーティングなのですが、おかゆを食べているところです。

という感じで、今、活動をしていまして、実は今もう、お子さんたちも青年もいるのですが、含めるとすごい人数になって、会員が200名を超えてしまったのです。幕別町というところで始めたことが、いろいろなところで輪を広げてきたという、僕も自分でやりながら時々恐ろしくなるのです。

この前も大谷短大というのがあるのですが、今、そこの学生たちがたくさんボランティアで来てくれている。そこの学園祭にみんなで行こうという企画をやりまして、そこの大谷短大の学園祭に、おかゆの会として1室もらって、実は畑も借りているのです。幕別町の地域の方が貸してくれているのが200坪近いのです。それを借りて畑作業をしているのですが、その作物を売るということをやったり、今度はクリスマス会もあるのですが、来週はそば打ちがあるのです。

そば打ちも賛同会員方で、幕別町にそばで、結構、その時期にしかそばを作らないというおそば屋さんがあるのですが、新そばの粉ができたから、ぜひおかゆの会のために打ってみたいという方が名乗り出てくれまして、それに賛同して僕らの方がすみませんお願いしますという形でやったりしています。

保護者の感想からとか、いろいろ抜き出して、今までの会報の中から抜いたやつとか、生まれてきた物語という中で、発足当初は、お互い初めて会うようなお子さんたちや、初めて会う関係者が多かったので、はっきり言ってぎこちなかったです。でも1年以上一緒に毎月会ったりして、今、「まっくもっく」という感じで、木曜日に家を開けるのですが、保護者の方が集まってきて木曜日に家を開けて活動をしたりとかありますが、そんな中でみんなが仲良くなっていく中で、いろいろなエピソードが生まれてくることができるようになりました。

例えば、今まで2年間不登校でずっともんもんと家で生活していたお子さんが、これはもう僕も奇跡のような風景だったのですが、家に入ってきてしまった。お母さんも信じられないという光景で、そこを読むとまた長くなって、僕も感極まってしまうと思うので、読むのを控えます、読んでみてください。

あとは今までの活動から見えてきたことということで、支援教育にも少しヒントになるのかと思いつつ書いておりました。子どもの居場所づくりから、みんなの居場所づくりということで、最初は子どもの居場所をつくらうという話だったのですが、僕たちにとっても非常に居心地がいいのです。大人にとってもそういう場所が必要なのだということに本当に気付いていって、お父さん、お母さんが本当に集うような。

あと、「ゆっくり・たのしく・自分から」という表現があるのですが、これはあるときに、お母さんが言った言葉なのです。おかゆの会の活動を何かいい言葉に置き換えると何だろうと言ったら、こういう言葉を言ってくれたのです。ですから、「ゆっくり・たのしく・自分から」動きだせるような環境づくりというのは、学校教育にも必要だと思っています。

あと新しい教育の枠を地域で創造するためにということで、ほんと僕も一歩外に出てやったので

すが、本当に地域資源の多さというものに改めてびっくりしました。例えば、その家の地下があったのですが、1年目もすごく人数がキャンプに集まったのですが、2年目は人が多過ぎて、たぶんこの家でキャンプができないという話になったのですが、そのときに地下があるという話に誰かがひらめいたのです。地下に寝られるではないか。でも地下は本当にほこりをかぶって十数年まったく手付かずなので、倉庫みたいな感じで、くもの巣ははっているわ、ネズミは出てくるわ、みたいなところだったのです。

ところが、ここを何とかすれば、子どもたちはここに寝られるのではないかという発想が出てくるわけです。そのときに、お父さん方の中で大工さん出身だとか、電気屋さんがいるんですよ。そうしたら、俺たちがやってやるよみたいな話になって、だけど資材が足りないという話になったときに、ちゃんと役員会の中に必ず委員会の方がいるのです。

役員会に必ず行政といわれている教育委員会の方が必ず1名か2名来ていたわけで、それをちょっと聞いていて、役場に行って当たったのでしょう。次の日にかけて資材が入っていたのです。木材とかスタイロフォームみたいなものとか、そういう材料が入っていた。セメントボンドが足りないみたいな話になってくるのです。これを誰が張るのだみたいな話になったときに、そと課長さんがセメントボンドをホームックで買って持ってきているのです。そういう風景なのです。それは今まで僕も見ることがないです。

1人の大人としてみんなやっているのですが、それぞれの背景の武器を使ってくれるのです。そういうところがあって、そういう資源の多さ。自分1人ではまったく地下の工事は、僕もど素人でできないので、教えてよ、分からないという話になるんですけど、俺がやってやる、塗ってやるというお父さんが出てきたときに、本当に、今、地下がすごいのです。地下に降りていく階段にまでじゅうたんが引いてあったり、すごい地下ができてしまったのです。子どもたちはそっちへ行きたがるのです。今もそういう「まっくもっく」のときには、ほとんどみんな地下で遊んでいます。

あと最後に、みんなで育てたかぼちゃです、という写真があるのですが、この写真を見たときにあらためて僕も驚いたのですが、ここに写っている人たちはすごいのですが、幼児期・小学生・中学生・大学生といるのです。青年という二十歳ぐらいの方もいるし、あと大人も関係者で、小学校の先生、中学校の先生、高等養護の先生もいて、大学の先生もいるわけです。あと幼児期のことばの教室の先生もいて、教育委員会の方もこの写真の中に入っているのです。

僕もこれを見て、高等養護の校長先生も実は中に入っていたのです。そういう風景を見たときに、すごいと言われまして、何かさりげなく写っているのですがすごい写真だなと、これもまとめながらずっと思っていたのです。

あと最後にということでもまとめてありますが、僕もこうやっていろいろな地域に出て活動をしているのですが、何よりうれしいのが友達や仲間がいるということです、第1点は、非常にこれが支えになっているということで、何で僕がここまで突き動かされたように、例えば、今も10年間引きこもっている方の家に行き始めたのですが、何かに突き動かされるように。何で僕がそんなことをしているのかと思ったときに、自分自身が味わった仲間という楽しいとかうれしいというものを、何とか、今つらい思いをしている人たちにも味わってもらいたいという気持ちかと思ったのです。

それを最後にとまとめたのが、そういう言葉に実はたどり着いたのが、今回の資料で刷ったのが遅くなりました。最後にちょっと書けなくて、そういう気持ちというのでしょうか、みんながうれ

しいとか、楽しいとかというものを、みんなにも味わってほしいし、そういう地域づくりというのを、これから僕もやっていきたいということを思っています。そんなところで終わります。(拍手)

北大シンポジウム 資料

2004. 11. 23

「学校現場から そして地域へ・・・」

～育っていく子どもたちの姿から教えられ そして始めたこと～

幕別町立白人小学校 北川 和博

I はじめに 今日の話しの前提・・・出会いとかかわりの中で

平成元年～5年 帯広市立緑丘小学校 情緒学級で出会った子どもたち
登校拒否・自閉症・場面緘黙

知らなさすぎる自分 とまどいと自問自答の日々

平成5年～12年 帯広市立森の里小学校
不登校・集団不適応・ADHD・LD・愛情剥奪症候群・虐待

チルドレンファーストの会→十勝ADHD&LD懇話会

平成12年～ 幕別町立白人小学校
アスペルガー症候群・高機能自閉症・不登校・ADHD・虐待
通常学級の中にいる配慮を要する子どもたちの存在

育ちゆく子どもたち・青年の姿→「おかゆの会」

II 子どもの「育ち」と「学び」を支えるために

1 学校教育の中で・・・様々な子どもたちのニーズに responding していくための環境づくり

(1) 個別的な配慮と支援を必要としている子どもたち

- ・知的機能や運動機能の成長が全般的にゆるやか
- ・同年齢の仲間集団をつくるのが苦手
- ・口げんかやとっくみあいのけんか等、友だちとのトラブルが多い
- ・楽しい気持ちを共有したり、気持ちでの交流が苦手
- ・ことばを使ってのコミュニケーションが苦手
- ・ものごとに対するこだわりが強く、気持ちの切り替えが難しい
- ・一斉の指示、一斉授業の流れにのるのが苦手
- ・特定の能力の習得と使用に著しい困難な面がある
- ・課題やあそび等の活動の中で注意を持続させたり順序立てて行うのが苦手
- ・環境や場面の变化に対して、極度に不安定になってしまう
- ・家庭ではお話を出来るけれど、学校に行くとお話をしない
- ・朝になると頭やお腹が痛くなり、学校を休むことが多い
- ・学校に行くことが出来ない
- ・育ちの過程の中に受けた心理的なダメージなどにより、成長のバランスが悪くなっている
- ・その他の心の問題で困っている

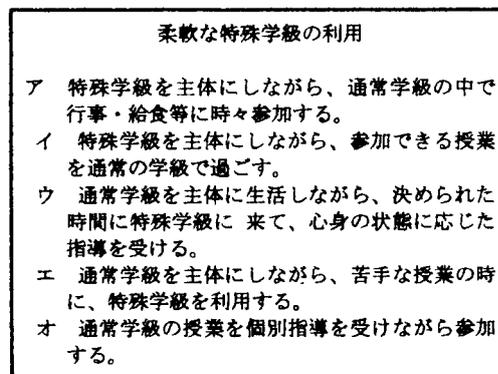
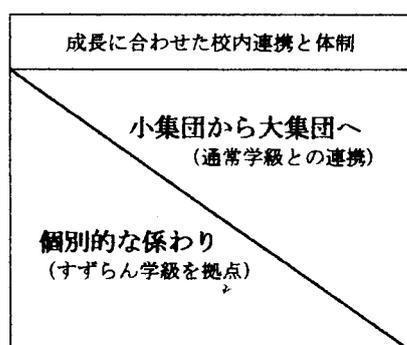
(2) 気づきからサポートまでのプロセス

① 支援への気づき

- ・乳幼児期からの気づきと引継ぎ→既存の就学指導委員会から
地域合同ミーティングの可能性
(保健師・母子通園センター・幼児ことばの教室・保育所・幼稚園・サークル)
- ・入学後～学校日常生活場面での気づきから支援
 - ・集団生活での気づき(集団活動・休み時間・運動会や学習発表会での気づき)
 - ・学習場面での気づき(担任や保護者の気づき)

② 具体的なサポートへ(特殊教育担当者として)

- 間接的なサポート
 - ・見守り・担任への情報提供
 - ・保護者、担任との相談活動
 - ・校内研修での情報提供
 - ・関係機関の紹介と仲介
- 直接的なサポート
 - ・柔軟な特殊学級の利用
 - ・成長に合わせた個別の「育ち」「学び」サポート



2 そして地域で・・・「おかゆの会」の取り組みから見てきたこと

(1) おかゆの会設立の経緯 (会報「ハッピースマイル」1号より抜粋)

自分の居場所や、生き生きとした活動をする場所を探している子どもたちに、できることから始めたい・・・今までのそんな思いが一挙に膨らみ「おかゆの会」が設立されました。そもそも「おかゆの会」の設立のきっかけは、昨年7月に芦別にある星槎国際高等学校へ、会の呼びかけの中心となった5名が視察に行ったことでした。この高校は広域性の通償制高校で、かつて不登校や引きこもりを経験していたり、「障がい」があるために周囲に理解されずに過ごしてきた人たちが集う高校でした。幸い視察当日は生徒さんと先生方が生き生きと活動する場面に会えることができました。活動を見ながら、そこに行き着くまでの生徒さん・先生方の道のりを思うと胸が詰まる思いがしました。

そして校長先生の話の中で「こんな字を知っていますか? 「にんべん」に育と書いて「侘」これを”いく”又は”かゆ”と読むそうです。」・・・人を育てる営み・・・そんなイメージを広げるいい字だ

ねえ・・・視察の帰りの道中で話は盛り上がり、幕別に帰ったら”おかゆの会”を作って、お粥でも食べながら夢を語り、出来ることから始めたいね・・・そんな会話が、実は「おかゆの会」の始まりだったのです。

ある日 教育委員会より活動場所にと”幕別町まっく・ざ・まっく研究所”が紹介されました。その建物とその家庭的な空間・雰囲気を見た時「おかゆの会」の活動イメージが一層膨らんでいったのでした。そこは近くに百年記念ホール・スポーツセンター・パークゴルフ場、そして広い芝生の大地が広がっています。これこそ長年子どもにかかわってきた保護者や関係者が探していた理想の場所だったのでした。そして、当初5名だった呼びかけ人も、話し合いを重ねる度に保護者や関係者の輪が広がり、本格的な会として発足するまでには、幕別町内・近隣地域から総勢20数名のスタッフがそろっていました。

(2) 趣意書への思い

会設立に向けて、まず着手したのが「趣意書」の作成でした。まずは現段階の私たちの思いを文章にしていく作業は、保護者や関係者が抱える悩みや抱えている夢を語ることから始めました。当初の案の段階では文章の中に「不登校「障がい」という文字が含まれていましたが、私たちの思いは「子どもたち」「育ち合う」「個性」「夢」「希望」「願い」というキーワードに凝縮されていきました。そしてたどり着いたのが次のような文章でした。

様々な理由から周囲との関係の中でつまづきやすい子どもたちが、生き生きと活動する拠点をさがせずいたり、自分の居場所や行き場所を見失っていたりする状況が見られます。また、地域の中で子どもたちが集い育ち合う環境が年々減少しているという状況もあります。

このような状況を少しでも改善し、「子どもたちに生きていくための糧となるような居場所づくりや活動を展開したい」という願いは、子どもたちを育てている保護者の方々や日ごろ子どもたちと接している関係機関の方々の多くが長年抱えてきた夢や希望ではないでしょうか。

様々な個性があるために生き生きと活動する場所が限定されてきたことを、同じ時代を生きる大人として、しっかりと受け止め、周囲の方々の理解が深まるような活動と平行して、今困っている子どもたちに大人として今何ができるのか、ということに目を向けていくことが重要なことと私たちは考えています。

子どもたちがこれから生き生きとした夢と希望を持った人生を送れるよう、環境を保障していくことは私たちの責任であり、願いでもあります。

子どもたちが「生まれてきてよかった」と思い、家族が「この子を授かってよかった」と思い、周りの人々が「この子と出会えてよかった」と思えるような環境を共に築いていきたいと思います。

2003年2月28日

「おかゆの会」準備委員会

(3) 一歩外に出たら・・・もっと やらなきゃならないことが 沢山ある

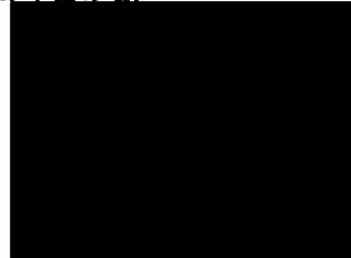
「おかゆの会」準備の段階から、数多くの保護者や関係者・学生ボランティアとの出会いがあり、話し合いを重ねていきました。それぞれの保護者や関係者の抱える課題や思いが沢山ありました。

○ 子どもたちの活動拠点作り

- ・「障がい」のある子どもたちの活動拠点（放課後・休日・長期休業中）
- ・「不登校」「引きこもり」の子どもたちの活動拠点（居場所づくり）
- ・子どもたちの育ち合い・学び合う活動拠点
- ・社会に出て行く前の活動拠点（就労に向けての準備の場）

○ 保護者・関係者の集い

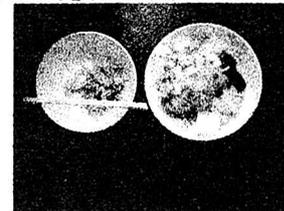
- ・学習会や講演会の開催や参加
- ・夢を語る懇親会
- ・悩み相談・悩みを語り合う会
- ・カウンセリング ワークショップの会
- ・ボランティアの方々への研修講座の開催



活動拠点は「魔法の家」

○ 支援の輪を広げる

- ・各種イベントへの参加
- ・各種団体への啓発と協力



役員会のお粥

○ 未来に向かって

- ・義務教育終了以後の地域体制づくり
 - ・作業所の開設
 - ・星槎国際高等学校（広域性通信高校）のサポート校
- ・子どもの育ちをライフステージごとに支援できる体制づくり
 - ・子ども支援センター

(4) そして今・・・会えることのうれしさと 実現していく夢 膨らむ希望

① 会員数（ 9月 3日現在）（ ）は昨年度の数字

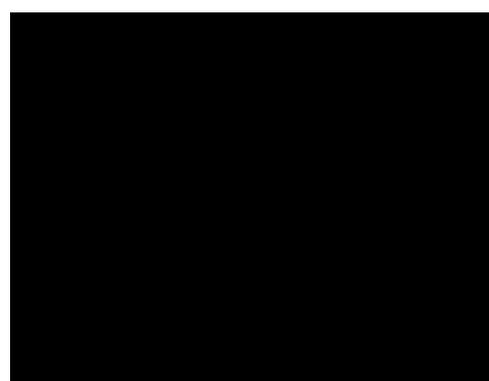
正会員・・・78名(40名)
本人会員・・・67名(24名)
賛同会員・・・(団体2 個人69名(26名))
学生会員・・・10名(5名)

計 団体2 個人 224名

② 本年度の活動の様子



4月の子ども広場風景



5月の子ども広場
テレビの取材を受けました。



7月 サマーキャンプの風景



懇親会の風景

ア 保護者の感想から 会報より抜粋

「キャンプ」に参加して

妻より「おかゆの会」のことについては聞いたり、通僮を読んだりしていましたが、実際活動には参加していなかったのが初めてにして「キャンプ」ということで会場の「まっく・ざ・まっく」に着きました。とてもいい場所にあり、息子が冬に野球をした所はここのかと思いながら、多数の参加の中に我が子も入れてもらうことになり、どうなることやらと思いつつもキャンプはスタートしました。

夕食の焼き肉を食べていても落ち着かずにグルグルしたり走り回っていても周りの方々は「〇〇君」と声をかけてくれたり、とこれが妻のいっていた「居場所」なんだと我が子の様子を見ていました。

花火の時には、はしゃぎすぎて煙を吸い込んで「ゴホゴホ」していた所「大丈夫？」と声をかけてくれたのが、〇〇先生だったのです。大人の方々の懇親会の紹介の時にやっと顔と名前が一致し安心し、我が子はこんなに沢山の方々に世話になり楽しめる場所を作ってもらっていること、そして皆さんがとても明るいことにびっくりしました。これからも参加できるようにしたいです。妻からの話も納得して聞くことが出来るようになると思います。このたびボランティアの方々やお手伝いをして下さった方々には本当に感謝しております。そして、これからも我が子「〇〇」をよろしくお願いします。

「バスツアー」に参加して

「バス遠足行きたくない。おなか痛い。」いつものことです。昨日はおやつを買ってあんなに楽しみにしていたのに……。それでも何とか言いくるめて連れて行くと、〇〇小のお友達の姿が見え「ヤッター」と大喜び。

行きのバスの中では、お菓子をずっと食べ通しソフトクリームも食べ、満足な様子。博物館では、自由に歩き回り、興味深く見ていました。そして自由時間は糠平湖畔を散策。釣りをしている側で石投げが始まり「2回できた。3回出来た。」といつまでも水切りをしていました。そういえば父親と石投げなんかしたことがなかったかも。

思えば、この1年、〇〇はどこへも外出したがらず、母親から離れず悶々とした日々を過ごしてきた私たち家族。この日は久々に母子で、すがすがしい一日を送ることが出来ました。ありがとうございました。

③ 生まれてきた物語

会発足当初はお互いが少々ぎこちない関係でしたが、約1年間の活動を通して、会員同士の交流が深まりまるで大きな大きな家族のような雰囲気が多く見受けられるようになりました。そして、何気ない風景の中に色々なエピソードが生まれてくるようになりました。

会報「はっぴーすまいる 4号」から抜粋

ある青年は4月から遠くの学校で寄宿舎生活を送ることになりました。なれない場所・新しい環境の中で気持ちが緊張し、今まで経験したことのないような寂しさを感じていたようでした。そして4月の「子ども広場」を心待ちにしていました。

いよいよ子ども広場の日、まっくに到着した青年は感極まったのでしょうか、一緒に過ごしてきた子どもたちやスタッフに泣きながら握手を求めてきました。

その風景を見て、みんながまるで帰郷したお兄さんを迎えるように「おかえり」と言ったり拍手をして迎えました。

5月13日初めて今年高1の息子といっしょに、「まっく・ざ・まっく」を訪れました。息子は中2の6月頃から少しずつ元気がなくなり9月末から不登校になりました。その時から親子共々悲しくつらい日々が始まりました。どうしてこんなことになるのだろう？ “我が子に限って！” 子どもの辛い気持ちを理解するどころか自分のつらさで一杯でした。

それから約2年・・・その間に中学を卒業し、通信制の高校に行くことになり入学式を迎えたころから少しずつ元気になってきましたが2歩進んで1歩下がり状態でした。そんな中、思い切って息子を連れ「まっく」に出かけることにしました。はじめは車から降りずに寝ころんでいたのですが、その後「まっく」に来ていた16歳の女の子2人が声をかけると何と車から出てきて大声で笑いはじめたのです。作業所に通われている19歳の青年が寄っていくと共通の趣味の話して盛り上がり肩を組んだり、駆け回ったり・・・家の中からその様子を見ながら・・・私の悲しみが笑みに変わった瞬間でした。・・・それから毎週木曜日まっくへ行くのが生活のリズムになりました。息子も私もまわりの人々の世界を知ることができ、本音で語り合える友に出会うことが出来、人間とは何か、生きるとは何かという所まで考える機会を与えられ、感謝の気持ちで一杯です。

その時の風景を振り返って・・・「その時 彼は動き出した」(文責 北川)

「まっくもっく」の日に、高校を休学中の女の子2名がやって来てくれて、畑作業を手伝ってくれました。

午後からは作業所の仕事を終えたエイさんがやってきて、すぐその高校生たちと仲良くなってしまいました。(エイさんは体に障害があるためにうまく歩けなかったり、流ちょうに話しが出来ませんが、とても明るく「おかゆの会」の本人会員代表になってくれている最近二十歳を迎えた青年です。)そこへお母さんと青年がやって来ました。その青年は不登校になって2年目、お母さんも一緒に死にたいというほどの時期もあったそうです。この家の場所がよくわからなくて帯広から普通なら30分程度なのですが、2時間もかかってここにたどり着いたということでした。とにかく外に出てみようということでもうまく青年を誘い出したそんな感じでした。2時間もかかってしまったので、逆に青年は憤慨しているような状況も感じられました。青年は車から降りないで携帯電話を操作しながら車の中で過ごしていました。

そんな様子を知った高校生とエイさんが「私たちが誘ってみるね」と車に向かっていきました。

誰もが恐らく降りないだろうと・・・その光景を眺めていました。
するとどうでしょう・・・あつという間におりてきたではありませんか。片言の表現で話をしているエイさんの姿とそれにうれしそうにしている青年の姿がありました。
そこへ今度は、放課後「まっくもっく」に遊びに来たケイクンが登場！遊んでくれそうな人たちがたむろしている中へ、強引に自転車で突っ込みアプローチ！あつという間に追いかけてこのようなあそびが展開していきました。うれしそうな高校生・青年・エイさん・ケイクン。とうてい大人にはつくりきれない世界が広がっていて、まるで奇跡のような光景でした。
それを眺めるお母さんは「何が起こったんでしょう！」と、涙を浮かべていました。そして、とうとう「おかゆの会」の家にみんな汗をかいた状態で入ってきてしまったのでした。
なぜ青年は車から降り、あそび、家に入ったのか・・・同じ世代の高校生がいてエイさんがいて、ケイクンがいて、青空がひろがっていて、広い芝生があって、家があった、何だかいい雰囲気があった。そして、出たくなかった。事実を言えばそれだけかもしれません。私には、高校生・エイさん・ケイクンが、私たち大人がなし得なかった事をやってのけたとしか私には思えません。
しかし、この高校生・青年・子どもたちの日常に思いを巡らせた時、不登校ということで、または障害があるということ、その人らしく生き生きと活動できる場所がなくて随分と不自由な思いをさせてしまっている事を本当にすまなく思います。高校生の廿の子は、初めて此処に訪れてエイさんに出会った時「久しぶりに笑った」とも言いました。その事を本当に重く受け止めたいと思います。
そして、今、高校生女の子2名は、正式に高校を退学し、それぞれの歩みを始めました。エイさんはエイさんで、いつものようにみんなを惹きつけ元気と優しさを与えてくれています。青年は、この日をきっかけに毎週木曜日の「まっくもっく」に来て、畑作業の手伝いや放課後遊びに来る子どもたちと遊んでくれています。

(4) 今までの活動から、見えてきたこと

① 子どもの居場所づくりから、みんなの居場所作りへ

子どもたちに居場所を創ってあげよう・・・それが「おかゆの会」の活動精神でした。しかし、活動を展開しているうちに、それは自分たち大人にとっても心地の良い居場所となっていきました。日常の見えない荷物を、子ども・青年に限らず、保護者も関係者も背負っているような気がしています。その背負った荷物を下ろせる場所、自分が自分らしく居られる場所というのを、今の時代どの人も求めていることを実感しています。

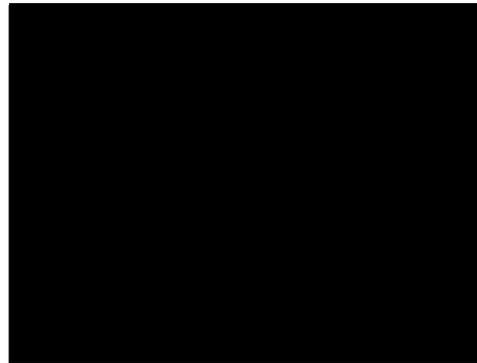
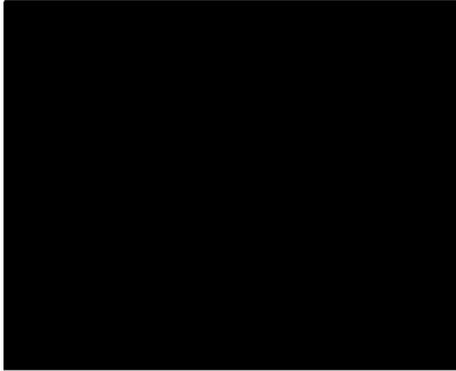
② ゆっくり・たのしく・自分から・・・

「ゆっくり・たのしく・自分から・・・」この言葉は、あるお母さんが、今までの活動や、子どもたちの様子を振り返りながら、語ってくれた言葉です。従来の「・・・ねばならない」「・・・ために」「・・・までに」というような明確な目標や課題をクリアするために「今」を過ごすのではなく、その時間を「ゆっくり・たのしく・自分から・・・」動き出せるような、みんなの「居場所づくり」を、これからもみんなで創り出していきたいと思えます。

③ 新しい教育の枠組みを地域で創造していくために

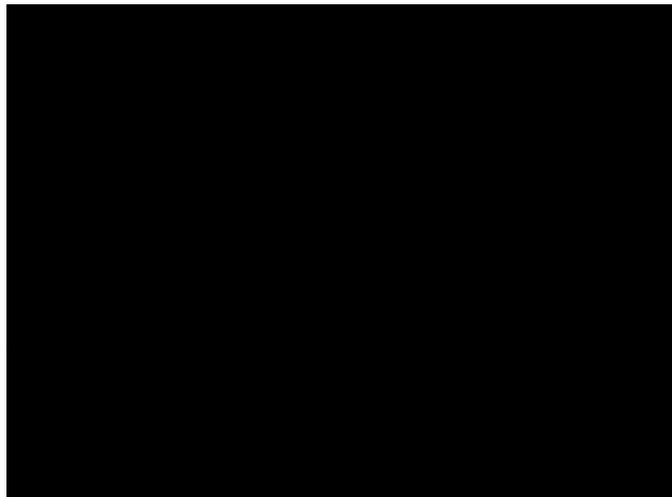
「おかゆの会」の活動を展開していく中で、地域の資源の多さに改めて驚かされました。学校という枠組みの中で、右往左往していても解決できないような事も、様々な職種や立場の人たちが集うことで解決の糸口が見つかるような気がします。近年、福祉・教育の制

度が著しく変化してきています。「特別支援教育」の流れもその大きな流れの一つのような気がします。今、教育という枠組みの中（残念ながらまだその中でも特殊教育のみ）でのみ論議がされるようになってきましたが、もっと地域に根ざした論議が今後必要になってくるのだと思います。そして、より大らかな視点に立って、人の「育ち」と「学び」を支えていくための地域の支援体制をこの新しい教育の枠組みを創造していくための基盤として必要だとも思います。



サマーキャンプに向けて
大人が集って地下工事をしました。

ちょっと・・・昼寝・・・



みんなで育てたカボチャです。

Ⅲ さいごに・・・

私自身「十勝ADHD&LD懇話会」そして「おかゆの会」の活動をしていくことで、自分の狭い世界から一歩外に踏み出し、今まで見えなかったことや、見えてきたり、不可能と思っていたことが、可能となっていくうれしさを実感する瞬間が沢山ありました。

この事はこれからの支援教育を前に、自分にとってとても貴重な事だと思います。何よりうれしいことは、こんなに沢山の仲間や友だちに囲まれていて「自分が自分らしく」出来る場所が、沢山あるという事です。こんな思いを、自分だけではなく、今まで孤立無援でつらい思いをしてきた子どもたち・青年たち・保護者にも味わって欲しい・・・

私の思いややってきている事はこの事につきるのかもしれない・・・今回の資料を作成しながら、そう思いました。

(田中) ありがとうございます。だいたい北川さんの話の後に話す方というのは、すごいプレッシャーを感じまして、このテンションをどう持続するか断ち切るかというような状況になりますが、3人目として、内田さんに登場していただこうと思いますが、今、北川さんのお話にも出てきた大谷短大ですが、今現在そこで先生をされております。内田さんは、もともとこの大学ですね、北大の教育学部を卒業した方です。その後道内の児童相談所にご勤務されました。心理判定員を中心にしたお仕事ですが、ひじょうに養育者や保育士さんたちからの信頼を得ている方です。帯広児童相談所時代に私は出会い、多くの示唆を得た方です。本当に感謝しております。急遽2001年には、本別町の、ことばの教室の指導員になりました。大きな理由は、子どもたちのその後を診たいということだったようです。2004年からは人材育成ということを目的にして、現在、帯広の大谷短期大学の社会福祉科で先生をされて、渾身の指導をされております。

十勝AD/HD&LD懇話会の設立当時のメンバーでして、もう1つ、子どもの虐待防止協会というものが札幌を中心にありますが、その十勝支部発足からのメンバーでもあり、現在事務局長もされておいでです。児童相談所の経験、そして今、教育の現場に来た中で、内田さんが感じていることをお話ししていただこうと思います、よろしくお願ひします。

3. 学校と他職種との連携を考える

内田 雅志（帯広大谷短期大学 社会福祉科講師）

(内田) 皆さん、こんにちは。11時半になっているので、こんにちはだと思うんですが、今、うちの学生は、このぐらいの時間になっても、朝一というか、今日初めて会うと「おはようございます」とあいさつをするんですね。それが正しいのかどうなのかということが時々議論になるんですが、一応こんにちはがいいかなと思ってあいさつをしました。実はこの話だけでも、少し膨らませて話すことができるんですが、今日はちょっとそれしてしまうので、いろいろご紹介ありがとうございます。

今、紹介していただきましたように、私はこの教育学部の出身でございまして、ちょうど20年ぐらい、卒業してからたつんですが、実は、さっきごあいさつをいただきました、学科長の逸見先生は、そのころまだ若手の先生でして、いろいろお話相手になっていただいたことを思い出しまして、今日、逸見先生もいらっしゃるというお話を、最近聞いて、とてもそれから緊張しまして、余裕がなくなっているのが今の状態なんです、舌がもつれて、うまくしゃべれないことがあるかもしれませんが、どうぞご容赦ください。

田中先生の紹介にもあったんですが、今の2人の後にやるのは、とてもやりづらいというのが本当にあるので、僕は彼らのように華がないので地味にやっぺいこうかなと思うんですが、野球のネタの例えも何かうまく使えなくて、3番バッターなんです、フォアボールぐらいでいこうかなというふうに思っています。

今日、私の方で分担したテーマということで「学校と他職種との連携を考える」ということとお話ししようと思うんですが、児童相談所でしばらくというか結構長く働いていまして、主に判定員という仕事をしていました。それから、ことばの教室で働いていたんですが、そこは小学校の中にあることばの教室でして、学校の近くにいたということで、学校教育の周辺を少しうろろしてい

た人間として、どういったかわりができたか。そういったことで少し参加させていただいたことがある事例というか、そういったお子さん、お母さん、先生との付き合いについてお話しさせていただこうと思います。

事例の説明という性質上、どこかぼやかして正確にお話しできないようなところがあって、分かりづらいところがあるかもしれませんが、記録にも残せませんでしたので、お手元も中に何年の何学期ということしか資料を出せなかったんですが、そこら辺はご勘弁ください。

小学校1年生のときに、児童相談所の職員としてお会いした方のお話をさせていただきます。このお子さん、A君にしておきましょう。A君は、児童相談所のころに学校の先生を通じて相談に来られたということなのですが、道立の児童相談所というのは半径50キロから、60~70キロぐらいの広さのところを管轄しているものですから、札幌市のようになかなか児相まで直接行くということが難しい方が多いので、その町ごとに巡回相談という形で公民館などをお借りして、そこで相談会を開くという形があります、そういう形でお会いしました。

大抵小さい年齢の方で相談に来られるというのは、学校の先生や保育の先生や保健師さんなどの勧めで、こういうものがあるから利用したらどうですかというところで、うーんと考えてから腰を上げるという方が多いんですが、この方の場合もそうだったと思います。

当時小1だったそのA君はいわゆる奇行というか、少し変わった行動が多くて、そこら辺で、学校の先生も困っていたということだったんです。人懐こくて、頭の回転のいい子なんですけど、思いがけない行動が多くて、それも時には危険なことをするということがありました。廊下で突然、クラスメイトに抱きついていたり、先生の服をはさみで切ろうとしたりということがあったということなんです。それがいろいろな形でちょくちょくあるものですから、どうしたものだろうということだったということです。

実は、保育所のころから少し変わった様子というのが目にされていて、落ち着きがないとか、途中でいなくなってしまうんですが、迷子になっても全然怖がっていないとか、少し興味が特定のものに偏っているとか、当時阪神大震災の時期に、地震のニュースにすごい興味を引かれて、大人がびっくりするぐらい地震に関して詳しくなっていたとか、保育所では、いきなり水をかぶってみたり、そのころもすれ違いざまに友達にかかっていたりということがあったみたいです。

注意をすると目を潤ませて謝るので、悪いことをしたんだということは分かっているそうなんですけど、何かの弾みに不意にそういうことを自分でも制御できなくてやってしまうというようなことが気になっていたようです。A君に初めて会ったときに私はちょっと印象的だったんですが、目のきょろとしたかわい子だったんですが、少し周りの様子とかをきょろきょろと伺うような感じがあったのと、とても話しぶりが小学校1年生とは思えないぐらい、ませた口調といいますか、難しい言葉をあえて選んで使うみたいなのところがあって、しかも敬語を、確か少し仰々しいぐらいに使うというようなところがあって、頭のいい子なんだなということと、大人にはちゃんとした言葉を使わなきゃいけないということが分かっているということと、場にそぐわないということが少し感覚としてよく分からないのかなというようなことを感じました。

そういうことを見ると、そういう頭のよさや知識の豊富さと人とのかわり方、そうやって丁寧に接しようとする半面、時折びっくりさせるようなことをしてしまうというようなことがあって、そういうアンバランスみたいなのところが問題なんだろうと思って、たぶん、そういうものの根っこ

には、どういうふうに周りのことを認識するかみたいな、そういったその子の独特なところがあるんだらうというふうに考えて、そこら辺のことを、よりみんなと付き合いやすい形の人付き合いの仕方を覚えてもらうようなかわり、あえて持った方がいいかなということで、地元のことばの教室を使ったらどうだろうというお話が出ていました。

そういうときに児童相談所の人間が期待される役割というのは、何とかおうちの人に「ことばの教室に行った方がいいですよ」ということを勧めるというか、そういう役割なんですけど、みんなから期待されたからといって、すぐ、そうですねとやるわけではないので、一応自分で判断して、その方が、この方のためには、いい社会支援の活用だなというふうに考えてからそれをやるわけなんです。実はその方は、保育所時代にもそういう話が出ていたんですけど、療育の機会などが何かうまくつながらなかったということです。

そこら辺で、何か抵抗があるかもしれないなということを考えてお話をするというのを気を付けました。そういう中で、前の話があったものですからちょっとお母さんがかたくななのかなとか、子どもさんのことについての理解が周りの方と少し違うのかなというふうに思ってお会いしたんですけど、お会いしたら全然そんなことはなくて、ごくごく普通に子どもさんのことを心配しているお母さんでしたし、こちらの言っていることもよく分かってくださったんです。

ただ、だからといって、その場で、じゃあ、ことばの教室に行った方がいいですね。はい、お話は決まりですね、というふうにするわけにはいきませんので、まずはお母さんの育て方が悪くて、こうなったわけではないでしょうということと、もともと持って生まれた、お子さんの特徴みたいなところがあるかもしれないから、そういうところを確認してみましょうかというお話をして、後日、児童相談所で、お医者さんというのは、ここにいる田中先生のことですが、会ってもらって、それから話を進めようかなというふうに持っていきました。

そこら辺で、ぱっと見てくれる先生がいると、順を追って仕事を進められるということでとてもありがたいんですが、なかなか全部の相談所に、そういった嘱託医、お医者さんが契約を結んでというわけではないので、そこら辺は帯広はよかったなというふうに思っています。

それで、児童相談所に来てもらいまして診察も終えまして、ある程度の説明、たぶん何か障害がありますとか何とか、そんなところまで深いお話はしなくて、今後のことについてのアドバイスということがあったんだと思うんですが、その後でもどうも地元の方に問い合わせても、ことばの教室に続けて通うというお話にはならなかったようです。

何でうまく話が進まないんだらうなみたいな感じに思っていたんですが、お母さんの方の受け止めも、何か分かってくれたという感じがするし、子どもさんも楽しんでみたいなんだけれどもというふうに思ったんです。そうやって少し分からないうちに、時間がたつていくと、なぜかまたまた私が転職するという話が持ち上がりまして、その勤め先がそのA君のいる町だったわけです。さっきこの町か言っちゃったんですが、後でテープか何かを編集して、どこの町か分からないようにしてほしいなと思います。

私が、そのA君に通ってほしいと言っている教室の指導員になってしまったわけなんです。ですから、その前のつながりもあるものですから、このA君のことについて、どう対応しようかということ、その担当みたいな形になりました。でも、学校での様子というのは、まだまだ難しいところがあって、年々上がるごとに少し激しくなっているみたいなのところがあって、教室の中で、

結果的に授業妨害みたいなふうになってしまう。授業中にずっと大きな声を出しているというようなことがあったりして、少し先生も何とかしなきゃというふうに思っていたところで、私は話を聞いていただけじゃなくて、子どもさんの様子を実際に見ようと思って、教室の授業をやっている風景を見させていただくことになったんです。それが、3年生の1学期のときです。

実際にその日の様子はそんなに変わったことはなかったんですが、担任の先生のお話からは、いろいろ難しいといったことが、さっき言ったみたいなことがあったものですから、どう工夫されているかというふうに聞くと、少し落ち着かなくなったりしたら、なだめてみたり、抱きしめたり、あと時には放っておいて気分が落ち着くのを待ってみたりとかということ、いろいろ自分1人で工夫してやっていらっしゃるという話だったんです。だから、何とかその場しのぎにはなっても、なかなかそれが一貫した継続した対応になりづらいということで難しさを考えていたようなんです。

ですから今度は、そこら辺で形をつくって学校と子どもさんを支援する方法を取りましょうということで、やはりことばの教室に通ってもらえるようにしましょうかということで、もう1回お母さんにお会いしてお話をしました。このころには、参観日などもあって、そのときの様子を見たりして、お母さんもだいたいこのままではいけないなと思われたようで、ずいぶんこっちのお話に乗ってくれまして、何とか通ってもらえるように話を持っていけました。ですから、それが小3の1学期、夏に近いころですから、最初に会ってお話をしてから、ここでもう1年半近くたっているわけです。

でも、このぐらいの時間がかかったことに関しては、後から考えると慌てなくてよかったかなというふうに思っています。子どもさんの様子について分かることと、周りがそのお子さんにこうしたらいいなというふうに思うことというのが、決して周りの人と親とが一致する必要はないだろうなと思うんです。親は親の気持ちで、子どもさんのことをどうとらえて、何が必要かというのを、心の準備ができてから動きがあれば、それでいいんじゃないかなと私は思っていますので、ここはもっと早くにということはありませんでした。

来ていただいて、ことばの教室に通うようになって、どんなことをしていたかという、コミュニケーション全体の力を付けようと思って、この子の周りの方と今、思い浮かべていることが、少し違うみたいなどころとか、自分の興味のあることだけに集中しちゃみたいなどころが難しいかなと思ったので、言葉遊びで、例えばミニバレーのボールをぼーんと隣の人に渡して山手線ゲームみたいにして、お題に沿った物の名前を言う。「クリスマスに関係があるもの」「サンタさん」「トナカイ」など、そういうふうに言うというようなことをやったりしたりとか、例えば「魚の名前といえよ？」と言ったら、一斉に「サケ」などと、何人か先生やお母さんなどと一緒に言ったりというような遊びをしていたんです。

そういうときにこの子は、A君自身が出したお題が「野球で一番大切な打順は？」と、この子は野球が大好きなんです。「野球で一番大切な打順は？」と言ったから、みんな、せーので、「4番」と言ったら、その子だけ「6番だ」と言い張って、6番かという反応をしてしまったら、「僕は6番だと思ってる」と言って、ドアをけ飛ばして出ていったということがあって、これだけずれると大変だよなというふうに思って、そういうことでこんなに怒るんだというふうに思いました。

それが、通い初めのころだったんですが、そんな調子でやっていく中で、結構来るのを楽しみにしてくれるようになりました。そういうところが、ずれみたいなのが、周りもあるんですけど、

何となくいいね、君のその考えはいいよね、というようなことを大事にして通ってもらおうということをしていたんです。だから楽しんでくれたんじゃないかなというふうに思います。

それが続いていたんですが、その3年生のときに、もう1回転機があって、1年生から3年生までずっと同じ担任の先生だったんです。ですが、その転勤の時期が近づいていて、3年生の担任の先生は、自分が次の人に交代するときに、何とかもう少しルートを作ってからじゃないと次の人に引継ぎできないというふうに、すごく頑張られたんです。

実は、その前に持っていらした子どもさんで、似たようなタイプの子どもさんがいて、実は、そのままクラスの中で浮いた存在になって、ずいぶんほかの子との間のトラブルが、学年が上がるほど悪化して、本人も学校もつらい思いをしたということを経験していて、この子に対しては、そういうふうにはならないように頑張ろうというような、その先生のすごく、先生としての良心や仕事への意識や子どもへの愛情などを強く思っていた方で、そのことで、何とかきちんと次の人が、この子どもさんにかかわれるような状況づくりをしたいということで、複数担任制的な対応にできるようにしたいということだったんです。

やはり学校はなかなか子どもさんが一人一人の理由によって、先生をもう1人配置するということは機能上も、また考え方の上でもやりづらみたいなどころがあって、学校内でも抵抗があったみたいなんですが、そこら辺を何とかしようということで、どこかで後押しして意見を言う人を探そうということで画策しました。

このときに、また乗ってくれたのが田中先生だったんですが、直接そのときは診察までつながらなかったのかもしれないのですが、以前受診しているということもありまして、意見を言ってくれて、田中先生とどこかラーメン屋の2階か何かで話をして打合せをしたというのを覚えているんですが、そうやってお医者さんの意見もあるから何とかその方がいいんじゃないかということをして、4年生からはクラスにもう1人先生が入るという形を取れるようにしました。

そして4年生になって、担任の先生もT2の先生も、T2というんです、2人目の先生のことを、私はよく分からないんですが、学校の先生は。その先生も、新しくその子とかかわるとい状況だったんですが、そのときにいろいろ引継ぎを受けていますから、何とかいい状態で迎えようということで、ちょうどそのころ病院を受診するというのと重なりましたので、そのT2の先生は、赴任の最初の仕事が学校の勤務じゃなくて、病院に、担任の先生と一緒に、受診に付き添って、お医者さんの説明を聞くというのが最初の仕事になったんです。実は新卒で、臨時みたいな扱いで先生になった人なんですけど、とても熱心で張り切っていました。

そこで2人担任制が始まったんですが、2人担任制になって、普段その若い女の先生が、その子にくっつけるようになると、その子は、その先生の方にたっぷり甘えを見せるというか、地の感情をばっと出すようになって、それまでは、どちらかといったらマイペースで我が道を行くという感じだったんですが、気持ちをぶつけるとか、その先生を試すかのように、教室を飛び出してみたり、学校を飛び出してみたりなどということも、出るようになってしまいました。

そういう様子では、かえって悪くなったんじゃないかなとかということが、周りから見えた時期があったと思うんですが、そこら辺をすごく迷いがあったところを、ずっと私も、その間、書いていますけれども、学校を訪れたり、担任ともう1人の先生が、ことばの教室の指導の時間に訪れてくれたりして、いろいろやりとりをしながら、たぶんこの路線は間違っていないはずだと、こうい

う時期が出てこない、この子は人付き合いの力は付いてこないから、少し辛抱しようと、先生は大変だけれども、もうちょっと今の調子でいっていけば、絶対落ち着いてくるからということで、私の半分はったりで話をしながらやっていたわけです。半分というか、かなり本当はったりで、自信はなかったんですが、やったことはしばらく続けるしか、覚悟を決めるしかしょうがないというか、ここで迷いが出ることの方が問題だろうと思ったので、路線をそんな数週間や数カ月で変えてはいけないというふうに考えて伝えていました。

その間に、お母さんがいろいろ考えだして、うちの子に何かいろいろ障害みたいなものがあるんじゃないかということに気がなされたときに、ことばの教室に通ったときなんですけど話が出たときに、ここで、このことについてお母さんとお父さんと話をするのが、私の分担の仕事だなというふうに思ったので、少しいろいろそういった軽度発達障害といわれるようなものに関するようなパンフレットをお見せしながらお話をしたんです。

ご両親とも、うちの子に合っているところが結構あるということでお話は聞いていただいたんですが、その後しばらくは、少し私との会話は弾まない時期が続きました。やはりすごく真剣に受け止められて、悩まれたんだろうなと思うんですが、実はもう1つ、ここで重なる時期がありまして、その4年生から就いたもう1人の先生は、臨時の先生で、来年のもう1人加配の配置が続けられるとは限らない。だから、安定して2人1組の体制にするには、障害児学級を開設するということが必要になるというお話が出ていて、就学指導委員会に、子どもさんの名前を挙げて検討してもらって、学級開設の手続きを取らなきゃならないという話が出ていたんです。

学校の方では、早くその話をお母さんに向けて考えてほしいというところと、最近親御さんがそこら辺の話を考え始めたところだから、もう少しゆっくりと考えてもらわなきゃいけないかもしれないというあたりのせめぎ合いがあったんですが、そこら辺を校長先生や教育委員会などの帳尻を合わせながらというか、どこかが先行して勝手に動かないように話し合いながらということ意識してやっていました。

上の方には、「そろそろ決めないと、やはり手続きがありますものね」と言いながら、親御さんには、「こういうのは、そんなに決断、早くしなくてもいいですよ。ゆっくり考えてください」と言って、両方に違う顔をしているのを分かっているのをさせてくれていたりということがありまして、時間をかけて、この(10)になっていますけれど、最終的に判断したのが3学期ぐらい、ぎりぎりまでということでもってもらえたんですが、待ってもらえたというか、親御さんにとっては待ってもらえたんですが、たぶん内密で手続きは進んでいたんでしょ、時期が間に合わないですから。

でも、そこら辺は、伝えることと手続きとを平行しながらやれるみたいな、そういう動きもできたように思います。ことばの教室に通うときもそうなんですが、子どもさんに対する説明は分かったということのご両親の考えと、じゃあ具体的に行動に移す。例えば、ことばの教室に通っている子であるということになると、障害児学級に名目だけでも在籍しているというふうになるとかということが、そこを引き受けるというのも、またタイムラグがあるというか、納得するのに時間がかかります。そこをしばらくお付き合いするというのが、かかわる人間にとっては大事なんだろうけど、そこができたかなというふうに思います。

そういうあたりで何とか5年生からは、障害児学級開設ということで、臨時の先生は、正規の教員採用試験が受かっていないものですから異動してしまっていたんですが、校内で、ほかの先生が

異動してこの子の担当になりました。その担当になった先生は、前は、若いかわいい女の先生で、とても子どもに引きずり回されながらも、ずっと必死で追い掛けて、愛情を全面に出して、本当にどちらかという学校の先生というよりも、保育所や幼稚園の先生みたいな感じで、一緒に遊ぶというところを大事にしてやっていた感じだったんですが、お姉さんという感じです。

今度の先生は、学校の中で一番こわもての少年団の監督をやっている先生です。少し私は嫌な予感がしていて、どうしよう、方針が全然変わって、この子が何かパニックが増えたらとかと思ったんですけど、そこら辺を担当が変わるという時点での校内の引継ぎや、またことばの教室に来てもらったり行ったりなどの繰り返しを何度かしていたおかげで、この子には、これ以上口をはさまない方がしっかりやれるんだなみたいなことがよく分かってきて、この先生はやればできるでは失礼ですね、のんびり見てあげるということができました。

だから話し合いとか、早め早めに準備をして意見交換をしておく、体制というのはつくれるんだなということそのときに分かったんです。その後、この子どもさんの方の状況がずいぶん落ち着いて、一番落ち着いたのがいつだったか。それで、さっき少し話をはしょちゃったんですが、女の先生が最初のうちすごい甘いせいで、かえって何か荒れたという状況があったんですが、秋口ぐらいには全然落ち着いてきちゃったんです。

「あらっ」と思うぐらい、そういういえば最近、学校の中で物が壊れないねという話をしていたとか。1学期は、確か卓球台が倒れて足が取れたよねとかという話をしていたんですが、「あっ」と言われて、だから、本人たちは必死でやっているから、「そうだ、よくなっている」ということに気付かないんですけど、時々私が、話をする関係で、「最近どうですか」と言って、うーんと思いつくと、「そうだ、よくなっている」ということが、点検できたりということがありまして、ずいぶんその子どもさんの様子がよくなりました。

そして、その担任の先生が代わったころには、もうほとんど特別なかわりをしなくても、だいたいのところ、変わったところがあるぐらいです。でも、一番学校でトラブルを起こす、先頭を切るということではなくなっていました。そのころにはマイペースだったその子も、今度は友達との友情などを口にするのが多くなって、ことばの教室での遊びも、最初のころ、いろいろさっきも言ったように考えたんです。

この子と遊ぶのに、少しでも、みんなと同じことを言えるようにするために、そういうソーシャルスキルを付けるためのトレーニングをしようといって、片仮名をたくさん使った指導計画書などを作ったんだけど、だんだん今日の指導のめあて「目いっぱい楽しく遊ぶ」しか書かなくなって、毎週毎週それしか書かなくなって、何をやったかという本人が毎週やりたいと言った、柔らかいボールを使って室内で野球をやるというのをやって、そのうちに彼が野球の物まねがうまいということが分かりまして、しかも、カブレラや、小笠原など、リーグでは強打者なんですけど、巨人戦しか見ていない人は全然知らないようなバッターの物まねを、とてもうまくやるというのが分かりました。最後の方には少年団の、ほかのチームメートの友達のまねをたくさんするようになりました。

周りに、あまり頓着しないでマイペースだった子が、何々君はこうなんだ、何々君はこうなんだということばかりを話題にするようになったんです。そのころには、もう私の役割もそんなにかないのかなと思いつつも、でもお母さんはずっと心配でというか、親御さんの心配というのは、周りが

こういう状況ではまずいというところと少し遅れて来て、周りが、これで私たちがかかわっている間の分は大丈夫だと思ったころには、この先どうなるんだろうということを、先の方を考えて今度は心配になってくるんです。

お母さんは、さっきから何度も出て、紹介しているLD懇話会などにも入ってくれたり、講演会を聞きにきてくれたりというふうにもなりまして、これで私も別の形でかかわれるかなという形で、ところでまたまた私の腰が落ち着かずに転職してしまったものですから、最近の細かい様子は知らないのですが、今日の発表に当たって本人に了解を得ないでやるわけにはいかないですから、最近の様子を聞いてみたら安定した状態でやれているということをお聞きして少し安心したんです。

長くなってしまいました。それで書いたものがあれば、さっと流せたんですが、書いたものを出すわけにはいかないので、出来事、A君とのかかわりの話をしたんですが、私の方では、この間の学校とのお付き合いなどで学んだことというのは、家族の思いというのは、理屈を理解したからといってすぐに切り替えられるものではない。それは当たり前的心情で、それがあからこそ子どもを育てていくことができるし、周囲の人間はそこをどう待ち、お付き合いができるかというのが役割になるんじゃないだろうかというふうに思ったこと、今お話したことです。

その次に、学校の先生はすぐ目の前のことを見て、どうしよう、どうしようと迷いながら、試行錯誤しながら子どもと向き合っていますので、そこら辺を、どうサポートするかが大事だろうなというふうに思いました。こうした方がもっといいという、アドバイスだけじゃなくて、今やれていること、このまま続けましょうとか、これでいいですよとかということ、そこら辺を伝える。だから、自分がやれているというところの手応えみたいなところを教えるというか、側面からお話してあげる方が、方針も一貫できますし、また頑張るという気にもなれるんじゃないかなと思いました。よく、前より悪くなったと思われている時期を担任の先生たちが乗り越えてくれたなということ、とても素晴らしかったなというふうに今、振り返って思っています。

私なりのまとめを3点。学校教育と家族支援の流れの他職種の役割ということと考えます。1つ、視点の変更。学校の中は基本的に同一職種です。私が最初に勤めた児童相談所というところ、ソーシャルワーカーと判定員と一時ホーム所というところの子どもの指導員などが、常にチームを組んで、職場内で常に異職種がチームを組むということが、当たり前前の職場にいたものですから、みんなが同じ職種で、同じ能力を持っていてという、もっと言うと、それでキャリアも同じぐらいだと、同じ職種の中で比較されるということが、起こりやすそうなところ、もともと特性があると思うんですが、そこら辺の何か難しさみたいなことに関して、別の視点を入れて、私の仕事の立場からではこういうふうに見えますよとか、その点に関しては、私の仕事の立場からも、いいやり方だと思いますよということが、きっと学校の方針に対する支えなどにもなるんじゃないかなと思えます。

次に、子どもと家族に別の時間と空間を与えるということで、これはことばの教室だったり、巡回相談の場面だったりなんですが、ある意味で意見や方向性がまったく一致しているという必要はなくて、一緒に仕事をしながらも、学校ではこういっているかもしれないけれども、私の方からはこう見えますよということ、親御さんにお話するというところの、あっちのことばかりを気にしなくてもいいんだというようなこともできるんじゃないだろうかということ、今お話したことです。

3番目、1番と似ていますけれども、すごくさっき言った子どもさんの状態が悪くなったんじゃないかというときに頑張っていたわけなんです。そこら辺で、一緒にたぶん酒を飲んで頑張ってい

るよねという仲間もいた方がいいんでしょうけれども、少し違う位置から、客観的に見て、たぶんこの方向は間違っていないということを書いてあげられるということも役割があるんじゃないだろうかというふうに思います。

棒読みにだんだんできてきたんですが、2職種がうまく学校教育の支援の輪に入るための条件ということで、先ほどの発表の中にもあったんですけど、丸投げではないこと。丸投げというのは、ここから先はそちらでやってくださいという感じや、こういうことをしてくださいということ了他職種、異職種に依頼するんじゃなくて、お互いの役割をポジションを持ちながら一緒に作業をするという形でやれたらなというふうに思います。

一番やりづらいのが、児童相談所にいたころあったんですけど、非行みたいな問題が起こったときに、もう学校ではやれないから、ここから先は児相ですねという感じになったときに、でもいつか子どもは学校に帰っていきますし、そうならちやいますと、もう家を離れて、学校を離れて生活をするしか道がなくなってしまうから、こちらとしても支援の選択肢が狭くなるわけです。そういうようなことは、一番難しいやり方だと思いますから、そういった役割みたいなところを限定しないで、一緒にやっていきましょうというスタイルで考えていただけるといいなというふうに思います。

2番目、異職種間は距離を置き過ぎるとよくないし、依存してもよくないということで、相手を尊重するのと同時に、自分の仕事、立場に誇りを持つこと。これは保護者も同様と書きましたが、さっきお医者さんに、いろいろうまく使ったこともあるんですが、お医者さんだから何でもやってくれるみたいな感じになっちゃうと、自分たちはじゃあ何をするんだということがありますし、それは、私はできないですから、もっと偉い先生がやってくださいみたいな感じになってはいけないうらなと思うんです。あなたにお願いすることはこういうことで、こういう部分は担ってほしいんだと思います。私たちは、こういうことをやっていこうと思いますので、共同してやりましょうと。やはり自分の仕事に誇りを持っていて、相手の仕事に対する尊重みたいな気持ちがないと、うまい連携はできないだろうなというふうに思います。

情報交換の大切さということで、さっきお話しした事例で、私はなるべく足を運ぼうと思って、毎年3回ぐらいは授業風景を見させてもらったと思うんです。これが少ないのか、多いのかは分からないんですが、先生たちもことばの教室に何回も来てくれたんです。同じことを知っているということが、とても大事だし、しかもそれを子どもさんと家族の方にも、オープンにしていました。だから、みんなが同じ情報を持っているということが、うまくいけるんじゃないかなというふうに思います。

最後のときに、意識の転換で変わるべきところということをいくつか挙げさせていただきました。さっき話したように異職種に依頼するというのでなくて、異職種を利用するというぐらいのつもりがいいだろう、丸投げにならないためにもということです。そのためにはお互いの効能と限界、お薬みたいですが、どういう力を持っているかということ、きちんと知っておくこと、過大評価してもいけないですし過小評価してもいけないだろうと。

3番目に、学校は万能ではなくて万能を求めて目指してもいけないことを、常に頭に置くこと。学校は大切な場所で力があるところですが、すべてを学校の中で解決する必要はない。学校の先生は、責任感が強い。自分たちが全部やっしまわなきゃいけないというふうに思うところ、そ

れがだめなら、もうだめなんだというふうに思っちゃうところ、そういうあたりの意識があるんじゃないかなと思って、そこら辺がとてつらいところでもあるし、うまく転ばないときもあるんじゃないかというふうに思うときがありますので、こういう意識の変化が大事じゃないかなというふうに思います。

4番目に、子どもたちにも、私たち大人たちにも力があるということを感じる、これが目標であり、条件であると思いましたが、自分たちができるという気持ちがなければ、ほかの人たちと、いろいろ組んで仕事をするというのは難しいだろうと思うんです。人を信頼するから連携できるだけじゃなくて、自分も信頼できないと連携するのがとても難しいだろうと思いますので、そういったことがとても大事なのかなというふうに思います。

駆け足で話してしまいましたけど、特別支援教育というのがスタートするんでしょうけれども、実はそういうふうな中身は、もうとっくに皆さん頑張ってやっているんです。危険なのは、システムができることによって、そこそこで柔軟にやっていたことが、かえってうまく進まなくなるようなこと、コーディネーターを決めて配置するけれども、コーディネーターになった人が常にうまく役割を果たせるかどうかというのは限らない。誰かコーディネーターにしなきゃならないからということをやった人が、実はそういうのが不得手な人だったということがあると思いますし、子ども中心に考えて、いろいろな人がそれぞれの役割を果たせるように、機能的につながることが大事ですから、今までやってきた取り組みのいいところという実績をむしろ残していくというふうなところが大切だろうと思いますし、システムには限らずに協力してもらえるような周辺の人というのを、うまく利用するというので、巻き込まれてくれるような、子どもの周辺にいる人を、どんどん仲間を引きずり込んでいくような活動などというのも大事になるかなと思います。すみません、大変長く時間がかかってしまいました。華がないわりには時間ばかりを取ってごめんなさい、これで終わります。(拍手)

2004年11月23日 特別支援教育を前にして、ひと、地域、そしてネットワークを考えるシンポジウム
 特別支援教育を具体化するために ～人、地域、ネットワーク形成～

「学校と他職種との連携を考える」 帯広大谷短期大学 内田 雅志

1. 本人、家族、学校の奮闘に異職種が協力した事例

- ① 小1 3学期 出会い 巡回児童相談
- ② 小2 1学期 診察
- ③ 小3 1学期 私の赴任、担任との打ち合わせ、学校訪問、母との面談
- ④ 小3 1学期 通級開始
- ⑤ 小3 3学期 学校訪問・医師との相談、TT導入へ
- ⑥ 小4 1学期 担任の異動・TT導入、病院受診（担任、T2、教室担当者同伴）
- ⑦ 小4 1学期 学校訪問、担任・T2の通室時参観、打ち合わせ
- ⑧ 小4 1学期 父母との面談（診断について）
- ⑨ 小4 2学期 就学指導委員会に向けての家族と学校、ことばの教室とのやり取り
- ⑩ 小4 3学期 在籍変更の決断
- ⑪ 小5 1学期 T2の異動、再受診
- ⑫ 小5 2学期 安定期へ

この事例から学んだこと

- ・ 家族の思いは理屈を理解したからといって、すぐに切り替えられるものではない。それは当たり前の心情で、それがあからこそ、子どもを育てていくことができる。周囲の人間はそこをどう待ち、お付き合いできるか。
- ・ 学校の先生は迷い、試行錯誤しながら子どもと向き合っている。「こうした方がもっといい。」と言うだけでなく、今の実践のよいところを評価し、フィードバックすることで、教師にとっても手ごたえを持ってもらうことが大事。それはエンパワメントにもつながる。

1. 学校教育と家族支援の中での他職種の役割

- ① 視点の変更 学校の中は、基本的に同一職種。そこに一石を投じることの大切さ。技術的なアドバイスも必要だが、新鮮な視点を与えることが大事。
- ② 子どもと家族に別の時間と空間を与える。ある意味、意見や方向性がまったく一致している必要はない。協働する関係でありながら、セカンドオピニオンの意味合いもある。
- ③ 当事者からちょっと引いた位置で、努力に評価を与え、方針が一貫性を持つように支えること。

2. 異職種がうまく学校教育の支援の輪に入るための条件

- ① 丸投げではないこと＝共同で作業をすること この役割をしてほしいと限定されずに、一緒に考えるスタイルで動けること。
- ② 異職種間は距離を置きすぎるとよくないし、依存してもよくない。相手を尊重するのと同時に自分の仕事と立場に誇りを持つこと。これは保護者も同様。
- ③ 情報交換の大切さ。一番うまく行かないのは相手がしていることに不信を持つこと。お互いの動きについての開示が重要。

3. 学校が、私たちが変わるべきところ（意識の転換）

- ① 異職種に「依頼する」のではなく異職種を「利用する」。
- ② そのためには、お互いの効能と限界を知ること。恐れず、しかし、期待し過ぎないように。
- ③ 学校は万能ではない。万能を求めても、目指してもいけないことを常に頭に置くこと。学校は大切な場所で、力があるところだが、すべてを学校の中で解決する必要はない。
- ④ 子どもたちにも、私たちにも力があるということを感じる。これは目標であり、条件である。

(田中) ありがとうございます。昨夜、少し打合せをしていたんですが、内田さんには、せっかくの機会なので、少し長くお話をさせていただこうかなんていうような話をしておりましたので、そんなようなところも背景にあったのではないかなと思っています。少し時間が押していますけれども、午前中で4人というプランでおりますので、午後の最初を少しゆっくりめにしようと思っておりますので、もう少々お付き合いください。

4人目として、佐々木浩治さんに来ていただきました。「地域でネットワークをつくり出すコツ」というタイトルで、とても難しいタイトルなんですが、引き受けていただきました。佐々木さんは現在、足寄町役場の福祉課の係長をやっております。札幌学院大学を出まして、その後、札幌北幼稚園で保育士さんをやっております。その後、足寄町役場の方に行きまして、あゆみ園という通園センターの活動をずっと長きにわたって行っております。

このあゆみ園の活動を通して、障害のあるお子さんの親の会をつくってみたり、おやじの会をつくってみたり、最近では教育現場の先生との活動をやってみたり、あるいは足寄町役場だけではなく、足寄町の大人の方のメンタルヘルスを一手に引き受けるというような形で、もう足寄町全部を一人で背負っているような方です。その辺のトータル的な活動を通して、地域の中で長く根を下ろして、人を支える実践を行ってきたところでつくり出すコツというようなことを最後に聞きたいと思いません、よろしくをお願いします。

4. 地域でネットワークを作り出すコツ

佐々木浩治（足寄町役場福祉科福祉係長）

(佐々木) 皆さん、こんにちは。過分なご紹介をありがとうございます。もうお昼も過ぎて、私は皆さんと一緒にずっと聞いて待っていたんですが、私も緊張はするんです。ずっと聞いていたら長いですね。みんな10分ずつ延びるともうお昼になっちゃったんですが、代表だけ時間を守っていましたが。非常に緊張のあまり何をしゃべるかだんだん分からなくなってきてしまうというところもありますので、12時半には、半という20分です、できるだけきばきやって終わらせていきたいなというふうに思っています。

私は今、足寄町役場の福祉係長ということで、行政の仕事をしています。振り出しが札幌にあります札幌北幼稚園というところで20年以上前、教員として障害のあるお子さんたちのクラスの担任を持ったということから始まっています。そして、13年前に足寄町に、あゆみ園という通園ができるということで、ご縁があってそちらに行ったんですが、昨年9月1日付の人事で福祉係長ということで行政職になりました。

ずっと現場にいたものが行政職になった途端に陥る、「分からない」という状況です。9月1日付で人事異動になりましたから、あっという間に当初予算の編成作業が入るんです。私は予算なんて立てたことがないのに、その予算何とか説明会に出されて、いろいろなことをやっていました。通常であれば、うつの状態になっても不思議はないんですが、基本的には、私は「何とかなる」としか思わないものですから、やっているうちに査定も何とか乗り切りました。

私は13年足寄で、あゆみ園というところでやっていたんですが、そのときにいろいろな人とつながってきていく中でいろいろなネットワークができたかなというふうに思っています。その辺の一

端をご説明させていただいて、何かのお役に立てばということです。

足寄町のイメージなんです、四国の香川県と同じ面積があって、行政面積としては日本一広いんです。その中には8,000人ちょっとしか人口がないという状況です。ですから私が家庭訪問にひとたび行こうと思うと、山の中に入っていくと片道40キロぐらいかかっちゃうんです。そのぐらい通ってくるお母さんたちもいるという、広大な行政面積の中に小学校が4つ、中学校が1つという状況です。

中学校が1つですから皆さん、片道1時間以上かけて、その町の中の中学校にスクールバスで集まってくるわけです、というような広大な敷地です。ほとんど山ですけど、山林が主なんです、そんな広大な地域の中で私は通園をやっていました。足寄町でのネットワークの取り組みテーマがあるんですが、地域におけるネットワークレベルというのは、これは、ここにいる田中先生が、『AD/HDの明日に向かって』という本の中で、対人レベル、実務者担当レベル、機関・組織レベル、各代表者レベルというものが必要だよということで私もこの通りだなというふうに思っています。

私がやってきたものを、少しずつ簡単にご説明をさせていただきますが、一番最初に持ってきた特殊学級教員との懇親会と書いてありますが、これは私たちの間では「ブラマン」と呼んでいるやつです。ブラック・マンデーの会という月曜日が怖い先生たちの集まりというものなんです。それでもう5年やっているんですが、足寄のような郡部になると特学経験者が、特学を持つということほとんどないんです。初めて異動してきたときに特学を持つ、もしくは異動が決まっています、本人が来ないうちにあの先生は特学と決まっているという非常に怖いんです、新任で来た途端に特学の担任になっていたみたいなの。

そうすると子どもたちのことがまったく分からないです、特学のお子さんを持ったことがないわけですから。僕は、初めのうちは学校の特学の先生というのは、「本当にきちんと授業をやらねえよ」などと言って、不真面目だよとか、いろいろなことを言って「僕は、学校の教員は大嫌いだ」と、ここに学校の先生がいないという前提で言っていますが、僕はもう公言していました。「教員は嫌いだ、もっと学べよ」というふうに言っていたんですが、たまたま5年前に知り合った、特学を初めて持った先生が、自閉症の子を持ちました、関われないんです。日曜日の夜に『サザエさん』の音楽を聞くと胃けいれんを起こすという状態に陥ったんです。円形脱毛症はできるわ、月曜日から、もう土曜日のことばかりを楽しみに待っているという先生がいたんです。

その先生とちょっと飲もうかということでお話をしている、出るわ、出るわ、その自閉の子が何で僕の言うことを聞いてくれないから始まって、いろいろなことが出てくるわけです。それをずっと聞いているうちに、その先生が「これを毎月やろうよ」と言い出したんです。じゃあ、せっかくだから会の名前を付けようと言ったら、その先生が、ブラック・マンデーだと、月曜日学校に行きたくないという話になって、それから丸5年やっています。毎月ですから単純にいいますと「12×5=60回」はやっているわけです、6年になるのか、70回やっている。私が休んだのは、2回だけという状態ですから、それだけでもぞっとする回数を先生たちと飲んでるんです。

これをずっとやっていると、特学の担任というのは2年に1回とか毎年代わるんです。長く持つ方はほとんどいないんです。ただ、それをやった経験のある先生たちが、「足寄にはブラマンというのがあって、君は絶対出た方がいいよ」と申し送りがあるわけです、特学になった途端に。顔ぶれは代わるんですがずっと続いています。そこに来たときに、その先生たちの訴えを聞いて、先生

のやっていることは間違いないよという。僕は13年足寄にいますから、足寄の特学に入る子どもたちは、全部あゆみ園のOBなんです。すると分かっているわけです、もう初めて通ったときから。小学校、中学校になることまで知っていますから、幼児期はこうだったんだけど、すごく先生、伸びているよという話などをすると、先生たちも非常に喜んで帰るんです。

最近普通学級で、心配なお子さんで悩んでいる先生を見掛けると、特学の先生たちが、ブラマンがあるからおいでよと誘ってくれるんです。すると、その難しいお子さんを抱えている先生が来ると僕の横の席は必ず空いているわけです、会が始まる時には。それでその先生が僕の横に座って、僕はその先生とずっとしゃべって飲んでいるという状況にはなっていたんですが、僕はもともと教員が嫌いというのを公言していたんですけど、先生たち、先ほど吉藤さんも言っていました、子どものことを一生懸命考えている人たちが非常に多いんです。

ただ、それをどう表現していいのか。じゃあ、分からないことをどう伝えていいのかのすべもっていない。特に学校現場で、その先生たちに聞くと校長先生、教頭先生に聞いても分からないと言われるよねという。「先生、特学の先生なんだから頑張っってよ」と言われて相談した意味がないということがあるんです。

そういう状況の中でみんな、このブラマンに集まってくる。僕はこれをやったことによって非常に学校の先生と仲良しになりました。その延長線上で、この実務担当者レベルという機関レベルになっていくんですが、足寄町の特殊教育振興会で、毎年やっている研修会に毎年私が行っている、この5～6年。お子さんたちのかかわり方や授業の進め方については、そこでお話をするということで、対人レベルのものが広がっていくと、そういう組織的なものに広がって行って、やれるんだなというふうに思っています。

それと、あゆみ園は、ずっと私は係長になっちゃったもので、毎月やっていたケース検討会議が今、3カ月に1回しかできないんです。私が係長になったときに、あゆみ園の指導員をどうするかという話になったんですが、うちの管理職も含めてなんですが、1人出たところで、どうにもならないだろうという話になりまして、係長の佐々木が、いつでもあゆみ園に行けるように係員を増やそうということになりまして、私はいつでもあゆみ園に行けるんです。いつでも行けるんですけど事務の仕事は残っているんです。すると、あゆみ園で指導を終わって帰ってくると仕事は全部残っているわけですから、僕の仕事は、だいたい5時になってからカーンと始まるわけです。それから事務をこなしているというのが、この1年続いておりますが、子どもに会えるのは非常に楽しくて行くわけです。ただ、3カ月に1回だけしか、ケース会議ができないんですが、そこにも先生たちがどんどん来てくれます。

もう1つ機関でいくと足寄の場合は、児童虐待および配偶者暴力等防止検討会議というのがあって、これは児童虐待のネットワーク会議なんですが、背景に抱える問題は一緒だろうということで、うちの町では配偶者暴力（DV）、これも一緒のネットワーク会議にしていると。その事務局も兼ねていますから、福祉係というのは基本的に何でも屋なんです。僕が抱えているのは、生活保護から精神障害、日赤、それから民生委員協議会といっぱいあるんです。仕事がいっぱいあって楽しいです、それなりにやっています。

もう1つは、「2. ふれあいの取り組み」ということを書きましたが、北川先生のおかゆの会ができて非常にうれしかったんです。こういう組織がたくさんないとだめだよということで、僕は11

年前(平成5年)に、「ふれあい」という会をつくりました。これは関係者と親御さん、初めから一緒にやろうよという、決して親の会とだけは言わない会にしようということでやってまいりました。

視察に行ったり、クリスマス会をやったり、これはどこの会でもやることなんですが、足寄から毎年札幌に今来ているんです。今年も9月に来たんですが、要するに障害のあるお子さんたちは、ガイドヘルパーの方に見ていただいて、兄弟が親御さんを独占するという日にしているんです。いつも買い物に行っても、この子がいるから早く帰ろうよとか言われているのが、札幌に来てガイドヘルパーに見てもらおうと、ずっとお母さんを独占して、買い物ができるという、まずは兄弟を喜ばせみたいところから私たちの取り組みが始まりました。

長期休業中の問題があってやったんですが、足寄には今、資源がほとんどないんです。学童保育に、障害のある子たちが行けるかといっても行けないという実態があって、それはもう自分たちでやろうということで、そのふれあいスクールというものも4年ほど前に始めました。さあ、誰にやってもらおうかと、組織がないんですから、たまたま婦人ボランティアクラブという非常に素晴らしいボランティアクラブがありまして、非常に平均年齢が高い。お願いをしたはいいんですが走ったら追い付かないだろうと。多動な子が走ったら絶対に追い付かないという。もし手を引っ張られて転んだら骨折するんじゃないかという人たちがボランティアだったんです。

みんなですごい心配だったんです、本当に大丈夫かと。すると分からないというのは強いですよ、黙って受け入れますもの。そうしたら子どもはパニックを起こさないです。多動な子は走るんですけど、追い掛けないですから、だいたい皆さん追い付かないですから、待つと言うと戻ってくるんです。ということで行方不明が無しなんです。この間、けが人がゼロです、みんな安定しているんです。

そこで学んだのは地域にはいろいろな資源がある、いろいろな人がいるんだと。ただ、何をやっていいか分からないから応援してもらえないだけで、こういうことをやってくださいと言うと、もうやせ細った、これは特殊ですね、すてきなおばさまたちでも非常に応援してくれるんです。この子たちが、地域で生きられるようになったのは、これをやってからなんです。スーパーなどで会うとみんな声を掛けてくれるんです、障害のある子たちに。「何々ちゃん、元気? いい顔になったね」とか。すると、そうやって生きていける、これもネットワークなんです。

僕はずっとこういう活動をやってきて、地域におけるネットワークづくりをつくり出す基本的な考え方2つも、1で書いたやつですから『教育と医学』の巻頭言で、教育大の伊藤則博先生が書いたものなんですが、僕はこれですべてやってきました。「障害を持つ人が家庭や地域を離れて特別に造られた施設や学校で生活するのではなく、生まれたその地域で家族や住民とともに過ごし教育を受け、可能な就労をして、充実した生涯を送ることを支援するのが特殊教育や」うんぬんかんぬん、ということです。

この特別支援教育も何のために、それは個別的な配慮が必要であったり、支援の必要な方たちに、どうやって適切な教育を受けてもらうような働き掛けをするか。手を取り合って、みんなでやりましょうよというものです。その中では、教員だけではなくて地域の資源というのは、絶対あるんです、必要なんです。というときに、学校の先生たちもお仲間づくりをすればいいんですが、ここにいる人たちは別なんですけど、学校の先生はなかなか友達をつくるのが下手です。

だけど授業では、「皆さん、お友達をたくさんつくりましょう」と言っているんですけど、言っている人たちが一番つけれないという問題があるんです。ですから、そういうときには、僕なんかは笑顔で寄って、「先生、友達になりましょう」と寄っていくと、すごくうれしそうな顔をしていただけているんですが、そういうことです。だから、地域の中で生きてもらうためのネットワークなんです、特別支援教育でもそうです。それで育てていただくための支援をする。そういうことが僕は重要だなというふうに思っています。

それと裏になります。先ほど吉藤さんの方から、にじませるという言葉が出たので、ここは少し割愛していきますが、中川信子先生という方が、『発達教育』2003年の5月号の中で、我々がつくった友達のような仲間だよという本を、十勝のこの懇談会で作ったんです。その中のことを取り上げていただきました。それを後ほど読んでいただければいいんですが、地域の中にいて1人ができることなんて限られているんです。僕は、たまたま療育という仕事をしていたときに、僕だけで成立するものは何もないです。あゆみ園の佐々木が言っていることが全部正解ということはないわけで、僕が言ったことは全部正解だと思われると、また逆に危険なわけです。僕が間違っただけを言っている、やはり誰かに修正していただかないとそれは大変なことになっちゃうんです。

それが、もしかすると経験のない若い特学の先生たちとブランチで飲んでいて、「先生がそう言ったのは、どうなんですか」と言われて、俺の言い方が悪かったんだということにすぐ気付けるんです。そうしていかないと、小さな町で大統領のように「僕の言うことを何でも聞きなさい」と言っても、それは僕はいいいんですけど、僕がやることによって、不利益を被る親御さんやお子さんがいたときには、それは大変なことなんです。それを防ぐためにも、僕はネットワークはすごく必要だろうというふうに思っています。

そのために、にじませるんです。僕はここまではできるけど後はできない。僕よりこの人の方がもっとできるよという橋渡しはします。できないものをできると絶対言えないです、そのお子さんに申し訳なくて。そういうやり方をずっとしてきています。ですから、学校の先生なんかも、相談にいらしたときには、僕が分かる範囲ではこうだよと、それ以上だったら、この人に聞いてごらんという言い方をします。

先日も僕が9時まで残業をしていたんです。その結局は、11時まで残業をしていたんですが、9時に若い特学の先生から電話が入ってきまして、「先生、きっと役場で残業をしていますね」と言うから、「はい」と言ったら、「これから少し行っていいですか」と言うので、断る理由もないので、「じゃあ、どうぞ」と言ったら、特学の先生が9時に来るわけです。

「お仕事の邪魔をして申し訳ありません」と、そこからずっと30分子どもの話をしている、ただ、それは就学指導委員会の話だったんですけど、気軽に来てもらえるのは非常にありがたいです。その分、僕の仕事は延びていくというだけのことで、身を粉にして働いていけば、そのうち浮かぶ瀬もあるだろうという話もやっちはいるんですが、気軽に来てもらえればいいかなという、それもネットワークです。あの人のところへ行ったら何か分かる、もっと分かる人を教えてもらえる、それだけでもいい、僕はそういうものかなというふうに思っています。

まとめとして、地域におけるネットワークをつくり出す上で、大切にしていること。このテーマ自体が、田中先生が書いた「地域でネットワークをつくり出すコツ」、コツなんかないです。これは地道にやるしかないんです。僕はネットワークの在り方の願いをイメージ化するというのを思

いました。ふれあいという親の会をつくったときもそうですし、この会は、ずっと育っていく中で障害のある子たちの、地域支援のきっかけにしたい。だから多くの人に理解してほしい。

最終的には、作業所を造りたいと、11年かかって作業所が今年できたんです。私はうれしかったです。作業所を造るといのは役場で造ってごらん下さい、大変なんです。もう条例は作らなきゃいけない、それも私の仕事ですから。条例は作るは、議会の文教常任厚生委員会には呼ばれるわ、予算を作るや、役場は今、お金がないですから。ぺんぺん削りながら最低限度を獲得してできたわけです。ただ僕は全部携われたので、すごく楽しかったんですが、やはり自分の中でどういうネットワークにしたいかというイメージを持って願う、そのうちに僕は形ができてくると思っています。

その中で、2に書いたすべての仲間、関係者、保護者、僕は絶対に保護者もそうだと思うんですが対等な関係を築くことです。親御さんは、先生の話聞く人じゃないです。先生とお子さんのことで協力し合って、そのお子さんの育つ道筋を一緒に考える人です。そうでなければ、僕は絶対だめだというふうに思っています。そして、人と人とのつながりを大切に、これはもう基本中の基本です。僕は、この特別支援教育の話が出たときに、正直言って、町長と助役および教育長と話をしにきた。本当は資料を持ってこようと思ったんですが、あまり大きくなってあんなので。

足寄の構想というものは、基本的に子ども家庭支援室という新しい課というか、室をつくる予定です。これは子どもと家庭にかかわる相談を一手に引き受ける。いいですね、僕なんです、たぶんであれば。僕は、人事異動で、そこに行けるのをもうそれを楽しみに待っているんですが、その中に地域支援コーディネーターを置こうと。足寄のように初めて特学を持った先生、特学を持ったことのない教頭先生が、学校の特別支援教育コーディネーターになって、できるかといったらどう考えてもできないです。6年で異動していく人が、その地域資源を分かってネットワークをつくれると思いますか。僕でもというのはおかしいですけど、10年かかるわけです。といったときに僕は、その中に地域のコーディネーターを置いて、学校の特別支援コーディネーターとともに、連携の仕方を考えて、個別プログラムを作ってというやり方をしたいというふうに思っています。

これは、昨年の予算の前に、町長、助役と教育長と話をして大筋で合意をしています、そういう方向で行こうと。それを早くやるためには、そういうプランニングを自分でしろということで係長になったということもあるので、忙しくて、そこまで手が回らないという、少し遅れているんです。基本的には、そういうものだと思うんです。たぶん人と人とのつながりだし、そういうものを大切にしたいなということです。支援者、理解者を広げる努力も並行して取り入れる。僕は、ふれあいスクールというものをやったときに、こんなにたくさん応援してくれる人がいるんだと初めて分かりました。

その人たちが、作業所を造るときに、ものすごく応援してくれたんです。今も、ものすごく支援をしてくれます。お金がないですから古紙を回収しているんですが、みんなが持ってきてくれるんです。どんどん置いていってくれる、4トントラックいっぱいになったら取りにきてくれるものですから、うちにいる知的障害で、重い自閉の子が3人いるんですが、この子たちが、ほとんど働かないんです、働くことも期待していません。トラックに積むときにも、いるだけなんです。すると作業にならないので、ボランティアを募るといっぱい来てくれるんです。それで半日かかって積んでもらえるんです。そういう理解者を広げていくということも重要で、その人たちが、もしかす

ると特別支援教育やそういうことを知っていったときに、地域の何らかの担い手になってくれることだって僕はあるんだというふうに思っています。

そして、ここに書かなかったのですが、もう1つは、この特別支援教育が動き出していくときに、僕は学校の先生たちが今一度、子どもの発達を学ぶべきだと正直言って思います。1年生だから字が書けるなんて思ってもらっては困るわけで、字を書けるようになるプロセスが発達上にある。これを知らないで字だけを書かせてもしょうがないわけです。この子は、手を回す動作ができるのか、図形の模写ができるのか、そういう発達を通して、きちんと今、この子に何が必要なのか。これは発達的に必要なんだよということを分からないと授業にならないです。

僕は、ブラマンで来たときには必ず発達の話をしてします。この子の今の発達でいけば、字は無理だよと。もっと図形の模写などをやろうよ、線描きをやろうよという話をするんですが、それもやっていたらだかないと、僕は特別支援教育は、絵に描いた餅に終わってしまう。支援ネットワークのためのネットワークで終わっちゃう危険性があるんです。ですから一人一人が発達を学ぶ、支援の在り方を学ぶ、そういうことと、子どもの見方、とらえ方を、共有し合えるような関係性をつくっていくことが、僕はすごく重要だろうというふうに思っています。

いろいろな話をしてきましたが、非常に雑ばくでしょう。半でやめたいなと思って、あと20分と思って、皆さんもおなかが空いただろうなと思いながらいるものですから、後ほど、質疑というか、シンポジウムの中で、いろいろ聞いていただければ、もっと膨らませてお話ができるかと思うんですが。僕は小さな町の中でやっていることで、それはもしかすると足寄という限られたエリアの中だからできていることかもしれないです。

ただ僕は、これを十何年やっていたとき、本当に多くの方に応援していただいています。議会の文教厚生常任委員会に呼ばれても、ちょうど支援費で、あゆみ園が児童デイサービスになるときに、議員さんの方からは「あなたがやりたいようにやっごらん。支援費になって、この子たちが何が困るの？ あなたは何が困ると思うの？」という質問を一番最初に受けました。そのときに障害のレッテルを張るような、受給者証をもらわないと通えないような状況では困るんだという話をしたら、じゃあ、医療費はなしでいこう。自己負担金も納めなくていいよということになって、やっているうちに救われるものです。

作業所を作ったのが教育委員会の教育施設なんです。そこは福祉施設が入ると目的が一緒みたいな形になるものですから、教育委員会に借用願いを出すと、教育委員会というものを開いて、了解を得ないとできないのです。そこの教育委員会が、私がずっとこうしているのを知っている方で、「今日の教育委員会の議題の作業所というのを佐々木さん、ずっとやりたかったやつでしょう」と言うから、「そうです」「じゃあ、賛成しておくから」ということで通ったんです。すると助けられます。

それで元気になる親御さんやお子さんなど、特別支援をうちの考えで、子ども家庭を支援して、地域コーディネーターを置くということだって皆さん応援してくれるんです。「やりたいようにやっごらんよ。佐々木さんの絵に描いた通り、1回やっごらん」と言ってもらえる。それが僕は、本当にいろいろな人に助けられているなというふうに思っています。ですから、皆さんもたくさんいろいろな人と出会って、自分たちの願いをぶつけ合いながら、この新しい制度に立ち向かっていただければいいかなというふうに思います。何とかあります。どうもありがとうございました。

(拍手)

(田中) どうもありがとうございました。4人4様の話が出されたと思います。最後は、気持ちよかったです。すっきりしたんじゃないかなという方もいるかと思いますが、かなりこういう話というのは地域性によりますので、佐々木さんが言ったように、これがすべてだということではもちろんないということです。それも踏まえて後半、午後じっくりと討論したいと思います。

従来シンポジウムといいますと、だいたい演者が話して、あと20分ぐらい議論をしましょうみたいな形になるんですが、この時間で、1時間休憩を取ったとしても、残り1時間半はじっくりと討論ができるというふうに思っていますので、まずは中休みをして、また集まっていたいただければと思います。午前中ご苦労さまでした。午後は、1時半から再開という形にいたします。

地域でネットワークを創り出すコツ

足寄町 福祉課 福祉係
係長 佐々木 浩 治

I はじめに

II 足寄町でのネットワークの取り組み

1. 関係機関ネットワーク

(1) 地域におけるネットワークレベル

(ADHDの明日に向かって. 田中康雄. 2001. 星和書店)

1. 対人関係レベル	信頼関係の構築
2. 実務担当者レベル	具体的対応の協議
3. 機関・組織レベル	機関的対策の協議
4. 各代表者レベル	政治的対策の協議

このネットワークレベルが、地域にとっての指標になると考えている。

(2) 対人関係レベルの取り組み

① 特殊学級教員との懇親会 (通称 ブラマン)

足寄町のような郡部の学校では、特殊学級担当経験がない中で担任を持つことが多い。このため、教員は子どもの状態をつかめず、授業の運営や親御さんとのかかわりにおいて苦慮している。

当初は、機関としてのネットワークを構築することを目的に教員とかかわっていたが、一人ひとりの思いを受け止めながら、必要な部分での密なる連携を図ることが重要ではないかと考えるようになった。その思いからスタートしたのが毎月開催している、特殊学級教員との懇親会 (通称 ブラマン) である。

この懇親会では、教員が子どもとのかかわりにくさや理解の難しさを訴え、対応方法などを相談してくる。機関としての連携以前に、人と人との連携が重要であることを、繰り返し開催する懇親会で学ぶことができた。「連携すべきなのに、連携が出来ない」と一方的に思いをぶつけるのではなく、互いの立場を認め合い仲良くなるのが、機関としての連携の基礎になるのだと今は感じている。

(3) 実務担当者レベルの取り組み

- ① あゆみ園ケース検討会議 (3ヶ月に1回開催)
- ② 児童虐待及び配偶者暴力等防止ネットワーク会議実務者会議
- ③ 足寄町特殊教育振興会担当者研修への参加

2. 地域でのネットワーク～ “ふれあい” について ～

(1) “ふれあい” の取り組み

ふれあいは、平成5年7月に設立された父母の会である。事業としては、焼肉お楽しみ会・

クリスマス会、親子視察旅行、講演会等を実施してきた。

大きく変化した事業は、親子視察旅行である。当初は、施設見学を主目的とした事業であったが、兄弟達に楽しい時間を過ごしてもらうことを主目的とした事業へと変化してきた。障害のある子どもはガイドヘルパーと共に行動し、兄弟が母親等を独占し買い物等が出来るようになってきた。「ふれあい」の事業は、兄弟が参加し楽しい思い出が出来ることを願ってきたが、その方向に向ってきたと考えている。

(2) 地域支援体制作り

様々な事業を通し、親のニーズが地域支援体制の整備や地域に支援を依頼できる関係作りへと変化してきた。

① ふれあいスクール

ふれあいスクールは、「長期休業中の子ども達に遊びの場を設けることで、情緒的な安定を図る。また、家族にとっても子どもと離れる時間を保証することで、情緒的に安定した中で長期休業が過ごせるように配慮する。」という趣旨に基づき実施している。実施の中心的な役割は、障害のある子ども達とかかわった経験がほとんどない方達が担っている。

② 当初の不安

会員の中には「障害のことがわからないのに大丈夫?」「子ども達がパニックを起こしたときに対応できるの?」等の不安があったのは事実である。しかし、献身的なかかわりと子どもを知ろうとする努力、そして、押し付けではなく子ども達に楽しんでほしいという願いに基づいた働きかけにより、皆が安心したものとなってきた。子ども達を不安定にさせるのは、障害のことを理解していないということではなく、子ども達の思いをしっかり受け止める努力をしないで押し付けるからということを改めて学ぶことが出来た。

③ 支援者を広げ、安心した子育て環境をつくる

この事業を通し、地域には多くの支援してくれる方がいることを学んだ。そして、支援してくれる方たちが障害を理解している、していないが問題なのではなく、子ども達を理解しようとしてくれるかどうかの問題なのだという事も学んだ。わかる、わからないを問題にするよりも、まずはかかわる経験をしてもらう。そして、その経験を他の人に伝えてもらう。そうすることで、子ども達への支援の輪が広がり、親も安心した子育てが出来るネットワークができると考えている。

Ⅲ 地域におけるネットワークを創り出す基本的な考え方

1. 「地域で生きる」ことを支援する

「障害を持つ人」が家庭や地域を離れ、特別につくられた施設や学校で生活するのではなく、生れたその地域で家族や住民とともに過ごし、教育を受け、可能なら就労もして充実した生涯を送ることを支援するのが特殊教育や障害者療育・福祉の理念であるということが、ようやくわが国でも定着しつつある。しかし、「障害を持つ人」のニーズは相互に大きく異なっているため支援のあり方が個別的事であることを要し、他方で個人が同時的・継続的に持つ複数のニーズへの適切な対応のためには、関係者・関係機関のネットワークがどうしても必要になる。このように表裏の関係にある「支援の個別化」と「ネットワークの形成」を「障害を持つ人」の居住する地域においてどのように実現していくかということが大きな課題だと考えてきた。

(教育と医学 1999. 巻頭言 伊藤則博)

2. 「I」デンティティー」から「We」デンティティー」へ

でっかい十勝のちっちゃな冊子

昨夏、でっかいどう北海道を走り抜ける羽目になったお話を前にしましたね。途中の浦河で「べてるの家」のメンバーたちを見かけたことを「発達教育 2003年5月号」に書きましたっけ。

そのときのメインの用事だった講演への参加者のお一人から小冊子をいただきました。『ともだちだよね なかまだよね』（十勝ADHD&LD懇話会 編著／伊藤則博 監修）です。

『ともだちだよね なかまだよね』という冊子の題にはいきさつがあります。この懇話会の代表であった田中康雄ドクター（当時・北海道立緑ヶ丘病院。現在・国立精神神経センターが、友だちのできにくかったADHDのある少年に「先生はもう友だちだよ」と伝えたところ、少年は、何度も何度も診察室に来て「友だちだよね？」と確かめ続けました。この出会いから懇話会は始まりました。『ともだちだよね』の由来です。

そして、懇話会には多くの仲間たちとの出会いも欠かせなかったので『なかまだよね』ということばをつなげたのだそうです。

解説には「『ともだちだよね なかまだよね』に「？」はつきません。この言葉には『あたりまえさ！』という返事が隠されています。『心配ないよ、大丈夫さ』、そんな思いも隠されています。懇話会の持つ『誰も責めない みんながよし』という心を詰め込んだつもりです」とも書かれています。

「読むと元気になる」という感想が多いそうですが、ほんと、私も元気になった。本は情報を伝えるものでもあるけれど、「思い」や「こころざし」を伝えるものでありたい、と思ったことでした。

冊子は文末の懇話会事務局（実態は一人、らしい・・・）に申し込むと送ってもらえます。

「にじませる」

どの文も勉強になる中、とても印象的だったのは「関係機関との連携」という一節に出てくる「にじませる」ということばでした。

「『専門性』を期待して関係機関にお子さんをつなげたときに」『これが私の専門です』と言われれば、そこには口のだしような権威とでもいうべきものが存在する」ような気になります。

でも、一見権威があるように見える『専門性』ではあっても、それが子どもの育ちに役に立つ実のあるものでなければ、「『専門性』という鎧を着た孤立しあう者たちの自己満足でしかないように思います。」という指摘につづき「自分のできることを追求しながら、ここは、こんなところに任せよう、こんなことがこの子には必要だけれど、私にはできないので、よりよいところにまかせよう、という思いを持てるかどうか」が専門性ということなのではないか、と述べられています。

また「目の前の子どものようすは、自分の関係性の中で見える様子であって、ちがった視点、関係で見れば、自分には分からないが他の人には見えてくる様子もあるのだとイメージできるかどうかも大切」「自分のできないことを自覚し、そこを次に引き渡すことが、ある意味では専門性であると思います。」とも書かれ、続けて「お互いをにじませる歩み寄りが、子どもや親にとって必要な連携と言えるのではないのでしょうか。」とあります。

「越境」から「境界をにじませる」へ

連携というと、かっちりした組織や『専門性』を持ったもの同士、つまりヨロイという細胞

膜に守られたもの同士が、どこまでなら譲れるか、どこかで手を結ぶかと線引きを考えているようなイメージが私にはありました。高い壁や、くっきり刻まれた境界線を打ち破り、攻め越えてゆく「越境」という意気込みが伴います。

でもこの部分を読んでいて、すべてに共通する大切なキーワードは、「境界を“にじませる”」ということなのかもしれないと感じたのです。何だかすっきりしました。

ヨロイという細胞膜に守られた「専門性」とか「部局」を振りかざすのではなく、子どもを中心に、この子のために自分のところでは何ができるのかを出し合う。Children first で。

境界を“にじませ”て、細胞膜を薄く、でこぼこにした結果として、自分自身の中身が少しだけ外に流れだしたり、形を変えたりするかもしれません。アイデンティティーがちょっと弱まるかもしれません。でも、そういうふうに「私」が形を変えたり、中身の一部を流出、にじみ出させることによって、「私」に接している人や組織の中身が濃くなり、容量がふえれば、その地域全体としての力量はあがることにもなるわけです。

流れ出た、失ったと思った「私」自身も、じつは薄くなった細胞膜を通して相手の栄養をちゃっかり取り入れてひとまわり大きくなることのできるのかもしれないのですし。

自分の所属する場や職種のエゴに基づいて、孤立しあう者たちの“I”デンティティーではなく、その子をとりにまく環境や地域の機関全体での“W”デンティティーを考えていく、ということ。

これはまさに21世紀、“共存の時代”のイメージかも、という気がしてきます。

信頼関係は知り合い関係から

「私のところだけでは不十分だから、その部分は手伝ってください」と素直に言える。逆に「その部分は手伝えますよ」とも言ってあげられる。こんなふうに「手伝って」「助けて」と互いが言えるためには、相手との信頼関係が必要です。

冊子の購入方法についてある方に問い合わせたら、あれよあれよと言う間に人から人へと情報が伝わり、最終的に必要な人から必要なお返事をいただきました。北海道らしい人と人が直接結び合っているネットワークを垣間見せられた思いがして、二重の収穫でした。「信頼関係は知り合い関係から」と思わずつぶやく私がありました。

地域を基礎に、人との信頼関係を大切に。分かっていたつもりなのに、何だか新しい地点に立ったような気持ちがあります。(発達教育2003年8月号 ほっと人間学 中川信子氏)

IV まとめ ～ 地域におけるネットワークを創り出す上で大切にしていること ～

1. ネットワークのあり方の願いをイメージ化する
2. 全ての仲間（関係機関・保護者）が対等の関係を築くこと
3. 人と人とのつながりを大切にする
4. 支援者・理解者を広げる努力も併行して取り入れる。

シンポジウム2（午後）

「特別支援教育を具体化するために」 総合討論

吉藤さゆり 北川 和博 内田 雅志 佐々木浩治
 青木 紀（教育学研究科） 坪井由実（教育学研究科）

（田中） お話していただいた4つのお話に対して多少関連するようなことを教育学部のお2人の先生に指定討論のような形で、今日も話題を広げていただこうと思っております。

まずお1人目は青木紀教授です。教育学部臨床講座の教授をなされておまして、教育福祉論を専門領域にしておられます。経済的、社会的なさまざまな課題を抱えている方々を対象にした社会科学による状況分析や、ソーシャルワークという視点からの教育福祉問題を研究されている先生です、よろしくお願いいたします。

（青木） ただ今、紹介にあずかりました北海道大学の青木と申します、よろしくお願いいたします。当初はといいますか、事情があって学校にも来なかったものですから何を要求されているかというのは、田中先生が先ほどお話ししたように、だいたいシンポジウムというのは、ずっと何人かのメインの報告があって、最後の20～30分、少し討論があって終わるぐらいというイメージだったので、それについて発言をすればいいのかというふうに思っていたので、ほとんど用意ができていないのですが、感想のようなことを少しだけお話をします。

細かいことについては、例えば一人一人に先ほど聞かせていただいたときに、メモを取っておりますので、一人一人にいろいろなことを聞いていきたいという気はあるのですが、それは具体的な議論の中で関連するような話題になった場合に、私の方も発言をさせていただきたいというふうに思っています。

ここでは2～3点だけ印象のようなことをお話しさせていただきたいと思います。一番感じたことは、第1に4人のシンポジストの方が、いずれも実践家（practitioner）としてといいますか、その活動の生きがいなり、熱意というようなものが、ひしひしと伝わってくる内容であったというふうに、その点で非常に感銘を受けております。

特に特別支援教育という言葉にかかわってでしょうが、先生方にいろいろなメッセージを投げかけているものであったというふうに思っております。あるいはまた関連する職種の連携に触れておまして、ようやく実践もその段階に来たのだというふうにあらためて感じております。ただ、親も含めて考えたときに、仮にここに集まっている人が、ほとんどが親だとしたら、どういう形でシンポジストの皆さんは、話をするのかというふうな疑問というより興味はありましたが、全体として先ほどお聞きしますと、先生方が多数を占めているということで、とても内容的にいいものではなかったかというふうに思っています。

そのことを聞いて、これは私の印象ですが、個人的にはこういうことを大して勉強も研究もしているわけではありませんが、思い出したのはアメリカの全米障害児教育法が、確か1975年だったと思いますが、間違っていたらごめんなさいですが、そのときにいろいろなハンディを持った子ども

さんに対して、学校教育の場合に先生だけではなくて、いろいろな職種がある。あるいは地域の中で働く人たちのいろいろな専門家が、あるいはボランティアが、どのように位置付けられるかというような話が出てきて、その中で初めて私が多少かかわっていることで言うと、スクールソーシャルワーカーもやっと認知されたという、そういうことがありましたが、そういうところに来たのかと。そういう意味では、25年ぐらい差がまだあるのかという感じもいたしております。

もう1つは2点目ですが、一応、少しだけかじって勉強をしているスクールソーシャルワークの話にかかわって言いますと、最近はまだ全然やっておりませんが、10年か12~13年前に若干研究ノートの的なものを書いたときに、そのときに予測していたことなのですが、ソーシャルワーカーさえ日本の場合、なかなか認知されていないような状況の中で、スクールソーシャルワーカーが、認知されていくためにはどうしたらいいのかというふうに考えたときに、私が考えたのは、子どもがだんだん少なくなっていく。従って教員の一部をソーシャルワーカーとして養成すべきだということを考えて書いたことがあります。今日の何人かの先生方の報告、あるいは最後の役場に勤めていらっしゃる方の報告も含めて、かなりスクールソーシャルワークという言葉を使うかどうかは別にして、地域の中では似たようなことがやられている段階に来ているのだというのは、これも非常に印象深く考えさせられました。

残念ながら、それに対して、そういうものをどのような形で今度は大学なり研究者たちが跳ね返していくかということになったときに、いろいろな実践が先行していて研究の態勢が整っていないというのが正直な段階だろうというふうに思います。その点をどうするかということも、いよいよ考えなければいけない段階に来ているのだというふうな印象を持ちました。

そういうことも含めて、このシンポジウムで4人のシンポジストだけではなく、フロアの皆さん方にもぜひお願いをしたいのは、現場にいろいろな実践をやっている方とあって、そのときに、私のような大学で働いている者に対して、あるいは研究をしている者に対して、何を一番求めているかということ、今日のシンポジウムを通じて言っただけだと、非常にこちらとしてもうれしいというふうに思っております。その点はぜひ期待をしたいし、こちらも知りたいという感じを持っております。少し中途半端ですが、先ほど言いましたように、一人一人の報告に関しましては、いろいろありますが、その点は省略をさせていただきます。以上です、ありがとうございました。(拍手)

(田中) ありがとうございました。青木先生からは、スクールソーシャルワーカーの話が出ました。先日、久留米で小児精神神経学会というのが開催されて、実はそこでも、今、横浜でお仕事をされている原仁先生という小児精神科の方なのですが、特別支援教育の話をし少しプライベートでしたときに、特別支援教育のコーディネーターというのは誰がやるべきだと思うかという質問に対して、原先生も「あれはね、ソーシャルワーカーなんだよ」というふうな言い方をされていて、かなり重なるところなのだというふうに思いました。

また今回は、この北大の教育学部の中で、こういうシンポジウムを企画しまして、ぜひ皆さんの方から大学に望むもの、我々の役割みたいなことも提示していただければというような話でした。本当にありがとうございます。

もう1人の先生にも指定討論としてお話をさせていただこうと思います。坪井由実教授です。教育

学部の教育計画講座の教授をなされております。専門は教育行政学・学校経営学を専門にやられております。日米の特に米国コロンビア大学や米国のシカゴ大学で研究をなされておりましたので、日米の地方教育委員会による学校改善の取り組みなどに注目をして研究を進めている方です。坪井先生、お願いいたします。

(坪井) はじめまして、ほとんどここにみえる方は初めてだと思うのですが、私も田中さんと一緒に、この4月から北大の方にお邪魔しました。今、私のアメリカでの研究生活が多いとお話がありました。こうした特別支援教育に変わって、私は愛知教育大学で26年間、教師養成をやってきました。一念発起これから10年間、北の大地で地域教育行政をつくっていくという仕事に頑張っていきたいということで、今日も十勝の地政についていろいろ学ぶことができるともよかったと思います。私自身は愛知の方で学習障害児のかっこ付きの高校、見晴台学園というのがあります。この創設のときに、今日もここにいる間宮さんと一緒になって、お母さん方の圧倒的なパワーで本当に学校をつくってしまったのです。

それは、実は学習障害というのは、知的にはほとんど問題がないということで、養護学校の高等部へは行けないのです。では就職をするかということ人間関係づくりがとても難しく、これもうまくいかない。だから、今日も何度か出てきた本当に一人一人を大事にしてくれる小さなたまり場、居場所です。そういう学びの場をつくりたいのだということです。

行政の側にちゃんと学習障害のことを認知するだけの能力がない。行政の側に障害があるわけです。障害がある中でどうやって自分の子どもの幸せを守るかと考えたのです。そしたら自分たちでつくるしかない。ついてはどうやってつくったらいいか教えてくださいと、こういう話なのです。

それは学校としては設置基準があるから当然できません。従って、無認可ということです。保育所ではないが無認可の高校というものをつくった。3年後には愛知教育大学の隣へ来て、芝生のあるサッカー場も、私の運動活動になっている集団的なかかわり合い研修課程の何とか研究という名目で、運動場を使わせていただいたわけです。そういうことで10年間やってきて、また今回、名古屋の方に移りましたが、そんな取り組みなどの中で、行政というものは、私は教育委員会の仕事のすべてを対象に研究を進めておりますが、行政というのは、この問題について非常に障害児教育の障害になっていたという面はとても多いのです。

ここからがお話ですが、今日の4人のそれぞれの方々の報告について、大変共鳴した部分と同時に、行政サイドからするとネットワークづくりというものが、ずいぶん違った形の認識がある。そのことの両面を少しお話ししたいと思うのです。

まず青木さんは避けられましたが、私は皆さんいろいろご質問がある中で、最初に私も質問をさせていただけるという感じで、一人一人の今日のご発表をされた実践の皆さんに一言ずつ質問と、私なりの質問といいますか、意見を述べさせていただく形で発言の責めを負いたいと思います。

最初の吉藤先生の実践は、とても分かりやすく頑張ってみえる。本当に養護教諭の先生として学校の自主的なコーディネーターといいますか、ネットワークの中心にいて先生を励まし、子どもを励まし、自分を励ましというところがよく分かりました。最初のところのAD/HDとともにある子の理解というふうにおっしゃって、AD/HDの子どもではないのだと、こういうお話がありました。

AD/HDを持っている、AD/HDのある子どもと、こういうとらえ方がとても重要だということを強調されたと思うのです。私は、これはとても重要なことだと思うのです。つまりネットワークづくりというときに、子どもを軽度発達障害とか、従来の特殊教育の子どもたちを類別するということも大事ですが、発達という視点において、いわゆる健常者と連続的にどうか、通底する基本的な共通に持っている視点です。それを大事にするということがとても重要で、今回も制度的には特別支援教育となっていますが、この特別というのはとても問題があるのです。文科省はこだわるのです、どうしても特別と言いたいのです。

ところが皆さんがやってみえる教育実践というのは、一人一人を支援するという教育としては、障害児も同様になっているわけです。そういう意味でネットワークづくりにおいては、支援教育という指定というのがとても重要ですが、しかし、行政としてはそれをやらざるを得ない。特別を付けるのはLDとAD/HDと、それから高機能性の自閉と、この3つを軽度発達障害というものとして、足すことによって特殊教育から特別支援教育と、こういうふうに言っていったわけです。

でもこれはまだ障害者基本法とかいろいろな対象からすると、そういう人たちが社会的にはきちんと処遇されないような行政の事情、光が当たらない事情といろいろある。でも取りあえず学校教育において、その子どもたちにきちんと支援をしていこうと、こういう姿勢だからいいわけですが、それでも私たちの実践のサイドとしては、AD/HDのある子どもという言い方において、まず人として子どもとして尊重をする。

これは普通の子どもでも宿題をやってこない、本当にあんたは、宿題もやってこないだめな子だな、こういうふうに言いがちですが、宿題をやってこない子はだめなところもある。けどいいところはいっぱいある。これがまず人として認めていくとか、そういう視点だと思うのです。

このように考えていきますと、AD/HDを持った子どもということをとらえる場合でも、そうした人としてまず育てていくというこの視点を軸にして進められているという点で、とても重要な指摘だったというふうに思います。こういう点でもご苦労について、今少しお聞かせいただければというふうに思います。

それから2人目の北川さん。私は、教育行政とどういう出会いをされるかということに関心を持って、その接点を一生懸命聞こうとしたわけです。つまり交渉に行つてこういうつばぜり合いをやって火花を散らしてこうやってやった。これが普通の都市型というのかあれですが、北川さんの話を聞いていますと、たまたま隣りに座ったと。2時間しゃべりまして、そしたら意気投合をして、こういう出会いです。

とてもハッピーというかいい出会いだと思いますが、その中で、おかゆの会の話聞きまして、とても重要でいい実践だと思いましたが、この話を聞いているときに地域とのネットワークということで、地域にもきちんと居場所をつくっていくとか、子育ての環境を整えていくということですが、私は、少年法とか児童福祉法の関係も教育委員会の関係でやっています、修復的司法という考え方があるのです。これは、いわゆる保護処分を設けて、例えば少年院に行った。3カ月とか6カ月を終わって帰ってきます。そうすると、その家庭は地域になかなかいられなくなってしまうということが多いです。

愛知県でも5,000万円の恐喝の事件があったときに、同じような問題がありました。でもそのときに地域で、そのお母さんたちの苦勞、いろいろな思いを受け止めながら、その子どもたちが中学

3年生で帰ってきて、きちんとそこで学んで通学ができるように、そういう形で地域と一緒にその悩みを共有し合う。こんな形で分かり合える、そういう集団づくりというのは、それぞれのニーズに応じてあると思うのです。

今、たまたまそういう少年院へといったようなことを言いましたが、このことでも、これは田中さんもよく言ってみえるように、AD/HDの子どもたちは、得てして2次的のいろいろな障害というか、不登校とか、そういう非行に走る率というのはとても高いということがございます。

その辺のことを考えていきますと、AD/HDの子の本当に分からない暴力的な場面に遭遇すると、みんな地域の人たちは引いてしまうわけです。でもそのお母さんたち、お父さんたちの悩みや、子どもの自分はだめなのだというあたりのことをちゃんと受け止めてくれるのは、そういう集団。そういうものをつくっていくということは、この障害に限らず本当に多様なニーズを持った子どもたち一人一人にとって重要なことであって、それを地域でつくっていくというのはとても重要になると思いました。

そのときに趣意書を書かれておりますが、この趣意書をやっていた北川さんを、私は興味深く聞いていたのは、結局、誰を対象に何をやるのだという話で、突き詰めていったら子どもみんなになっちゃったというお話でした。これも先ほどの話とも非常にかかわって重要だと思うのです。

私は今、この障害の子どもたちを含めて、北海道ですと今度「子ども未来条例」というものをこの間作りました。あれもどういうふうに機能しているかというのは、少子化の中で何とか障害を持った子どもたちについても、子育てもできるようにということが書いてあるのです。

私は、それをどう実践していくか、行政が掲げた条例を実践していくというのはとても重要ですが、作っていく過程で条例の前文づくり。例えば奈井江町は、子ども権条を作ったときに立派な前文がある。そのときに子どもの現状を出して、親の気持ち、行政の立場、先生も、そういうところで初めてコミュニケーションが取れていくわけです。

そういう意味で、この趣意書づくりの中にも、やはりネットワークづくりの大切なプロセスがあるのではないかというふうに思ってお聞きしておりました。この点についてももう少し、今の私の感想などを伺ってご意見を聞かせていただければと思います。

それから3つ目の内田さんのご報告。私は、ここで面白いと思ったのは、最後の方で異職種を利用するとおっしゃっています。これは、学校が利用するというだいたいそういう文脈でおっしゃったと思うのですが、これは親も一緒です。私たちは、親が子どもの幸せを築いていくということにおいて学校を利用する、先生を利用する、さまざまな機関を利用して、自分と自分の子どもの幸せをつかむ。そういう力が、今、求められていると思うのです。

行政も本当は自分たちのお金で雇っているのです。立派なことをおっしゃっているあの係長さん。住民のサーバントであって、それに応えるべく本当に頑張ってくれると、そういうことだと思うのです。ですから行政の立場の人たちは、みんなにサービスをするということですが、一人一人の親にとってみたら学校も地域も、そして専門の児相も福祉事務所も療育センターも、それらを利用していく。

つまり1人の親の中でネットワークができるというか、そうやって自分の子どもの幸せ福祉です、福祉というのは幸せです。児童福祉、幸せ追求をやっていく。その中に教育委員会の活動も位置付けていく。だから、私は聞きたいのです。病院の先生方、本当に隣で酒を飲む。酒というのはカッ

トですが、話している、あれは酒を飲んでみえたのだな。

とにかく行政に対してあまり悪いイメージがないのです。行政の方もみえるということもありますが、でも市町村の教育委員会で、そういうことを回ってみえるが、北海道の教育委員会は何をおっしゃりたいのか。北海道の行政に対して何をおっしゃりたいのか。もう今、財政的な問題では、本当に義務教育の国庫負担はとても厳しい状況で、北海道からまともに受けるのです。

いろいろな補正の計数的なものはすべてカットされていきますから、北海道のように人口のわりに学校がすごく多いところ、そういうところはこれからまともに被害を被るはずですが、それに対してきちんと国に対して要求をしていくということはありますが、当座の北海道の教育行政ということで言うと、どういう要求をされているのか、そんなことを思います。

それから、最後の福祉係長さんのお話ですが、佐々木さんの最後のレジュメということでのまとめも含めて大変共鳴いたしますし、先生が本当にもっと学習というか、発達ということについて学んでほしいと。これは最初にお話ししたことともかかわって、障害児の発達のプロセスと健常児の発達のプロセスはまったく違わないと、私は普通は言うのですが、今日は専門家がいっぱいいますから、そういう視点でいきますと、この障害児の一人一人の支援をしていくという姿勢で実践を貫いていけば、すべての子どもたちをまとめ上げていくというか、育てていく力にもなるということでも重要です。

最後に4つのまとめをされていますが、こういうことというのは、とても大事だと思うのです。行政のネットワークづくりで少し違うところということを最初に言いましたが、そのことを最後に触れて、私の発言を終えたいと思います。実は教育行政の場合、例えば教育委員会という制度があります、それから教育財政もいろいろ制度があります。これらを教育行財政と言うだけではなくて、実際にそのシステムを動かしていく人的なシステムがもうあるのです、実はネットワークはあるのです。

例えば、それはどういうことかということ、校長先生を選ぶシステムというのは、教育委員会の内申や道教育委員会による選考があって、試験を受けたりいろいろの中で、そういう人事上のことがあるのです。そのことで重要な役割を果たしているのは校長会なのです。あるいは教育畑出身の教育長さんなのです。

だから、教育長のポストはどここの町で空く。ここは代々、教育界がやっているのだと、今度、誰がやるかということ、そのネットワークが動くわけです。つまり今まで教育行政ということで学校を動かしていったりして、具体的なネットワークというのは現にあるのです。現にあつて、それは特徴として専門職中心であったり、学校の中でもネットワークは一応あるのです。それは同質の先生たちのネットワークが、ある種の分業と協業と体制であるのです。

ですから、1人のスクールカウンセラーの人が入っていったときに、担任としてはみんな知っていないと気が済まない。それはスクールカウンセラーから言われて、そんな面もあったのかというふうに思ったときに、新しいある子についての知識を共有できることを喜びと感ずるよりも、担任の私が知っていないことをスクールカウンセラーの人は知っている。これは、私の力の至らなさを何か指摘されているみたいな、そんな話というのはよく聞かれると思うのです。

でもそれは今までの体制、生活指導主任がいて、とかというのとは違って、もっと新しい専門家と、それから機関を利用しながら学校を行政を動かしていかないと、今のそれぞれの子どものニー

ズに比べられるような制度と、人的なネットワークは有効に機能しないということで、既存のネットワークを壊してというか拡充というか、変えていくことが行政の非常に重要な役割になっているのです。

ですから皆さんが今日おっしゃった中で、実はよく感じてみえることは、ネックは先生であったり、教育委員会であるというのは、もうある種の見えないネットといいますか、法制化はされていないが、現に今まで動かしていくほど機能をしていた。でもこれからの学校と教育行政は、それでは立ち至らないということで、新しいネットワークづくりを、今、言われているのです。

その新しいネットワークづくりのときに2つの方法というか、動きが基本的にあります。1つは、もう教育委員会だけではなくて、児童福祉関係の児相や福祉事務所など、いろいろな療育、それから医療施設、これが虐待1つを取っても虐待防止法の第5条には、早期通報のシステムの筆頭責任者というか、期待されているのは教職員なのです。

でも学校の教職員が児相か福祉事務所へ連絡することになっているのですが、これがなかなか回っていかないのです。本当にこれが機能するためには、この横の連携のネットワークをきちんとつくっていく。このことが1つあって、これは北海道でも保健福祉部と教育委員会が連携して今、やろうと。あの条例もそういうふうに動いていけばいいと思うのですが、これからだと思うのです。

もう1つの新しいネットワークづくりはボトムアップなのです。今までのネットワークは、先生たちを中心にやっていたのです。そうではなくて、もっと親と住民、その人たちと一緒に子育てと教育をやっていくという、そういうネットワークづくり。このことがとても重要で教育行政よりも、それを少し一般化すると社会関係資本となって、それに詳しい先生がみえましたが、と言っています。

つまりいろいろお金のことや施設も重要ですが人間関係です。信頼し合える人間関係、これをネットワークとしてきちんとつくるといことが、これからの支援教育が回っていくようにするためにはとても重要だということなのです。つまりシステムを整備する。これは田中さんが入って、今度、厚生労働省で1月に3つの障害、軽度障害者の教育支援体制の整備のためのガイドライン（試案）というのができているのです。

この中で、例えば校内委員会とか、先ほど来あった特別支援教育コーディネーターを立ち上げていくのだと、こういうお話なのですが、得てしてこういうものを作ると、またその人が分業をして何かやるような体制になってしまうわけです。これを支える分厚い信頼関係と協力関係の親と先生とのつながりが、これからの学校をつくっていく、支援教育を実際に動かしていく、子どもの発達の方へ向かって動かしていく力になってくるということなのです。

ですから、今日、4人の実践の方たちのご報告は、その部分が非常に夢のある話としてというか、本当にこれは日本の話だろうかと思うようなお話で、確かにこれは日本語で聞いているという感じでありましたが、そんな夢のある話でとてもよかったですと思いますが、これは行政のことをやってみえるというのも先生たちを思っただけ夢があるが、これからの特別支援教育というシステムを動かしていく上では、一番重要な社会関係資本というのはリソースです。そのことを私は強調して、そしてそのバリアーという、校長先生に失礼ですが、なかなか分かってもらえない既存のシステムがあるのです。

この校長先生たちも悩んでいる。だからそういう人たちにいろいろと一緒に話し合っていく中で、

そういう協力体制はできてくると思います。残念ながら1つ批判をさせていただきますと、学校評議員制度とか、この9月からは学校運営協議会というものが、それぞれの学校でつくっていいことになりました。

これは諸外国と比べて本当に特異なのは、先生を入れないということです、外部評価的なのです。だから保護者や地域の人に監視をしていただくといったようなニュアンスが非常に強く、でも今、必要なこと、この支援教育を回っていくようにするためには、もっと先生と子どもと親が話し合わなければいけない。コミュニケーションを取って、そういう資源を有効に束ねていく、これがコーディネートをしていくということです。

その中で先生たちも本当に実情を開いていく。そうすると、先生も開いていろいろひっちゃかめっちゃかなところが分かってくると、先生たちも気が楽になる。先ほども何かそういう話でしたが、その中で新しいネットワークというものが、ボトムアップでできてくる。そして行政にこれを要求していく。そんなシステムをどうそこから人間関係でつくっていく、こういうことがとても重要で、その動きはもう十勝の方では先駆的に進められているということ、そういうことに今日は確信が持った会であったと思います。まだ終わりではありませんが、私の感想であります。ありがとうございました。(拍手)

(田中) ありがとうございました。それでは4人のシンポジストの方と今、指定討論をしていただいたお二人の先生にも前に座っていただきまして、この後、議論を深めていきたいと思います。

まず坪井先生の方から感想といいますか、一人一人への質問ということがありましたので、その辺を簡単に吉藤先生の方から一言ずつでも言っていただければということです。AD/HDとともに、あるいはAD/HDのある子というとらえ方を、学校の中で広げていくことの難しさ、あるいは視点という部分。また北川さん、内田さん、佐々木さんにもそれぞれ一言ずつ話していただいて、それからフロアの方とディスカッションをしたいと思います。

(吉藤) おふたりの先生方、ありがとうございました。私のような者の言葉を聞いていただいてありがとうございます。ともにある子ということはずごくこだわってしまっていて、1つの状態像を見て子どもを分かるものでもありませんので、ただ生活を共にしているというところで、その生活実感の中で子どもは泣きだして、お伝えするということが大事だと思うのです。

私の立場で言うと、例えば学校で出会ったお子さんの様子を親御さんなり、教師なり、管理職なり、行政の方にお伝えするときに、とても気を付けていることは、そのお子さんのことを生活化した言葉という言い方を私はしているのですが、例えば、あの子は非常に多動でというような言い方をしないで、こういった状態のときに非常に動きが大きくなりますが、こういうやり方をすると落ち着くことができますとか、その子は今までの生活の中でと言って、保健室で聞いた言葉をお伝えしています。

例えば、画面にも出たと思うのですが、僕はだめだとあの子は言っているのですと言われたときに、大人は、ああ、そうだよ、やっぱりねと思わないのです。そんなふうに思っている内面を抱えていて、あの子は廊下を走っているのだとか、そういう子どもの内面を伝えるというか、言葉を伝えるということは非常に努力をしていますし、その子の状態像を伝えるときには、具体的にお伝

えするというのを非常に心掛けていました。

ですから、そういう伝え方をしていくと、教師ですので、私はいつも教師魂と言うのですが、私はそこに火が付くと思うのです。そういうふうと言っている子どもの悩みを何とか支えたいと思ったときに、パッションとか情熱だけではなくて、ではどういう取り掛かり方があるのかというところも勉強をしていきたいと思いますというような投入になっていくのかということです。

先生方も認知の仕方の得意、不得意がありますので、聞いて分かる先生もいるのですが、ビデオを見てやっと分かる先生もいらっしゃるのか、具体的に自分が接していた子どもの行動や言葉が、自分が軽視していたことと一致したときに、あつというふうに入るということで、あれやこれやで、私が理解できる方法で子どもの姿を提供したからといって、言われた大人が分かるというわけではないので、いろいろな在り方をアプローチしていくというやり方は非常に気を付けました。

それと、行政のネットワークのつくり方ということで、お話を面白く思っていて聞いたのですが、実は先ほどのお話に時間の都合で出なかったのですが、あの中で教師たちが一致しまして専科はいらない。分かりますでしょうか、理科専科の先生とか、図工専科の先生はいらないので、私たちはすべて空き時間なしにしますので、フリーの先生をつくりたいのということですを実は組合で決議を出しまして、校長に言ったことがあるのです。

その結果、内々になのですが、クラス編成を2クラスだったのを3クラスにしました。委員会は、それを分かっているのだが、実動は3クラスでいくということで、それは校長先生の尽力がすごく大きくて、また行政の方での理解も大きかっただろう。これは特別支援教育を言われる前にやっていて、今は法整備がなくてもそれぞれの工夫で動いてくれと言われるのですが、そのときは法律違反だと言う方もいらっしゃったので、外に出すことはできず、中でやったというようなこともあったりということで、非常に小さい輪っかの中ではあったのですが、実際に動いたということがありました。

ですから、行政の方も子どもの姿が分かれば動いてくれるだろうと、その伝え方を中にいる者が非常に工夫をしなければならないだろうというふうに思います。あと校長先生とか教頭先生というような部分で、意識改革はしていただきたい。ですから、管理職研修というのは非常に大事だというふうに思っているのです。

管理職の先生は本当に土日がすごく忙しいのです。小さい学校だったら勉強をしたくても出て行けないと思います。ですから、平日の中で必ずこの研修をなささいぐらいの勢いで、局なりから言っていた方が、校長先生、教頭先生は出て行って、そちらで勉強をされる機会は持てるのではないかというふうに思いますので、そこら辺は行政として現職教育をどういうふうに提供していくのかというのが、お願いかというふうに思うのです。

ただ、長年やっていたら先生だと、こうやってきたら、こうまくいったという自負もございしますので、そのことを抜けていただくという脱学習が必要なのです。だから、そういう研修をしていただかないとなりませんので、そのところを含めた、ただ新しい情報を入れるだけではなくて、そういう見直しの必要な部分もあるということになっていかなければいけないであろうというふうに思います。

(田中) どうもありがとうございました。だんだん会場の方がストレスがたまってくるような時

間になってくると思いますので、俺にも、私にも一言言わせろというような形になってきますので、手短に3人お願いいたします。

(北川) 趣意書のことで、僕のことだと思って。僕は答えるのが苦手なので、うまくしゃべれるか分からないのですが、12月にクリスマス会をやり、1月から会をつくろうかということで、人々がこの家に集まってくるのですが、僕とかほかの先生方が声を掛けて、この人を引っ張ってこようという感じで、小・中の先生方、それも特殊教育、特殊学級を担当している先生方が主だったのです。あと教育委員会と一緒に視察に行った2人の方と、幕別町の幼児ことばの教室にいらっしゃる方と、幕別町の保健福祉センターにそのときにいた人と、保護者数名です。それも特殊学級を利用されているお母さん方に来てもらいました。

あと隣の市の帯広の方から、不登校や教育相談をずっとされてきたすごい先生がおられて、そういう方も来ていただいて、コメントをしてもらうみたいな形を取って、少し話し合いをしていきました。ですから、皆さんが抱えている背景とか立場、職種が全部違ったので、いろいろな話が出てくるのです。

ですから、まずはそういう僕自身の思いとしては、僕もそうなのです。学校現場にいると限界がある。それぞれの縛りがあるので、なかなかやってみたいと思うこともできない。この家に来れば何かできそうな雰囲気があったので、取りあえずざっくばらんに出してもらって、そういういろいろな立場や職種をまず越えるというのでしょうか、そういう中で話をしてみたいという思いがあったので、取りあえずそういうものをいったん外して話し合いをしましょうということでは一つと出していったらいっぱい出てきたのです。

そうなるのと、何か1つの思いみたいなものを1つにまとめたいということで、趣意書を作っていくのです。僕が、先ほど言ったように不登校とか障害という文字を入れて、僕が原案を作って出すのです。ただ、話の中で、うちの子はだめですかみたいな話が出たりとか、討論をしていくとだんだん思いが共有化されていくというか、2カ月か3カ月ぐらいこの趣意書にかかわって話し合いをしていくのですが、言葉が進化していくのです。

それが僕も非常に勉強になって、それぞれの思いがどんどん、こう、できそうもないのだが取りあえず夢として掲げておこうとして、次のページの子どもたちの活動拠点づくりから、まるで4つに書かれたやつがほとんど出たやつなのです。それをできるかできないかは分からないが、これからの取り組みとして書いておこうというので、趣意書の裏あたりに書いてあるやつです。そういう形で作り上げていって、今なのです。いろいろやりたいこともいっぱい出てきて、でも原点に戻るためにこういうことを、趣意書にもう1回戻りながらやっていこうかと思います。

(内田) 坪井先生のお話のお答えになるかどうか分からないのですが、異職種を利用するというような考え方に关しまして、私も子ども自身、親御さんから見てもというふうに考えていまして、だらだらとまとまってしゃべれなかったものですから、そこら辺を詳しくお話しできなかったのですが、そういう意識はございました。

それと教育行政に対してということなのですが、私の考える特別支援教育は、子どもさんの教育ニーズに合わせた教育を、学校内外のいろいろな資源をうまく組み合わせて提供するものというふ

うに考えていますので、どれだけ自由に自在に組み立てられるかということが、大事になってくるのではないかというふうに思います。

そうなりますと、そこに関する制限みたいなことが強くなれば難しいだろうと思いますし、先ほどお話ししました例でも、かなり正規の決まった扱いだと、やってはいけないとか、もしかして言う形も含めて、学校内で工夫をされていたと思って、それがよかったと思うのですが。

ちょうど僕が3年間勤めていた間に、むしろ学校の先生の例えば特殊学級ですか、養護学校教員の資格ですか、そういうものを持っていないといけないとか、代替えで入った先生が小学校教諭の資格を持っていないので、次年度は続けて勤務できないみたいなことが、かえって強くなってきたような印象を持ってまして、一方で自由に組み立てなければうまくいかないものを推し進めておきながら、他方で資格というか、本人が、今、実際に使える力みたいなのところとまた別のところの要素で、教員の配置がうまくできないみたいなことが起こっているのかというような印象を持っていて、そこら辺のところを何を一番大事にして取るのかみたいなのところを、特別支援教育の推進をきっかけに、むしろ考えていっていただきたいというふうに、個人の意見なのですが思っております。

(佐々木) いろいろなご意見をいただきありがとうございます。私は、基本的に福祉行政の立場ですので、ただ市町村、市は別かと思うのですが、町村の場合だと、ほとんど一般の人事異動で教育委員会に基本的には回っていくのです。役場の組織というのは、町長部局と教育委員会部局、教育長部局があって、基本的に教育委員会に行くときには、町長部局から教育委員会に出向という形になって、そこで教育長辞令をもらう、それで教育委員会の職員になるわけです。

そうすると教育委員会の方へうちの場所なんかで行くと、ほとんど教育行政がまったく分からないという状態で行くわけです。この特別支援教育の話が出てきたときに、これは現実だと思うのですが、ほとんど教育委員会の職員は分かりませんでした。何かあるみたいだということは知っていたのですが、知らないと言うのです。最終答申を読んでと言ったのですが、いっぱいありますねということで、それ以来、教育委員会に特別支援教育の資料を送ると、全部、私の机の上に上がっているということにもなるぐらい基本的には分からないのです。

だから、そのときに分からないから勉強をしろとか何とかというよりも、お互いに、先ほど先生がおっしゃったように教育委員会も含めて、この町、この学校の教育ビジョンをどうするのだということを話し合えばいいのです。そこそこで勉強をみんなでし合う。うちの教育委員会の職員を見てもみんな熱心なのですが、いかんせん行って1年目で分かるかという分からないわけです。そこを一緒に話し合っ作り上げていく。

対組合と教育委員会みたいな構図ではなくて、この子たちを育てていくためにはどうすればいいのだろうということの話し合いが、僕はできるようにしていけばいいでしょうし、うちの教育委員会は聞いてくれるという話は先生たちにもしております。ただ、それがすぐできるかどうかは分かりませんが、そういうふうにして知恵を出し合わない先へ進まないというふうに思っていますので、そういう声はずっと出し続けていきたいというふうに思いますし、それがボトムアップなりにつながっていただければというふうに思っているということです。

(田中) ありがとうございます。お待たせいたしました。10時からご苦労さまです。皆さん方も聞く一方だけですと、このまま帰ってきつと気持ちかもやもやとするでしょうし、ご意見、ご批判、何かご質問がございましたら、可能な範囲で所属、氏名を言っていたら、討論に参加をしていただければと思います。ご意見をいただきたいと思ひます。シンポジストの方に、はしよらせまでつくれた時間ですので、ぜひ積極的に手を挙げていただくとありがたいと思ひのですが、ございませんか。どうぞ。

(Q) 大変、田中先生にはお世話になっておりますので、恩返しのため参加の1人と思ひて来たのですが大変勉強になりました。実は、私は昨年まで言語障害児を持つ親の会の全国の会長をしておりますが、名前を変えます。すでに北海道はことばを育てる親の会、NPO法人も立ち上がっています、変えました。

全国は今、内閣府を通りまして閲覧が入っているので、12月ぐらいまでは変わると思ひますが、今度、全国の方はことばをはぐくむ親の会というふうに、言語障害児という名前を外しました。もちろんここにも、今、先生方のリーダーがおられますから言いにくいのですが、我々も決して特殊教育が特別支援教育に変わったのではなくて、今までの教育が新教育に変わったのだ。その視点は、今まで私も大学で教授をしていましたから、自分で教授、教え授けるなんていう立場で、主体が教員で学生が客体だという立場から、今度は逆転して子どもたちが主体だ。

その教員だとか行政もみんな、今日の話のネットワークを組んで、文科省は生きる力とかという言い方ですが、それも将来にわたって支援をするかということなのだというならば、特学が支援教育に変わったとかというのではなくて、僕は一番心配しているのは、この動きが本当に先生方、みんなが自分たちの問題だと思ひているのかどうかということで、長くなればあれなので、最初の口火と思ひて今、話しているのですが、ぜひ教育学部とか教育の方にお願ひがあります。

今までは特別教育といひて、特別な人がやるカリキュラムだったのです。今度、特別支援教育になったら全学生を支援してほしいと思ひます。免許も特別に総合免許証になりそうです。我々はあまりじっくりいひていないのですが、でももしなつたとしたら、それはコースの人だけではなくて全教員がそれを取るといひこと。といひことは、教室に今度そういう子が入るから大変だではなくて、いるのです。現在もいるのに相手にされなかつた者を教育の対象にしようといひことですから、何も変わっていないのです。

先ほど坪井先生や、あるいは吉藤先生が言われているように本当に我々も最初に言つた言語障害児といひ言葉を除いたといひことは、確かに言葉に不自由や不便をしているが、大部分は普通の子どもたちと同じなのです。ほんの少しの違いのところ個性だとかといひ人がいますが、だからそれを飛び越して、そして特殊教育だといひのではなくて、その手法は全教育、全子どもに、これは皆さんがそうおっしゃつたと思ひますが、だとするならば、ぜひ大学等も、今、ここに関係の先生がおられるから言いにくいのですが、私も中教審のヒアリングに行つて発言をしてきましたが、裏話では、実は特別委員会ではなくて、別に免許証の委員会があつて、そつちがいかない。

総論は賛成なのだが、大学、教育学のカリキュラムを変えなければならぬから、これはものすごく抵抗があるのだといひような話を聞きましたから、本当にどの程度までいくかは分かりませんが、今度は本当に全部の教育が変わるのだといひ視点で、大学の方もぜひそういう教育をしていた

だきたいと思います。よろしくお願いします。

(田中) ありがとうございます。教員養成課程も含めたご提言だったと思いますが、何かご意見はございますか。特になければ次の質問についてよろしいでしょうか。

(山田) 札幌の方で訪問型フリースクール漂流教室というものを運営しています山田と申します。今年で始めて3年目に入ったのですが、最初の不登校の子どもという大きなくりで、学校へ行っていなくて、それでフリースクールなどの居場所の方にも行っていない子どもたちの方に、訪問をしていくという形で活動を始めたのですが、ずっと人と会ってなくて、久しぶりに人と会いたいがまだ一歩踏み出せないというような微妙なところなんです。

ただ、実際行ってみますと、その対象となるお子さんたちのかなりの割合が、今回は特別支援教育という形でくくろうとしています、その対象になるようなお子さんたちだったのです。今、4名の方のお話の中は、取りあえず学校の方であるとか、そういった居場所の方に来ているお子さんについての活動だったと思うのですが、こうしたそこから漏れている子というのが、例えば北海道であれば不登校は小・中で約4,500人ぐらいいます。札幌であれば1,500~1,600人いる中で、かなりの数の子が取りこぼされている子があると思うのです。

そういった部分について、今現在まず訪問といったような活動で、何か地方で行われているのでしょうかということ、それから大学の青木先生でしたでしょうか、何ができるでしょうかということ、うちの方は学生を一応メンタルフレンドという形で養成して送り込むのですが、ぜひ一緒に活動できるとうれしいと思っているのです。

田中先生のお話は、この間、有朋の講演会のところでもお話を聞かせていただいて、非常に面白かったのですが、そういった民間でこうした活動をしているところもありますので、私たちだけではなくて、ほかにもありますので、そういった形につながってほしいと思うのですが。今後のそういった訪問をしていくといった形の学校、居場所に来られない子どもに対する活動への展望ということで、何かお話をお聞かせいただければと思います。

(田中) どうもありがとうございました。どうぞ。

(佐々木) 今、おっしゃる通りのことがすごく大きな課題だと思っているのです。たまたま私は、今、先ほどから言っているように福祉をやって、今年、地域福祉計画というのを策定しているの中で、足寄町に障害者基本計画がなかったものですから、同時的に今やっているのですが、不登校の親御さん、もしくは精神の引きこもりの方の親御さんたちと懇談会を持ったときに訪問ですとか、その子たちがみんながたまっているところへ行きたいと思ったときに、背中をぼんと押してくれるような、そういう人たちが定期で訪問してくれるようなシステムが必要だというような話が出ていたのです。

現実には今、策定中なのですが、その中には私が児童相談所に不登校を入れて、今おっしゃったメンタルフレンドです。それを1つは文言として今、入れていっています。現実にはそれをボランティアの方たちの研修を、私たちの方で積み重ねつつも、そういうボランティア組織を組織しつつ、足

寄というサイズの町の中でやっていけないだろうかということは今、検討をしているところです。

現実には、私も必要だと思っています。そういうものがないと親御さんも言っていましたが、行ける子はいいということです。行けない私たちの子どもはどうしたらいいのということに、きちんと目を向けていくということも重要だというふうに思っていますし、行ってご覧と言って、うんと行ける子は心配ないのだということなのですが、そのうんとも言えない子どもたちをどうやって解きほぐすという、それをうちはこの計画の中で検討し、実際に取り入れていきたいというふうに、私の中では思っているということです。

(青木) 類してあれですが、そういう意味で、先ほどフリースクールの方がおっしゃったメンタルフレンドの問題ももちろんありますが、学校と家庭を結ぶソーシャルワーカーの役割というのは、どうしても必要なのです。その関連がセラピーの問題もありますが、その場合は、得てして向こうから来る場合に対応できるかと思うのですが、そうではなくて、こちらから出掛けていかなければいけない場合というのが結構あるのです。その点はもっと重視されなければいけないとつくづく思っているのです。

これはいつもよく思うのですが、私も話が飛びますが、社会福祉調査実習ということで、例えば障害を持っている子どもさんの親御さんの家庭に行って、学生が聞き取り調査をさせていただいて、それでかなり教育的効果を上げていまして、そういうことを経験した人が児相に行くわけですが、それでも一番その問題は、受け入れてもらえない家庭がそれでもいっぱいあるのです。

その辺のところはどうするかという問題があるのと、もう1つ、私の専門は貧困の問題を今中心に勉強をいまして、生活保護を受給されているような世帯を調査させていただいているのですが、その中で見ていくと、非常に高い割合で障害を持っているお子さんが出ているという感じがするのです。統計的なものがないので何とも言えませんが、そういうことを考えていくと、橋渡しをちゃんとプロとしてできるような、そういう人たちを何とかしてつくりたいというふうに思っています。

(浅川) この教育学部を卒業しております浅川です。教育行政を専攻しております、大学院で中退したのですが、青木先生の今のお話の中でちょっと引っ掛かることがあったのでお話ししたいと思います。

全障害児教育法の制定時にもそういう議論はあったのですが、貧困層に障害児が多いという、そういうような統計は非常に多く言われておりまして、逆に本当に古い話ですが自閉症の親とか、学習障害の親は高収入の子どもがなるんだぞ、なんていう、えっ、うそ、みたいな話だったのです。

ところが地道にきちんと調査をいたしますと、実はアメリカでは学習障害の教育をするということで、教員を配置するというふうになると補助金が出るわけです。その補助金を取るためには先生を雇わなければならないわけです。ですから、そのためにはお金がなければ先生は雇えないので、だから学習障害の学級はつくれない。それが全障害児教育法の時代のアメリカの認識だったのです。私は、きちんとした統計をもしお話しするのであればすべきだと思いますが、私は決して貧困だから障害児であったり、特別なニーズを持った子になるとはどうも思えません。以上です。

(青木) そういうふうを受け取られると困ってしまうのですが、たまたま調査をしたときに、従来より高い比率で出ているのではないかというふうに思った。だから貧困だからなるという、そういう意味で説明をしたわけではないです。

(亀貝) 私は、フリースクール札幌自由が丘学園の亀貝といいます。先ほどのお話の中で、今回の問題が全部の教育にかかわる問題になるだろうというお話がありました。それに関するコメントということで発言をしたいと思うのですが、実は私たちは、今年になって特にいわゆる不登校や高校を中退した人など、引きこもりの子どもたちのための支援のネットワークをつくろうというような話し合いをしていたのです。

そういう意味でのネットワークの観点というのは、1つは子どもたちの学ぶ権利をどうするか。それからもう1つは、居場所をどう設定することができるのかということだったのです。この2つのことをキーワードにしながら、大人たちがまず話し合いをしながら、一定の子ども支援の体制をつくっていかうのではないかというようなことを考えてきたのですが、その話の中でどうしても私どもの学園もそうなのですが、かなり多くの割合を持つのがこのLDだとか、グレーゾーンの子どもたちなのです。

ですから、不登校や引きこもりや中退の子どもたちと、かなりの部分をオーバーラップするのが、いわゆる特別支援教育の対象になる子どもたちだということを考えたときに、私たちが言うネットワークのもう1つの観点というのは、将来にわたる自立の問題ということで、飯を食っていけるとい、そういう意味での自立をどうサポートできるのか、つくり出すことができるのかということも、3つ目のテーマとして考えないといけないということを感じ取ったわけなのです。

私たちは、先ほど山田さんの話もありましたが、学校に行っていない子どもたちをサポートしているのです。学校に行っていないが、私たちで言えば札幌自由が丘学園というところに足を向けるという、そういう子どもたちですから完全な引きこもりではありませんが、学校の分野での話だけではなくて、教育を全部変えるのだというようなテーマであるならば、いわゆる民間の私たちのような仕事をしている人たちも含めたネットワークが、絶対に必要だというふうに思うのです。

数千人の子どもたちが、もちろん全部が全部1年間学校へ行っていないわけではありませんが、不登校のテーマを抱えているわけです。それはLDだとかうんぬんという、そういうグレーゾーンの部分とかなりの場合にオーバーラップをするわけですから、その子どもたちに対して、非常にボランティア的な精神でかかわっている人たちが、札幌でも何十人かいるわけです。この部分を考えて、行政のサイドで学校的な1個のネットワークだけでは絶対にうまくいかないということは、私たちが道教委だとか札幌市教委とは常時そんな話をしてきました。

道教委のその関係者も分かりました。これから一生懸命やりましょうという話し合いを今もしているのですが、そういうような意味で、今回、私はこの集まりに来て、皆さんとともにこれから考えていかなければいけないのではないかということ、あらためて感じ取った次第です。

特に今、十勝の話がありましたが、札幌という大都会でどうするのか。特に大人たちがこの問題について、この問題というのはそのネットワークをどう形成するか、そのためにどう足を踏み出すのかということが、ものすごく重要なテーマになるのではないか。その意味で北大の先生方、ひとつよろしく願いますということです。(拍手)

(田中) ありがとうございます。何か大きな荷物をいただいたような感じがいたしますが、質問が。

(坪井) 今の札幌自由が丘ですか、の質問ですが、質問の前にまず私は行政の横のつながりと同時に、一人一人とNPO的な組織と行政もつないでいく、これがとても重要だと思うのです。その際に不登校についてのいろいろフリースクール等々でも、通学しているという形で取り扱う時期以降、一定の補助金、例えば東京周辺などは、公的な補助金を得ております。愛知県もそれをもらおうと思ったのです。愛知県は出さないと言う。絶対出さないというふうになったのですが、北海道の場合はどうなっているのでしょうか。

(亀貝) 補助金だけで言えないです。共同募金会だとかそういった形の援助金はありますが、たぶん東京支部でも公的支援はないはずです。違った形で、あるの？ 失礼しました、東京はあるのですね。ついからですから文科省も札幌市教委も道教委もみんなネットワークやNPOとの連携などということを行うのです。

具体的にどうするのかということになると、みんな面倒くさいというのか、大変だというのか、なかなか足を踏み出さないのです。だから非常に狭い範囲で公の部分だけで1年に何遍か会議をやるとか、そんな形になっているのです。私たちもこの問題をきっかけに、1歩も2歩も3歩も足をもうひとりのスタッフが来ていますから踏み出して、子どもたちの将来をどう援助するのかという形で公の先生方と一緒に、あるいは教育委員会のサイドの人も含めて、いろいろつながりを持っていきたいと思っています。補助金で言えばそうです。

(田中) ありがとうございます。あれやこれやといろいろ話も交錯しておりまして、今回のこの企画ですが、特別支援教育を具体化するためにということで話をしております中で、もうすでに文科省もご存じのように、不登校問題と特別支援教育をかなり絡めた言い方をしておりまして、不登校を呈している子どもたちの中にも、こういった関連のある子どもたちがいないわけではないということをゆっくり強調してきております。

そうなってくると、この辺の話はどんどんすそ野が広がってきて、今のNPOも含めて民間の団体も含めて、あるいは引きこもりの問題も含めて将来保証も含めて、さまざまな視点に広がっていく何かきっかけになるのではないかというふうに個人的には思っています。ただそれをいっぺんに広げていくには、あまりにも広大過ぎるということで、あくまでも今回は小さなところで実践をしている。そこはある意味、意見が集約されているということと動きが見えるというところを1つ考えまして、十勝のメンバーに来ていただいて、10年ほどの実践、あるいは5年ほどの活動というものを報告していただいたわけです。

札幌には札幌型、いわゆる大都市型、さらには郡部型というのがもちろん、特に北海道はそれを考えていかないと成立しないと思いますし、医療も含めて、あるいは教育行政も含めて、すべてが同じスタンスでネットワークが動いているかということ、非常な地域格差があるということも、これもまた皆さんご存じの通りだと思います。機会があつて、こういうことが何度も重なっていくたびにいろいろ広がっていくことを願った第一矢みたいな、最初の弓矢を引いたわけです。

それと中途半端な話になったのですが、先ほどの貧困の問題については、いわゆる因果関係として貧困故に障害が生まれるということではないということ、まず強調しておかねばならないというふうに思います。話が中途になってしましまして、ただ貧困という1つの課題を抱えているご家族の中に、もう1つの障害という課題を抱えたときに、このおうちの中で抱えている大きさ、重さ、生きにくさというのは、かなり強いものだろうということは認識しておかなければならないだろう。それは何を基準に貧困かという問題だと思えます。もちろん経済状況とはまた別な次元で障害というものの生きにくさはもちろんございます。その辺が交錯してしまいました。

それと、お話の中でちらっと出ていた、かつてLDとか自閉症はいわゆる高収入・高学歴のご家族に多いみたいなことは、1943年にカナーが見つけたときに報告されましたが、現在では大きな誤解ということで、今現在それはほとんど伝説化しておりますので、どういう状況であっても1つの障害というのは運命的に生まれてくるというふうに、私たち、医療の中では考えております。その辺を少し整理しておきます。まだ少しお時間がありますので、どうぞ意見とかがございましたら、どうぞ。

(上田) 札幌自閉症児親の会の上田と申します。田中先生、今のご説明ありがとうございました。収入の格差に障害の発生率は関係ございませんので。

4人のパネラーの先生ありがとうございました。

私が特に感銘を受けましたのは4番目の佐々木さんのお話、札幌の北幼稚園というのは障害児保育所でも有名な園で、私どもの会員の中には、結構、北幼稚園を卒業された方が何人もおられます。

ついこの間、先生たちのお集まりでもいろいろな話をしたのですが、学校の先生というのは、教育だけをしていればいいということではないです。札幌市の『学びの手帳』や校内学びの委員会などいろいろ進んではいるようですが、ただ、井の中のかわず大海を知らずで、自閉症の支援もままならないのに、果たして特別支援教育なんて札幌でできるのかというのが、親として現実のものなのですが、特に18歳以降の卒後の人生の方が私どもは長いのです、小・中・高。

うちの息子はあいにくと1浪して二十歳で学校を出ましたから、少し先延びになったのですが、私は正直言って年金をもらってから学校を出てもいいかと思うぐらいですから、高等部なんて5年いて年金をもらって、それで自分で手前で金を払って学校へ行けという、そういう考えなのですが、そういうふうにもなっておりませんが、特に先生と教育と、それから福祉と、それから地域の人と、いろいろなことの考えがまとまらなければ、たぶん卒業一番困るのは親と子どもなのです。

先生たちは出した後はもう関係ないでしょう。後からいろいろな人がやってきますから、正規のいろいろな福祉を取り入れることと、例えば、ここの北大の与えなどの施設があつて、どのエッセンスが利用できて、いろいろなことを学ばなければいけないことと、それから、今、福祉はまた変わろうとして、グランドデザインになっています。分かりますよね、服のデザインではありません。変わるのです。やっとな新品が入ったところに、まだ2年もたっていないのにグランドデザインで変わってしまうのです。本当に頭が追いつきません。そんなところで佐々木さんはよくお分かりだと思います。

学校教育だけではなくて、いろいろなところに目を向けていただきたいと思います。4人のパネラーの先生のお話を聞いて、地域格差がかなりあること。札幌でできないことが多いです。学校の

空き教室を1つ借りてたまり場的活動をやるにも、こっちは建設、こっちは何省と、いろいろな問題があるので、今までいろいろ腹立たしい思いもしましたが、そんな意味では、できるところとできないところがあるとうらやましい。

それから1つ、特別支援教育に高機能と入っていますが、うちの親の会の高機能のお母さんは、高機能を外して自閉症にしてくださいと言います。結局、スペクトラムでかぶっているところは自閉なのですし、この間も親の会の会合ををやりましたときに、国語と算数の時間しかいられない。あとは保健室登校で全体に相手にされないと、本当にお母さんは涙ながらにお話しされました。それと親がなぜ学校に入って引率しなければならない。何で教育の場に親が行かなければならないのでしょうか、おかしいです。

親はたぶんここは少ないと思いますから、いろいろなことを発信できるような教育と福祉と地域、もちろん私たち親ももっと協力をします。だから市教委にも私は言ったのです。うんと私たち親の会の者を使ってくださいと。全然お声が掛からないのです。いつでも地域の学校に行って自閉症のことをいろいろな材料をもっと話したい。山ほどうずうずしているのに全然お呼びが掛からないで困っています。コーディネーターの研修授業に呼ばれただけでした。以上、感想とご意見を述べます。

(吉藤) 学校のできることが少なくして申し訳ありません。まず学校ができないことがあるということ、それをきちんと認識するべきであるということと、できると思ったことに責任を持つということで、私も学校に親御さんをわざわざ引率してきて、階段を登らせたりとか、そういうことをなぜというふうに確かに思います。そこには授けているというようなごう慢さがあると思うのです。だから教師の原罪というお話をしたのですが、指導者ではないということです。寄り添う者として寄り添わせていただく者として、誠意を持って何ができるかというところにたちどころに立たないと、どの子ども大事にするということとはなかなか難しいであろうということを実感しています。

今、不登校うんぬんの話が出ましたが、学校で5年ばかりこのお仕事をずっとやってきて、今の学校でも実はそれが続いているのですが、学校関係者の方がもしいらっしゃったら、そして周りで聞いている方に見てみたら、何だそれしかできないのかと言われるかもしれませんが、一番頑張らなければならないのは、お子さんの自尊感情を下げないということです。

申し訳ないのですが、お勉強もきちんと伝えることもできず、何もできずというところがあるかもしれないのですが、そのお子さんが、自分はだめだということとせめて思わないようなところの最終ラインを守るのが学校の役目だと思うのです。それができていないから2次的に傷ついて、こじれた形になって、もともとの障害ではない部分で非常に重くなってしまっていて、なかなかご家庭も出てくれないという方もいらっしゃるであろうと思います。

あと学校は、子どもが学校に出ていないからかかわらないではなくて、かかわる姿勢は持ち続けるべきだと思うのです。不登校が出たときには、そういうのもありだということで、あまりこちらからアクションを起こさないというのが、何か変に一般化してしまっていて、来なくなったということでフェードアウトしてしまう学校もあつたりするのです。

ですから、そうではなくて、子どもさんとかかわらないのであれば、せめて親御さんの話を聞かせていただくというようなことはできるはずなのです。そこら辺を本当にできることは少ないが、

学校というところは、教師というのは努力をするべきであろうというふうに思っています。

(佐々木) 北幼稚園のことを知っていてくれてありがとうございます。先ほどおっしゃった就労の問題、これが一番大きいです。学校を出てからの人生の方が長いわけですから、障害者基礎年金を二十歳から受給したとして、Aで99万なんぼぐらいです、Bで95万なんぼという金額です。

先ほどおっしゃったように、僕も障害者基礎年金をもらってから学校を卒業するのも1つの案だと。僕は障害者基礎年金は固定給だと思っていますので、その上積みだけ働けばいいという考え方も1つだというふうに思っているのですが、ただ、その場合に一番問題になるのが、働けるようにするために教育をするのでは決してないです。ただ、就労に意欲が向かうような支援を、いかに学校の中でできているかということです。

本当に読み書きができなくなったり、生きていく力というのをたくさん持っているお子さんたちがいて、それで意欲的に働いて、趣味をきちんと持って生きていっている人たちというのはたくさんいるわけです。ではこの子が長いスパンで生きていく上で、何を身に付けていた方がよいかを見つけることがいいのだろう。そのためには何の支援が必要なのだろうということを、僕らは常に考えなければいけないでしょうし、それは学校の先生によく言います。

僕は、ずっとネットワークを組んで長く子どもたちを見てきたのは、教育に18歳まで貸しているみたいな感覚があるので、だけど18歳になって絶対に返ってくる。そのときに地域の受け皿がないと、この子たちが一番苦労をするというのが、あゆみ園が始まったとき、その触れ合いをつくったときに一番思ったことでした。現実が大きくなってきたときに本当に、それは大変です。

軽度発達障害の軽度が付いているばかりに、この子たちは就労的な支援を受けられないです。現実には働いたうちの多くが対人関係が元で仕事を離職している現実がある。それによって引きこもっている状況も出てくるわけです。では軽度という名前を付けたのは本当に悪いと思うのですが、この子たちの一生のライフデザインというのはおかしいですが、その子の生涯を描く人生の中での道筋。では今はどういう支援が必要なのか、長いスパンの中で何かということも学校も親御さんも、それからご本人も少しずつ考えながら共に歩いていくようなことが重要かというふうに思っています。

最近、本当に不況で就労がないです。作業所はどんどん授産が減って収入が減っている。これが支援費になってデイサービスが始まったことによって、北海道だけはまだ小規模作業所運営要綱ということで、作業所の補助金が残っているのですが、道もお金がないですから、これはそのうちにきっと支援費のデイサービスに移行していく可能性はあるわけです。それと今、制度がものすごく変わっていく時期で、18年から介護保険と統合をされた日には、どうなっていくか分からないという現実があるわけです。

だからそういう福祉の世界の流れと、それからお子さんたちの生涯のプランと、それをきちんと情報を入れながらやっていかないと、そのときに困るといえることがあるのだというふうには思っていて、皆さんに私はお伝えをしているというところでもあります。

(田中) ありがとうございます。

(金沢) 先ほどの亀貝と同じく札幌自由が丘学園の金沢と申します。うちは北海道チャータースクール推進センターという会を立ち上げておまして、坪井先生の学生でありますシノハラ君の方から、今日のシンポジウムの案内をいただきまして、メンバーの何人かで参加をさせていただいております。坪井先生と田中先生と、会場の中でも札幌市内の小中学校の先生方がどなたかいらっしやれば、1つご意見をお伺いしてみたいと思っております。

まず坪井先生にご質問なのですが、この特別支援教育というシンポジウムが最近よく開かれている場に、私も何回か参加をしてみたのですが、その会によりましてさまざまな温度差というか、意見の違いというものが当然ありまして、学校現場の先生方の中では当然お金もない、人も付かないという中で、どうやってやれるのだという、そういった憤りの声というのがある。

一方では、とにかく始めてだめだったら、また文科省はどうせ取り下げるのだろうと、そういったようなわりと楽観的というか、自分たちにはあまり関係がないと、そういった見方をされている現場の先生方もいらっしやる。でも一方では、こういった十勝の先生方のように、実際にすでに取り組んでいらっしやるといった先生方もいらっしやる中で、この特別支援教育というのは、しばらく地域格差というものは当然生まれてくる制度なのだろう。

それもまた何かに到達するための過渡期であるのであれば、それもまた仕方がないのかと考えるのですが、ここ10年、例えば十勝という地域に見るか、札幌という地域で見ると、北海道、日本という地域で見ると見方というのは変わってくると思うので、今、ちょうどお集まりの方は、おそらく道外の方はいらっしやらないと思いますので、北海道の今後10年の特別支援教育というのが、どういうふうに移り変わっていくのかという、坪井先生なりのご見解と、失敗するということを考えても仕方がないわけですから、ではそれを成功の方に導くために、タイトルにもありますように具体化ですが、成功に導くための具体化の方法として、1つにはネットワークという言葉が、今日、盛んに出てきたわけですが、それ以外の部分で何か坪井先生のご見解があれば、お聞かせ願いたいといったようなものがまず1つ目です。

あとは田中先生の方に、どうしても我々も医療機関との連携というものを考えるのですが、なかなかこの医療機関の先生とつながったらいいのだろうかということ非常に悩みまして、先ほど管理職の方のお話を聞いていたら、皆さんが口をそろえて田中康雄先生だと、やはり自由が丘も田中康雄先生だろうと、今、意を強く思っているのですが、田中先生も1人しか体がありませんので、いつまでも田中先生に頼ってばかりでもいられないだろう。後からこっそりでもいいので、田中先生がご信頼していらっしやる先生方がいらっしやったら教えていただきたいと、それはまた冗談なのですが。

あともう1つお伺いしたいのは、札幌市内の小中学校の先生でも結構ですが、もしいらっしやれば、今回のこの特別支援教育というものを、どういうふうにとめていらっしやるのかというのを1つお伺いしてみたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

(田中) 坪井先生、壮大な質問が出ましたことへの。

(坪井) 宿題をいただいたというか、私はちょうどここへ10年おりますので、そのところを皆さんと胸を張ってこんなふうでやってこられたことをいいと思う。名古屋へ帰らないことにしたと

か、そういうふうになるのか分かりませんが、頑張っていきたいと思うのですが、私は特別支援教育ということでの支援教育に重点を置くと、先ほど学校に対する教育が支援教育になるのだと、そんなことをおっしゃいましたが、その対象はこのところのいいところを生かそうと思ったら、一人一人のニーズに応える教育、それをいろいろな形で支援をしていく。地域と、それから行政とNPOもです。

そういう新しい関係性をつくるということです。学ぶということの本当に学んだり、学ぶということは本当は人を結うと、結んでいくはずなのです。競争的な中ですとそうはならないのですが、本当は学べば学ぶほど人はつながっていくつながりが深くなっていくはずだと思うのですが、従って、この支援教育をやっていけばいくほど分離していくという発想であって、みんながつながりが深くなっていくって学びも高まっていくわけで、そういう中で障害者のお子さんも輝くし、その光を受けて親も輝く、みんなが輝いていくと、そういうふうな関係になっていくと、私はそういうことを期待したい。

その際には、ところが、今、医療と教育と福祉をもっと大事にと言うのですが、これが一番構造改革の中では削減の対象になっているのです。ですから行政との緊張関係、私もぐっと引き付けてみますと、そこでの緊張関係、これを失ってはならない。絶えずもっと人に優しくいい行政にしていくという地域の支援教育をつくっていくと、こういう姿勢でもって行政と渡り合っていくということがとても大事ではないかと思います。

今、自閉症の親の会の人たちは、ほとんどお声が掛からないとおっしゃった。これは非常に非効率なわけです。非効率、非民主的ということもあるが、行政で効率は絶対的に重要なことです。でも本当の効率とは何と、そういうお母さんたちなくして、自分の子どもたちの幸せはない。

行政もお母さんと一緒にやるのが、本当にその子どもの最良の最善の利益というか、関係をつくったことになる。そしたら行政と親は手をつなぐ、学校でも先生と親が手をつなぐ。このことがとても重要で、いつもその一人一人の子どもの人権と発達、そういうことに目を向けさせるような行政に、ぐっと少しでも切り替えていくというか、そのことが、今、全体の国の動きを見ているととても危険で、私は覚悟して掛からないといけなと思っています。

(田中) 分かりました。では10年期待をして待ち続けると。札幌の小・中の先生でどなたかということで。

(キタムラ) 札幌で小学校の教員をしておりますキタムラと申します。今日は4人の先生方のお話はすごく参考になりました。札幌の場合どういうふうになっているかということ少し話したいのですが、1つは管理職とか校長主導の形でなされているというのが現実です。だから、ある日の職員会議で突然この方がコーディネーターになってもらいます。お願いしますという形で校長指名をされている。

ほかの人は何でその人がなったり、その方もどうしてなったのかというのは全然分からないので、それこそ管理職のネットワークで決められていくというのが実際問題です。実際のことで言えば、校務分掌が1つ増えたということです。そしてその方の負担、仕事が増えたというのが現実で、一般教員は私ではないとか、その人の仕事だとかというのが実際問題だと思うのです。

上からのこの特別支援教育という感じはすごくしています。少し僕の個人的な体験を言いたいのですが、私も3年前くらいに低学年を受け持ったときに、初めてこういう特別支援ということ言われているような、当時は困難を持った子どもたちと言われていたのですが、その子どもを初めて受け持ちまして、すごく自分自身の教師観とか子ども観が問われるような形だったのです。

これは教師にとってみれば、今までそういう子どもたちは見たことがあるが、当事者にならないと分からないということがあるのです。自分がクラス担任とかになってみないと分からないということがあると思うのです。そういう子どもと初めて会ったものですから、それから私自身いろいろ研究会に参加をしてみたり、本を読んだりしてようやく分かってきたのですが、そこで今まで持っていた教師観とか子ども観というのが、180度変わったというのを体験したのです。

これは教師にとってみれば、こういう子どもたちに出会うということは1つの体験ではないかというふうに思うのです。上からの特別支援教育ではなくて、教師がこういう子どもたちと出会うことによって、本当に下からのネットワークを今、話されていたことなのですが、下からのそういう子どもたちとの教育をどうするかというような形での教育の話を進めていく。今は文部省がやられていたり、学校本位の上からの指導ではなくて、そういうようなネットワークをつくれたらいいというふうに1つ思っているのです。

吉藤先生が分析されていた学校の実態ですが、スピード、生産性、管理が画一していて、それは本当に札幌ではすごい状況です。速くいっぱい間違わないようにみんな同じということ。それに対して僕が言っているのは、4つのキーワードということで、ゆっくりやろうと、間違おうと、それから子どもに聞こうと、それから公開していくのだという、そういう4つのキーワードに対抗して今、教育に当たっているのですが、そういう上からの教育に対して、私たち一人一人がそうではない教育を提示して、何とか広げていきたいというふうにして今日も参加をしました。どうもありがとうございました。

(田中) ありがとうございました。

(Q) 札幌市の特殊学級の担当の教員です。今、先生がおっしゃったように、コーディネーターさんは、札幌市の場合、総務の先生か、さもなければ特殊学級の担当の先生が多いと思います。それがどういう理由かは分からないで、うちは特殊学級があるから、はい、先生というふうになっているのが多いのではないかというふうに思います。

私たちのところは特殊学級があって、これからは特別支援教育は、なおさら子どもたちの交流を大事にしようということで、朝の会に子どもたちを急に入れていたのです。私たちのところの子どもは自閉の子どもさんが多くて、話せるし言葉は分かるのですが、なかなか集団適応が難しいというお子さんたちばかりで、行ってもほかのことをしていたり、何とか我慢して終わったらピューツと帰ってくるようなお子さんだったら、こんな朝の会は何の意味もないからやめましょうと学校の方で言われて、結局、検討を重ねた結果もっとよい交流を目指しましょうという名の下に、毎朝行っていた交流はぶつ切り切らざるを得なくなったのです。

毎日一緒にいることが大事なのだからいいのですと私たちが言っても、僕らはそうは思わないという、ただそれだけの理由で、みんなの意見だからということで突然なくなってしまったのです。

それを考えていると、管理者からの考え方というのはすごく反映するのではないかというふうに思います。

だから、いくら私たちがやりましようと言っても、こういうところに来て話を聞いてくれたら、そうかと思うかもしれないですが、まずこういうところには必要感がないので来ませんし、研究会をやっつちの学級もやっつ授業をしているのですが、終わりごろ来て、やっつねと言っつらもう終わりという、ただそういう状態なので、たぶん本当は学校に期待することがみんな多いと思うのですが、実情としては期待をしてもらいたいが、期待をしてもらって何ができるのだろうということを、みんな悩んでいるというところが多いのではないかというふうに思います。

(田中) どうもありがとうございました。では最後の質問、どうぞ、いったいつ終わるのだろうと思っながら考えています。

(Q) お時間がなくなっつからですみません。一番最初に手を挙げかけたのですが、うまくタイミングが合っつませんですみません。札幌の南郷小学校というところのことばと聞っこえの教室という通級による指導を担当している教員です。

札幌の実情ということ、お2人の先生が状況をお話しくださつたので、私はまた私の学校のコーディネーターは実は私で、私の学校は通常学級が17学級で、あとはそういうことばと聞っこえの教室だけがあるという、ほかの固定の特殊学級はないというような、そういう教室なのです。

私が引き受けるに当たっつては、1人ではできないというお話もしたりはしたのですが、最終的にはやっつているのですが、通級の場合は教室でケース会議というものをやっつてきまして、一人一人の子どもについて指導の経過であつたり、これからのことをどうしていいかというあたりをいろいろ相談するのですが、そういう形で校内委員会を運営するということ、そろそろ1年近くになりますが、すでにいろいろ担任も子どもも非常に苦労して困っつていた子どもの取りあえず3~4人を、校内委員会の中でいろいろどうしたらいいだろうかということをお考えようということ、去年の秋からスタートして、何とかその話題になつた子については、時間の経過が一番大きかつたのかとは思っつのですが、それぞれの人が何らかの気持ちを持っつて取り組むことによっつて、何とかいい方向に変わっつてきているという状況があります。

ですから、国の制度を受けてそのままうまくいっつているということではなくて、それをきっかけにして何とかやっつ始めているところもあるが、全体的には非常に鈍い動きであるというふうに私は感じています。

ただ、その障害児教育を担当している先生に聞きますと、今の状況でもなかなか時間的な余裕もなくて大変なのに、さらにいろいろなことが増えてくるとどうなるのだろうかという制度が見えない故の不安感が非常に大きくて、教育条件はどうなるのだろうかというようなあたりが話題になることが多いのですが。

でも一方で、私は日本の教育がインクルージョンになるのだというふうに理解をしていますので、福祉体として進められてきて遅々として進まないわけではあるのですが、脱施設とかという形、いろいろな形で福祉が地域の中でという方向に、お金がないというのが常に裏に付いてはいるのですが、そういう歩みを始めている中で、学校教育もそういう方向にいいよ一歩踏み出さざるを得な

いような、それにもお金がないというのが裏にいつも付いているので残念なのですが、そういう意味でとらえて、先ほど十勝の先生方がお話をされていたような、今、自分が目の前でできることを取りあえずやっ払いこうというふうに思っているわけなのです。

そういう意味で、先ほど教員の人の問題というの一番大きいのだと思うのです。教育条件の中でも心配されているのが人のところで、通級も非常に加配という特殊学級ですと、子どもの人数に応じて8人までで1学級、19人からは2学級というふうに確実に増えるのですが、通級はそういう人的な基準がありませんので、例えば十数名の子どもを通級で1人で担当しなければならないとか、そういうようなことが現実に起こっているわけなのです。

細かな話ははしよるのですが、結局、学校の中でどのようにそういう人的な条件を作っていくかというのが、これから中教審で議論がさらに進んでいくのだとは思いますが、先ほど来お話にありましたようなスクールソーシャルワーカーであるとか、確かにそういう立場の方が、行政的に位置付くと非常にいいだろうとは思いますが、では今すでにいる、例えばスクールカウンセラーをどうするのですか。

あるいは心の教室相談員という形で、両方とも非常に多額の文部省の予算を使っているわけなのですが、そのような人的なもので先ほど吉藤先生が、前任校で専科はいらないから、そういうフリーの立場で動ける人を増やしたいというようなお話がありました、それと同じように国レベルでどのように学校教育に人を配置していくということを、その辺のことからきちんと行政的には、先ほど道教委というお話があったのですが、国に対してもその辺を求めていくということが大事なのではないかと思ひますし、教員養成ということと言ひますと、更新制ということが非常に話題になっていて、先ほど来、勉強が大事だということも繰り返し話題になっていまして、私も本当にそう感じています。

更新がどういふふうになっていくか分かりませんが、リフレッシュする時間と言ひますか、勉強をきちんとできる時間。例えば、何かの本で読んだのですが7年間で1つの任期と、1年間勉強をして次の任期に備えるみたいな、そこで更新していくといふような、そういうシステムを取っている地域も外国にあるといふことを本で読んだことがあるのですが、それぐらひの時間的、空間的な余裕があつて、子どもの一人一人に対していくといふ、そういう仕事をできる条件といふものを作つていって、そこで私たちがもっといい仕事したい。

一人一人に目を向けて、先ほどインクルージョンと言ひましたのは、それだけ言つても何か分かつただけなと思ひのですが、結局そのカリキュラムに合わなひ子を分けてきたのが、今までの日本の教育だと思ひのです。いわゆる通常の教育のカリキュラムに合わなひ子どもたちを別の場所で教育をすると、より効率がいいといふことで来ていたと思ひのですが、これからは一人一人に合わせたカリキュラムを、いろいろな場で考へて作つていくといふことなのではないかといふふう思ひています。

ですから、そういう意味で、今日4人の皆さんがお話しされたことは、私も非常に刺激になりまして、一人一人に合つたことをまた自分の持ち場に帰りながら考へて、取り組んでいきたいと思ひています。感想と意見とごちゃごちゃになって申し訳なかつたのですが、ありがとうございました。(拍手)

(田中) ありがとうございます。本当に申し訳ございません。時間の配分が悪く予定の時間をオーバーしてしまいましたことを進行としてはおわびいたします。今回は「特別支援教育と地域支援プログラムの展開」研究プロジェクトの一環として、このようなシンポジウムを開かせていただきました。

これが、今後どんなふうに継続していくのか、またどういう形になっていくのかというのは、まだ我々としても見えていないわけですが、その中で、今回、特別支援教育を具体化するためにという大きなテーマの中で、シンポジストの4人の方には本当に短い時間でご迷惑をお掛けしたと思います。

何人かの方がおっしゃっていたように、特別支援教育という言葉はもう本当に氾濫しておりまして、さまざまなところで、さまざまな研修会、さまざまな説明会が行われております。その中で納得のいくときもあれば、非常に暗い気持ちで帰るというようなところもあり、でき得ればだいたいどのような話をしてくれるだろうというふうに想定できる人を集めたつもりです、それがこのシンポジストの4人です。

私の思惑以上の間違った展開をしてしまうと、私も收拾が利かなくなるというような思いがありましたので、大筋納得のいく話をしていただけるだろうという4人をお呼びしたということです。特に地域偏重のことなど、そこまでの配慮が足りなかったという点については、何人かの札幌の先生方が今、短い時間でまとめてくださったように、次回は大都市型のシンポジウムというような形での展開というのが、期待できるというのを3人の先生のお話を伺って、またNPOの方々のお話を伺って痛感しました。

それと今回おわびしなければならないのは、シンポジストの中に当事者、あるいは親御さんを含めなかったという点です。これも非常に悩んだ末に、今回は見送らせていただきました。実際であれば一番苦しんでいるのは親であり、そしてもっと苦しんでいるのは本人であるというようなことを抜きに、この話は進めてはいけないというふうに思っています。

自らの問題を自らが抱えているテーマを自らが知るということは、とても大事なはずですが、残念ながら我々自身がまだそのことについて受け止めるだけの時間とセッティング、企画ができなかったということです。これも次回もし機会をいただければ、そういう方に登壇していただきたいというふうに思っています。そういった意味では4人の方は本当にありがとうございました。(拍手)

また青木先生と坪井先生には、非常に短い時間できちんと打ち合わせをすることもなく、本当にA4の紙切れの半分ぐらいの文字で、こんなことをやりたいのですがお願いしますみたいなことで、休日でご自身のご研究もある時間を朝から割いていただきまして、本当にありがとうございました。

私は、来てまだ間もない人間なので、よく内情が分かっていたわけですが、青木先生、坪井先生のお話を伺いまして、いろいろなところで連絡、連携というものが取れるものだというふうにあらためて痛感いたしました。今後ともまたいろいろとご指導なり、ご意見をいただければと思っています。本当にありがとうございました。(拍手)

週の中の休日ということで、本当であれば家でのんびりしたり、たまった洗濯物でも片付けたいというふうに、これは私の個人的な問題ですが、そんなふうに考えるこの時間を、朝からこの時間までお付き合いくださいまして、また予想以上に活発なご討議をしていただき、さまざまご提案をしていただきましたことを感謝いたします。

医療のことをちらっと触れましたが、私の考えは、特別支援教育の王道に医療を置いてはいけないということです。今回、LD、AD/HD、高機能自閉症等、この3つを特別支援教育の名前に載せたということ自体、僕は大事件だと思っておりますし、教育の中に医療言葉を載せる意味というものを、もう少し僕は検討していただきたかったというのが医療サイドの考えであります。医療の世界は医療の世界で説明をするが、教育の現場はこれを使わずに説明できるはずだというふうに、私はいつも思っております。

ただ、情報として医療の側面的なアシストが必要だということも、これもまた事実ですので、札幌には私以外にも静療院、あるいは長沼先生、あるいは氏家クリニックと、さまざまな専門の先生がおいでです、あとはもう相性の問題だと思います。どの先生がいい悪いではなくて、会った瞬間にびびっと来たらびびっと来たということで、びびっと来なければきびすを返すというような潔さも大事だと思います。この辺は内田さんが言うてくださったように利用するということが、活用するということが、

ひるがえれば特別支援教育も法が下りてきた、枠が下りてきたのではなく、これをどう活用するか、どう利用するかであって、この教育が下りる前からすでにさまざまな裏の手を使って活用してきた人たちがいるということも、今日のお話の中では分かっていたのではないかと思います。どのようにそれを悪用ではなくて、いいように展開するかということが、本当の意味での手腕ではないかというふうに思っております。

後半の方でいろいろと出てきたのですが、私は最終的に人と人がつながるネットワークという、非常に聞こえのよい言葉で終わるのではなく、具体化する必要があると思っております。取りあえず1つだけ具体化するのには、人と人が異職種で向き合ったときに、お互いの立場を尊重して、ご苦労さま、大変だねというふうに声を掛けるというところからだと思います。何でやっていないのだとか、どうしようもないぞというようなところからでは、坪井先生や青木先生もご指摘いただいたように、信頼と協力関係というのは結ばれない。そこからではないとシステムは作動しないだろうというふうに思っております。

今回の企画については、室橋先生のご尽力をいただきました。それと室橋先生のゼミの院生も含めて、たくさんの方々に協力をしていただきまして、こういった受付やマイクの準備からすべておんぶに抱っこというようなことでした。本当に院生の方にはお忙しいところありがとうございました。これでもうおわびをすることがないかな。あとは時間が過ぎてしまいましたことを深くおわびをして終了いたしたいと思っております。6人の方々に拍手でお送りして、幕を閉じたいと思っております。みなさん、どうもありがとうございました。(拍手)

2.1.1. 第1回シンポジウムの解説

「特別支援教育を具体化するために ～人・地域・ネットワーク形成～」について

教育臨床講座（臨床教育学分野）

田中康雄

2004年、11月23日、北大文系合同教育研究棟で、「特別支援教育を具体化するために ～人・地域・ネットワーク形成～」というタイトルでシンポジウムが開かれた。

これは、北大教育学部の2004年度研究プロジェクトのひとつである「特別支援教育と地域支援プログラムの展開」の活動計画の一環である。「特別支援教育を前にして、ひと、地域、そしてネットワークを考えるシンポジウム」という大テーマで三回のシンポジウムを企画しており、そのスタートとして開催したものである。

会場には、保育、教育関係者のほかに、家族と思われる方々も多数参加されており、その熱気は、後半の活発な議論に結実したように思われる。

吉藤氏の報告は、多くの子どもたちを学校教育の現場で見続けて、関与し続けた人の叫びであり、願いであろう。障害を中心に据えるのではなく、常に人をまんなかにおいて、人について語る、考えるという手法を忘れない氏の面目躍如である。

氏の報告のなかでは、実際に校内で支援活動を行う時に必要な「事態の共有」へ大きく力を注いだ点に注目したい。ヒューマンエラーを考えると、個々の価値観や危機感の温度差は大きい。特にそれは、両極端な見解を生みやすい。安易な方向に流れるとそれぞれの覚醒レベルは向上せず不注意を生む。強固な方向に向かうと過覚醒状態となり、結果注意継続が困難となりミスを生む。解決方法は、事態の共有であり、合意した対策の建立である。氏はまさにそこに大きくエネルギーを注ぐ。コーディネーターとしての養護教諭の役割の一つとしても注目すべきことであろう。

北川氏の報告は、あたかも偶然性の積み重なりというような印象を持たれるかもしれないが、彼の日常を知るものからすると、ひじょうに緻密かつ繊細な思いと、ブルドーザーのような機動力に支えられていることを強調しておきたい。

宮沢賢治のように、東西南北に足を運ぶ、思いを馳せる。この活力が求心力となり、人が彼の周囲に集まるのであろう。子どもたちは、彼を「キタサン」と呼ぶという。教師という立場は、学校にいて、教室で向き合うだけで自明であろう。しかし、そこに生じている関係性は、人と人の対等な、そして真剣な対峙である。キタサンと呼ばせること（あるいは先生と呼びなおさせないこと）は、自己との対峙という点において、氏にもある意味大きな負荷を与えているはずであろう。それでも動く氏は、おそらく「ほっておけない」という思いに突き動かされる臨床の心の持ち主であるからだろう。

内田氏は、常に限界設定を十分（禁欲的）に行うなかで、継続的かつ丁寧な支援を心がけている。医療同様に、氏の活動範囲は非日常的な場所（児童相談所）である。しかも、訪問されること自体に、なんらかの負荷がかかるという場所で勤務しているわけである。吉藤氏や北川氏との大きな違いは、こうした出会いの日常性からの逸脱である。

氏は、そのなかで、常に逡巡している。事例を挙げつつもそこで述べられているのは、常に氏の

戸惑いと後悔の気持ちである。

反射的に考えるのではなく、建設的に思考する、大切なことは批判者になるのではなく、ではどうしたらという学習者になることである。その意味で氏は常に自問自答のなかで豊かな学習をしていることになる。常に現状に疑いのまなざしを「批判者」ではなく「学習者」として持ち続け、常に「他者」に対する謙虚な疑問を持ち続けるという点において、市井の哲学者とも思われる。それらは、事例に対する氏の姿勢から読み取っていただける幸いである。

内田氏が哲学者であるとする、最後の佐々木氏は市井の政治家であろうと思う。熱情ある、誠意あふれた対応は、常に見事であり、身を粉にして働く姿は、殉教者的でもある。シンポジウムでも強調していたが、常に地域に根を下ろしての実直な活動には頭が下がる。

氏が引用した伊藤則博先生の言葉、「障害を持つ人が家庭や地域を離れて特別に造られた施設や学校で生活するのではなく、生まれたその地域で家族や住民とともに過ごし教育を受け、可能な就労をして、充実した生涯を送ることを支援する」ことを生涯をかけて実践していることになる。

選ばれし人たちではなく、自ら足を運ぶ必要性に自らを突き動かした面々である。しかしだからこそ、意味のある活動になっていると信じたい。

午後の討論は、初回にも関わらず多くの関係者の参加と関心と呼んだ。時間を超越した議論が会場を往復したように思われる。

その成果は記録を読まれて、またいろいろと考えを巡らしてほしいと思う。

会場の関心の高さとお呼びしたシンポジストの方々から連想したエピソードを最後に記す。

「愛の反対はなにか」と問われたときに、ある人が「憎しみでしょうか」と答え時、ある人は「愛も憎しみも相手の存在を認めて初めてわいてくる感情であるから、愛の反対は『無関心』でしょう」と述べた。その人こそ、マザーテレサである。

あの会場には、その意味で紛れもなく愛と関心があった。

2.1.2. 地域のあり方、支援のあり方

発達障害をもつ子どもたちの親の会ならびに支援ネットワークの形成過程

－北陸地方の場合－

教育臨床講座（障害児臨床心理学分野）

室 橋 春 光

1. はじめに

日本において発達障害が注目を浴び始めたのは、ここ10年ほどのことである。当初は、学習障害のある子どもたちの、学校教育における問題として浮かびあがってきた。日本においては、学習障害は特殊教育の範疇では扱われてこなかったし、通常の教育の中では無視されてきたといえる。学習障害という「障害」は従来、特殊教育が対象としてきた盲・聾・肢体不自由・病弱・虚弱・知的障害といった「障害」とどのように共通する面を有し、どのように異なるのか。なぜ、学習障害が近年注目されるようになったのか。学校教育において何が問題となるのか。学習障害の問題は、そのこととどのようにかかわるのか。これらの問いは、教育の領域にとどまらない問題を含んでいる。社会は「教育」という事象をどのように位置づけようとしているのか。そして、「障害」とは何か、社会は「障害」をどのように理解し、いかに受容しようとしているのか。

本稿では、発達障害、特に近年、軽度発達障害とよばれるようになった、「学習障害」「注意欠陥/多動性障害」「高機能自閉症/アスペルガー障害」のある子ども及びその親たちを対象とした自助活動・支援活動について、一地方における展開過程としてみていきたい。そして、地域連携のための活動が開始され展開された過程を追い、検討を試みたい。

軽度発達障害についての明確な定義はないが、杉山（2000）は、「機能的な障害そのものは軽度である発達障害に属するのは、高機能広汎性障害、注意欠陥多動性障害、学習障害、協調性運動障害、軽度知的障害などである」としている。そして、健常児との間に連続性があり、臨床像が著しく変化するること、教育的に適切な対応をされてこなかったこと、二次的に情緒的、精神科的な問題を併発しやすいことなどを問題としてあげている。従来から障害児教育の対象となってきた知的障害や自閉症（重度・中度）とは教育的対応では異なる面があり、基本的には通常教育内で対処すべきであるとされる。

2. 国内外における発達障害への取り組みの経緯

「学習障害 Learning Disability」という名称は、1963年のS.Kirkの提唱に始まる（清水,2004）。アメリカでは当時、知的機能は低くないのに読み・書き・算数などの習得が困難である子どもたちが注目されるようになり、教育上の問題として学習障害が現れた。その後、アメリカでは、障害児に関する全米委員会（NACHC）で学習障害の定義が提案され、1970年代から学習障害への取り組みが本格化した。1975年には、全障害児教育法（公法94-142）が制定され、学習障害を含めたさまざまな障害をもつ子どもたちに対する教育についての取り決めが本格的に行われた。1990年には、障害をもつ個人のための教育に関する法律（IDEA）が制定されることにより全障害児教育法が受け継

がれ、さらに継続して改定されている。

イギリスでは、1978年に障害児童・青少年の教育問題に関する政府委員会の答申が提出された。これが、障害児教育にとって画期的な考え方を提案したと評価されるWarnock報告である。この答申に応じて、政府は「教育における特別ニーズ」(Special Needs in Education) 白書を発表した。その後、イギリスでは、特別な教育的ニーズをもつ子どもたちに対する教育が行われることになった。学習の困難を抱えている子どもたちに合った教育を、より広く提供しようとしたものである。イギリスでも1981年には教育法が制定され、障害をもつ子どもたちも含めた教育に関する取り決めが行われた。2001年には、特別な教育的ニーズをもつ障害者ための法律 (SENDA) が制定され、高等教育機関においても、障害をもつ学生への対応を求められることになった。

日本においては、アメリカの動きに対応して1960-70年代から研究が細々と始まっていた。しかし、教育行政が本格的に学習障害に対する取組みを始めたのは、1990年代にはいつからであった。1980年代の後半から、各地に学習障害児親の会が設立されるようになり、行政への要請が行われるようになった。軽度発達障害のある子どもたちは、通常教育を担当する教員にとっては、対応しきれない子どもたちであり、より重度の障害をもつ子どもたちを担当する養護学校教員からは、普通に対応できる子どもたちであるとみられてきた。この子どもたちが、ようやく、日本においても教育的対応を検討されることになった。

3. 親の会の成立過程

上述のような経緯の中で取組みが始まり (上野, 2000)、次のような展開があった。

1990年 全国LD親の会設立

1992年 日本LD学会設立

LDに関する調査研究協力者会議の発足

1994年 全国親の会連絡会が親の手記集「ぼくたちだって輝いていたい」を発行

1995年 「学習障害児に対する指導について (中間報告)」の発表

1996年 LD児に対する巡回相談事業開始

文部省がLD等の理解に向けてのリーフレットを作成し配布

全国親の会がハンドブック「きにといっしょに」を発行

1997年 文部省がLD等の理解に向けての指導冊子を作成し配布

1999年 「学習障害児に対する指導について (報告)」の発表

2000年 LDの判断・実態把握体制に関する新規モデル事業の開始

2001年 「21世紀の特殊教育の在り方について (最終報告)」の発表

AD/HD・高機能自閉症に関する調査研究協力者会議の発足

2003年 「今後の特別支援教育の在り方について (最終報告)」の発表

2004年 「小中学校におけるLD (学習障害) AD/HD (注意欠陥/多動性障害)

高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン (試案)」

発表

親の会の資料によると、愛知、東京、静岡、埼玉、北海道では、全国に先駆けて1990年以前にLD

のある子どもをもつ親たちが親の会を結成し、行政に働きかける活動を行っていた。その流れは、1990年の全国親の会結成に集結する。1990年に結成された親の会は12にのぼった。しかし、地方にあっては、親の会の結成にまでは至っていないところも多かった。1992年から1999年にかけて、36の親の会が結成された。小さな県で複数の親グループが結成されていたところでは、一本化の調整が困難な場合もあったと思われる。いったんは準備会が結成されながら、実質的には消滅したところもあったようである。

全国親の会では、各地の情報交換が行われ、後発地の親の会が先進地における親の会の活動報告を聞いて、参考にしながら対応の幅を広げていった。全国親の会の設立当時は、文部省が学習障害という名称を正式には認めておらず、地方教育委員会に相談・陳情にいても、協力できないと言われたところが多かったようである。

親の会の役割について、親自身の立場からはどのように考えられてきたのであろうか。当時の全国LD親の会会長の山田康裕氏は次のように述べている（山田、1996）。

「私達親は、我が子が他の子どもとどこか違うと気付いた時より、不安になり、『どうしてうちの子が?』と、とても不幸な気持ちに陥ります。初期のショックを乗り越えると、次に『何をしてあげればいいのか?』と、東奔西走して藁をも掴む気持ちになり、その孤独感や他の人に理解してもらえない苦しみを分かち合える場として親の会に出会うのです。『うちの子だけじゃなかった』、『やっと本音で話しができる人に会えた』と長い間のモヤモヤを晴らし、安心して語り合っています。

子育ての経験談や家庭内での対応の仕方、学校の先生に我が子の困難さを説明する事、援助の求め方等々、試行錯誤を繰り返してきた親同士ならではの情報が溢れているはずです。LDは環境的要因等で生じる後天的なものではない、と言われてはいますが、二次的な症状の中には、親自身の外的な価値観の押しつけが原因となっていることも多く、ともすれば軽度の障害といわれ、音通の枠と考えたい親も多く、そのため方向違いや過大な期待を押しつけたり、子どもの思いとは正反対な援助をして過保護にしてしまったりします。LDを正しく療育するために、親がまずLDを正しく理解し、柔軟な考えを持ち、子どもと共に育っていく事の大切さを学び、そしてLD本人の、また親にとって豊かな人生とは何かを実践していく場が親の会なのかもしれません。

子どもの年齢、タイプ、目標の違いにより、それぞれの持っている問題は違って当然です。現在の我が子にとって一番大切な事は何か、同じ悩みを持つ親同士が小さなグループを作り、友達作り、進学情報収集、一緒に電車を見に行くなど、他の人が用意してくれた行事に参加するだけでなく、親同士、子ども同士が準備をしていく中で、話し合い、共同で買い物をしてひとつの行事を終えた時の達成感、ただ参加しただけの人の10倍はあるのではないのでしょうか。親の会は子どものより良い生活を目指し、ただ楽しければ良いという事ではなく、失敗・成功よりもその途中においてがんばって、またはけんかをしながらもやり遂げた事が大切なのではないですか。

さらに親の会の役割のひとつとして、「LD」の名称は広まったものの、その適切な対応となると、学校などで良く見られる方向違いのがんばれだったり、多くの誤解と偏見が存在しています。そこで、「きみといっしょに」（LDの親のハンドブック）のQ&Aを利用して、学校や県・市町村に親が働きかけていかななくてはこの子達の環境は少しも変わっていかないのです。

最近では、多くの県でこわごわ要求してみたら、思ったよりすんなり受け入れられた、という報

告が各地で聞かれ始めました。時代は変わってきています。平成11年には現在の教育制度は大きく変化し、LDなどの特色のある子どもひとりひとりを見つめていこう、という方針に変わっていくのです。ですから、北陸各県でも、全国的レベルに乗り遅れまいと多くの実験的ケースを受け入れ始めているはずで

しかし、LDの中学卒業後の進路となると配慮は望むべくもなく、多少背伸びをして通常の枠に入るか、知的障害者として困難さを認めた上で生きるかと大きな判断を求められます。どちらにしても平坦な道ではなく、ストレスもたまります。それを減らしてくれるのが友達です。この年齢になると親との交わりを極端にイヤがります。そこで、同じ様な困難さを持った友達同士が冗談を言ったり、旅行などが出来る「たまり場」創りも親の会の役割ではないでしょうか。このたまり場には親が直接関与する事は避け、若いボランティアの援助が必要でしょう。

さらに就職し、30歳ぐらいになれば、独立してひとりで生活する事も考えなければなりません。しかし、ひとりでアパートに暮らせるでしょうか？多分私の子どもなら、すぐには無理でしょう。ではどうするかと言うと、「生活ホーム」とか「グループホーム」という同じ様な困難さを持った者同士が公的な援助とケースワーカーのアドバイスを受けながら、共同生活を街の中のアパートで始める事です。だいたい4人がグループを組みますが、出来る事出来ない事が同じ様でないという問題が起き易いのだそうです。ではそんな4人がすぐに集まるでしょうか、親同士も運命共同体みたいなものですから難しいのです。でも昔から親の会で一緒に遊んできた関係なら、親も子ども安心できるのではないですか。つまり、小さな時から友達として一緒に積み上げていく事が将来の安定につながるのです。その後も近くに相談者がいれば、ひとりで下宿する。恋をする。結婚し、子どもを持つ。ひどい二次障害がなければ、親亡き後も生活できるのではないのでしょうか。永い目で見た時の親の会の役割になりそうです。」

このように、親自身からみた親の会の役割として、①親が相互に理解し受容しあうことにより、LDをもつ子どもの親としての位置づけを確認する場、②子どもにより適切な環境を与えるために、情報を取得するきっかけとなる場、③LDのある子どもの親として連帯しながら、行政に自分たちの子どもにあった対応を求めていくための話し合いをする場、④親の会に属する子どもたちのためにできることを相談する場、などがあげられよう。

さらに山田氏は、親の役割について、次のように述べている（山田、1996）。

「親の会の講演会や本などで勉強してきた親の多くが出来ない事のひとつとして、何をしたらいいか頭では分かっている、それを家庭の中で、時や場に応じて、訓練の意識を持って、どうトレーニングしていくかということです。

講演の内容と自分の子どもでは年齢やタイプはもちろん違うのですから、親がただまねをするのではなく、考えて、我が子用に作り換えてやってみることが大切なのです。例えば、講師がコンビニに行って昼食を買う、というトレーニングを示したら、年齢が小さければ、初めは「だいこん一本」と紙に書いて八百屋に行く、ことからだんだんとお金の計算も一人でする、などの様に親が無理なく仕向けていくのです。

年齢が高ければ、乗り物に乗って、複数の物を買に行くなどです。できた事への「ごほうび」

も大切に、品物をあげる。シールやポイントにして貯める。とにかく楽しい事を学びながら続ける事が大切です。さらに大切な事は「自分で決める」という経験を増やす事です。どんな服を着るか、駅名から料金を見つけて100円玉何個で足りるか、どの高校を選ぶか、自分で選んだのだからがんばって通う、作業で分からない時にちゃんと質問する、などにつながってくるのです。

LDにとって基本は家庭なのです。外でつらい事があっても自分の事を分かってくれる人が家にはいる、もしいかなかったらどんなに不安定な気持ちになるでしょう。

家の中ではお父さんとお母さんの話し合いがあるからこそお母さんが直接子どもにトレーニングをすることができるのです。そしてそのトレーニングが社会的に価値があるかないかを少し離れて、永い目で見ていなくてはいけないのはお父さんです。「お父さんあなたなら自分の子どもを部下として雇いますか?」「どういう子どもだったら部下としてかわいがれるのですか?」。あいさつやお礼が言えて、ちょっとした用事なら気軽に動いてくれる子どもなら、多少能力が低くてもかわいがるのではないですか。ではそのように自分の子どもを育てていきましょう。さもなければ、誰も雇ってくれないかもしれません。ついつい忘れがちな事として、LD児・者は自分で話す事も、表現する事もできるのです。しかし、外観上では困難さを持っている事が他の人には理解されにくいのです。そこで常に意識に置いておかななくてはならない事として、同年令の普通の人達はどんな洋服を着ているのか、どんな趣味を持っているのか、親との関係に異常さはないか、などのチェックが必要です。特に小学校高学年の子どもにべったりしている子離れできない母親は良く見かけます。子どもの発育に遅れや不安があるからといって、親も共に育っていかなくては、今度は親が子どもに新たな二次障害を作ってしまう事になるのです。

親もストレスが貯まると言った人がいましたが、本人の苦しさを考えたら少しぐらい周りの人ががまんをしたり、待ってあげる余裕を持ってみましょう。焦っても、怒ってもいい結果は生まれません。世の中の価値観などをもう一度見直して、親子で無理なく育っていきましょう。」

育児における親の基本的役割は、障害の有無にかかわらず同じであるといえるかもしれない。しかしながら、日常生活面で配慮をしなければならないことが多数あること、学校や地域などとのあいだで難問が生じ苦しい決断をせまられることが多々あることの違いは大きい。

自分の子どもの特性について、母親が幼児期・児童期を通して理解を深めていくのに対し、父親は児童期・青年期までかかることもある。まわりの子どもと比べて行動特性の異なる面の目立つ我が子を理解し受容することが、親の重要な課題である。まさに「親になる」という課題である。親の会は、そのような面においても意義のある役割を果たす。特に父親の参加が親の会の活動力を高め、またそのことが父親自身の発達を促す。自分以外の子どもたちを、親の会活動を通してみていくことが、自分の子どもの子育てに参考になる。学識経験者を呼んで講演を依頼し、学習障害や育児に関する知識を高めることが親の会の役割のひとつであるが、親たちが支え合って子育てをすることは親の会の重要な役割である。

4. 北陸地方における親の会の成立過程と活動

福井県では1993年、富山県と石川県では、1994年に親の会が結成された。富山県では前年に親17名、助言者7名で設立の準備が始められた。当時は、親も学習障害について十分に理解していたわ

けではなく、多動を示す子、他児と遊べない子、言語発達に遅れを示す子、不器用さが目立つ子どもなどとして教育関係機関や医療機関に相談・診察を求めている。富山県には肢体不自由児を診察する医療機関があり、そこを紹介され、また評判を聞いて診察に訪れた。

富山県では、1984年、高志通園センターが心身障害児総合通園施設として開設され、ここで感覚統合療法が実施された。当時は、「微細脳機能障害」という診断名があり、その中に学習障害に該当する子どもたちが含まれていた。このセンターに通園していた親たちが、主要メンバーとなって、親の会の準備会を結成した。親たちは、あちこちで開かれる関係のありそうな研究会や学会に参加して、子どもたちにかかわる情報を収集した。親の会をいち早く立ち上げた先発地に出向き、先輩の親たちの話を聞いた。

1994年2月には、朝日新聞東京厚生事業団主催による朝日福祉講演会「ぼくのことわかって」が開催された。この講演会の準備に大学関係者と親たちが協力を依頼され、実質的に親の会の初仕事となった。そして4月に設立総会を行い、富山においても親の会が始まることになった。

会の設立目的は「富山県に住む学習障害(LD)児・者およびその周辺の子どもたちが一人一人に適した教育を受け、就労し、自立していくことを援助すること」であり、活動内容としては、「親の勉強会(親同士の話し合い、情報収集、専門家を招いての講演会など)、遊びと学習の会(子ども同士、あるいは親子ぐるみでの親睦活動や学習活動など)、会報・文集等の発行(例会や活動の記録、会員相互の情報交換など)、教育・医療・福祉・行政等の関係機関に広く理解を求め、LD児等の待遇改善のための行動をする、など」とされた。親の会の名称は、「ゆうの会」で、「ゆう」には、友、優、勇、悠、遊、言う、結、You、などさまざまな願いがこめられていた。毎月、例会と勉強会を交互に行い、また子どもを対象にグループ活動(遊びの会)を行うことになった。野外でのレクリエーション、近隣施設を利用した陶芸教室や水泳教室、バーベキュー、サイクリング、カルタ大会などが企画された。

1995年には、石川県の「PAL」、福井県の「たんぽぽの会」とともに北陸ブロック交流会を立ち上げ、定期的に会合を持つのみでなく、毎年交代で合同キャンプを行ってきた。1995年には、富山大学障害児心理研究室によるスポーツ教室が始まった。また民間による遊びの教室も始められた。1996年には、学習面での支援を行う土曜教室も開始された。

5. 地方における親の会の役割

前述した親の会の役割は、都市部でも地方部でも基本的に変わりはないと考えられる。しかし、地方部では「障害」に対する社会的対応は、都市部とは異なる面を有しており、障害のある子どもを抱える親たちが語り合う場をもつことは、親の精神的健康を保つという意義を特に重要なものにする。親の会の名のはいった封筒を家庭に送付することが、「障害児」の存在を近隣に知られることにつながると懸念され、拒否される場合もある。親の会に入会すること自体が、「障害児」の存在を公表する覚悟につながることもある。このような地方における親の、社会と関わる上での不安は、「学習障害」のような「軽度発達障害」において顕著であるといえる。

北陸地方は、共稼ぎ率の高い地域でもある。平成12年度国勢調査(総務省, 2000)によれば、福井県が1位、富山県が3位である。石川県も全国平均を上回っている。また共稼ぎが多いこと、三世同居率が高いこととは、密接に関連している。北陸地域において育児期にある女性の労働力率

は、他地域に比べて高い傾向にある（厚生労働省，2000）。子どもたちは、祖父母に育てられている面が強いのである。「学習障害」は「障害」として認知されにくく、祖父母からは兄弟姉妹と比較して出来の悪い子という評価を与えられやすい。一方、母親は、就労のために祖父母に育児を任せるという後めたさを感じるが、「発達障害」ではなおさらである。他方で、育児観の世代間差の上に、「発達障害」を祖父母に理解してもらうことの困難さに直面する。「障害」を家族で共有することの困難さがあり、母親の精神的負担は大きい。しかしながら、就労する母親にとっては、子どもから一時的に離れる時間をもてるという面もある。このことは母親の精神的健康に寄与し、ひいては母子関係の改善に結びつくこともある。

親の会設立当時の主要メンバーの子どもたちは、小中学生であった。しかし、5－6年後には子どもたちは中高生、専門学校生、大学生になっている。親の願いは子どもの幸せであり、当然のことながら子どもの発達に合わせて親の希望は変わってくる。親の会活動の難しさは、会員が様々な年齢の子どもをもつ親からなるということにある。それぞれに親の会への要望があり、役員はそれをうまくまとめていかねばならない。毎月の会の活動や運営にも工夫が求められる。幼児から大学生までの子どもを持つ親の要求をカバーする幅広い体制で応えなければならない。これは、仕事をもつ母親にとっては大変な苦勞となる。家事・育児・仕事の上に、さらに親の会の運営に携わらなければならない。家族の協力なしには親の会は成り立たない。そのような会の役員になることを、誰も積極的には希望しない。

さらに、親の子育てに関する価値観の世代間ギャップも存在する。LD児を抱える三世同居では、このことが家族内関係をさらに難しいものにする。先輩の親たちがよかれと思って助言することも、若い親たちには必ずしも受け容れられないものだったりもする。

親の会の役割のうち、情報収集については、近年のインターネットの普及により、親の会を経由する必要性が薄れているという面もある。またインターネット上でいわゆる書き込みのできる場所が増え、自らも容易にそのような場所を作り出すこともできるようになってきた。特に若い世代にとって、会務の面倒さがなく、自分の意見を聞いてもらえるインターネットの存在は、親の会の意義すらも変えようとしている面もある。

6. 土曜教室の開始とその役割

土曜教室は、1980年代の後半から、東京学芸大学の上野一彦教授の研究室において、土曜日の午後に学習障害のある子どもたちが集まってきて学習面や社会面での支援を受ける目的で開催されていた。その後全国各地で、多くは親の会と地元大学の連携により、同様の土曜教室が開かれるようになっていった。

富山大学障害児心理研究室によるスポーツ教室は、親の会の要請に応じて開始された。当初は、LDに関心をもつ数名の学生とともに、親の会の遊び活動のお手伝いをするかたちで開始された。スポーツ教室という形態は、福井県で既に小児療育センター、大学、特殊教育センター、養護学校などの関係者が集まって行われていた。富山大学では、これを参考に開始した。

不器用な子どもたちが多く、学校の体育の授業ではいわゆるお客さんになるのだが、彼らも体を動かすことは好きであることが多い。しかし、役割を与えられることが少ないのである。スポーツ教室では、人数が少ないこともあり、誰もが何かの役割をすることになる。またそのように支援す

る。不器用でありながら、学校では与えられず認められない役割を、スポーツ教室ではこの子どもたちが担う。スポーツを体験する喜び、いわば波長の合う仲間と共にプレーする安心感、お兄さん・お姉さんの役割をとる学生たちと共に過ごす時間は、学校空間では味わうことが困難であろう。種目は、キックベース、ティーボール、バスケットボール、ビーチバレーボールなどであり、1年ずつ継続して指導した。

スポーツのみでなく、学習面でも支援してほしいという親の要請から、スポーツ教室を拡大するかたちで土曜教室が始まった。学生だけでは人数が不足すると予想されたことから大学外の社会人の方を学習ボランティアとして募集した。親の希望と本人の現状をチェックし、個々に学習計画を立て、担当する人たちが毎回の内容を工夫していった。主に午前が子どもの苦手とする面を中心とした個別学習、午後がゲーム、スポーツなどの集団活動であった。学習支援準備の相談をする時間を外部のボランティアの人たちと共有することが難しく、次第に学生中心に運営することになっていった。

個別学習では、愛知県の見晴台学園の活動を参考にして卒業論文作成にも取り組んだ。子どもたち一人一人と相談してテーマを決め、数ヶ月かけて調べ、画用紙にまとめていった。学期末には、卒論発表会を開き、お母さんたちにも見てもらった。夏休みにはキャンプ、冬休みにはクリスマス会といった行事も盛り込まれた。またカラオケ大会といった行事もソーシャルスキルトレーニングの一環として盛り込まれた。

パソコン教室も、情報教育課程の教員と学生の支援を受けて2年間行った。情報教育課程の実習用パソコンを使わせていただき、一人一台使用することができた。自分の名札を作り自己紹介ページを作ることから始めた。こどもたちの作品を集めたコンピュータ美術館を作ったり、インターネット体験も行った。土曜教室で行った動物園見学のレポートをパソコンのワープロソフトを利用して、デジカメの写真を貼り付けたりしながら、作成した。またオリジナルクリスマスカードを作って、コンテストを開いたりした。子どもたちには、パソコンが得意な子どもが多く、自由に絵を描かせると、学生たちが感心するような作品が生まれることも少なくなかった。

これらの教室活動は、学生の支援の基に始めて可能となった。学生の所属は、主に教育学部の養護学校教員養成課程であり、彼らのほとんどは教員採用後、養護学校勤務となるため、学習障害をもつ子どもたちとかかわることは、卒業後の仕事には直結しないようにみえたであろう。しかしこの子どもたちとかかわることに意義を見いだした学生たちは、積極的に彼らとかかわることを始めた。附属養護学校での見学や実習を経ている学生たちは、最初から子どもたちとうまくかかわりをもっていった。障害児教育を専攻しており、子どもに合わせた教材が時間をかけて創作され、その多くが有効に作用した。子どもたちにとって、学生たちはお兄さんお姉さんの存在であり、年齢的に身近な者が支援するという役割は大きかった。そのような中で子どもたちは、いわば波長のあう者たちどうしであることを直感的に確認し、お兄さん、お姉さんがかかわってくれる土曜教室のひとつの居場所を求めて、土曜日ごとに親の車で、電車で、バスで大学にやってきた。子どもによっては、一人で通えることも課題となった。

学生は4-7名、参加する子どもは小中学生と高校生15-20名くらいであった。したがって学生一人当たり4、5名から2、3名の子どもたちを担当した。彼らは主に卒業論文研究として、事例研究や教室運営実践を行った。しかし子ども全員の指導プランを検討する時間は十分になく、また

支援の力量がついてきた頃に卒業を迎えるため、学生間での知識・技術の伝達が十分に行われなかった。

現在、特別支援教育が始まろうとしているが、中でも養護学校はセンター的役割をとることを求められている。しかし、各県にある教育大学あるいは教育学部に設置されているほとんどの養護学校教員を養成する課程では、知的障害を主とした教育カリキュラムを組んでおり、そこには発達障害を十分に講義する余裕はない。また教育実習先もほとんど知的障害養護学校である。したがって、養護学校教員が特別支援教育のセンター的役割を求められても、いわゆる軽度発達障害をもつ子どもたちへの対応には、とまどいもまた大きいのである（吉利、太田、小谷、2005）。

土曜教室に参加した学生たちは、学部教育の中で知的障害について学ぶとともに、ボランティア行動も含めて種々の発達障害をもつ子どもたちとかわる中で、いろいろな特性のある子どもたちの存在を知り、対応の多様さを学んでいく。このような活動が、特別支援教育コーディネーターを担う教員の資質を形成するきっかけとなるであろう。

7. 富山LDネットワークの設立

学習障害の理解促進ならびにLD児援助が円滑に行われるよう関係者の連絡・調整を行うことを目的として、LDネットワーク設立準備会が1996年7月に立ち上げられた。発案者は、学習障害をもつ子どもたちにもかわる行政機関関係者で、親の会のメンバーでもあり、いちはやくネットワークの重要性を指摘していた。参加者は、大学、医療福祉専門学校、肢体不自由児通園センター、高校教諭、児童相談所、総合教育センター、精神保健センター、中学教諭、少年鑑別所などに勤務する学習障害に関心をもつ人たち、および親の会のメンバーなど26名であった。月1回集まって、情報交換や交代で話題提供等を行った。当時は、学習障害に関心を持つ者たちが集まって、情報交換をするというのが実情であった。1997年には同会主催で大阪教育大の竹田契一先生に来ていただき、「LD児の理解と教育」というテーマでLDシンポジウムを行った。月1回の例会では参加者数は少なかったが、学習障害をもつとみられる子どもたちにかかわる人々がいろいろな領域に存在することが確認され、相互に理解を深め、いろいろな場での子どもたちの実態を知ることについて役割を果たしてきた。しかし、田中（2001）が十勝地域において実践したような、ひとりの子どものためのネットワークの形成には至らなかった。そこには、求心力をもったキーパーソンの存在と個別的連携と相互連携をとるに可能にする土壌が必要となるのであろう。

教育・医療・福祉・労働・法務などの行政関係者が集まり、情報交換するとともに必要な連携を行うことの重要性は、繰り返し指摘されてきた（室橋、2005）。しかし、社会の関心が向けられない段階では、本来ならば行政的に必要な関係機関の担当者が集まるようなネットワークを設立することは極めて困難であった。行政機関の職員の学習障害に対する理解は不十分であり、また理解している職員がいても行政機関担当者としてそのようなネットワークに参加することは困難であったと思われる。関係する行政機関の担当者が一堂に会するようなネットワークが組織される可能性が出てきたのは、ここ数年のことであろう。特別支援教育の柱のひとつとして広域連携協議会を組織することがあげられ、行政的に議論され始めたことであろう（文部科学省、2002）。

8. まとめ

1990年代前半から始まった全国各地における親の会設立の動きは、ここ10年の教育行政における動きを大きく変えたといえる。2001年に出された21世紀に向けた特殊教育の在り方の検討報告書、さらにそれに続く特別支援教育の在り方の検討報告書の発表は、これまで行われてきた分離教育を建前とする特殊教育から教育的ニーズにあった教育支援をおこなう方向へと大きく変えるものとなった。都市部のみならず地方での親の会の動きが全国的なうねりを作り出した。親たちの全国レベルでのつながりが地方の親の会を支え、そのことが教育行政のありかたを変えさせることになったともいえる。そこには地方の活動を支えた行政機関の職員や大学などの関係者の存在もある。このような情勢が、いかに創り出されていったのか。市部、郡部と大都市部における学習障害をめぐる親の会活動や教育行政のありかたについて、さらに詳細に分析する必要があるだろう。そのことが、日本における障害観の分析にもつながりうるであろう。

しかし、子どもたちを取り巻く環境はこの10年でそう大きくは変わっていない。依然として学習に困難を持つ多くの子どもたちが、学びたい気持ちを持ちながらも勉強することにあえいでいる。その実態に関して、心理学的・教育学的・社会学的な分析と検討が進められなければならない。ある特性を有する「からだ」という構造と機能をもつ子どもたちが、日常活動をベースとして社会に参加する。その活動や参加が環境により制約や制限を受ける相互作用のメカニズムが解明されなければならない。

引用文献

- 上野 一彦 (2000) 学校教育におけるLD児の発見と対応—学習障害に関する調査研究協力者会議報告の意義と残された課題—, 学習障害 (LD) —研究と実践, 8 (2), 2—11.
- 学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議 (1999), 「学習障害児に対する指導について (報告)」.
- 厚生労働省 (1997) 平成9年版「働く女性の実情」
- 清水 貞夫 (2004) アメリカの軽度発達障害児教育—「無償の適切な教育」を保障—, クリエイツかもがわ, 京都.
- 杉山登志郎 (2000) 軽度発達障害, 発達障害研究, 21 (4) 241—251.
- 総務省 (2000) 国勢調査 (平成12年)
- 田中 康雄 (2001) AD/HDの明日に向かって. 星和書店 (東京).
- 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議 (2002) 「今後の特別支援教育の在り方について (最終報告)」.
- 室橋 春光 (2005) 特別支援教育について—地域連携の重要性と医療に期待されるもの—, 北海道公衆衛生学雑誌, 18 (2), 22—27.
- 文部科学省 (2004) 「小中学校におけるLD, AD/HD, 高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン (試案)」.
- 文部科学省中央教育審議会 (2004) 「特別支援教育を推進するための制度の在り方について (中間報告)」.

- 山田 康裕（1996）親の会の役割・親の役割－LD児を持つ親として－，北陸ブロック会・会報，No. 5.
- 吉利 宗久、太田 正己、小谷 裕実（2005）全国知的障害養護学校における「センター的機能」の実施状況と課題－「LD児等」に対する支援を中心に－，発達障害研究，26（4），279－288.

第2回

特別支援教育を前にして、ひと、地域、
そしてネットワークを考えるシンポジウム

特別支援教育を前にして、ひと、地域、そしてネットワークを考える
シンポジウム

特別支援教育と地域連携

～実践現場からの報告～

シンポジウム 1 (午前)

1. 幼児期から就学へ・その後の連携の試み
～特別支援教育を意識した、事例実践を通して～

田中 陸 (上富良野町 幼児ことばの教室 言語指導員)

2. 特別支援教育 石狩市の取り組み
三浦高行 (石狩市教育委員会 特別支援教育担当主査)

3. 地域連携の困難性について
田中康雄 (北海道大学大学院 教育学研究科教授)

シンポジウム 2 (午後)

- 「特別支援教育を具体化するために」 総合討論
田中 陸 三浦高行 田中康雄
間宮正幸 (教育臨床心理学G) 室橋春光 (特殊教育G)

2月12日 10時～3時

北海道大学学術交流会館

連絡先 北海道大学教育学研究科教育臨床講座 田中康雄

2.2. 第2回シンポジウム

『特別支援教育と地域連携～実践現場からの報告～』2005.2.12

第1回シンポジウムから3ヶ月もたってしまったが、2005年、2月12日の午前10時から無事第2回シンポジウムを開くことができた。

第1回同様、今回も企画者である田中の人脈による。

「特別支援教育と地域連携 ～実践現場からの報告～」というタイトルで、それぞれの立場による地域の取り組みが語られた。

ここでも、若干個人的なことを記しておく。

上富良野の田中さんは、ことばの教室に勤務している形になっているが、全国を縦横無尽に飛び回っている、勉強家である。ひじょうに活動力、機動力もあり、現在上富良野で親と当事者の会として、かみふらのAD/HD&LD懇話会代表もしている。ともかくスーパーウーマンである。

田中さんには、上富良野での地域実践を語ってもらった。医療機関や児童相談所と、中途半端に距離のある広大な地域において、どのような地域展開を図っていくのか、彼女のハイパワーをもってしても、課題は山積している。今回の途中経過から、次回も継続して経過を聴きたいと思っているのは私だけではないと思う。

石狩市教育委員会の三浦さんは、現在、市の特別支援教育担当主査である。行政職でありながら、非常に枠を超えた活動を精力的に行っている点は、田中さんと重なる部分である。

通称あんちゃんと呼ばせてもらい、仕事以上に飲み会でお世話になっている。彼のようなフットワークのよい、実行力のある人を主査に据え、地域展開を図ろうとしている教育委員会の見識に頭がさがる。先日あんちゃんの上司に会ったところ「改革の時には、彼のようなバイタリティーが必要不可欠なんだ」という返事が返ってきた。

あちこちで、ハイパーな方々が止まることなく、動き続けているということは、子どもに対して、教育に対するパラダイム展開が期待されているからだろうか。

田中さんは、発達臨床心理士を、三浦さんは先日特別支援教育支援士の資格を獲得されたことを付記しておく。

3番手の田中は、時間の帳尻をあわせるために、ずいぶんと省略した報告になってしまったことを、ここでお詫びしておく。この報告書では、そのあたりも含めて、別原稿で述べることにしている。

田中 康雄

シンポジウム1（午前）

（司会：田中） 鈴木先生、ごあいさつをお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

（鈴木） ただいま紹介していただきました北大の鈴木ですけれども、今、残念ながら研究科長の不在ということで、副研究科長の私がいさつせよということで、代理であいさつをさせていただきます。

私どもは北大の教育学部、それから教育学研究科は戦後の創立以来、特に辺境の地にあって、いわば社会の周辺あるいは最近の言葉に直すと社会的に排除されがちな人々を、あるいはそういった地域を主たるフィールドにして活動してきました。最近ではいろいろな、最近のそうした例えばホームレスでありますとか、最近私たちの取り組んでいます青年でありますとか、いろいろなそうしたような階層や地域を対象にしてやってきました。

このシンポジウムは前回、十勝を中心とした地域のネットワークということで進めさせていただきましたけれども、LD研究会、特に軽度発達障害の子どもたちを対象にした発達学習支援のネットワークをつくるという趣旨で前回は進めさせていただいたのですが、今回は先ほど田中先生が説明いただいたような形で進めさせていただくことになりました。

私たちでは今、学部、研究会を挙げて発達学習支援のネットワークづくりということを目指す総合的な研究を進めております。プロジェクトとしては、その一環でもあるわけでございます。これまでの研究でいろいろな課題が浮かび上がってきました。私なりに理解しますと、1つは生涯発達支援のいわば垂直的なネットワークです。

今日もお話がありますけれども就学前の子どもから就学、それから就学後、社会へ出て、いろいろな段階、もちろん学校間においてもいろいろなハードルがあって、そこがなかなか越えられない実態があるということで、発達支援というのを生涯にわたって子どものときからいろいろな段階を経て、生涯にわたる発達支援として考えなければいけないと考えています。とりわけ今回のテーマではそういう問題が1つの大きなテーマではないかと私は思います。

それからもう1つが、いわば水平的なネットワークをつくる。子ども1人の発達支援をするためにはいろいろな専門分野の人、他職種の専門分野の人が協力し合わないと発達支援というものはうまくいかないというようなことがはっきり出てきています。そういう意味での水平的なネットワークをどうつくるかというのが2つ目の課題であると思います。

それから3つ目に今回のテーマにも出てきますけれど、いわば地域総合ネットワークをつくるということが課題になるかと思っています。前回のシンポジウムでも単なる専門家だけではなくて、もちろんNPOだとかいろいろな団体で活動している人たち、それから地域住民のさまざまな活動、こういったものをつなげていって初めて発達支援ができるのだというようなことが問題になっていたと思います。

この発達支援の問題はコミュニティの力をベースにしながらか地域で総合的にネットワークをつくっていく中で初めて発達支援ができるのではないかと考えております。その間の私たちが進めているプロジェクトの中で、今言った3つくらいのことが浮かび上がってきたと思いますが、この問題をいわば理論的にも実践的にも最先端で取り組んでいくには特別支援教育というテーマではないかと

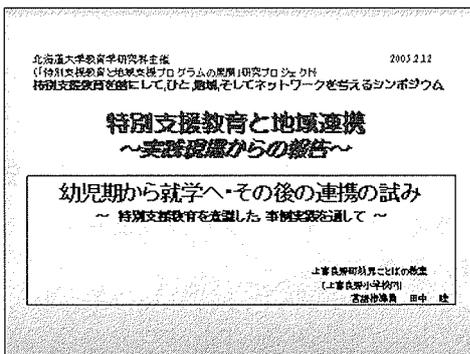
思います。

そういう意味で私どもは、非常に今日は期待して参加させていただくということでまいりました。今日は午前から午後にわたって長丁場になりますけれども、非常に重要なテーマ、政策的にもようやく制度づくりが始まったテーマでございますので、未来を切り開くような新しい展望がいろいろな形で提案されることを期待しております。では、与えられた時間、若干まだありますけれども、この辺で、あんまりあいさつが長くなってはいけませんので、皆さんの今日の活発なご議論に期待して、あいさつとさせていただきます。

(司会：田中) 先生、ありがとうございました。それではシンポジウムに入りたいと思います。最初は、今お話がありましたように就学前ということから取り組んでおります上富良野の実践ということで、ここに書かれてあります上富良野町幼児ことばの教室、上富良野小学校の中にあるものですが、そこで言語指導員、言語指導員だけではなくて本当に地域を走り回っているといいますが、ほとんどあれやこれやと奔走されております田中睦さんに「幼児期から就学へ・その後の連携の試み」ということで、「特別支援教育を意識した事例実践を通して」という題でお話をさせていただきたいと思います、お願いいたします。

1. 幼児期から就学へ・その後の連携の試み～特別支援教育を意識した、事例実践をとおして～

田中 睦(上富良野町 幼児ことばの教室 言語指導員)



(田中睦) 田中睦です。現場でやってきたことを行き当たりばったりのことではあるのですが、今回振り返る機会をいただきました。「幼児期から就学へ・その後の連携の試み」ということでいろいろお伝えしてみたいと思います。至らないことがいっぱいあると思いますけれども、よろしくお願いいたします。今日は私の職域であります、ことばの教室というところから見た特別支援教育のつながりということをお話ししたいと思います。地域にそれぞれことばの教室というのがあると思いますが、いろいろな特質があることばの教室ではないかということで上富良野町の様子をお伝えしたいと思います。



まず上富良野町の紹介をしたいと思います。北海道の上川管内にありまして、へそのまち富良野市よりも少し北の位置にあります。人口総数が1万2,648人ということで、国勢調査の産業人口の推移というのをお知らせしたいと思います。1次産業はほとんどが農業です。第3次産業の64.9%、公務員27.5%、これはとても多いかと思いますが、妊娠届けから見た夫婦の職業ということで、公務員が63%、その中に45.7%が自衛官という町です。それから出生率ですけれども全国が1.36%、北海道が1.23%、上富良野が2.07%というふうに比較して高率な町でもあ

町内の利用機関・学校

- 子育て支援センター ●母子通園センター(上富・中富)
- 保育所(公立2、私立1) ●幼稚園(1)
- 小学校(5校)総児童数 716名
 - ◎上富良野小学校-463名 知、情、難、言語通級指導教室
 - (●幼児ことばの教室併設)
 - ◎西小学校-187名 知、情、言語
 - ◎江嶋小学校-21名 特認校
 - ◎清富小学校-5名
 - ◎東中小学校-40名 知、情
- 中学校(2校)総生徒数 348名
 - ◎上富良野中学校-328名 知
 - ◎東中学校-20名
- 高校(1校)
 - ◎上富良野高校-

ります。

町内の幼児、児童生徒の利用機関としまして、子育て支援センター、母子通園センター、これは隣の町の中富良野町と合同です。保育所、幼稚園。幼稚園は1カ所です。小学校は5校ございます。上富良野小学校にはご覧のように知的学級、情緒学級、難聴学級、そして言語通級指導教室があります。幼児ことばの教室はこちらに併設という形であります。その下の西小学校に言語とありますが、これは6月にできました特殊学級です。

言語通級指導教室

- ・教諭 2名 指導員 1名(臨時職員) **指導室 3部屋**
- ・通級児童 36名
 - ・幼児ことばの教室からの継続 9名
 - ・就学時健診から 26名
 - ・児童期途中から 1名
- ・学年別

学年	5年	4年	3年	2年	1年
人数	2	4	6	9	15

上富良野小学校にあります言語通級指導教室ですが、通称はことばの教室というふうに幼児も含めまして呼んでいます。教諭が2名、指導員が1名、それで教室が3部屋というふうにやっております。児童数が36名、幼児ことばの教室からの継続9名、就学時健診26名、児童の途中からというのが1名というふうになっています。学年別にはこのような形で、1年生が多いかなと思います。

障害種別

- ・構音障害 (13.9%)
- ・言語発達遅滞(8.3%)
- ・吃音 (5.5%)
- ・なんらかの発達障害の疑い (44.4%)
- ・発達障害 (27.7%)

障害種別ですけれども、構音障害が13.9%、言語発達遅滞8.3%、吃音5.5%、何らかの発達障害の疑い44.4%、発達障害27.7%。ここで言います何らかの発達障害のあるお子さん、ということにつきましては、診断名は付いていないけれども医療機関を利用しているというお子さん、それから担当者から見た子どもの様子から判断したものというのが含まれます。発達障害といっているお子さんにつきましては、医療から診断を受けているというお子さんになります。

幼児ことばの教室

- ・上富良野小学校言語通級指導教室に併設(共同運営)
- ・室長 設置校学校長
- ・指導員 1名(教育委員会 嘱託職員)
- ・通級幼児数 23名

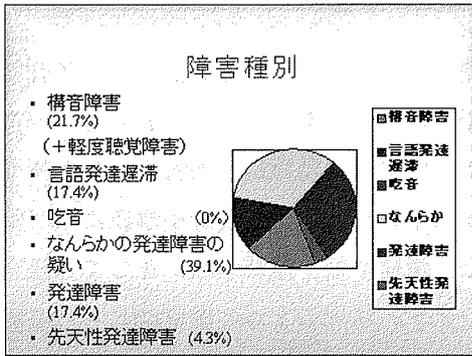
	年少	年中	年長
3歳児	2		
4歳児	4		
保育所	2	7	2
幼稚園	1	3	2

- ・通級児対象
 - 基本…(個別指導1対1 週1回1時間 (1日3コマ))
 - 変則…隔週・2対1指導・不定期指導

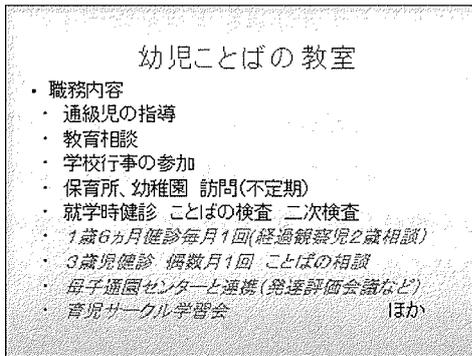
幼児ことばの教室です。先ほどもありました併設で共同運営ということになっています。両方とも教室が上富良野小学校にありますので、室長が設置校の校長というふうになっています。それから指導員、私1名です。教育委員会の嘱託職員です。通級幼児は23名おまして、以上のような人数の割りになっています。

ちょっと人数も多いので、通常であれば基本的には個別指導で1対1、週1回1時間という形で1日3コマと

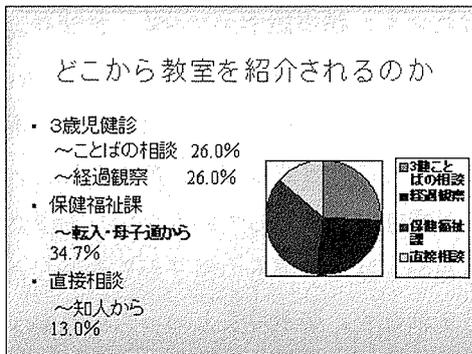
いうふうに入れているのですが、人数の関係で変則的に隔週であったり2対1指導であったり、不定期通級であったりというふうにしています。



障害種別につきましては構音障害21.7%、軽度難聴のお子さんも含まれています。言語発達遅滞のお子さんが17.4%、吃音0%、何らかの発達障害のあるお子さんが39.1%、発達障害が17.4%、先天性発達障害のお子さんが4.3%というふうになっています。ここでは吃音のお子さんがいないというふうになっていますけれども、何らかの発達障害のあるお子さんという中に、詰まりながらお話をするお子さんというものも含まれていて単独ではないという意味です。

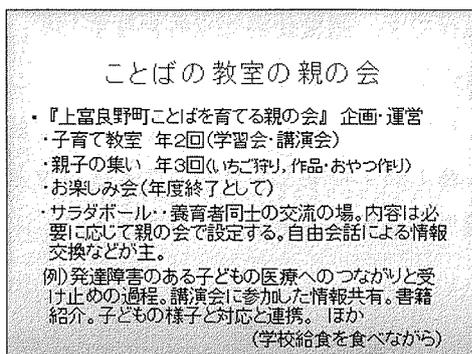


職域、職務の内容ですけれども、上のポツの5つ目まではことばの教室ということで教育委員会の管轄で行っているものです。下のポツの斜めの字になっている緑の4項目につきましては、保健福祉課の依頼によりましてやっているという業務になります。



幼児ことばの教室に通っているお子さんは、どこから教室を紹介されたのかといいますと、先ほどもありました保健福祉課から依頼されている仕事の中とつながっていて、3歳児健診のことばの相談というところから、それからその相談後、経過観察の中でということにつながっているお子さんがご覧の通りになっています。

それから先ほどもありました転入が多い自衛官の町です。保健福祉課の方に転入ということ、また母子通園センターから、ことばの教室ということで入ってくるお子さんが34.7%いらっしゃいます。また、お母さん同士のつながりからということで13%のお子さんが直接いらっしゃっています。ですから、ほとんど福祉課を通じて通級しているということになります。ですから幼児ことばの教室の担当者は保健福祉課と普段から連携されているのかなと思います。



ことばの教室には親の会というのがありまして、在籍の幼児、児童の親御さんと担当で「上富良野町ことばを育てる親の会」というのを運営しています。養育者の声を少しずつ加えながらいろいろと行事内容を変化させています。子育て教室というので、前は母親教室という名前だったのですが、名前を変えまして学習会であったり講演会であったりということを行っています。

親子の集いというのは、親御さんと一緒に参加する、お子さんと一緒ということ。お楽しみ会というのは、

ことばの教室をご存じの方は、以前はことばの誕生会であったり、ことばの発表会であったりというところでやっていたかと思いますが、通級指導教室になったというところから親御さんにどうでしょうということで、終了を祝う会というのはどうなのだろうということをご提案してきて、今年度からお楽しみ会ということで年度終了ということでの楽しみ会というふうに変えました。

サラダボールというのは養育者がお互いに付き合う場ということで、内容はその時々によって自由に変えています。例ですけれども、発達障害のある子どもの医療へのつながりと受けとめの経過ということで、お母さんからいろいろなお話をしていたり、講演会に参加したよということで全員参加していない講演会についてお話をしたり、こんな本を見つけたよとか、子どもたちはこんな様子だよ、こんなふうにやってみたよというのでいろいろな交流の場になっています。学校給食を食べる機会がないのでいつも給食を食べて行っています。

地域が発達障害を知る機会

講演会・学習会

・ことばを育てる親の会主催 公開で開催

・子育て教室・学習会・講演会
～学習会～ 養育者中心

◇軽度発達障害の理解とかわりについて 田中康雄氏(北大教授) 児童精神科専攻

◇園について(園長挨拶)

子育ての中で、お子様を育てる中で、お悩みがちなことばの発達について、
専門先生やスタッフのサポートもあわせて、ことばの発達について学びたい

～講演会～ 専門家をお招きし、地域の方々や機関関係者と学習をする
◇発達障害スペクトラムについて(軽度発達障害・幼児期にできること)

・かみふらのADHD&LD懇話会主催(2003.3設立)

・年10回ほど例会開催(講演会・シンポジウム・ディスカッションなど)

・常に公開・会員以外の参加可能 ・会員構成・機関関係者・養育者

地域が発達障害を知る機会としまして、これまでも出てきました、ことばを育てる親の会で主催した、常にオープンな形で開催をしています。子育て教室として今年度ですが、学習会と講演会ということで、学習会はこのたびは日中だったということもありまして親御さんの参加が多かったと思います。田中康雄先生のお話を間近で伺いたいというお母さんたちの希望から、少人数ということをご企画してみました。

学校内で行いましたので、ことばの教室のプレイルームだったのですが、そちらで行いましたので先生方で時間のある先生が見に来ていたというか話を伺いにきたというふうになっていました。その下に「脳について」ということで、町の保健師さんをお願いしています。これは4年間継続している内容で、なるほど、そこと脳が結び付くのかなどというちょっとフレッシュな感じで、これは人気があってつながっている会です。

それから講演会ということで年1回行っています。専門家の方をお招きしまして地域の方々と関係機関というので学習をしましょうということで、ことばの親の会からの発信ですけれども地域を巻き込んでということで行っています。昨年度は田中康雄先生に「自閉症スペクトラムについて」ということをお話ししていただきました。今年度は「軽度発達障害のある子どもへの関わりについて、幼児期にできること」ということで北海道教育大学旭川校の安達潤先生にお話をいただきました。

その下のかみふらの&LD懇話会の主催した講演会やシンポジウムですけれども、年に約10回ほど行っています。こちらの方は単独で行うというものもありますけれども、地域のことばを育てる親の会や療育専門部会などというところと共催をしながら行っているという感じです。

会員は、狭い地域ですので82名というような人数です。人数構成としましては養育者が20.7%、学校教諭が24.4%、保健師が7%、施設職員が7.3%、保育士、幼稚園教諭が34.1%、病院職員が6.1%というような形になっています。お手元の「おやぶかい通信」というものを別に配らせていただいたものをご覧いただきたいと思います。そちらの方に親部会ということで懇話会の中に親部会というのがありまして、そちらの方で親御さんたちがそれぞれの立場を尊重しながら意見交換をしているということで、お母さんたちの勢いに押されながらやっているというような形です。そこにあ

りますマークは懇話会のシンボルマークで、つながり続けるという意味でつくっていただきました。

地域の変化

<ことばの教室>

- ・ 関係機関からの来所依頼の増加
- ・ 集団での様子から対応をともに考える

<養育者>

- ・ 養育者としてするべきことが見えてくる
- ・ 気になっていることの訴えの増加
- ・ 養育者間による発達障害の理解とそれぞれの試みの情報交換

<機関関係者と養育者>

- ・ 情報共有の増加

※ 学習の場が広がった

次に、講演会を行った地域の変化といたしまして、ことばの教室に対しまして関係機関から来所依頼の増加というのがありました。それから集団での様子から、見に行っただけではなくて、それで一緒にどうしましょうかということを考える、対応について共に考えるという機会が増えました。養育者の方は家庭ですべきことが具体的に見えてきたということがありましたし、これまでの子どもさんの様子で気に掛かっていたことを相談して訴えるということが増加してきたように思います。

それから養育者間による発達障害の話題ということで、学校でできることから家庭で試みたことなど、いろいろそういった家での情報交換などが非常に頻繁にされるようになりました。それから機関関係者と養育者間においては、講演会の内容に触れたり、その情報を共有したりという機会が増えたように思います。地域としてはこういった学習会をする場が多くなったと思っています。

就学児の引継ぎ

- ・ 事例Aさん(現在小学校1年生 男児)

3歳児健診のことばの相談より通級(3:6)
医療機関利用開始(3:5) 現在も継続
幼稚園利用 年少途中より入園
養育者は親の会講演会の企画運営に携わる
◇医療と連携—特に就学を踏まえ、一年前から心理発達検査などを行ない、家庭・幼児ことばの教室での対応について連携をとり経過する。

これまで関係機関の間で行われてきました就学児の引継ぎのことです。このように講演会等を行ってきた中で、親御さんの方から学校に対していろいろお願いをしていきたいなという意見が出されてきました。それで養育者も交えた中で引継ぎを行うということをして昨年3月行ってみました。

まず事例Aさんです。現在小学校1年生の男の子です。3歳児健診のことばの相談から、ことばの教室に通級ということになりました。3歳児健診の後すぐ医療機関にかかりまして現在もつながっています。幼稚園には年少の途中から入りました。養育者は親の会の講演会や懇話会の講演会などの企画運営に携わっています。就学する1年前には非常に医療機関との連携が密になりまして、そういった発達検査や家庭とことばの教室との対応ということで非常に連携が多くなってきたかなと思います。

まず事例Aさんです。現在小学校1年生の男の子です。3歳児健診のことばの相談から、ことばの教室に通級ということになりました。3歳児健診の後すぐ医療機関にかかりまして現在もつながっています。幼稚園には年少の途中から入りました。養育者は親の会の講演会や懇話会の講演会などの企画運営に携わっています。就学する1年前には非常に医療機関との連携が密になりまして、そういった発達検査や家庭とことばの教室との対応ということで非常に連携が多くなってきたかなと思います。

引継ぎの経過

- ・ 養育者から就学前に教育機関へ連携の希望

↓

- ・ 担当者から学校に申し出る

↓

- ・ 学級担任決定通知後、引継ぎ(校長室にて)

学校 校長・学級・学年担任教諭・言語通級指導教室 担当教諭

一両親・保健師・幼児ことばの教室担当者
両親…医療からの連絡、どのような子どもか、今後の具体的な連携について
保健師・機関利用にいたる経緯と経過、養育者との連携について
ことば・医療との連携から指導内容・対応、養育者の思いについて

引継ぎの経過ですけれども、先ほどありました親御さんから教育機関に対して連携を希望されたということで、私の担当者の方から学校長に対してお願いをし、それから担任が決定した通知が行ったときに引継ぎを行いましたということになって校長室で行いました。学校関係者としましては学校長、学級担任、学年の担任、言語通級指導教室の担当者ということです。

このときに両親がおみえになりまして、担当保健師、それから私ということで参加しました。話をした順番は、ここの順番と少し異なりますけれども、まず保健師さんが機関利用にいたる経緯と経過ということと養育者との連携についてということをお話しし、それからことばの教室の担当者から、医療との

連携から指導内容・対応・養育者の思いについてということでお話ししました。

その後、ご両親がいろいろお話をされまして、医療からこういった連絡を受けています、どのような子どもですと具体的な子どもさんの様子をお話しして、その後具体的にこのようなことをしたいということでお母さんがそのときおっしゃったのは、私は先生と交換日記をしたいのですがいいですかということで、ノートに家での様子を書きますので学校でも学校での様子を書いてくださいということをお願いして、担任の先生が快く受けていただいたという形があります。

就学児の引継ぎ

- ・事例Bさん(現在小学校1年生 男児)
- 3歳児健診のことば相談後、母子通園センターを利用(3:4)
- C医療機関利用開始(3:1)
- D医療機関利用開始(3:9)現在も継続
- 保育所利用 年中(4:5)より入所 加配保育士
- ことばの教室利用開始(4:5)講演会:運営参加
- ◇医療からの情報を受け、保育所・通園の機関と家庭での状況を共有し数回ご様子連携をとる
- ◇就学時健診前～両親～就学に関わる機関教育相談、結果を学校に持参し連携をはかる
- 校長・教頭～両親・保健師・幼児ことばの教室担当者

次は事例Bさんです。このお子さんも小学校1年生の男の子です。3歳児のことば相談の後すぐ医療につながりました。その後、母子通園センターを利用してもう1つの医療機関にかかっています。そちらの方には現在も継続しています。保育所を利用するに当たって加配保育士さんが必要であろうということで年中のときより入りました。そのときからことばの教室に通うということになりました。

この親御さんも親の会、懇話会の講演会の運営、企画に携わっていらっしゃいます。それから医療からの情報を受けていろいろな関係者がいっぱいいるというのもありまして、保育所、通園センターの先生という形でいろいろな連携の輪が非常に大きかったというお子さんです。就学時健診の前に道の方の教育相談というのが就学に関わる相談としてありますけれども、そちらの結果を学校の方にお持ちいただきました。

就学前に一度こういう引継ぎが必要なのではないかということで、親御さんと保健師さんといういろいろ検討してそういうことにしました。そのときにはご両親でみえられました。そのとき学校側では校長と教頭ということでお話をしました。相談の中では通常学級で過ごして通級指導教室を利用するというような形が望まれるという結果を学校に伝えました。

引継ぎの経過

- ・養育者から就学前に教育機関へ連携の希望
- ↓
- ・担当者から学校に申し出る
- ↓
- ・学級担任決定通知後、引継ぎ(校長室にて)
- 学校 教務(学校長不在のため)、学級・学年担任教諭、言語通級指導教室担当教諭
- 一 母親、保健師、幼児ことばの教室担当者
- 両親…医療からの連絡、本児のこれまでの経過と家庭を中心とした様子
- 保健師・保健福祉機関が携わってきた。これまでの経緯と経過
- ことば・保育所担当保育士からの情報・通園からの情報・相談内容と経過の様子

引継ぎの経過です。先ほどと同じような感じで経過いたしました。同じように学校側ではこのときは学校長が不在でしたので教務が担当しまして、それから学級・学年担任、言語通級指導教室の担当者ということで、このときご両親ではなかったのですがお母さんがみえられました。それから保健師と私ということでした。

こちら保健師が最初にお話をさせていただいて、関わってきたことやこれまでの経緯、経過です。それから私の方からは保育所担当の保育士さんからの情報、通園センターからの情報、それからことばの教室での指導内容や経過についてお話ししました。養育者からは医療からの連絡、それから本人のこれまでの経過と家族を中心とした話題というのをお話ししていただきました。

こういった親御さんを交えた中で引継ぎを行いました後に、このお子さんたちを担当される学年の先生、学級の先生に学習会というのを私の方で行いました。よこはま発達クリニックに勤務されています吉田友子先生の本であります『高機能自閉症・アスペルガー症候群「その子らしさ」を生

引継ぎ後学習会

- ・担任・学年担任教諭と幼児ことばの教室担当者による学習会

軽度発達障害と括られる発達障害、特に「高機能自閉症・アスペルガー症候群」はどんな特徴を持っているのか?を中心とし、併せ持つ他の障害について

資料を「高機能自閉症・アスペルガー症候群」その子らしさを生かす子育て法(吉田友子著・中央法規)から作成する

ことばの教室から特別支援教育の発信
上富良野小学校教職員配布資料

- ・今後の特別支援教育についての在り方について(最終報告)(平成15年3月)文部科学省
- ・特別支援教育推進資料(平成15年6月)文部科学省
- ・小・中学校におけるLD、ADHD、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン(試案)(平成15年1月)文部科学省
- ・通常の学級に在籍するLD、ADHD等の児童生徒の支援のために(平成16年3月)北海道特別支援教育振興協議会
- ・特別支援教育における相談支援のための手引(平成16年3月)北海道教育庁生涯学習小中・特別教育科
- ・PEARLS OF WISDOM 特別支援教育のノウハウの活用～(平成16年3月)北海道立特別教育センター
- ・通常の学級の先生へ～自閉症児の支援マニュアル(改訂版)～
- ・特別支援教育を推進するための制度の在り方について(中間報告)(平成15年12月1日)中央教育審議会

かす子育て』という本をベースにいたしまして軽度発達障害と括られる発達障害の、特にこの本の項目にありました「高機能自閉症・アスペルガー症候群」はどんな特徴を持っているのかというのを中心に、併せ持つ障害というのをお話しさせていただきました。

ここではことばの教室から特別支援教育ということを意識して、去年おととしぐらいからいろいろな形で先生方の手元に残る資料ということで、最終報告が出てから講演会にも参加しまして必要ではないかと思いましたが、こういった形で先生方全員に配布するというようなことをやってきました。

先ほどありました懇話会では平成15年度の9月に特別支援教育についてということの講話を企画したり、私個人ではあったのですが文部科学省から学習障害児に関わる委託研究を行っていました、滋賀県の甲西町の教育委員会の職員の方に資料提供をお願いしたりもしてみました。

研修会や講演会に参加する中で、やはりこれは必要だろうと思った資料を用意したつもりです。また、お手元に別のA4の資料で「わいわいふいりっぷ」というのがあるかと思いますが、ちょっと不定期に短編物で通信というような形で先生方に見ていただきたいなというので何部か出しました。

親の会を通じた特別支援教育の発信ということで、先ほどからもあります学習会や講演会というのを軽度発達障害のある子どもたちの理解というようなことで発信してきましたけれども、親の会というのを絡めて行ったケース・カンファレンス、それから公開事例検討会というのをご紹介したいと思います。

親の会を通じた特別支援教育の発信

- ・学習会・講演会…軽度発達障害のある子どもの理解と対応について
- ・ケースカンファレンス…児童精神科医師による通級児の教室での様子から【校内研修を活用】(学習会と併用)
- ・公開事例検討会…スーパーバイザーと共に、小学校学級担任・養育者・ことば担当者による、子どもの理解と支援と計画

※ 学校施設を利用し、学校関係者の参加しやすい環境調整
※ 学校関係者を巻き込んだ事業計画

ケース・カンファレンスにつきましては、児童精神科医師、田中康雄先生にお越しいただいて見ていただくということで校内研修というのを活用しました。これは後ほどちょっと説明させていただきたいと思います。

それと公開事例検討会というのを行いました。それについてはまた詳しくご説明したいのですが、この2つの行事を学校の施設を利用して先生方が参加しやすいとか、学校関係者を巻き込んだ事業ということで先生方にぜひ見ていただきたいということを意識した会です。

ケース・カンファレンスのことですが、このことばが適切なのかというのは、私は分かりかねますが、ここではそのように言わせていただこうと思います。まず最初に「学級担任の戸惑い」というのがありまして、その学級担任がことばの教室の担当者に、こんな課題があるんだよということが相談されました。その後、ことばの教室の担当が、教室に来るときは必ず養育者がいらっやいますのでそのときに養育者の方とお話をしてということで相談をいたしました。

このことについては学校関係者だけでは解決の糸口が見えないということで、専門家の介入が必要なのではないかということで、来ていただきたいなということになりました。それで専門の方に来ていただきたいということを依頼いたしまして学校に来ていただきました。学校に来ていただいて授業中や休み時間を見ていただいたり、それから養育者の方とお話をさせていただいて、その後残っている職員で全体で研修をするということになりました。本当に半日以上お付き合いいただいて大変貴重な時間をいただいたと思います。

ケースカンファレンス

- ・ 学級担任の戸惑い
 - ⇒ことばの教室担当者との相談
 - ⇒養育者と担当者との相談
- ・ 専門家介入の必要性
 - ⇒ことばの教室担当者検討会
 - ⇒専門家への依頼
 - ⇒専門家来校
 - 教室見学→養育者と相談→学校研修
 - (学級担任報告・専門家からのアドバイス)
 - 在教職員参加

公開事例検討会の試み

- ・ **事例1) Aさん(小学校1年生 男児)**
 - 3歳児健診からことばの教室に通級
 - 言語通級指導教室に引き継ぐ
 - 医療機関継続利用
- ・ **事例2) Eさん(小学校4年生 男児)**
 - 3歳児健診でことばの遅れから母子通園センターを利用
 - 幼稚園入園と同時に通園を退級
 - 就学時健診よりことばの教室に通級
 - 医療機関利用→初診医療機関が遠方のため近郊の医療機関を紹介され継続利用

発表者の感想 事例1)

- ・ ことばの教室担当者
 - ・ 事例検討会が決まってから、休日の指導に関する研修会に参加した
 - ・ 養育者と担任との話し合いを密にすることで、役割がみえてきた
 - ・ 子どもの様子が分かってきた
 - ・ 担当者としての視点や役割がはっきりとしてきた
 - ・ これまでの指導の反省と、今後の指導について考える貴重な体験をした

次は公開事例検討会の試みということで、実は先ほどありました親の会の講演会を講師の先生に依頼したところ、「事例検討会をやるのだったら行くよ」と言われたのです。「じゃあ、やれば来てくれるのですね」と言って親御さんに相談したら「やりますよ」と2人のお母さんに言っていただきましたので、こういうことが急ぎよできたというようなことになります。特別支援教育の中の個別の指導計画というのを意識した公開事例検討会にしようということで、ガイドラインも親御さんも見ながらやったというようなことです。

まず事例1はAさんです。先ほどのAさんです。事例2はEさんです。小学校4年生、男の子です。このお子さんは3歳児健診でことばの遅れがあってその後、母子通園センターを利用いたしました。幼稚園に年中から入ったのですが、入ると同時に通園センターを退級いたしました。就学時のことばの相談でことばの教室に通級になったというお子さんです。小学校に入ってから医療を利用しています。初診の医療機関が遠方だったために近郊の医療機関を紹介していただきまして、現在も継続して利用しているというお子さんです。ここでいろいろな事例検討会をやっている様子を見ていただくと、よりよかったですでしょうけれども、参加されたことばの教室の担当者、親御さん、学級担任の感想をここでご紹介したいと思います。

これは発表した順にお話ししたいと思います。ことばの教室の担当者が事例1のAさんです。休日など指導に関係する研修会に参加したと。それから養育者と担任と話し合いを密にした。子どもの様子が分かってきた。担当者としての視点や役割がはっきりとしてきた。これまでの指導の反省と、今後の指導について考える貴重な体験をさせていただいたとおっしゃっていました。

発表者の感想 事例1)

- ・ 養育者
 - ・ 生育歴は小説にでもなりそうなくらいの量の文を書いた
 - ・ 書くことで自分自身の心の変化がわかったように思えた
 - ・ 振り返る暇もなく、現在まできた
 - ・ 早速実践できるアドバイスがいただけた
 - ・ 人に恵まれてきた
 - ・ 何より大切なのは連携のだと分かりました

発表者の感想 事例1)

- ・ 学級担任
 - ・ 普通に考えれば、学級全員に個別の学習支援を行うのが当たり前ではないが
 - ・ 養育者の視点、専門家の視点、そして自分の控えている障りでの視点を集め、子どもが一番困っていることに焦点を絞る作業が必要
 - ・ 実際の支援にはそれぞれの立場の意見を突き合わせ、練り合わせて方向性を互いに探り、出来る事を分担・協力していく姿勢が必要不可欠不可欠だろ
 - ・ 可欠だろか・どう生かせるか、今後の自己評価、他からの評価を求めたい
 - ・ 話し合っで子どもへの理解がこれまでより格段に深まったといえる
 - ・ とても強く感じた事・養育者のお子さんに対する思い、誰よりも理解していることが改めて分かり、尊敬の念を抱かずにはいられない
 - ・ これからも、養育者の方を始め色々な方とつながりを持ち、子どもの成長を支援する一人として出来る限りのことをしていこうと改めて決意している

話し合っで子どもへの理解がこれまでより格段に深まったといえる。とても強く感じたことは、養育者のお子さんに対する思い。誰よりも理解していることが改めて分かり、尊敬の念を抱かずにはいられない。これからも、養育者の方を始め色々な方とつながりを持ち、子どもの成長を支援する一人として出来る限りのことをしていこうと改めて決意しているというふうに感想をおっしゃっていました。

発表者の感想 事例2)

- ・ ことばの教室担当者
 - <緊張感を通して>
 - ・ お互いの立場を尊重し話をすること
 - ・ お子さんの状態像を専門用語を使わずにわかりやすく説明するか
 - ・ 今までの自分の関わり方を、大勢の人に聞いてもらうことによる自己・他者評価が明らかになる
 - ・ 事例検討したからには、今後お子さんに対してよりよい関わりをしたい(い)と出来るかな
 - ◇ 特別支援教育が始まれば事例検討会は当たり前のことになるのだろう。
 - ◇ 取っ掛かりはイメージが湧かなかった。養育者・担任・スーパーバイザーと話し合っでいくうちに霧が晴れるよみに全体が見えてきた。やってよかった。

発表者の感想 事例2)

- ・ 養育者
 - ・ 幼児期に関わった機関からの資料集めで、自分の記憶が曖昧で新たな発見もあった
 - ・ ガイラインにある、親として子どもへの願い、親が考える子どもの困難や課題は発表する時は時間内では到底終わらなかつた
 - ・ カミングアウトではなく、あくまでも個別の指導計画への手がかりになる事を願って
 - ・ 初めて三者でお互いのエピソードや関わり方を話し合っで、違った角度から温かく見て、工夫した支援をうけていることに気づいた
 - ・ 打合せから連携の大切を感じる
 - ・ 地域での教育的支援や、校内の個別の指導計画など、周囲の皆さんの協力が重要
 - ・ 親たちも参画していくためには準備が必要

養育者からです。生育歴は小説にでもなりそうなくらいの量の文を書いた。書くことで自分自身の心の変化が分かったように思えた。振り返る暇もなく、現在まできたと。それから、早速実践できるアドバイスがスーパーバイザーからいただけたのでやってみようということでした。人に恵まれてきた。何よりも大切なのは連携だと分かりましたというお話がありました。

次は学級担任です。普通に考えれば、学級全員に個別の学習指導を行うのが当たり前のことではないか。養育者の視点、専門家の視点、そして自分の接している限りでの視点を集め、子どもが一番「困っていること」に焦点を絞る作業が必要。実際の支援にはそれぞれの立場の意見を突き合わせ、練り合わせる方向性を互いに探り、出来ることを分担・協力していく姿勢が必要不可欠だろう。どう生かせるだろうか。今後の自己評価、他からの評価を求めたい。

次に4年生のお子さんの事例です。ことばの担当者からです。「緊張感を通して」ということでお話がありました。お互いの立場を尊重し話をすること。お子さんの状態像を専門用語を使わずにわかりやすく説明するか。今までの自分の関わり方を、大勢の人に聞いてもらうことにより自己・他者評価が明らかになる。事例検討したからには、今後子どもさんに対してよりよい関わりをしたい(けど出来るかな)というようなこともありました。

その下のところに、特別支援教育が始まれば事例検討会は当たり前のことになるのだろう。取っ掛かりはイメージが湧かなかったけれども、養育者・担任・スーパーバイザーとお話をしていく中で霧が晴れるように全体が見えてきて、やってよかったというふうに言っています。

養育者の感想です。幼児期に関わった機関からの資料を集め、自分の記憶が曖昧で新たな発見もあった。ガイドラインにある、親として子どもへの願い、親が考え

子どもの困難や課題を発表するには時間内では到底終わりそうにない。カミングアウトではなく、あくまでも個別の指導計画への手がかりになる事を願って。

初めて三者でお互いのエピソードや関わり方を話し合う中で、違った角度から温かく見て、工夫された支援を受けていることに気づいた。打合せから連携の大切さを感じる。地域での教育的支援や、校内の個別の指導計画など、周囲のたくさんの協力が必要だと感じる。親たちも参画していくためには準備が必要だというふうにおっしゃっています。

発表者の感想 事例2)

- ・学級担任
- ・保護者からお子さんの生育歴やその時々、現在の思いを聞いたことは大変参考になりました。
- ・打合せから事例検討に至るまでの間にとてもたくさんのお話を保護者の方とすることができ、お子さんを思う気持ちの強さにあらためて感銘を受けるとともに、学校教育の場では私が出来ることを考えさせられました。
- ・ことばの教室の先生とスーパーバイザーの専門の立場から話があり、私もお子さんへの理解を深める上で役立つものばかりでした。
- ・学級という限られた空間での私の拙い見取りの中で、どの程度のお話を、ふさわしい内容なのか、検討会の後どの程度よりよい環境や対応が出来るのかなど、悩みもありました。学級担任ですら躊躇するのですから、保護者の方はいかに悩んでいました。
- ・子どもの成長を前向きに捉え、一人一人の可能性の開花のためによりよい支援の方法を考えていこうという、一見当たり前のように思えることが、実は口ほど簡単ではなく、そのためには話し合いが何よりも大切だと気づかされた会でした。
- ・保護者の方やスーパーバイザーの貴重なお話、それに参加している方々の真剣な眼差しは今でも覚えていますという感想を寄せていただきました。

学級担任からは、保護者からお子さんの生育歴やその時々・現在の思いを聞いたことは大変に参考になりました。打合せから事例検討に至るまでの間にとってもたくさんのお話を保護者の方とすることができ、お子さんを思う気持ちの強さにあらためて感銘を受けるとともに、学校教育の場で私が出来ることを考えさせられました。

ことばの教室の先生とスーパーバイザーの専門の立場からお話があり、いずれもお子さんへの理解を深める上で役立つものばかりでした。学級という限られた空間で

の私の拙い見取りの中で、どの程度のお話を、ふさわしい内容なのか、検討会の後どの程度よりよい環境や対応が出来るのかなど、悩みもありました。学級担任ですら躊躇するのですから、保護者の方はいかに悩んでおりました。

子どもの成長を前向きに捉え、一人一人の可能性の開花のためによりよい支援の方法を考えていこうという、一見当たり前のように思えることが、実は口ほど簡単ではなく、そのためには話し合いが何よりも大切だと気づかされた会でした。保護者の方やスーパーバイザーの貴重なお話、それに参加している方々の真剣な眼差しは今でも覚えていますという感想を寄せていただきました。

上富良野小学校の校内体制

- ・校務分掌組織(平成16年度)
- ・特別委員会・・・特別支援委員会
- ◇構成メンバー 9名 委員長1名・教頭
- 校長・教頭・低中高学年 各1名・義護
- フリー 1名・しえん 1名・ことば 1名
- ◇活動
- 今後のメンバー構成について
- 実態把握
- 平成19年度に向けた体制作り

上富良野小学校での特別支援に関わる校内体制です。今年度は校務分掌組織の中の特別委員会の中に特別支援委員会というのをつくりました。構成メンバーは9名で、ご覧の通りです。メインの話の内容としては、今後のメンバー構成についてや実態把握、それから19年度に向けた体制づくりをどうしていったらいいかというふうに考えているということでした。

保健福祉と教育の普段のつながり

- ・乳幼児健診(幼児)
- ・教育相談の連絡調整(幼児)
- ・通級児の連絡(幼児)
- ・学校内カンファレンス 保健師の参加(児童)
- ・就学児の引継ぎ(幼児⇒児童)
- ・療育推進協議会・療育専門部会(幼児・児童)
- ・母子通園センター発達評価会議(幼児・児童)

相互に顔が見える形で学びあう

保健福祉と教育の普段のつながりということで、先ほどもありましたけれどもこれは担当者とのつながりというふうにちょっと書いてみました。乳幼児健診、これは幼児の担当者です。教育相談の連絡調整というのも幼児担当者です。通級児の連絡というのも幼児担当者です。校内カンファレンス、先ほどのカンファレンスですけれども、保健師さんの参加もありました、児童の担当者です。

就学児の引継ぎということで、幼児から児童というこ

とで担当者が2人参加していたかと思います。それから療育推進協議会・療育専門部会には幼児担当者、児童担当者が参加しています。母子通園センターの発達評価会議というのは、現在児童さんもそちらの母子通園センターを利用していますので、幼児担当者であったり児童、これは特学の先生ですけれども関わっているという、お互いに顔の見える形で学び合っているという場だと思います。

教育委員会として

- ・特別支援教育平成17年度の計画
 ~学校教職員を対象に学習会企画・2~3回
 町外から講師を招く
 ~学習会を開催する中で、次年度の対策を計画
- =特別支援教育対策の担当者は未定
- =特別支援教育担当者を置いている教委の体制を知りたい
- =教育と福祉との連携をどのようにしたら・
- =特別支援教育の研修会等の参加を希望

うちの町の教育委員会にお話を伺いました。新年度に向けて学校教職員を対象に学習会を企画していますということでした。予算の関係もあるけれども2~3回できるといいなということで、先生方を中心にした学習会を計画されているということです。その学習会を行いながら次年度の計画を考えたいとおっしゃっていました。

現実として現在は担当者がいないということ、それからその難しい中で、担当者を置いているほかの教育委員会はどういうふうに行っているのかな、知りたいなという

お話がありました。教育と福祉との連携を取ることはとても大事だけれども、どうしたらいいかなというお話もありました。また、教育委員会の担当者としてほかの特別支援に関わる研修会に参加したいというお話がありました。

保健福祉課にお話を伺ってきました。これは一番最初のころ、2年前のころです。研修会で特別支援教育というのを資料の中に見つけたけれども、このことばはいつたい何だろうということで、これは誰に聞いたら分かるんだろうということで、聞きやすいのは誰だということになると、普段からつながっていた私であったということで、ああ、それはこれだよということで、そのころも最終報告が出ていましたので、この資料ということでお渡ししたのが、保健福祉課が特別支援教育を知ったきっかけになっています。

保健福祉課として

- ・特別支援教育とは？
 2年前の研修会で資料の片隅に見つけたこのことば・
 いったい誰に聞いたら分かるのか？
 聞きやすい人に…普段からつながりのある人に
- ・特別支援教育を早期に広く知る必要性
 ・療育推進協議会 講演会開催 講師：室橋光氏(北大教授)
- ・ジョイントの役割を誰が担うか？ ←どうするか！
- ・課題 普段のつながり⇒体制作り
 仕掛け…仕組み…懇話会！？…制度？

それは早期にみんなが知る機会が必要ではないかということで保健福祉課が考えまして、昨年の夏に療育推進協議会、先ほど中富良野町も合同ですけれども講演会というのを開催いたしました。そこでは「特別支援教育の理解、まちに合った体制づくりのために」という演題で北大の室橋先生にお話をさせていただきました。

ジョイントの役割というのは誰が担うのだろうと話があって、そこをどうするかだろうということで、普段のつながりということだけから、やはり体制づくりが必要でしょうということでお話があり、一応こういうような仕掛けはしてみたけれどもどのような仕組みになるのだろうということで、それと横のつながりがある、先ほどメンバー構成をお話ししましたが、懇話会というのはいろいろつながりがあるけれども、それではないよねと、制度になるのかなというお話がありました。

そんな中で自分たちはまじめにやってきたことですが、ほかから見たら意外だったのかなと思ったので項目を挙げてみました。先ほどもありました特別支援教育のことについて保健福祉課

地域の意外な動き？

- ・保健福祉課から地域に「特別支援教育」についての講演会開催(療育推進協議会)
- ・ことばの教室から設置校内へ「特別支援教育」の発信(資料提供)
- ・専門家との出会いから、子ども理解と支援を学ぶ
- ・ことばを育てる親の会から「特別支援教育」の“個別の支援計画”を意識した事例検討の提示(この後、養育者・学級担任・担当者で話し合いの機会が増加する)
- ・ことばを育てる親の会から地域に向けて、発達障害についての学習講演会開催
- ・既存地域連携として、療育専門部会・懇話会
- ・PTA役員が学校と協力し、発達障害の理解と支援についてPTA全員にもけた研修会の企画の動き

から地域に講演会を働きかけるというのもちょっと珍しいのかなと思います。それからことばの教室から、設置校内ではありますけれども資料提供をするというのも珍しいのかなと思いました。

専門家との出会いから、子ども理解と支援を学ぶというところでいろいろな講演会等を地域に広げてきたかなということ、それは次にも関わってきますけれども、やってきたかなと思います。それから特別支援教育の個別の

指導計画というのを意識した事例検討会というのは、どういったらというのを広く分かっていただきたいなというふうに公開をしたというのもちょっと珍しいのかなと思いました。

これを機に養育者と担当者だけで話があったのがこれまでだったので、担任も入って3人でお話する機会が増えたということです。それから親の会から地域に向けて発達障害についての学習会、ちょっと先ほどと重複しますが、行っているというのも珍しいのかなと思います。既存地域連携として、母子通園センターのある町には療育専門部会というのがあるかと思いますが、それ以外に懇話会というのがあるのも珍しいのかなと思います。

それからPTA役員が学校と協力して、今後、役員が特別支援の大切さというのをPTA全員に向けた研修会というのを企画しているというのも珍しいのかなと思います。これは私の考えなので、私からというふうに思っていたきたいのですけれども、これらのことをいろいろ運営してきたり、関わってきた中で、こんなものが課題ではないかと思いました。

見えてきた課題

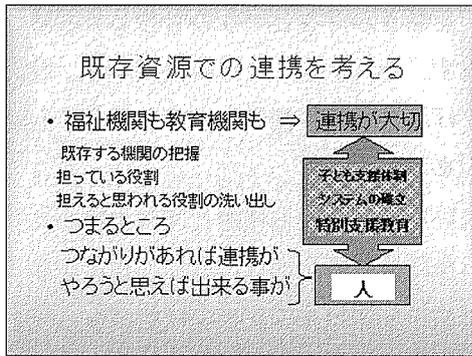
- ・学級での困りから対応への道筋がつくまでに時間が経過する
⇒困りから連携、校内支援システム化の早期確立
- ・個人レベルのジョイントにより専門家依頼
⇒システム化された専門家とのネットワーク
- ・子どもに関わる養育者を含めた関係者で、これまではこれからの支援を考える
⇒それぞれの立場を尊重した上で支援計画が考えられる。養育者・関係者全てをITCは地域の意識改革
- ・特別支援教育の地域への啓蒙を任意団体からの発信
⇒教育行政から地域全体へ意識改革の発信

学級での困りから対応の道筋につながっていくまでに非常に時間が経過してしまいます。ですから、困りがあったときにどういうふうに連携、ということで、校内支援システムを早くつくるべきではないかと思いました。個人レベルでのジョイントにより専門家依頼ということで、困ったよ、誰か先生、来てよということで、私が「では」というような形になっているので、そうではなくシステム化された専門家とのネットワークというのが必要ではないかと思いました。

子どもに関わる養育者を含めた関係者で、これまで、これから支援を考えるということで、それはそれぞれの立場を尊重した上で支援計画が考えられるということと、また養育者を含め、こういことが行われる、またひいては地域の意識というのが広がればいいなと思いました。

それから特別支援教育の地域への啓蒙を任意団体が発信していますけれども、親の会や懇話会ですけれども教育行政から地域全体へ発信するというのが、今後あったらいいなと思いました。

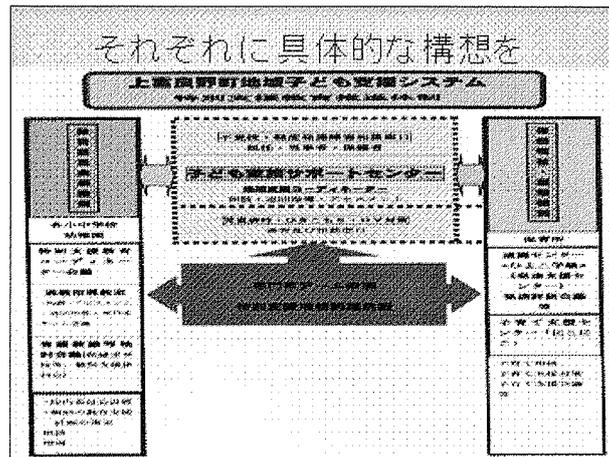
そんな中から、お金がないという特別支援教育をやらなければいけないと考えたときに、地域にはどんな資源があるのだろうかということをまず拾い出すことが大事なのだろうと思いました。先ほどもありました保健福祉課も教育委員会もお互いの連携が大切だと思っているということが分かりましたし、どういうふうにつながればいいのかということ、今は人につながっているところですが、そこのところを何かの形で支援体制というのが確立した中に、特別支援教育という



があると、より円滑なのではないかと思いました。

これはあまり大したことはないのですが、あくまでもシステムというのは町の中にどんな資源があるかなと自分で冬休みに出でて、前回のシンポジウムでお話いただいた足寄町の佐々木浩治先生の図を参考に、また雑誌で見たそういう組織の図などを見ながら、もうテンテンというのが大変でしょうけれども、こんなものがあるといいのかなというのをちょっと一時考えまして結構

面白かったなと思って、でも具体化するにはとても大変な作業だなとあらためて思いました。



こういったことをそれぞれの立場の先生方や親御さんたちで、どんなことが、支援が必要なのかなということそれぞれに意見を持つことで、今後大詰めになってくる特別支援教育の枠組みに生かせるのではないかなと思いましたので、それぞれ持っているということがいいのかなと私は思いました。

ここ1～2年で特別支援教育ということ意識した本当に思い付きの行事もたくさんありますし、

今回いろいろなことを振り返りながら、こんなことをしてきたなと自分たちのたどってきたことも振り返ることができました。特に養育者の方々には非常に講演会についても協力いただけたことはすごく私たちにとっても力になりましたし、これからどうしたらいいのかなと一緒に考えられるということは心強いなと思った次第です。観光地、上富良野、ラベンダーの街、ぜひお越しください。ありがとうございました。(拍手)

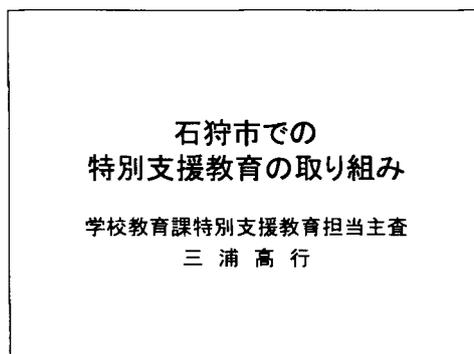


2. 特別支援教育 石狩市の取り組み

三浦 高行（石狩市教育委員会 特別支援教育担当主査）

（司会：田中） どうもありがとうございました。非常に精力的に行っている地域展開だったと思います。こういった、今はどちらかというボトムアップ的に地域の中から上げてきた話で、後半の方ではずいぶん、ではトップダウンとして行政が、あるいは教育委員会がどのような動きをするのかというようなことも課題として挙げられたと思います。

そこで次は、まさにそこの現場の先生といいますか主査ということで、ある地域での特別支援教育の取り組みということで、特別支援教育担当という新たな部門の主査ということで長く学校教育の方で活動されておりました三浦高行さんにお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。



（三浦） こんにちは。石狩市の教育委員会の三浦と申します。田中睦が上富良野近辺で精力的に活動しているということで、私も彼女からの話の中で厚生労働省の資料が出ていましたが、厚生省の資料をいただいて、それが1つのきっかけでもある。そして実際に厚生省にお邪魔して藤井さんや小西さん、あと西谷さんというような一生懸命やっている方々、そういう人を知りました。やはりこれを進めていくためには、人というのがまず大きなキーポイントになるのだろうという気がします。

石狩市では特別支援ということばの前に、私自身が実は教育委員会、平成の前後のときに学校教育の係長をしておりました。そこで特殊教育というものにぶつかったのですが、子どもの発達とい

うものについてなかなか知り得るところまでは至らなかった。それで途中で庁舎の建設ということもありまして、そちらの方に回されました。

教育長とはかなりぶつかり合いながら面白く楽しく過ごさせていただいたのですけれども、思い途中にして別な職種にということになったのです。それで平成11年だと思いましたが、教育委員会にまた戻ることができました。そのときは不登校の子ども、それと非行関係、少年指導センターという部署があります。その担当と

特別支援教育までの経緯

- H. 15 障害のある子どものための教育相談
体系化推進事業指定
(石狩市・羽幌町・千歳市)
- H. 16. 5 教育委員会一部機構改革
就学指導担当→特別支援教育担当
(当然、特殊教育含む)

いうことで戻ってきました。

その仕事を続けてはいたのですけれども、学校教育の特殊教育に対する対応の仕方というものにちょっと疑問がある。担当者が全然勉強する時間もない。学校現場が一生懸命動いているのに、それに対する手立てというのが教育委員会としてなかなかないということがありました。それで手を挙げて「やらせて」と言ったら「あ、いい」という非常に簡単なものです。

就学指導委員会廃止

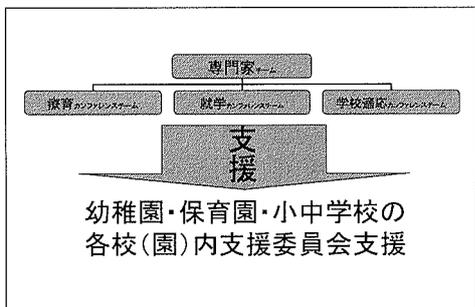
・ H. 16. 5 就学指導委員会廃止(規則)
↓
教育相談支援チーム設置(要綱)
①療育カンファレンスチーム
②就学カンファレンスチーム
③学校適応カンファレンスチーム
* 専門家チーム

話の中にも入れようと思っているのですが、昨年5月に教育委員会の一部機構改革がありました。下の方ですけれども、この一部機構改革によって私の持っていた仕事、不登校の部分や少年指導の部分というのを外してもらいました。そして勢いに乗じて、ついでのことだから就学指導担当という名前も変えてよ、とお話したら、それもすんなり。何という世界なのだと思います。

それで発達ということについて非常に関心を持ったのが不登校の関わりということがあります。札幌学院大学の臨床発達の部門の学習会というか研修会というのが長く続いておりました。私どもの子どもを支援する立場のスタッフ、今日も1人来ていますけれども、そういうスタッフと一緒に学習会に参加しました、3年間。

それと一昨年、北海道教育大学札幌校での夏季の学習というのにも参加させていただいて、支援の仕方というもの、また発達というものについての勉強をして、そしてできる限りの支援をそのお子さん、また保護者に対して、ということを感じながら深く精力的に今は進めております。

直接的な特別支援教育というきっかけ、なんか動きが変だなというのが、21世紀の特殊教育の在り方というものもありましたし、文部科学省の特別支援協力者会議の中間報告とか最終報告というものがありました。これに即対応していかななくてはいけない。待っていてもしょうがないだろうというのがありました。その間に田中教授の講演会、石狩でも何度も何度もやっていただいております。



その中で教育委員会としての体制づくりというものも必要だろう。それで出会ったのがここにある、障害のある子どもたちのための教育相談体系化推進事業というモデル地域に指定を受けることができました。これは石狩市と羽幌町、千歳市、その前年度までは留萌市で取り組んでいたものです。これに並行した形で北海道では3地区の札幌市、岩見沢市、千歳市というのが特別支援教育のモデル地域として指定を受け今年度で終了はいたしました。

その結果についてはまとめとして道教委から発表されると思います。

この15年度、私どもが受けた障害のある子どもたちのためのというのも今現在、道教委のホームページに掲載されておりますので詳細についてはそちらの方でご覧になっていただければと思います。この事業の成果というものについてですけれども、タイトルが示す通り、教育相談のシステムというものをどういうふうに体系化していこうかという主題がありました。

石狩市では小さな少ない人数でこれを検討しよう。ほかのエリアのところでは二十数名という大所帯で検討するというような形を取っていたようです。それでなかなか審議が深まらないだろうということで、石狩市では医療と療育と教育、福祉のスタッフに集まっていただきまして、ただ、そのシステムをどうするという検討だけではなかなか考えが横に広がらないということもありまして、では実際に行動というか、1つ動いてみてこの検証をしてみたいということで、自閉症児が在籍している特殊学級、それも大所帯ではなくて少ないところという学校を指定して、そこでTEACCHの手法を用いまして実践をしてみました。

何の実践かということとは構造化の実践をしてみました。これはイコールその支援をする側のシステム、体系化というものにも結局つながるのではないだろうかという想定で実際に動いてみました。この視覚的とか物理的な構造化によって、その事業にとっても動きがよくなる。視覚的というものの強さというのが検証された。それと指導する側、支援する側にとっても、どんな手立てをどんなふうにするということをことばにしてみたりチャートにしてみたりすることによって理解が深まるということが立証された。

それで特別支援に向けても体系化というものが1つ必要だろうと。それで物理的というよりも構造化というものをキーポイントにして、では支援する側のシステムを体系化してみようではないかということをつくってみたいところです。1つ去年の10月に開催されました石狩管内特殊学級設置学校協会という研究大会で、その校長が発表しているものを抜粋してみましたのでちょっとお聞きになっていただきたいと思います。

「対象児童が自閉症の診断がなされ、行動についての注意、修正をされるといきなり殴る、つねる、引っかけるといった他害行為があり、交流学級でも何かとトラブルの多い子である。児童が教室内の物理的構造化やスケジュールの導入後、環境の変化に戸惑うよりも、変わった様子を1つ1つ確かめながら受け入れていった。スケジュールはシステムの理解が早く、今では知覚支援による活動の見通しができるようになった。

担任は養護学校の免許は持っておりません。TEACCHという言葉は知っていたけれども、内容的にはほとんど知り得ていなかった。教室の環境調整と構造化と学校生活のスケジュール化に取り組む中で有効性を知り、上手に利用していけるようになった。対象児童の発達段階のスキルに合わせた芽生え、それを押さえる必要があり、知能検査やPEP-Rなどを早期に実施しIEP作成をする必要がある。

この児童の知的障害と自閉症について感覚の異常が表出した場合に、自閉症の症状が知的発達を押さえ込む形となり、結果として問題行動が形成されやすくなる。それを防ぐためにも自閉症児をどうコントロールし知的発達を保証していくのか、それが大きな課題となる」というふうに結んでおります。この発表の中でもさまざまかなりのキーワードが含まれていると思います。先ほども言いましたように構造化ということばをキーワードとして分かりやすく実効性のある教育相談、支援体制の体系化ということを目指す。

それで機構改革の5月に合わせて就学指導委員会を廃止しました。就学指導委員会自体はご存じのように障害児の発見、それと就学時における就学先の判断、それが主なものになっておりますけれども、石狩市ではその部分にとどまらないで、早期の相談、発達に関する相談が始まったときから当面は義務教育終了までの間、一貫して関わりを持つようなシステムというものでこういうよ

うな教育相談支援チームの中に3つのカンファレンスチームというものを設けています。

カンファレンスチームというのは医療関係ではよく使っている言葉です。相談支援というものにマッチするようなことばは何かないだろうかということでいろいろ考えてみました。それでミーティングではあまりにも浅過ぎるだろう。カンファレンスだったらちょっと方向も出せるのではないかということでカンファレンスという名前を採用しました。それとチームということばをどうしても残したかった。

カンファレンスチームというのは読み下しがとてもいいだろう、それがいいだろうということでその名前にしたのですが、なかなか私の上司、そのもうちょっと上の上司は、横文字は嫌だなと言うけれども、あまりにも教育相談支援何とかかんとかという漢字にしてしまったらもつともつと堅くなりほしくないだろうかと、何となくごまかしながらこの名前を使ったということです。

就学指導委員会については各自治体では条例であったり規則であったりしています。石狩では教育相談支援チームというものは要綱によって決めました。なぜかという情報公開という制度が今取り入れられております。この就学指導に関するものは果たして情報公開に値するものなのかというのが1つあります。それでできる限り情報公開の条例に乗らないような形ということで、要綱というものでこれは攻めてみました。これも意外とすんなり了承されたところです。

それぞれのカンファレンスチームの概要、流れとしてはこういう形です。専門家チームを石狩にも置きました。これは後ほど説明します。それと療育と就学、学校適応という3つがあってそれぞれが、まだ進んでいない幼稚園、保育園というのがありますけれども、小学校を含めた中でそれぞれを支援、助言というものを、もくろんでいるということを今考えています。

療育カンファレンスについては先ほど田中睦さんの話の中にもありましたけれども、地域療育推進協議会というのがこの十数年、13~14年になるのですが進んでいます。そしてこれはもう確実に定着をしております。今後どうなるのかというのは後ほど田中教授のお話の中であるかもしれません。せっかく進んでいる組織の1つの専門部会を直接引っ張ってくれば行政間、福祉サイド、療育のサイドと教育のサイドのやはり壁というのがあります。

それぞれの責任のある上司の考え方、それぞれでまた取り組みが違ってくるといってもあります。それで勢いに乗じてというか、既存のしっかり役割を果たしている組織をそのまま教育の組織の中に引っ張ってこよう。それによって動きというのが1つよくなるのではないかと。そしてお子さん、また保護者の方々の情報というものもスムーズに入ってくるのではないだろうかという意図、これはもう試して、これが何年か先に破綻するかもしれない。また、整理できるものは整理というか、まずは動いてみようということです。

①療育カンファレンスチーム

- 従来の地域療育推進協議会の1つの専門部会をそっくりあてる

臨床発達心理士・保健師・発達支援センター職員
(主査・ST)・学校教育課職員

就学までの児童の支援(就学後も必要に応じ支援)
幼稚園・保育園・保護者支援
新入学児童の就学先検討→就学カンファレンスへ

その役割とすれば就学直前までというのが1つの基本になりますけれども、そこの中での支援、それぞれの個人に対する支援もあります。発達支援センターが中心となった支援もあります。この組織とすれば次年度から幼稚園、保育園というものを対象に保護者支援も含めて、そして必要があれば就学後のお子さんの状況を見ながら、今まで培ってきた情報を学校側に提供するというのも必要になってくるだろう。ここがとても大きなポイント

だと思います。

それで得た情報、就学先の基礎的な検討をここの中でしていただいて、それで就学カンファレンスというところにつなぐというような形を今考えています。それと構成員については地域療育の1つの専門部会そのままということで、臨床発達心理士、それと保健師、発達支援センターの職員、発達支援センターの中のST、それと私が入っています。

以前というか、このグループの中には保健所、私のところは江別保健所なのです。その石狩支所というのができたのですけれども、そこもいろいろ財政的な事情もあるようでスタッフが減らされました。それで枠の中には入れておりませんが入ってこられるような形にしております。

②就学カンファレンスチーム

- 療育カンファレンスから→新入学児童の就学先判断→教育委員会へ検討結果通知
- 従来の就学指導委員会的機能がここに
- 学校から依頼のあった児童生徒の各種検査実施(ビネー・WISC-Ⅲ・K-ABC)・アセスメント
- IEPミーティング支援(校内委員会支援)
- 養護学校・特殊学級担当・福祉施設職員
学校教育課職員

それと就学カンファレンスチーム、これについては今お話しした療育カンファレンスからの事前基礎的な判断をもらって新入学、ちょうど12月から今あちこちで行っていると思います。その就学先の判断をする。判断をした結果を教育委員会に通知するという形を取っています。これは就学指導委員会であれば諮問というような形になりますのでなかなか難しい手続きが必要なのです。

そういうのを避けるためという試験的にやっていますが、これがどういようなまた周囲からの判断とかが出てくるかもしれません。そのときは動きながら考えていく。おとついでだったか、その前だったかのBS、8時からの映画がありました。『風と共に去りぬ』、明日考えればいいわというような、そんな雰囲気です。

今年度以降、それについては学校から上がってきたケースについての心理検査でもあり発達検査でもありというものを構成しようかと思っています。従来なかなかできなかったというのは、やはりスタッフがなかったというのがあります。あちこち石狩を目指して来てくださる先生方が増えました。それによってこういうような検査ができるような体制づくりが整ってきたと思っています。

今後においても人事異動によって層が少しでも厚くなっていくのであればいいなと思います。そのアセスメントの結果というか保護者の了解を得たもの、医療機関や相談機関を選ばないで地域の中でという保護者のご希望があったときには私どもが対応するというのを考えています。

それとIEPミーティングにつきましては、本年度試験的という言い方もおかしいかもしれませんが、ちょっと動いてみようということで実施しております。これには当然のことながらご両親に出していただく。それと医療関係のドクター、主治医にも来ていただく。それと検査をされた相談機関の直接検査をしてくださった方、アセスメントをしてくださった方にも来ていただく。

それと放課後支援を受けている方であれば、その支援士、それと発達支援センターに関係しているお子さんであれば、その発達支援センターの担当している方というような形で、できる限り多くの方々に集まっていただいて、そして文字化にして、そして保護者の願い、できる限り遠いところまでの将来というものをお話しいただいて、それに向かうような手立てが、ではそれぞれ役割分担をして何ができるか。それも短期目標を設定して振り返るというような取り組みをしていく。

これについてはなかなか保護者の方々の反応はとていいと。ただ、それが学校内でスムーズに

行えるか、その力をもってコーディネーターが仕切っていけるかというのはなかなか今の状態では難しいと思っております。これは次年度以降の取り組みとして後ほど紹介したいと思います。

構成しているのは、私どもの町には現在養護学校2つがエリアとしてあります。

拓北養護学校と星置養護学校、それぞれのコーディネーター、地域担当の方々に参加してもらっておりますし、特殊学級、小、中の担当者1名、それとことばの教室の担当者1名、それと福祉施設の職員、これは地域の構造化するに当たっての専門的な知識、技術を持っている方という意図で入れております。それと学校職員で構成しております。

③学校適応カンファレンスチーム

- ・不登校児童生徒対策検討
- ・適応指導教室「ふらっとくらぶ」との連携
- ・問題行動における地域連携推進事業等との連携
- ・養護教諭・通常学級教員・こどもと親の相談員・青少年アドバイザー・子ども相談センター職員・スポーツ青少年課職員

それと特徴的なのが学校適応カンファレンスチームというのをつくっております。不登校については協力者会議の中間報告までは確かことばとして載っていたはずなのです。それが最終報告の中では薄ぼんやり、完全に消えてしまったというような印象があるのですけれども、これは特別支援教育というのが19年になるのか20年になるのか、その時点でおそらくまた文字化されてくるのではないだろうかという読みがあります。

それで待っていないで、では最初から入れてしまおうよということで、これは石狩では入れてみました。不登校のお子さんの多く、私も何年間か携わった中でやはりLDや、高機能自閉症等の症状をおそらく持っているだろうというお子さんがかなりの割合にいるのではないだろうかという話をスタッフの中でしておりました。やはりその手立てというのが学校任せではなかなか動き切れない。

そして学校、また担任が家庭訪問するに当たっても当事者同士であればどうしても不満がぶつかり合ってしまうというのが1つある。では、中に誰か入ろうよという形の方がいいのではないか。緩衝材でも何でもいいと。お互いの話をまとめられるようにというような意味合いをこのカンファレンスチームで持っております。市で設置しております適応指導教室、今現在は3名のスタッフがおります。

その3名のスタッフがそれぞれその施設内での指導、支援にも当たっておりますし、ご家庭の方にも行っています。なかなか引きこもりから出てこれられないお子さん、あと学校にも月末の長期欠席児童生徒、これは通知ですけれども通知が上がってきて、早急に顔を見せて状況を探り出すというようなことも学校に赴きまして、中学校であればだいたいスクールカウンセラーがおります。

あとは担任、管理者、そして市では独自で相談員、心の教室相談員の名残です。今年度からなくなりましてけれども、そういう方々との連携で、どういう手立てをするか。学校の例えば担任、コーディネーター、生徒指導の担任と一緒に適応指導教室のスタッフが行ってお話を聞きながら方策を講じるというようなことをしております。

問題行動における地域連携推進事業、あと子どもと親の教育相談体系化事業だとかそういうのを2本、今現在石狩は受けております。そこの事業とタイアップをしながら、1つずつの事業では協議会をつくりなさいというのが必ず付録で付いてくる。なかなか単年度ごとの事業で協議会的なものをつくるというのは困難なことです。それでこのカンファレンスチームに全部抱き込んでしまうというようなことも考えて動いております。

構成員につきましては養護教員、これも小、中から1名ずつ。通常学級の教諭、これも小、中1名ずつ。子どもと親の相談員、それと青少年アドバイザーというのは適応指導教室のスタッフでもあり、スポーツ青少年課というのが新しくできました。その中のスタッフ。それと2年ほど前にこども相談センターというのが1つ組織化されました。その中に教育委員会から相談員という形で1名派遣しています。

新年度において、またこども相談センターというのが子どもに関する1つの部ですね。部という大きな枠の中に入ることになります。これは田岡という私どもの市長ですけれども、4年、5年ぐらい前から子どもに関する特化したような組織をつくれという指示があったのですが、なかなか公共機関というのは難しいところで、でも何となく形とすればこぎつけてきたなということになっています。

専門家チーム

- カンファレンスチームへの指導・助言
- IEPミーティングでの指導・助言(必要に応じ)
- 精神・神経科、心療内科、小児科などの医師
- 軽度発達等の障がいや児童心理に関する有識者・心理士・福祉施設職員・その他(要綱上では)
- (要綱策定時には軽度発達障がいのことが残っていた)
- ↓
- 精神科医師・大学院教授・臨床心理士・福祉施設長

それぞれのカンファレンスチームについては、年に6回程度の開催ということを考えて今動いてもらっております。本年度の設立した最初の年度で、本年度についてはそれぞれの動きのよさというものを見てくださいたいというようなことをテーマに動いてもらっております。

専門家チームです。これは全国のモデル事業の指定を受けているところでは医師や教育関係を研究している大学教授や、あとは研究機関の職員、例えば北海道で言えば特殊教育センターの職員や教育研究所の職員、それに教員や教育委員会職員というような構成になっております。それぞれの方が巡回相談員というような形で各学校を訪問して、どんな様子ですかとかケースに対応したようなアドバイスをするというようなことになっております。

市町村単位ではなかなか専門家という方々の確保をするというのが困難ということもあります。必要性というのは当然ありますけれどもなかなか人的な部分、また予算的な部分で難しい。石狩市が幸いなことに札幌市の圏域というかその中に入っていますし、地域的には恵まれております。それで市内に精神科の病院がありますのでその院長にお願いして、それと大学の教授、どなたか何となく分かると思えますけれども、一応名前を書いています。忙しくて全然動いてもらえません。それと先ほどありましたが、こども相談センターに臨床心理士を月3回配置しております。その方にも不登校絡みの部分でお願いしているというのがあります。

それと福祉施設の施設長、この方は自閉症にとっても深い方でありまして、生振(おやふる)の里というところの施設長さん、若いのですがとても行動が活発でして、AD何とかというような格好なのかなというような雰囲気の人で、自分でも言っています。私どものところでは教員と教育委員会職員は入れていません。

その理由とすれば、北海道に設置される、道教委に設置される専門家チームを待っていてもいつ来るんだろう。その間に子どもはどんどんどんどん変化していくではないかということで、できることは自分たちでしようということで先ほどのカンファレンスチームというのを考えたわけです。

それで私自身がまた巡回しろということばがとても嫌いで、待っていてもしょうがない。やはり私もどこかで動きたいのかなということで、そのうち来てくれるだろうというようなのはとても嫌

い。学校現場や教育委員会でやはり人に頼り切ってしまうというのは一番いけないことだろう。まずは動いてみましょう。足りないことはたくさんあるだろうと思います。そのために専門家がいる。

こういうことが分からないのだということを専門家に聞けばいいわけで、何から何まで教えてよ、結構学校の中に体質はあると思います。特別支援というもの、ことばが出ました。では、対処療法的に何ができる、教えてというのがあります。そうではなくて、もがいてみよう。お子さんには失礼かもしれない。手立てがなくこういうものが進められていくということに対しては当初の段階では失礼な、でも私たちが勉強させてよというのが大事なかなと思っています。

軽度発達障害者支援法や障害者基本法など昨年夏から12月にかけていろいろ発表されて、軽度発達、自閉というのが取り込まれるよ。これは条文には載っていませんけれども、これは1つの進歩だと。また自閉や軽度発達というものを保護者の方々はどう意識付けされているのだ。障害の中にくられることへの抵抗感というのが果たしてないのだろうかという思いはありますけれども、療育手帳がもらいやすくなるのかもしれない。これは1つの方法とすればいい道なのかな、開けてきたのかなというような印象はあります。

それと基本となる障害者基本法の中に根底にあるのが、療育時から就労まで一貫した支援をというのをうたっています。それが大きな基本になると。カンファレンスチームの中に近い将来、高等養護学校の方々にも入っていただいて、また情報構築ネットワーク北海道というのがあります。これも少ない人数ですけれどもいろいろな層の方々が集まって検討しています。そういう方々の力も借りながら、地域でできるものは地域でいろいろと動いてみたいという意図を持って、就労カンファレンスチームというのを本当に近い将来つくっていききたいと思っています。

H. 16の取り組み

- 10月 全小中学校でコーディネーター指名
コーディネーター学習会(月例)
- 特別支援教育担当・特殊教育センター職員・あおいそら職員 -
特別支援教育通信発行(おまけ資料つき)
- 11月 LD等児童生徒把握アンケート実施
- 12月 一次調査結果から、抽出での二次調査

16年度を振り返ります、まだ終わっていませんけれども。石狩市には10校の小学校と5校の中学校があります。つたない私ですけれどもいろいろ今まで勉強してきたことを引っ提げ、北海道教育委員会から出ている資料を基に、または講演会へ行って聞いて、これは学校に行つて学校で受けるなどというものを見つけて校内研修の場、または職員会議の場の時間を割いてもらいました。1時間から1時間半割いてもらって特別支援教育というものの理解、それと国や道の動きというものをタイムリーな部分、

なかなか国や道からの情報はないのですが、知り得る限りの情報を提供してきました。それがだいたい9月でおおかた終わった、まだ残っているところが1個だけあるのですが、なかなか公表しません。

ある程度理解が得られたなど1つ判断しまして、10月に教育長の名前で校内のコーディネーターを指名してくださいと。全体、全教職員になかなかお知らせするのが難しいのであれば16人の先生方、小さな学校ですけれども、その学校は2名コーディネーターを指名しました。その16名に対して毎月学習会をしています。なかなか毎月というのは先生方も忙しい。私も資料を作るのが忙しいというのがありますが、短い時間でも顔を突き合わせて情報の交換でもできればいいな。誰がコーディネーターをやっているのか。同じ中学校内、近くの小学校同士がお話できる機会があればいいなという目的も1つもあります。

私とあと特殊教育センターの職員、あおいそらの職員、函館の自閉症発達支援センター、唯一の北海道内の支援施設、そこの職員に来てもらって今まで取り組んでおります。それと特別支援教育通信というものを毎月1日付で発行しております。これはA4の1枚物です。そのときのタイムリーな情報、講座や講演会のお知らせや講演会結果などそういうものを織り込みながらまず見出しの部分だけです、それを出しています。

それとおまけ資料付きというのは、今までためてきた資料、例えばLDの理解という、口頭だけではなかなか分からない。本を1冊買うのもなかなか高いですね。田中教授からたくさん本ももらっています。あちこちの講演会、研修会に行ったときのものをペーパーでずっとためていたのが3年間の分あるので、それを付録として多いときには20部、少ないときには5枚ぐらいというようなもので学校に提供しています。

学校それぞれの考え方もあるでしょうけれども、活用してくださっている、そんなのあったのいろいろあります。それはそれでいいと。動きが出てきた、気づきがあったときに気づいて見ればいいだけの話です。そういうような流れの中で11月に、果たして自分たちの学校のLD、AD/HI、高機能自閉症等、またそれだけに限らず教師として気づきのあった、学習面や行動面でこんな点を持っているという気づきのあった子はどのぐらいいるのだろうかというのを見てよということで、本当の簡易版なのです。

これの調査に当たっては田中教授にしかられた。こんな検査様式ではだめだ。でもやらせてよ、これは、最初は気づきだから、そこから始めましょうということで調査を取りました。これには田中教授に関係している学生さんにお手伝いをいただきながら分析、まとめまで全部おんぶに抱っこというような形ですけれども、とてもいいものができたと思います。なかなか公表できない部分があります。ただいま決裁を取っていて、今日は担当科長は来ていませんね。担当科長が一字一句「三浦、これは何だ、これは分かりづらい」「まずは読んでください。読むことによってあなたの3月の議会答弁に役立ちます」ということで渡して、まだ決裁は下りてきていません。

その一次調査は本当に簡易版です。それが終わって二次調査、これは文部科学省の教育者会議が行ったそれに準拠しています。それを行ったのは小、中2校ずつ、それも一次検査で数字が少なかった学校、多かった学校、そういうものをベースに文科省レベルでの検査というか、アンケート調査をしました。それと併せて教員の意識の聞き取り調査を実施しました、これは対象者16名だった。これは私どもが直接聞いたときには正当なお答えは来ないだろうということで学生に協力していただいて、とても上手な聞き方なのです。文字化されたものを見たら、わあ、上手な導きだな、さすが勉強していると感想を持って、ありがとうございます、ということです。

つづき

- 1月 校長会でH17方針通知(教育長名)
: 校内支援委員会、コーディネータを校務分掌に位置付ける
- 2~3月 コーディネータ学習会で次年度の体制づくりの検討(中学校区内1小学校をLD等の実践研究校に指定)

それで先月の校長会の席で、予算の絡みもありますから、17年度の教育委員会の取り組み、特別支援教育に関する考え方ということで教育長名で文書通知をしまして、校内の支援委員会というもの、それとコーディネーターをすでに指名されていますけれども、その方々を校務分掌、モデル地域ではすでに校務分掌の中に位置付けております。この校務分掌の中に位置付けることによって既存の組織の整理もできるだろうということが1つの目的

にあります。そして意識付けにもなるだろうと。今後については2月、3月はその取り組みについての検討、どんな手立てでやっていいかというようなことを検討していけるかと思います。

H17実践研究校での取り組み

- 4月 研究実践校指定(5小学校)
コーディネータ指名・校内委員会設置
- 6月 PRS(1・2年生)・SPI(要対象者)検査
- 7月 評価・観察
- 8月 要支援対象者検討
保護者面談 各種検査実施
(WISC-Ⅲ、K-ABCその他)C・T

はAD/HDの絡みで田中教授が監修本で出しております中にSPIという検査があります。それも合わせてバッテリーを組みながらやっていければなと思っております。それをどう使うかを観察しながら8月から9月にかけて活動を要支援者というものをある程度確認しながら保護者面接が可能であれば保護者面接をして、各種検査を行っていく。そして、短期目的、長期目的というものを設定しながらどのような流れの中で検証をしていきたいなというふうに思っております。

つづき

- 9月 保護者面談 各種検査実施
アセスメント・IEPミーティング・IEP
- 12月 短期目標評価
- 1月 校内委員会評価 短期目標再設定
- 3月 IEP学年評価 引継ぎ
研究事業まとめ

それ以降で考えていること

- 特別支援教育を「当たり前」の意識→定着化
- 特殊教育の質の低下防止方略検討→特殊統合
- 大学・地域資源の学校導入→官・学・社連携
- 情報交換・管理(イントラネット)→合併・遠隔地対応
- 療育から就労までの「自立・自活」を目標とした支援の一元化→就労カンファレンスチーム設置
- 5歳児健診(相談)の実施→ブランクの解消
- 教育センターの設置→支援・研修体制の充実

来年度は15校の中、中学校は5校あります、その中の1つの小学校を指定して、LD等ということ、気づきのある子どもがどのような形で、いったいどのような手立てができるのかということを実際に検証してみようと5校を指定することにしました。具体的にどんな手立てでやったらいいのかということがあります。標準化されている検査というのが私の知り得ている中ではPRS、隠岐先生と森永先生が日本語訳をされて出しているもの、それをまずベースにしたい。それと行動面では

その一方で考えていることという部分で、特別支援教育というのが特別なものではなくて当たり前なものだよというのが、特別と専門性とか、専門的なものという言葉は外していけるような取り組みができればというものを根底に持って進んでいきたいなと思っております。そして特殊教育、特殊学級がどうなるかというのがまだはつきりされていません。

昨日、奈良教育大学の先生もいろいろお話をなさっていたんですけども、やはり特殊教育、今まで培ってきたものを閉鎖するわけにはいかないだろう。じゃあ、市でも何らかの形で今、分散されているような特殊学級というものに集中して、市のお金を出したっていいじゃないだろうかというような思いはある。質の防止ということはまだ十分に考えていかなくちゃいけないなど。それとある資源はたくさん活用したい、地域内にもあるだろう、教員免許を持っていないけれども、関心を持っている方々のお手伝いもいただきたい、または大学で研究なさっている

の方々、今回は学生に協力していただきました。とっても有効性があると思います。学校現場もかたくなに外からの介入というものを拒否していた学校も校長以下、柔軟な考え方に変わってきています。これは今回のアンケート調査をした大きな成果だと思っております。

それと情報交換の、このイントラネットというのは、閉鎖されたインターネットと思ってください。メールでのやりとりがそこでできますよと。外からも侵入できないというやり方です。療育

から就労まで、これは一元化をしていきますよ。そして5歳児健診、これは田中教授もおっしゃっていますけれども、どうしても法定の3健からの2年間のブランクで子どもの発達が著しくあるときに、何らの手立てもできないというのは、これはいかがなものか。できる限りお金の掛からない5歳児健診と言わないまでも5歳児相談というものに結び付けていければ考えています。教育センターの設置というのは当然のことだと思います。この専門的なまずは教員が研修をする場が近場がないというのが1つはありますし、保護者の教育に、子育てというよりも教育に関しての相談ができる場所がない。これも早急に立てていかなくちゃいけない。これは教育プランという中にも位置付けています。

これまでで感じたこと

- 特別支援教育はTEACCH手法で！
- ↓
- 理解の構造化＝ねらいの明確化
- 手法の構造化＝5W1Hでの明確化
- 組織の構造化＝役割の整理と明確化

構造化によって

- 学校資源の明確化(年度ごとに整理)
- ☆ 人的資源(教職員等・地域・大学等)
- 支援に関する時間的資源
- 経費的資源
- ☆ 施設設備資源
- 支援に関する経費的資源

このことから、どんなことを、どこまでできるか？

最後に

- 教育委員会でも
- 学校、幼稚園、保育園でも
- 家庭でも
- 地域でも

- それぞれの役割を、背伸びしないで、手をつないで、できることをきちんとすることが大事

これまでは構造化をして明確にしていく、これは児童生徒だけじゃなくて、教員、学校の中の構造化、明確化というものをきちんとしていかなくちゃいけないだろうと考えています。それで年度ごとにどれだけのリソースが学校内にあるんだらうと、それを評価していかなくちゃいけない。できないことまで目標として設定しても、これはいかがなものか。できることを確実にという、下に書いていますが、そういう思いがあります。感じたことです。すべての方々ができることを、きちんとということところが大事だと思います。

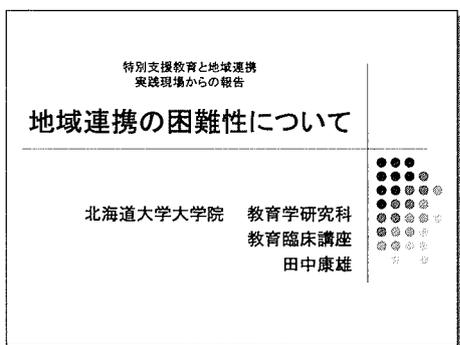
それでこれで本当に最後としていますが、療育は教育で、特別な教育的支援を必要としている子どもが、社会で自立や自律、自活というものをするために、さまざまなスキルを身につけるためロールプレイを行っている、掛詞で期間、そして機関、だから役割をきちんと果たしましょうという、私に対する何といいますか、戒めでもないけど、何か例えて言ってください、ということで終わります。ありがとうございました。(拍手)

3. 地域連携の困難性について

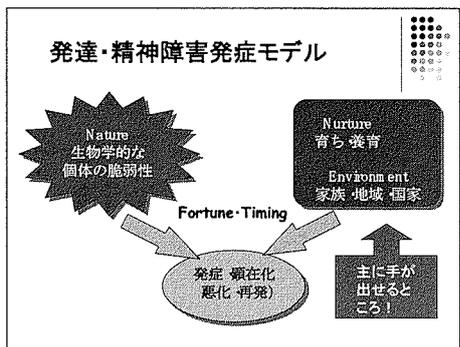
田中 康雄（北海道大学教育学研究科教授）

（司会：田中） ありがとうございます。これで実践現場からの報告ということで、上富良野のことばの教室、学校現場からの地域への働き掛け、そしてまた今、三浦主査の方から教育委員会というトップダウン的なところでの考え方、石狩での取り組みというのを話していただきました。

午前中の時間が少し短くなってきたので、私の方はそれほど実践というよりも、ここ3年ぐらいやらせていただいた、教育現場を中心とする地域連携、治療としての地域連携がどうあるべきかというテーマをいただきまして、いろいろあれやこれやとやっていたんですが、結局結論からいくとこのタイトルにあるような地域連携は難しいということに気づいてしまった、当たり前のところなんです、そのデータを簡単にお話して、午後の指定討論、あるいは皆さんとのディスカッションに回したいなというふうに思います。



基本的にはずっと今までお話をさせていただいて、何らの発達のつまずき、あるいは何らの障害と呼ばれるものなんです、もともと脳の脆弱性、あるいはもろさ、あるいは育ちというものが運やタイミングの中で障害化されるのだらうというふうに考えたモデルです。生まれたときに何らの外傷体験があったとしても、それからすぐに発達障害が、すべてが顕在化するわけではございませんし、極小未熟児がすべて何らかの発達障害を負うというような一律では話せないというところ、いろいろな他要素が含まれていくものです。



その中で我々がもし手が出せるのであれば、環境要因に対してどう手が出せるか。そんなこともあるのでずっと前回のシンポジウムの十勝のメンバーや今回の上富良野、あるいは石狩の取り組みというの、いわゆる周辺をどう足並みをそろえていくのか、いや、足場を築いていくのかという話に集結しているのであろうと思います。軽度発達障害は生涯にわたる障害である。

包括的な対応の主要原則

- 軽度発達障害は、生涯にわたる障害であり、適宜生活支援を必要とする
- 早期対応が望ましいが、そのためにも早期の気づきが求められる
- 親、教師などの関係者、子ども本人に対する相互支援のもとでの対応が必要不可欠であろう
- 対応プランは適宜見なおされるべきであろう

→連携・ネットワークへ

そして、自立も含めて生活支援は適時必要だと。何度も強調されておりますが、早期の対応が望ましい、そのためには早期の気づきが求められる。

これはぜひ、午後にディスカッションをしていただきたいと思うのですが、この早期の気づきが、善意からの抽出であっても、それが決して善意ではないというようなこともあろうかと思いますが、まず気づくことから始

めるということには、どうしてもスタートがそうなってしまいます。

親、教師などの関係者、子ども本人に対する相互支援の下での対応。いわゆる誰かが頑張ればということでは收拾がつかない、お2人がいみじくもお話をしたように、他職種が手を携えてというような相互支援という形になります。そして、子どもの成長や地域性や関係者の状況、さまざまな要因の変化によって、適時、対応プランが見直される。そんなことをやっていくためには、今日のお2人の話は、気づいて、本当に走っている2人なわけですが、2人だけではなかなか、1人が頑張れば地域がというわけではありませんから、やはり地域連携ネットワークということが必要なんだということです。

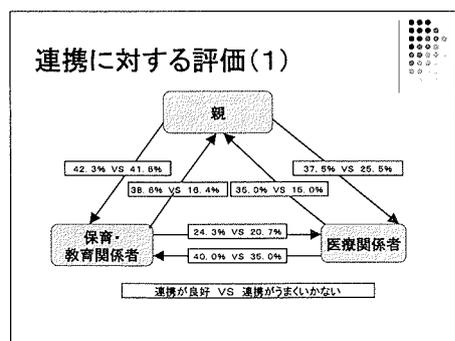
(2002年度)
自助・支援グループ活動の調査結果

- 軽度発達障害のある子どもたちの自助あるいは支援グループの現状と課題を調査した(総数485名)
- 参加状況:
 - 積極的な参加の過半数は親であり、消極的な参加の約半数は保育・教育関係者であった
- グループに対する満足度:
 - 親は満足と不満に2極化された。保育・教育関係者の満足度は高く、親の満足度との違いに有意差があった

それはどんなことかと言いますと、これは2002年度に全国の自助・支援グループ、主にと診断をされているというふうな支援グループのアンケート調査でした。ただ、もうすでにご存じのように、軽度発達障害は1つの診断名でくくれるものではございませんので、その団体の中にはさまざまな障害のある子どもたちが含まれ、その子どもたちの親、あるいは関係者が入っているというふうに理解しています。485名にアンケート調査をしております。

こういったグループ活動、いわゆる懇話会とか学習会とか研修会というようなさまざまな、あるいは親と関係者の会、あるいは親の会というような名前があると思うのですが、ここに参加状況としてあるのは積極的に参加しているのは、やはりほとんどが親であるということでした。消極的な参加は保育、教育、医療の関係者ということで、特徴的なのはやはり大きな講演会とか、そういうときには保育、教育、医療関係者は登場するのですが、定例の毎月の定例会には本当に親ばかりが集まるというような状況が全国的にあるようでした。

そういった中で、このグループに参加している満足度と言いますと、親は非常に満足しているというグループとまだまだ不満である、もうちょっといろいろな展開をしてみたいというような、



さまざまな要求の中に二極化されておりました。消極的に参加している医療、保育、教育関係者は、それにしてもこのグループに対する満足度が高いということが象徴的なデータだったと思います。

もう1つ、お互いがお互いに対して連携、協力関係が取れていますか、取れていませんかというような数値を出しました。ここの数値がちょっとお手元の部分では分かりにくいと思いますが、このように親と保育、教育関係者、医療関係者の中では数値的なばらつきがあります。

連携に対する評価(2)

- 親は、関係機関と良好な連携が取れているとは評価していなかった
- 関係機関は、親と比較的良好な連携が取れていると評価しがちであった
- 関係機関どうしは、それほど良好な連携が取れているとは評価していなかった
- 「連携・ネットワーク」は、実際には難しい

→なぜ(それでも)求められるのか？

文章でまとめますと、親は関係機関、保育、教育関係と医療関係、両方に対して、決して良好な連携が取れているというふうに評価しておりませんでした。一方で関係機関は親に対して、比較的良好な連携が取れているというふうに評価しがちで、ここに大きなずれがございました。

もう1つ、関係機関同士が横のつながりとしてどうなのかということになりますと、ここがまたとんとんなんですね。連携が良好だというふうな判断をしていない、手を携えてといいながら、良好な関係が取れているという評価をしていなかった。支援・自助グループというところに会費も払いながら自主的に参加しているメンバーの中でもこういうデータだったということを考えると、そこに参加していない方たちの判断は推して知るべしだろうということで、連携ネットワークというのは、実際に難しいだろうと。じゃあ、なぜそれでも求められるのかということでした。

日常の子どもを巡る様子

責任の追及(しつけ、養育姿勢批判、学習指導の徹底した要請)
 疾病性としての認識(医療、その他へ速やかに相談に行くように指示)
 相談機関への期待と失望、偏見(専門機関の少なさ、予想外の展開、衝突)

保育・教育側 ←→ 養育者側

責任の追及(専門的立場からの指導力の要請)
 事例性としての認識(機関内での調整を指示)
 相談機関への期待と失望、偏見(専門機関の少なさ、期待はずれ、障害観)

衝突・悪循環からの打開を求めて!

これは今日、お話ししていただいたように親側の立場から言いますと、保育、教育に対する要請は日に日に高まっております。特別支援教育も始まるというようなことから、専門的な立場から指導力を発揮してくれるんだろう。あるいは人間として、人として我が子を我が子として教育の現場、保育の現場で調整してくれるんだろうという希望。もう1つ、親御さんの中にはかなり早い段階で児童相談所や医療というところで相談をし、そこに対するある期待を持ち、あるいはそこで失望を受け、あるいは偏見にさらされたというような専門機関に対する期待外れや障害観というものがあるのだろうと。

保育、教育の方々もどちらかという今日、教育現場の方々もたくさんおいでだと思うのですが、まさにこういった子どもにある何らかつまずきということにのみ、目が速やかに行ってしまいますと、疾病性障害としての認識から医療その他に速やかに相談に行くようにというような指示をしたり、あるいはしたがるというような事象が出てきます。一方では、それができないという中で悶々としてしまう。その部分を、障害を越えたところで、また親にしつけ、対応として頑張っていただきたいというような要請がどうしてもいってしまいます。また、保育、教育の部分も、先ほどの横の連携が決して安定していないというように、専門機関に対する予想外の展開、衝突というものもございます。病院に紹介してみたんだけど、学校が逆に批判をされてしまって、紹介をしない方がよかったとか、どの病院に行くんだというようなことで、非常にその専門機関に対する期待というものが輻輳しているというようなことでした。こういった部分では非常にぶつかりやすいわけですね。別に最初から敵対感情はないわけですがけれども、保育、教育側のその現場の理解と対応、親側の現場の理解と対応というところではどうしてもぶつかってしまう。

気づきとネットワークのタイプ(1)

- 養育者の気づきから始まる(養育者から保育・教育現場、相談機関に相談・連絡がいく)
- 持ちかけられた機関の対応力が問われる
- 養育者の心理状況が常に安定しているとは言いがたい
- うまくいくと成果は大きいですが、深くと養育者に及ぼす心理的な傷は深く、長く後遺症(失望や後悔)を残す
- 一期一会的になりやすく汎化しにくい

具体的に述べていきますと親御さんが我が子の変化、我が子の何らかの生きにくさということに気づくというところから始まるのが気づきネットワークへのタイプ1というふうに考えてみました。親御さんが保育、教育、あるいは相談機関に相談を持ち掛けるわけですが、持ち掛けられた機関の対応力というのがここで問われるわけです。

従来から言われているように、2歳、3歳だとまだまだお子さんはこれから育っていくから、そんなに心配がないよ、様子を見ましようということ、いわゆる消極的な放置、ネグレクトというような形になってしまう事例もありますし、あるいは早い段階で、それは大変だということで、早々に診断が付いてしまい、それがはっきりとした根拠がないというようなことも多々あったと思います。その機関の対応力、そういうレベルだけではなくて、親のしつけがなっていないんだ、親の対応が悪いんだというふうにせっかく相談に行ったのに、傷ついて帰ってくるというようなことも少なくないわけです。

もう一方では相談される、気づかれたからといって、その親御さんが非常に客観的に第三者として我が子を見ているかということは、そんなはずはありませんから、非常にそのとき、そのときの心理状況によって安定、不安定という狭間の中で揺れながら相談を継続している。そういう中で、これが展開として保育、教育の現場と親御さんが手を結べるというような連携ができるということになると、これは、成果は大きいだろうと。しかし、つまずくと気づいた親御さんの心の傷は深く、長く、後遺症を残す。いわゆる医療、学校現場、保育現場に対する失望や後悔というものを残すだろうと。うまくいったとしても、それはAちゃんという、1人のお子さんに対するかかわりが成立したということで一期一会的になりやすくて一般化しにくいということがあり得るだろう。

気づきとネットワークのタイプ(2a)

- 現場(担当者)の気づきから始まる
- 現場、相談機関への開会・相談・連絡が遅れる
- 基本的に抱え込みやすく、ぎりぎりまで頑張ろうとする
- 連携は、気づいた人の機動力と周囲の支えがものをいう
 - 必然性(個人の意思)と偶発性(周囲の支援者とタイミング)
- 活動自体が、時間的制約を受けやすい
- 時に善意だけの誤解(努力あるところに問題が解決する、愛情はすべてを凌駕するなど)から展開してしまうという危険性もある
- うまくいくと現場組織に一定のシステムが形成されるが、深くと気づいた人に与える挫折感が大きい

担当の先生が気づいたところから始まるタイプ2のaというふうに私は考えました。これは先ほど2人のお話にもありましたように、担当が気づいて、さあ、じゃあ組織が動くかということ、そういうことではどうも我々の経験からすると違うような気がしています。担当の先生がお1人で頑張るといふようなところが比較的多く、相談機関への紹介、相談、連絡というのが遅れ、ぎりぎりまで本当に頑張っていく。気づいた人が周囲にどうい

うふうに話を持ち掛けていくのかというだけではなくて、周囲がそれをどう受けとめるかということになります。

象徴的なのは、例えば保育所あたりでこんな話をしますと、そんなことをしたらお母さんやお父さんが怒ってしまうのでやめるとか、うちの園は子どもを障害児扱いするのか、なんていうふうなうわさになってしまったらとんでもないから、それはもう言わないようにというふうに封印をされるというようなことももちろんあるわけですね。こういった周囲の支えがどのように動くかということで、また変わってくる。気づいた方がじゃあ、どれだけ頑張れるかといひましても、その子と

1対1で仕事をしているわけではございませんので、時間的な制約を活動自体が受けやすい。

また、非常に善意溢れる気づき者がかかわる中で誤った対応というところがあります。1つは努力あるところに問題が解決するというので、漢字を100回書いてみようとか、愛情はすべてを凌駕するというので、すぐにこうそばにいて抱きしめる、肩をなでる、手を結ぶというような接近を非常に不安がる子どもたちに対して誤ったかかわりになってしまう。それはこちらの気持ちが伝わらないということで、かえってそのお子さんや、お子さんの周囲を攻めてしまうというような危険性ももちろんあります。

ここもうまくいくと現場組織に一定のシステムが形成され、この気づいた担当者の自信というものは確固たるものになりますが、つまずくとこの気づいた担当者は挫折感が大きいだろうと。

気づきとネットワークのタイプ(2b)

- 現場(担当者以外)の気づきから始まる
 - 担当者への相談・連絡が遅れやすい
 - 担当者に働きかけることにも困難性がある
 - 気づいた人の組織内の立場、位置付けが動きを決定する
 - 必然性(個人の立場)と偶然性(周囲の支援者とタイミング)
 - 時に担当者とさまざまな衝突を生むこともある
 - うまくいくと現場組織に一定のシステムが形成されるが、疎くと孤立してしまうこともある

担当者以外が気づくという場合ももちろん特に学校現場でよくあります。これは養護教諭がよく気づくことです。気づいた養護教諭がじゃあ、速やかに担任に連絡、相談ができるかということ、これもまた私のつたない経験ではうまくいかないところがあって、そんな保健室の先生に言われるまでもないというような部分があり、ここでぶつかってしまう。働きかけることの困難性、あるいはその気づいた担当者以外の教員、養護教諭のその組織の中での力関係といいますか、影の校長と言われるぐ

らい大きな動きをもってずかずかっに行ければうまくいきますが、まだまだそういった立場にない方ですと遠慮をしましてうまく言えないというようなところも出てくるだろう。

そんなことで担当の者との衝突を生むということももちろん出てきます。うまくいくと現場組織にシステムが形成されますが、つまずくとその担当者以外の気づいた方が孤立をしてしまうというようなことも出てきます。

気づきとネットワークのタイプ(3)

- 医療・相談機関から始まる(養育者と共に現場へ働きかける)
 - 現場への連絡が迅速
 - 養育者の思いと常に一致した思いではない
 - 時に医療的情報が周囲を傷つけ、理想的対応の追求が周囲を追い詰めるという危険性もある
 - うまくいくと現場組織に一定のシステムが形成されるが、疎くと相互不信感という長い闇を生みやすい

医療、相談機関が何か鍵を持って始めてみるとどうなのか、それでいいのかということもありますが、唯一よいとする場合は連絡が迅速だということではないかと思いますが、連絡が迅速であっても養育者と同じ思いで常に伴走するわけではないということもあります。

時に医療的な情報が周囲を傷つけてしまう。これは私も何回か経験があるんですが、医療的な情報を流したところ誤った形でそれが流布されてしまう、あるいは守秘義務というものがまだ十分ではないために校内でA君の診断名が、A君やA君のご家族に無断で公表されてしまうなんていうようなこともありました。

理想的な対応、1対1でこのように、このようにというふうをお願いすることが担任を追い詰め、そんな大変な、むちゃなことではできないというような話になり、医療側の情報はまったく役に立たないというような現場を知らないんだというようなことで却下されることもございます。うまくいくと現場組織に一定のシステムが形成されますが、ここでつまずくともう医療、相談機関が学校に

足を踏み入れるということについての不信感というものができて、これが比較的長い闇を生むというようなことがございます。

いろいろな地方でも、学校の中に医療、相談機関が足を踏み入れることに非常に緩やかなところと、非常にハードなところがあって、そのハードなところは、かつてそういうとても大変なぶつかり合いがあったというような歴史があったというふうによく聞きます。

定義:連携・ネットワークとは

- 連携とは、複数の者(機関)が、対等な立場に位置した上で、同じ目的を持ち、連絡をとりながら、協力し合い、それぞれの者(機関の専門性)の役割を遂行すること (田中)

ここでお2人の方もいみじくも伝えていて、今回のシンポジウムの1つのテーマにもなっている連携ネットワークというのはどんなものかということです。正式な定義がないので、取りあえず便宜的に複数の者が対等な立場に位置した上で、同じ目的を持ち、連携を取り合い、協力し合い、それぞれがそれぞれの専門性の役割を行うんだということを1つ私は定義をしました。

連携スケール

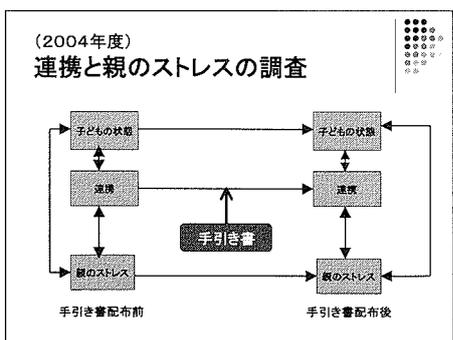
- 5つの項目から総合的な評価をする
 1. 対等な立場に位置している
 2. 同じ目的を持っている
 3. 連絡をとっている
 4. 協力し合っている
 5. 役割を遂行している

連携スケールというものを作ってみました。対等な立場に位置しているだろうか、同じ目的を持っているだろうか、連絡を取り合っているだろうか、協力し合っているだろうか、役割を遂行しているだろうかというようなアンケート用紙です。

連携の手引き書の内容

- 立場の対等性
 - 話し合いに臨む前に
 - 思いや気持ちをどう伝えるか
- 目的の共有
 - 障害について
 - 子どもについて
- 連絡の量と質
 - 連絡方法
- 協力体制
 - 感謝
 - 折り合いの付け方
 - 評価
- 役割の明確さ
 - 子どもにある課題について
- その他

同時に、よりよい連携をするための手引き書というのをA4で4ページほどの簡単なもので、立場の対等性、あるいは目的の共有、連絡の量と質、協力体制について役割の明確さ、子どもの課題について、その他というような項目について、ある意味接遇的な話し合いに臨む前には落ち着いて向かい合えようとか、思いや気持ちを伝えるためには、これこれ、このような手立てを取りましょうというような、そういったことを手引き書に作りました。



これを2004年度に調査をいたしました。まず最初に何らかの診断名が付いて、連絡、連携を取り合っているというふうに仮定される親と担任にアンケート用紙を配りました。子どもの状態を把握し、連携の状態を把握し、親のストレスの程度を測りました。途中で手引き書を配布しまして、それを読んでいただいて、しばらくしてからまた同じような3つの項目を調査したということです。

調査した諸項目について

- AD/HD-RSによるAD/HD度
- 連携スケールから
 - 立場対等性
 - 目的の共有
 - 連絡の質と量
 - 協力態勢
 - 役割の明確さ
- Parenting Stress Index (Short)の日本語版
 - 親の悩み
 - 親子の機能不全
 - 困難児童

養育者について

- 養育者では、事前調査のみで中断した事例が58名、事前事後と最後まで協力してくれた養育者が75名であった。それぞれの項目における平均値に有意差は認められなかった。
- 事前、事後ともに、連携スケールのうち、目的の共有、連絡の質と量、協力態勢、役割の明確さの4項目において高い相関を認めた。
- Parenting Stress Index (Short)の日本語版では、事前、事後ともに親子の機能不全と困難児童の2項目に相関を認めた。
- 事前事後の同一項目では、立場対等性における項目で有意差が認められた。

結果です。親御さんですが、事前調査のみで中断した事例と、事前事後、いわゆる手引を配布する前後で最後まで協力してくれた方がこのぐらいの人数がいました。ただ中断した事例の方がどうだったというようなことは、すべての項目において有意差がなかったということです。

事前事後ともに連携スケールのうち、目的が共有され

教師について

- 教師では、事前調査のみで中断した事例が61名、事前事後と最後まで協力してくれた養育者が54名であった。各項目の平均値に有意差は認められなかった。
- 事前、事後ともに、連携スケールのうち、目的の共有、連絡の質と量、協力態勢、役割の明確さの4項目において高い相関を認めた。
- 事前事後 間での同一項目で、全項目で有意差が認められなかった。

結果のまとめ

- 個々のAD/HD度において、連携の度合いや養育者のストレスには相関が認められなかった
- 養育者のストレスは、親子の機能不全と養育に困難を感じさせる子どもで高い相関を認め、親の悩みは両方で相関を認めなかった。
- 連携の5因子では、養育者も教師も目的の共有、連絡の質と量、協力態勢、役割の明確さの4項目において高い相関を認め、全体に良好な結果が認められた。
- 一方、立場の対等性は、他の4項目に比較して低い。
- 連携の手引きを介しての変化は、「養育者における立場対等性」の改善のみであった。

—RSに準拠したもので、度インデックススケールというものをちょっと使ってみました。連携スケール、あるいは親のストレスについてはParenting Stress Indexというものがあるので、この日本語版を使い、親の悩み、親子の機能不全について、困難児童という3つの項目が測れるようなものを使用してみました。

結果です。親御さんですが、事前調査のみで中断した事例と、事前事後、いわゆる手引を配布する前後で最後まで協力してくれた方がこのぐらいの人数がいました。ただ中断した事例の方がどうだったというようなことは、すべての項目において有意差がなかったということです。

事前事後ともに連携スケールのうち、目的が共有されている。連絡の質と量、協力体制、役割の明確さという4項目は高い正の相関を認めました。Parenting Stress Indexについては親子の機能不全と困難児童というところ

で、どうも相関があるようだということ、そして、事前事後の同一項目で親御さんに尋ねたところ、立場の対等性についての有意差が認められて、事後の方で少し相手から立場が対等のように認められているような感じがするという評価が得られました。

教師についてもまったく同じでした。目的の共有、連絡の質と量、協力体制、役割の明確さは高い正の相関でした。こういった調査に基本的に参加して協力してくれるという方々に限定した結果になりましたから、それは目的も共有しているわ、連絡の質と量も安定しているわ、協力体制もよいわ、役割も明確だわというのは、ある意味結果を追う前からの自明だったわけですよね。その中でも立場の対等性というものが有意に低い項目でした。非常にほどほどに、あるいはよく取れていると思うというポイントをかなり下回るんですね。この立場が対等ではないということが、どうも前提にあるのではないかと思います。ここだけの調査をまとめますと、連絡の連携の度合い、養育者のストレスと子どもさんの程度というものについては相関がありませんでした。親御さんがストレスを感じるの親子がうまくいっていないという部分と、非常に養育に困難を感じさせる子どもということ、親の悩みというものはちょっと別次元のものだったというような感じがいたします。これはきっと親御さんのパーソナリティーの問題がそこに出てくるんだろうなというふうに想像していました。

連携の因子については、先ほどから言うような4項目で、いわゆる立場の対等性については非常に低いという、いわゆる対等ではないというような、お互いの認識というものが見て取れたということです。ただ、2002年度にやったときには、学校関係者は親と連絡が取れている、うまくいっているというふうに判断していたわけですから、それでさえもお互いが何か同じ土俵に立っていないんだという認識をどちらも持っていたというのは面白い結果だなと思いました。

自由記載を書きいただきました、ほとんどが親の言葉でたくさん書いてもらったものの一部の

自由記載から抜粋(1)

- 「連携の手引き」を読むことで、自分自身の姿勢を見つめる機会となりました。わかっているつもりでも先生方へのアプローチは誰に教えてもらうわけではないので、気がつかないこともあります。(親)
- 教師用の「連携の手引き」はボリューム的にふさわしいものです。あまり厚いと読んでくれません。(親)
- 「連携の手引き」は父用、母用、教師用のほうがよかったです。(親)
- 連携のよいマニュアルが出来ることを祈っています。(親)
- 初回と比べて心の変化がありました。先生への信頼が深まったように感じます。(親)
- 担任でない先生には理解してもらえない。(親)

抜粋です。「連携の手引きを読むことで自分自身の姿勢を見つめる機会となりました。分かっているつもりでも先生方へのアプローチは誰に教えてもらうわけでもないので気がつかないこともありました」「連携の手引きはA4で4枚ですので、ボリューム的にふさわしいものであり、あまり厚いと読んでくれません」。この親御さんはきっといろいろな本とか資料を提出していたんだろうな、なんていうふうに想像しました。

お父さんが1人だけ書いてくられて、お父さんとお母さんでも気持ちが変わるから、父親用というのでも欲しかったというようなこともありました。よいマニュアルができること、あるいは初回と比べて心の変化があった、先生の信頼が深まったように感じた。担任では生徒にやっぱ先生には理解してもらえていないな。

学校側と争うのではなくて、子どもと同じ方向に向くということの大切さが分かったと。また先生も神様じゃないから、思いを伝えることはやはり難しいんだ。連携の難しさが分かったと。ある

自由記載から抜粋(2)

- 「連携の手引き」で学校側とは争うのではなく、子どもために同じ方向を向いていくことの大切さを痛感しました。(親)
- 先生も神様ではないので、思いを伝えることの難しさを知りました。(親)
- 改めて連携の難しさを知りました。(親)
- 次は行動面への対応の手引きがほしいと思います。(親)
- 「連携の手引き」で学校側とは争うのではなく、子どもために同じ方向を向いていくことの大切さを痛感しました。(親)
- 先生も神様ではないので、思いを伝えることの難しさを知りました。(親)
- 改めて連携の難しさを知りました。(親)
- 次は行動面への対応の手引きがほしいと思います。(親)

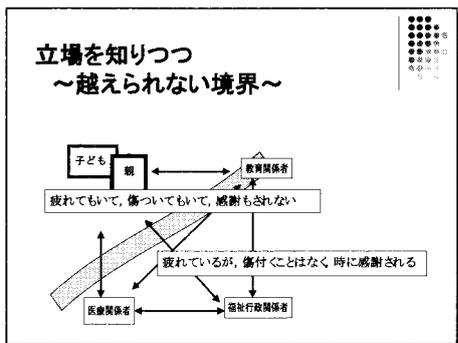
いは、これはご批判だったんですけども、そんな接遇ではなくて、子どもの行動に対してどう対応したらよいかという具体的な手引きが欲しいということはいくつかの意見の中にもございました。

自由記載から抜粋(3)

- 親にもサポーターが必要です。(親)
- これまで学校側とのコミュニケーション不足を反省しました。(親)
- 連携とはお互いがお参りすることと学びました。(親)
- 親との連携は教師にとっても大きな目標です。話を聞く、共感する、世間話を楽しむことです。(教師)
- これまで付き合いにくい親と想っていましたが、きわめて常識的な親であることがわかりました。(教師)
- 子どもへの対処方法の手引きを期待します。(教師)
- 連携の手引き、助かりました。連携を取るうちに母親が子どもと同じADHD傾向があることに気づきました。それも含めて対応できるようになりました。(教師)

「教師の方々にはこれまで付き合いにくい親だと思っていましたが、極めて常識的な親であるということも分かりました。親との連携は教師にとっても大きな目標で、話を聞く、共感する、世間話を楽しむということが大切だと分かった。もちろん、子どもへの対処の手引きを期待された教師の方もおりました。ある先生は、連絡を取るうちにお母さんが子どもと同じ傾向があることに気づき、それも含めて対応できるようになったというような意見もいただきました。

これはアンケートの前から日々のかかわりの中で我々が感じていたことです。教育関係者、福祉行政関係者、医療関係者と子どもと親というものが手を携えてネットワークを組むというモデルを考えたときに、最初は、私



は安直にこの真ん中の黄色い線を何も考えずに手を結び合えようまくいくんじゃないかというような幻想を持っておりました。

しかし長い懇話会活動や子どもの成長に一喜一憂する親や今回のいくつかの調査の中から、これはちょっとまたげない境界があるんじゃないかということを感じたわけです。具体的には子どもと親は疲れてもいて、傷ついてもいて、感謝もされていない。一方で我々は疲れては

いますけれども傷つくことは少なく、うまくいくと時に感謝をされるというような、その立場の違いというようなもの、またげないところがあるんだろうなど。あるいは我々はやっぱり親にはなれないということと、生きにくさを感じている子どもとまったく重ね合うということとはできないんだという当たり前のことなんですが、そこに行きました。

じゃあ、どうしたらいいんだろうかということなのですが、あくまでも街へ出る、現場に行くということの大事さだと思います。

課題(1) 往診のすすめ

- 取りあえず、街に出よう
- 実践の場に起きていることを、自分の目を通して見て聞いて、考える
- そこに在る人たちの状況を知ること
- そこに求められていることを知ること

→ 汎化を求めて

2つ目はそこでの理論整備をしていくことじゃないか。そして、三浦さんも言うていただきました、その評価についてどういうふうにやっていくのか、これについては1つは行動評価がまだまだ精緻化されていないということと、実践性との共同が必要だということ。また午後にもぜひ、ディスカッションをしていただきたいんですが、そういうふうに抽出していきこうとする姿勢の中に、危機感がないだろうか、危険性がないだろうかということもございます。

課題(2) 理論整備と評価と継続性

- 目前で起きていることの説明と理解のために理論整備を
- 環境を視野にいれて
- 評価: 活用と生成に向けて
- 評価方法の進化を目指して
 - 子どもの認知・行動評価の精緻化
- 評価を対応にどう生かすか
 - 実践者との協働
- ネットワークの継続性: 誰のための連携か?
 - 小さな境界線の肥厚した世界の乱立にならないために、理念・哲学の絶え間ないすり合わせを

ネットワークの継続性というものを実は今回、当初考えたのは、3~4年ほど前から各地にネットワークと称

する団体ができてはつぶれ、できてはつぶれているんです。当初の思いから始まった他職種連携という理念が継続していくうちにぶつかっていくんですね。そこで相いれなくなってくると、本当に修復不可能な形で壊れていくという団体も私たちはよく見聞きしました。

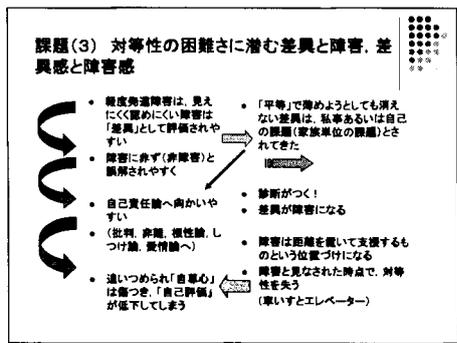
実は十勝も何度も危機的な状況に直面しているわけです。そうやって考えてみますと、やはりこう誰のための連携なんだろうか、誰のための組織なのだろうかということを考えていく必要があるだろう。小さな境界線がだんだんだんだん分厚くなって、1つ1つが線ではなく、本当に点として

乱立していくというような、本来のネットワークとは逆行するような展開になるのではないか。あそここの団体とは手を結ばないとか、あそこはもう口も利かないとか、あいつには出ていってほしいとか、そういうような展開というのが基本的に日本人にあるんですね。

それであるお医者さんは、もうこの団体には絶対に首を突っ込まないからというようなことを東北の方で聞いたなんていうようなこともありました。そもそもの理念、哲学というものをすり合わせしていかないと厳しいということです。

今回、対等性がなぜ困難なのかということ、ちらちら考えてみました。軽度発達障害というの

は、もともと見えにくくて認めにくい障害ということですから、この段階で障害というよりは違いとして、何かこの子は差異、違いがあるんじゃないかというふうな評価が出てくる。しかし、この差異、何かちょっと違った子だよねというものは、どうも我々の中では平等で薄めようとしていこうとする。そうすると、これは結果的には障害なわけですけど、薄まらないわけですよ。



その思い、愛情論だけでは薄まらない。そうなると我々は、私事、あるいは自己の課題としてまた誤解

をしてしまう。そうすると障害じゃないと誤解されやすいという流れのほか、これは自己責任論だよというふうに向かっていく。万が一、診断が付くとこれまで差異として認めたものが障害になるんだと。障害になった段階で、障害というものは距離を置いて支援するものというふうな位置付けになり、スタンスが変わってくるわけです。自己責任論に向かっ追いつめられていくケースもありますし、距離を置いて支援するというのが実は、もうすでに対等性を失っているんだというふうな考え方もあります。

ある地方のお話なんですけど、ある学校の先生に「どうしてあの子はいつも教室から飛び出しているんですか」と校長に聞いたら、「分からないんですか、皆さん。あの子はAD/HDという診断が付いている子でじっとしていることができない子なんです。だから走り回させているんです」というふうに校長がフリーライターというか、ノンフィクションライターの方におっしゃったそうですね。

その段階で、いわゆるもう仕方がないことなんだというふうな諦念というか、あきらめというものが、それを乗り越えて、どうこの社会の枠組みに近付けていこうかというのを考えなかったというようなエピソードを教えてくださいました。だから、診断が付くということが戦略になるということではなく、診断が付くということが逆にあきらめになるんだというようなこともあるんだなということ、また学んだ次第です。

障害とみなされた時点での対等性を失うということの1つのエピソードは、もう数年前に政府広報のテレビで流れた、車いすの「ちょこっとボランティア」というコマーシャルをご存じでしょうか。車いすに乗っている青年が、エレベーターに乗るときに、エレベーターに乗り遅れてしまう。そのときにきちんと歩ける女性の方がつかつかと歩いて行って、エレベーターのボタンをピッと押してエレベーターを止めておいて、その車いすの青年を招き入れたと。これこそが指先1本ででき

るボランティアなんですよというふうに政府広報で出たんですね。

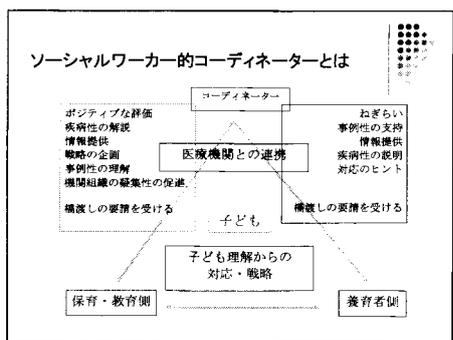
それを見たときに私は、本当に情けなくも、ああ、そうなんだというふうに思いました。数日後に、朝日新聞に頸椎損傷の会の代表の方からの投書がありました。「車いすを使用している人間がエレベーターに乗り遅れそうなときに、車いすを使用していない人間にボタンを押してもらおうということがボランティアというふうに位置されると、我々はボランティアを受ける者としてこれから一生を生きなきゃならない。そんなことは金輪際いやだ」というようなことでした。

ちょっと考えてみてほしいと。向こうから買い物袋を持って走ってくるおばさんがいて、エレベーターに乗っている私が、あ、これから乗るんだろうなと察知した瞬間に開くというボタンを押し続けるのはボランティアではなくて、共に共同のエレベーターを使う上での社会的エチケットという部分で押しているわけですよ。それが片や、こちらの方が車いすというものを使っている、それは障害というふうに位置付けられた瞬間にそれがボランティアに変わるということにすでに対等性が消えるんだというふうに、本当に当たり前のことをしていて恥ずかしい。

言っていて恥ずかしいんですが、そういうようなところが実は、軽度発達障害という子の見えにくさの中に潜んでいき、診断を受けることが決してハッピーではない、しかし差異という中に置かれることもハッピーではないという、この難しさが我々にはあるんじゃないかというふうに思いました。

その中でコーディネーターという分については、お2人の実践の中ではやはり非常に建設的にシ

ステマチックにやっけていこうというところを提示していただきましたが、我々はやはり、その人をどう支えるかというところから考えていきたいと思ひまして、親を支えるためのねぎらい、ここまで本当に困難な、大変なお仕事をずいぶんお1人で頑張ってきたという親に対するねぎらいと、その子の障害を越えた、差異を越えたところの子らしさということを共有するということがとても必要なんじゃないだろうか。



その上で、じゃあ、この障害に対する戦略はどうしたらいいだろうかというふうに考えるべきであろうと。コーディネーターは同じく保育、教育側に対してもその現場の方々をポジティブに評価をする、支えるというところから始まり、次に戦略を持った障害理解ということにいき、果てはそれを越えたところに、障害を越えたところにあるA君、B君に対する理解ということを共有していくことじゃないだろうかというふうに考えました。

関係機関同士がよりよい連携を目指すためには、その立場の対等性というのをまだ、私の中では非常に戸惑っています。対等性というものを強調すべきではないんじゃないかという部分と、しかし、その対等性というもののひずみを意識しながら向き合うべきじゃないかというようなこと。捨てるべきか、捨てるべきかということを考えて、まだまだ私の中では結論が出ておりません。ただ、互いの専門性を尊重すること、役割分担を明確にするということは、やはり互いの職場を知

関係機関同士のよりよい連携を目指して
～立場対等性の育成のために～

- 互いの専門性の尊重し、役割分担を明確にする
 - 互いの職場、職業を知ること
 - 現場の動きを体験すること
- 共通の言語で話ができるよう、対話に気を配る
 - 各々の現場でしか通用しない言葉は世界を広げない、理解を深めない
- 批判するまえに、まず「大変だね、ご苦労様」と声をかける
- 互いの支え合いが、当事者の支えに繋がる

らないと分からないなど。

僕は今日、三浦さんの話をしっかりと聞いたことは初めてで、いつも酔っぱらって夜、酒ばかりを飲んで2人で、やっぱり主査はすごいぜ、というふうに思ったわけですが、職場を知らない、職業を知らないと分からないなどというようなことと、共通の言葉ですね、分掌という言葉が、公務分掌というのがいくつかお2人からいみじくも出ましたが、私がまだあれが分からないですね。

公務分掌というと、公務文書という文章の方になっちゃうんですね。ああいう何か分けて手の上というように、あれがどういう意味なのか。あるいは加配という言葉も田中睦さんの方からも出ましたが、医療に身を置いた人間としては加配という言葉ほとんど知りませんでしたし、今もって公務分掌というのは何だろうというのが分からない。そういった共通の言葉で話ができる必要があるだろうと。

もちろん我々がAD/HDですとか、PDDですとかといって、教頭や校長先生が、「ああ、そうですか」と言って、1週間後に「先生方、PHCCは何でしたっけ？」というようなこととまったく同じ現象になります。そういうことを批判する前に、まず「大変だね、ご苦労さま」というふうに声を掛ける、何事もねぎらうという、おそらくその対等性、あるいは差異というものを乗り越える部分には寛容さというものが求められるんじゃないかというふうな思いが漠然とありますので、「大変だね、ご苦労さま」という声の掛け方から始めるべきだろうと。

我々こそが支え合うというようなことを経験していなければ、あの川の向こうの親と子どもという、あそこの難しいところを支えるなんていうことは、やはり困難じゃないかということをもまず意識しないと、せめてあの三角の横のつながりが、「うん、僕たちは連携が取れているよ」というふうに言えていない現実を考えたときに、そこから始めていく方が手っとり早いんじゃないかというふうに思います。

その話は実践というよりもこれまでの結果をお伝えして、田中睦さんと三浦さんというボトムアップとトップダウンという、いみじくもそれぞれの立場から出てきた話をちょっと側面的に補完した形になりました。

ここで1時間ほどの休憩を取らせていただきまして、お昼の時間が申し訳ないんですが、3時までに終了ということもございますので、1時15分から午後の部を開始したいというふうに思います。午後はまた別なところでいろいろな機会が札幌の中では行われているようですが、ぜひ、聞きっぱなしではなくて、一言、二言意見があるという方は残っていただいて、小さなやりとりでも結構ですので、議論が白熱することを期待したいと思います。これで午前中の部をいったん休止というふうにしたいと思います。どうも午前中ご苦労さまでした。

(午前の部・終了)

発表資料 (田中睦)

第3号でお伝えした臨床症状の①多動性②不注意③衝動性の中心症状のほかに、ADHDに関連したいくつかの症状を説明します。

④おこりっぽさ ADHDのある子どもたちは、自分のしたいことが止められたり邪魔されたりすると、腹を立てたり、かんしゃくを起こしてしまいます。これは、特に集団場面で生じやすく、幼いときには怒りが即座に「つきとばし」や「かみつき」という行為として表現されたり、ときに(どちらかというとADHDのある女兒の多く見られますが)有無を言わせぬ攻撃的な言葉を機関銃のように相手に浴びせかけるため、仲間はずれにされたり無視されるようになります。するとこれが本人にとっておもしろくなく上記のやりとりが繰り返される、という悪循環になります。

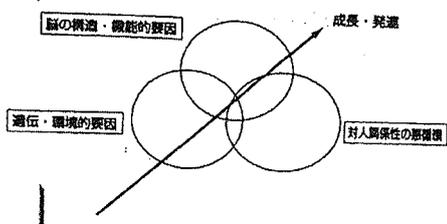
⑤学習障害・学習不振 ADHDのある子どもたちは、知的に遅れがないのに、学習の得手、不得手に大きなばらつきがみられることがあります。ひどい不器用だったり、根気が続かず中途半端になってしまったり、そそっかしい失敗やふざけたり、はしゃいだりして、結局学習が身につかないことが理由となる場合もありますし、後述する「いわゆる学習障害」がいっしょに見られます。

⑥二次的な障害 特に私が重要な問題と考えている点は、ADHDのある子どもたちにみられる、抑うつ、孤立感、劣等感といった情緒的問題と、反抗的な口論や乱暴な行為、あるいは頻回な嘘や万引きといった行動上の問題です。そしてこうして情緒・行動上の問題が子どもたちに不登校やいじめ体験などを生じさせ、悪循環のように繰り返されます。私は、この背景に、「自尊心の傷つき」や「低い自己評価」が潜んでいると思っています。(図1)

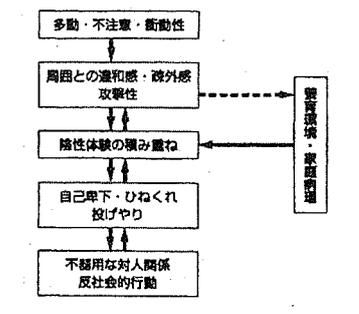
1995年に、われわれは33例のADHDのある子どもたちを対象にして、子どもの情緒的問題を検討しました。われわれは、ADHDのある子どもたちにおける多くの情緒的問題は、子ども側の器質的要因と、両親の養育態度を代表とした環境的要因から形成される部分があり、この両者が悪循環的に展開されると当時考察しました。(図1)

2. 原因 現在ADHDの原因は、まず第一に脳の構造・機能的要因が挙げられ、そこになんらかの遺伝・環境的要因が絡み合い、こうした傾向のある子どもとの早期からの関わりくさから、双方向的に生じる周囲との対人関係性の悪循環などが複雑に絡み合っていると考えられています。

(図2) 重なり合う原因



ADHDにおける情緒障害の成り立ち (田中, 毛利, 1995)



ADHDのある子どもに対して、安定した環境を用意することはとても大切です。「関係性は常に悪循環に陥りやすい」ということを私たちは充分理解しておくべきでしょう。このようにADHDの原因は、脳の構造・機能的要因に遺伝的要因が絡み合い、関わりにくさからの環境的悪循環が修飾すると考えられます。しかし、まだ決定的な結論は得られていません。私は、脳の微細な障害を強調した短絡的な意味づけや、何が悪い、誰が悪い、誰のせい、何のせいという感情的な「犯人探し」にだけは陥らないでほしいと思っています。今大切なことは原因追及ではなく、今、目の前にある「周囲のすべてを追い詰める問題」に対して、「(とりあえずの)最善の結論」を捨て、「具体的な対応策」を見つけたことです。このためには、関係者全員が束になって子どもと養育者を支えるために、手をつなぎあわせなければなりません。

わいわいふりりぽ

第4号 2004/06/11 ことばの教室

抜粋書籍「ADHDの明日に向か って」田中睦著 星和書店



あやほがし 信

親部会研修報告

1月22日(土)保健福祉センターかみんでビデオ研修を行いました。ビデオは『H16.10.19 旭川で行われた講演会「きこえとことばの教室と特別支援教育」講師、北海道大学大学院教授、田中原雄氏』です。視聴後ディスカッションをしました。事情によりビデオを最後まで上映していませんが、親部会に教職員でもある会員の初めての参加があり、教師として、親としての立場からの話題提供に、多くの事を学ぶことが出来ました。午後から始まった部会も話しが尽きることなく終了は日没を過ぎていました。まだまだ親としても学ぶことがたくさんあると感じました。とても実り多く、元気になれた部会でした。また、これからもお子さん同伴でも遠慮なくご参加下さい。



上富良野小学校を見学しよう!

昨年開催しました小学校見学を今年も予定しています。新一年生にとっては初めての場所でもあり、在校生も進級にあたって校舎や教室が変わります。環境の変化に敏感なお子さんも親子で一緒に楽しく見学してみたいかでしょうか?会場は親部会の会員が多い上富良野小学校となりますが、見学してから「ことばの教室」で約1時間の自由遊びも考えています。新一年生に限らず、他校の方もぜひどうぞ!



2月の親部会のお知らせ

早いもので懇話会発足から2年が経とうとしています。今年度を振り返り、また、来年度に向けて親部会として出来ることを皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。ランチしながらの楽しい近況報告もしましょう!今回はお弁当を注文しますので、2月18日までに親部会役員にご連絡下さい。



ハッスルママのひとこと

節分の日に息子(小1)の学級で「自分の中の苦手なオニをやっつけよう」と豆まきをしたそう。帰宅すると自分のオニは見つけられなかった息子が弟の「いやいやオニ」をやっつけると言い、家族での豆まきは「いやいやオニ退治」で盛り上がった。さて次回は自分の中のオニを見つけれぬかな?来年の話をするオニが笑うかも? Iママ

これからの予定

2月28日(月)

9:30~13:00

会場:社教センター倶楽休憩室

内容:この1年を振り返って

2月親部会例会

*お弁当を注文しますので出席の方は2/18までにご連絡下さい。

3月25日(金)予定

9:30~11:30

会場:上富良野小学校

集合:職員玄関(北側、1線)

内容:上富良野小学校を見学しよう!

*上靴を準備して下さい。

3月26日(土)または27日(日)

時間、会場は未定

内容:懇話会総会、

2周年記念講演

私のお薦めの2冊

マイノリティストーリーブック

キャロル・グレイ 著、安達潤 監訳

子どもに対して事前にあらゆる場面を想定して伝えておくことが、動揺を少なくし自信につながると教わりました。挿絵や文字が大きく各家庭での「マイブック作り」に大いに役立つと思います。

青年期のアスペルガー症候群

~仲間たちへ、まわりの人へ~

ルーク・ジャケソン 著、ニキリンコ 訳

ASと診断された13歳の少年が日々の生活での感じ方を自ら書いた本で実にわかりやすい。人と「違う」事に誇りを持つ少年の言葉に前向きになる読みやすい本です。少年にエールを贈りたい!

*上記の2冊、スペクトラム出版社

編 集 後 記

冬休みをはさんで久しぶりの発行です。今後の年度末の行事は苦手な子もいます。慌ただしくなる時期こそ子どもをしっかり見守っていききたいですね。

親部会編集員

シンポジウム2（午後）

「特別支援教育を具体化するために」 総合討論

田中 睦 三浦 高行 田中 康雄

間宮正幸（教育学研究科） 室橋春光（教育学研究科）

（司会：田中） 皆さんといろいろとお話を、やりとりができたらいいなというふうに思います。その前に今回のシンポジウムでは、指定討論として2人の方に指定討論をしていただくことになっております。お2人とも北海道大学大学院教育学研究科の方々なんですが、我々、教育グループの間宮先生に最初にお話をさせていただきまして、その次に特殊教育グループの方の室橋先生にお話しをしていただき、それから皆さんのやりとりをと考えております。では、間宮先生よろしくお願いたします。

（間宮） 教育学研究科の間宮でございます。私は、ここにまいります前に少し病院に勤務をしております。今日のテーマになっておりますような地域ネットワークの現場の仕事をしてきた者でありますので、ちょっとお時間をいただきまして、古い話からまた始めさせていただきます。

私は実は1979年にある学会で、「地域精神衛生活動の取り組み」というのを報告したのですが、これが一番自分の現場生活で一番始めの報告でした。それを報告したときに当時、日本で台頭しつつあった概念である発達保障という言葉をつけまして、地域発達保障の取り組みとして、もう今はないと思いますけど、ある医療図書という出版社で文章を寄せたことがあります。

それ以来、80年代を通しまして、今日のテーマであります「人・地域ネットワーク」といったような分野で、自分が現場に身を置きながら相談活動をしながら動いてきたという経過がありました。90年代になって、臨床心理士なんですけど精神科の方へ移ったものですから少しその動きは鈍りましたが、以来ずっとこのテーマは自分の中の中心的な研究テーマといえますか、実践テーマであったわけです。

今日は特別支援教育にかかわるお三方の報告をお聞きしまして、やはり私がやっておりました80年代と今日の課題は違うのだなと思ひまして、1つは、舞台である地域の生活がやはり相当変わっていると。この20年間の間に、一言で申せば地域共同体のかなり深刻な衰退現象が見られるという中で、そのネットワークという言葉に込められた意味も、20年前とずいぶん違うんだろうなと思ひます。そういう中で、今日は上富良野と石狩の大変貴重な、かなり具体的なお話を聞くことができうれしく思っています。

新しい困難に立ち向かう、新しいネットワークづくりということで、それに特別支援教育が1つの軸になって突き刺さっているといえますか、つないでいるというところが大変面白いなといえますか、興味深いところでありました。

実は私は、田中先生と一緒に虐待防止の仕事も今、仰せつかっているんですけど同じ課題があるなと思ひます。それはやはり地域社会が衰退していく一方で、共同体が衰退していく一方で、こういった特別支援教育や子どもの虐待防止の連絡協議のネットワークづくりとか、これが今、非常に

大きな力になっているといますか、地域社会のネットワークづくり、人と人をつないでいくネットワークづくりの大きな、実際的な課題になっているということで実感をしております。前置きはそのぐらいにしまして、そこで今日は3点ぐらいに渡って私の指定討論としたいと思います。

1つは、80年代からずっとこの20年ぐらい、このテーマを細々と考えていたんですけども、1つ自分自身のやり方も含めて反省点があるんです。それは特に保育の分野などではずいぶん議論をされた形跡があるようなんですけれども、1つは、このネットワークづくりの目的といますか、田中先生が先ほど報告されたと思いますが、誰が何のためにやっているかというところです。我々のかつての地域発達保障などといった概念の中で欠けていたのは、たぶん我々専門家集団が育てるような仕事をするというような意識がやっぱりあったのではないかと。

それはさっき田中先生は調査でお示しなされた、立場の対等性に、対等・平等の対等性をご指摘なさいましたが、それにもかかわるんですけど、どうもあの当時はやっぱり専門家集団が作っていくという感じがしていたような気がします。すなわち、その結果、育つ主体、どちらに主体があるのかということが、ちょっとないがしろにされていたような帰来があったと思います。

今、いろいろな精神科医療の分野ですとか、社会教育やいろいろな分野で、そういう意味では先ほど挨拶なされた研究科副科長の鈴木敏正先生などは、非常に精力的に理論的な検討をなさっておられますけれども、『主体形成の教育学』という著書が鈴木先生にはおありです。主体形成をするのはいったい誰なのかということです、ここが問われないとやはりいけないだろうというふうに思われます。これは私自身のかつての反省も含めましてです。

つまり、それは当事者たちなんです。当事者というのは、もちろん学校の教師も行政の人たちも医療関係者もみんな主体者ですけども、そのときにその主体を形成する人たちが、地域で暮らしていく主体なんだ、我が町で暮らしていく主体なんだ、そういう思想形成も含めた主体形成の教育学みたいなもの、私はそれを今日最も必要としているのではないかと考えてきておりました。

そういう点で今日、大変印象に残りましたのは、上富良野の田中先生方の実践ですけども、司会の田中先生がボトムアップという表現をなさいましたが、先生のボトムアップ的な主体形成の取り組みのように思われまして、大変興味深く、北海道はこういうところがいくつかあるから、すごいなと思うんですけど、やはりこれは北海道で持つ百何十年かの新しい国づくりの、地域づくりの1つの成果なんだろうかななどとも感じております。それが1点で、主体形成はどこに置くかということです。

それから2点目は、これも科長がおっしゃった障害発達支援の観点ですが、これも二十数年、私はこれを細々と考えてきまして、垂直的、水平的、地域総合ネットワークという表現をさっき鈴木先生がおっしゃったのは、まったくその通りだと思いました。長年、子どもたちに付き合っていますと、その子たちがやはり加齢化していくわけです、地域で暮らしています。

ところが小学校教員、中学校教員はその地域で3年とか5年の単位で異動します。そういう中でやはり主体的に暮らしていくのはいったい誰なのか、本人たちと家族たちです。そういう地域の中で暮らしていく主体を育む、そういうネットワークというのはいったい何なんだろうかというふうに考えるようになっていきます。そうしますと地域調査を細々とやっていると、なかなか学校卒業後、義務教育終了後のその主体形成の教育の場がないといますか、そういうネットワークが非常に乏しいということが感じられておりました。

その点で今日のご発表では石狩の三浦主査が、いずれ就労支援ネットワークといいますか、就労カンファレンスチームを作りたいんだとおっしゃっていましたが、それは1つの取り組みかと思いますが、これはやはり早急に急がねばならない課題で、今日は特別支援教育ということで、主に義務教育の課題なんですけど、しかし合わせてプランの中には、即、その後の義務教育以降の障害児教育、発達支援の、そういうプランを作っていく必要があるだろうというふうに思います。それで、もう三浦主査の頭の中には、それがプランとしてお入りになっているということで大変感銘を受けている次第です。

それから、その障害発達支援ということにかかわっているんですが、上富良野の田中レポートで大変興味深く思いましたのは、実はご本人はたんたんとおっしゃっていましたが保健福祉課とのネットの強さというのを大変強いということをご承知でしょうか。これは特出すべきことであろうかと思えます。これは簡単ではないと思います。教育分野と保健福祉分野が、軽々とネットワークする。むしろご発表によりますと保健福祉課の方から問題意識がこちらに投げかけられたというご発言がありましたけれども、それはすごいことだと。

すなわち逆に言えば、それだけ地域の人の、住民の生涯発達支援ネットを考えているのは、実は保健福祉の人たちにも当然あるわけで、むしろ強くあるわけで、教育の側はそれにもう少し学ぶ必要があるだろうと。即、結びつくつながりを求めるということが、教育の側からも、そういうすでにある成果に学ぶ必要があるだろうということを感じました。

これは保健福祉課を今、たまたま出しましたけれど、社会教育が非常に熱心であります。活動が優れた地域では同じことが言えると思います。むしろ学校の方が門戸を開けばすぐにも結び付くような場所がおそらくいくらでもあるだろうと思いますが、上富良野の報告からは、そのような保健福祉、学校外の領域と学校の連携の強さについて教えていただいたという気がいたします。

それからちょっとばらばらで申し訳ありませんが、3点目の私の印象でありますけど、これは日本社会における変わらなさに関する問題意識があるんですけども、特別支援教育といい、虐待防止のネットワークづくりといい、非常に具体的に直面することの1つに地域社会がどうしてこう変わらないかということがあります。例えば三浦主査の上司が、「俺は横文字は嫌だな」と言ったとおっしゃっていましたが、横文字、つまり舶来の方法や舶来の考え方でしか考えられないという、そういう方法論もいくらでもあると思います。

例えばカンファレンスです。カンファレンスなんていう言葉は、たぶん従来の日本にはなかったので、こういうものは定着させて、中身を検討し吟味した上で定着させたらよろしいかと思えますが、田中康雄先生の調査報告のレポートにもあったように、例えば親と教師の、その親の会に対する参加意識、あるいは満足度のずれというご発表がありましたけれども、おそらくその行政マンから教師、さっきの保健福祉士、親、当事者、いろいろな人たちが、いろいろな集まりを作っても満足度と参加意識のずれが起こるんだろうと思うんです。これがいったいどこから来るのかということもいつも思うんです。

そうすると、あまり建設的な意見を申し上げられないので、これからも議論をしていただきたいんですけども、日本社会の変わらなさ、変わりにくさということはかなり根深いものがあって、それが故に田中先生が発表なさったネットワークの困難性につながっているだろうと。ここなんですけど、明治維新以来、百何十年、そして戦後の60年たっておりますけど、なぜかくも変わらない

のかということにむしろ視点をあてておきたいと思うんです。

そうしますと実は、今日ご発表のお二方の実践も変わらない日本的な土壌、あるいは日本の思想的土壌といってもいいんですが、あるいは人間観、いろいろな観の土壌の中に、かなりそれぞれの地域を代表するような取り組みをなさっているというふうにも思えるんです。変わらないといいながら、上富良野では、やはりこれだけのネットワーキングができたのはいったいなぜなのかと。さらに深くお尋ねしてみたいなというふうな思いがあります。

それから石狩の三浦主査の報告の方からありますと、トップダウンというふうに言っているのかどうか分かりませんが、とにかく教育委員会って、あの変わらない教育委員会がこれだけ変わったというのは、私は報告を聞いていて織田信長を思い出してしまったんです。「鳴かぬなら殺してしまおうホトトギス」と、別に殺したわけではないでしょうが、指導委員会もつぶしてしまったというんですかね。そのぐらいの革命的意識がないとやはり変わらない。やはりなぜこれができたのでしょうかということです。

これはたぶん織田信長のようにやらないで、「鳴くまで待とうホトトギス」をやっていたらおそらく変わらなかったのではないかとも思いますし、このあたり3点目の変わらない日本の思想的背景、あるいは生活観、そういう中でそれぞれ2つの地域で微妙に変えていった、変わってきたという、それをご自分たちももう少し、どのように総括されるかを後でお尋ねしたいと思っております。

実は今日、どのような報告があるか分からなかったので、慌てて今コメントをしておりますが、3点だけ申し上げました、どうも。

(司会：田中) どうもありがとうございます。それでは、次の指定討論として、室橋先生お願いいたします。

(室橋) こんにちは、室橋です。今日はとても内容の濃いお話を3人の方々から伺いました。とてもコメントしきれないんですけど、でも昔話をさせていただこうと思います。今日は、田中先生が2人いらっしゃるの、まず田中睦さんの方からですけど、ケース・カンファレンスのお話を詳しくしていただきました。ここから行きたいと思います。

ケース・カンファレンスは、私はとても重要だと思っています。ただ、通常のやはり小学校、中学校とどこでもそうですけれども、ケース・カンファレンスというのはあまり行われていない。もっと行われていいはずの養護学校でも、やはりほとんど行われてないというふうに言った方がいいと思います。とても先生方お一人一人が忙しい中で、ケース・カンファレンスをやっている余裕はないよというのが現実だろうと思いますが、これはことばの教室ということはあると思いますが、それにしてもこれをある程度定期的にやっていけるということは、とてもすごいことだと思います。

そのときに専門家が入るとというのがまた1つ大事なことだろうと思います。専門家という外部の違った見方をする人が入るということが重要なんだと思いますが、どうしても担任の先生は、学級運営という視点からクラスを見ます。あるいは授業をカリキュラムに沿って進めていくときに、この年間計画をどういうふうになさるかという視点から見えています。そのときにやはり勉強になかなかついてくるのが難しい子、それから学級運営上、集団からはみ出してしまう子は、どうしても困った子ということになりやすい。学習面、あるいは行動面でどうしても困ったというふう

見るということが出てくるだろうと思います。

しかし、ケース・カンファレンスをしますと、学校の中のほかの先生から見たその子がどういうふうに見えるのか。それからさらに指導の仕方についても外部の人から見たときに、その子がどういうふうに見えてくるのか。その違った視点で、いろいろコメントしてくれる人の存在というのがとても重要なこととなります。普段の学級運営、授業の中でどうしても自分のやり方というものがあるから指導をしていけるんですけれども、しかし同時にそれは、ある枠に収めた見方を固定していくということにもなります。

ケース・カンファレンスというのは、そういう意味でとても重要な役割を果たす、その時間が本来は学校の中で保障されるべきだろうと思いますけれども、それをともかく田中さんのエネルギーでこれを専門家をずっと呼び続けながらやっていかれるということがとてもすごいと思います。

先生方が視点を変えるきっかけになるのは、どうしても行き詰まったときにどうしたらいいだろうというときに初めて視点がずれていって、そのときに外部の人なり専門家の人がかうではないかということがきっかけになって変わっていくということがたぶん起きます。親からの見方であったり、専門家からの見方であったり、そういうことをやはり田中睦さんは、しょっちゅうコンタクトを取っているのだから、そういうことが非常に田中さん自身に起きやすくなっているし、それをまたほかの人にもそういう形で起きるように促すことができるだろうと思います。

ただ、終わりの方でお話しされたかただと思いますけど、個人レベルで動くのには限界がある。どうしてもやはりシステム、どうしてもネットワークが欲しいというお話があったと思いますが、だいたいスムーズにきちんと一定のレベルで動いていくためには組織が必要になります。組織的なネットワークが公の形で作られていくということが、一定のレベルで仕事をしていく上ではやはり必要になります。しかし、組織としてのシステムがあれば、それでいいのかというと、それはやはり物事の半分でしかなくて、あと半分というのは、私はやはりキーパーソンですね。そのネットワークの中でキーパーソンとなる人の存在だろうと思います。

上富良野町の場合は、まさに田中睦さんが、そのキーパーソンの役割を果たしていらっしゃる。個人的なレベルでの専門家のつながりがあって初めて動けるといえることがあります。それが組織的に保障されている、裏打ちされているということが大事になってくるとは思いますけれども、組織上、それがあれば動くかというところでもない。やっぱりそこには上富良野町だったら田中睦さん、石狩市だったら三浦さんというようなキーパーソン、そして北海道全体で言えば田中康雄先生というような、キーパーソンがいないと動かない。特に最初の段階では、そのキーパーソンが積極的に動いて、そういうものを作ってしまうということがとても重要なんだろうと思います。

三浦さんのお話とも重なってきますけど、上富良野町は私もお邪魔をしてお話をさせていただいたわけですが、人口にすると1万2,000人ぐらいの小さな町です。しかし、それだからこそ田中先生が動けるといえることがあるのだろうと思います。個人レベルで田中先生が動かされたときに動けるわけですが、札幌市で動こうと思ってもこれはなかなか難しい。でも上富良野町では、お互いの顔が見える形で動けるわけです。保健福祉課の課長さんと普段から話ができる、そしてほかのいろいろな教育委員会の関係者とも普段から顔が見える話ができるわけです。

今、間宮先生もお話になっていましたが、上富良野町の保健福祉行政というのはとても質が高いと私も思います。それはやはり出生率が2人を超えているというお話がありましたけど、それがベ-

スにあるだろうと思います。保健師さんたちがとても熱心に活動をしていらっしゃる。それだけではなく、要は出先の人たちだけではなくて、役場の中の行政を担当する人たちの意識もとても高い。それぞれが裏打ちされて動いているわけです。

私も話を田中さんからいただいたときに、教育委員会だと思っていましたから、保健福祉課ですかとびっくりしたんですけど、そういう形で、でもそれを可能にしたのはやはり田中さんがそういうふうに普段からコンタクトを取っていたからということがあると思います。たぶん人口1万人がいいのかどうか分かりませんが、小さな町だからこそ、このネットワークが生きる、田中さんのこの活動を作っているということがとても大きいことだと思います。

それでもなお、まだまだ保健関係と教育関係が具体的に仕事をしていく段階は、まだきっかけを作っているところなのかなと思います。これからどういうふうに具体的になっていくのかというのが課題なんだろうと思いますが、しかしこれは札幌のような都市部ではさらにさらに難しいところで、むしろ上富良野町のような地方からそういう、その地域の合った組織づくりをしていく。むしろ、組織づくりよりも先行して、小さなところからどんどん作って行って、最後に札幌市の重い腰が上がるというふうになるのではないかという気がしています。

三浦さんからは、行政から見た視点でいろいろお話を伺いました。教育行政の部門にこれだけ現場だけではなくて、子どものことが分かる、行政担当の人がいるというのはめったにないことで、まさに間宮先生が言われていました驚き以外の何ものでもないということで、本当に三浦さんのお話を聞いてびっくりしました。

いろいろあるんですけども、とても大きなお話がいくつもありましたが、1つは就学指導委員会を廃止したということ。札幌市では学びの支援委員会と名前が変わりましたが、実際に自主的にその廃止をして、このカンファレンスチームを作ったということがあります。就学指導委員会というのはどちらかというと、いわばお上が判断を下すという機関でした。しかし、石狩市の場合は、カンファレンスチームという形で、ある1点だけにかかわるのではなくて、ずっとその経過を追いながらかかわっていきこうという視点です。これがとても重要なことだと思います。

就学指導委員会の判断は、場合によっては裁判が起きるような状況にもなっていましたけど、やはりそれは保護者の信頼感というものを就学指導という形で得られなかったということがあります。しかし、この三浦さんが先導してやってこられている、このカンファレンスチームという形になると、経過を追いながら、いろいろかかわりを持ちながらやってきますから、その分だけ保護者の信頼、理解というのも得られるということになるだろう。行き違いはそれでもあるかもしれませんが、しかしそれでもこの経過を追ってやっていくというのは、はるかにいい手法になっていくだろうと思います。

それから就学のカンファレンスチームにしても、そのIEPを作っていくということですが、これもなかなかユニークな形になっていると思います。特殊教育の領域ではIEP（個別指導計画）を作ることが数年前から始まっていますが、どうしても学校の中で作ってしまうということになりやすい。それは学校で前から作っているものとどう違うんだということにやはりなってしまうやすいんです。

以前に養護学校の教頭先生の全国大会がありまして、そこに参加させていただいたことがあって、たまたまこの個別指導の分科会で、そこに参加されていた方が、養護学校では昔から個別指導とい

うことはやっている。何でいまさら個別指導計画というものが出てくるんだということをおっしゃった方がいました。

私は、それはやはり違ふと。個別指導なんだけれども、今までの個別指導というのは、カリキュラムから下りてきた個別指導なんです。しかし今度出てきている IEP というのは、つまり今までのそのカリキュラムから下りてきた個別指導というのは、これはいわばレディメイド（既製服）になります。しかし、今度やっていこうというのはオーダーメイドをしようということです。そこが 1 人について何か指導をするという点では同じように見えますけど、そこは違っていかなければならないはずなんです。

しかし、それは学校の中で作ってしまうとなかなかそういうふうになりにくい。これはもう、たぶん石狩市だからできることだと思いますけれども、ほかのいろいろな専門家が、福祉施設の指導員の方とか、または三浦さんとか、いろいろな人が入ってできるというのも、これは小さな町だからできることなんだと思います。やはりその中でお互いにどういふ人か顔が見えて、そういう中で話し合いをしながらそのプランを立てていくということが可能なのも、お互いにそれは顔が見える形で信頼感が持てるんです。メンバーとしてやっていけるということは大きいかと思ひます。

専門家チームのお話があったのですが、今は札幌市と岩見沢市と千歳市に専門家チームがあります。いつつくるか分からないから、もう自分たちでつくったという話でしたけど、私も札幌市にかかわっているのだから、札幌市ですから石狩市のようにはいきませんというか、いけませんし、それから今試験的にやっている段階なので、札幌市に 300 もある学校をとて 1 つの専門家チームで回れるわけではない、これは試験的にやっている段階です。

これから札幌市としてどういふシステムにしていくかということが課題になるんですけど、これもむしろ相対的にいへば、小さな街であるからそれができる。確かに待っているはできなくて、できることはどんどん自分たちでやっていこう、大きな街の都市部の札幌のやり方を見ているのではなくて、見てまねをするのではなく、むしろ地方からどんどん必要なものを作っていって、最後に札幌が動くというぐらいの方が、現実性があるのではと思ひます。

これから就労のカンファレンスチームがつくられていくということですけど、これもやはり石狩市にはいろいろな施設があります。施設というのは、だいたい町外れにあるんです。しかし、そういうところのリソースおよび人材を活用できるというのも、むしろそれは石狩市だから可能になるということもあると思ひます。

この上富良野町にしても石狩市にしても、まずキーパーソンになれる田中さんや三浦さんがいらっしやる。それから小さな街で互いに顔が見える。そういう中で三浦さんや田中さんが活動するということが可能になる。そのことがネットワークをつくるということに直結していくんです。これは、やはり大都市部では難しい。たくさんの方がいろいろな意見を持っているから、どうしても動くときに最大公約数でしか動けないんです。そういうふうになっていくと、結果的にはあまり…、札幌にしかない課題もありますが、そういう場合はいろいろまた動くということになるかもしれせんけど。

ですから、むしろ北海道のあちこちの小さな街から、その地方の特性に合わせた積極的なネットワークをつくって、実績を作っていく、文部科学省ももう上から指導をする時代ではない、それ

それで工夫してほしいということを言っていますけど、まさにそれをこの北海道で、あちこちの街から立ち上げていくということがむしろ現実的で、できることなのではないかという気がします。

最後、田中康雄先生のお話で重要なことがいくつも出てきたと思います。それからまた、いろいろ皆さんのこういうディスカッションが続けばいいと思いますが、親と学校の先生と、それから病院や相談機関という三者が、ネットワークをつくるときの立場をなかなか越えられない限界、連携の難しさという話で、そのときに障害ではないけれども、それは一種の差異だと。その差異というふうに見ることが、結局は自己責任論になっていくという話がありました。

障害というのはいったい何だろうかということだと思います。私は、前からその例として眼鏡というのを出すんですけど、学生さんは、また聞いた話になってしまうけど。私は眼鏡を掛けていますし、この中で眼鏡やコンタクトをしてらっしゃる方はとてもたくさんいらっしゃると思うんですが、眼鏡やコンタクトをした人自身は自分のことを障害者だというふうには思わない。皆さんもたぶん眼鏡を掛けている方は障害者だという認識はないです。

しかし、とても荒っぽい話として、目が不自由だ、これは体が不自由だ。体が不自由であるのは障害だというふうに荒っぽく言ってしまおうとしますと、眼鏡を掛けている、コンタクトをしているというのは障害者だというふうに規定しておかしくないわけです。しかし実際にはそういうふうに認識している人はいない。これはなぜか。しかし、それが眼鏡を車いすに替えますと、やはり話が違って来る、それはどこが違うのか。いろいろあると思いますけど、1つは、眼鏡やコンタクトをしている人はとても多い。むしろ眼鏡やコンタクトをしている人の方が普通、数で言ってしまうと普通というふうにいえるかもしれない。何が普通で、それで何が特殊なのかということは、1つは数が作り出す部分があると思っています。

今話題にしている、いわゆる軽度発達障害は、2年前の文部科学省のアンケートの調査で6.3%というのが出ていますし、それからこの数字は男の子に限れば8.9%という数字も出てきています。1割に近い数字ですから、これはもう特殊な話ではなくて、むしろ普遍的な話とっていいと思います。行動が目立つという場合もあるし、それから変わって見えるという部分を持っている子もいます。しかし、それは障害ではないというふうにしようとした場合に、しかしその違いはやはり見えてくる。その違いをどうとらえるかということです。

こういうときによく言っているので、金子みすゞさんの詩の中から「みんな違って、みんないい」ということがいえます。しかし、そのときの「みんな違って、みんないい」というのは建前になり、実質的にみんな違うんだよというふうに、なかなか世間はやはり認識しないということがあります。

これは田中先生のエレベーターのボタンの話につながっていると思いますけど、私たちは色眼鏡を掛けています、私たちはみんな色眼鏡を掛けている、この色眼鏡を外すことはできない。いろいろな色眼鏡がありますが、私たちはもう人である限り色眼鏡を掛けている、それを外すことはできない。できることは何か、掛けているのだという自覚をすることと、それから薄める努力、それをすることはできます。立場が違えば色が違って、しかしそれを外すということができない場合にできることは、ほかの人は違う色眼鏡を掛けているのかもしれないということと、それからどうやったら薄まるかという努力をするということになると思います。

私も、その連携というのは簡単にいかないと思います。立場が違えば当然そのことは起きて、それをやはり最初からそれぞれのネットワークをつくる者がやはり考えておかなければならない。そ

して、その立場を越えて理解し合うということをしなければ進まないわけで、そのときにやはり眼鏡を取り替えてしてみる。外してしまうことはできないけど、取り替えたときにどういうふうに見えるんだろうか。これはなかなか難しいことで、その前にやはりせめて色を薄めるという努力をすることだと思えます。

そのことは、なかなかしかし基本的に立場が違ふと難しいわけですけど、しかしそれを薄める1つの方法は、先ほどの田中睦さんのお話でしていえば、ケース・カンファレンスをやることです。ほかの人の見方というのを聞くことで、あ、そういう点もあるのかということ色で薄まっていく。いろいろな人の見方を聞くことで薄めるということが可能になると思えます。

そのことがないと田中康雄先生の最初にお話がありました早期に気づいて対応するということがとても重要だというふうに私たちは考えるわけですけど、そこの自主的な仕事をしていくときに、やはりお互いに関係者が理解し合う、理解を深めてそれをやっていくということがないと、いろいろな評価の問題も出てくると思えますし、そのときにやはり行き違いが起きることがあります。重要な時期だけに、微妙な時期だけに、そのところをお互いに、それぞれの立場の人が理解しながら、保護者を支えていくということをやっけないといけないと思えます。

その微妙なところというのは、また色眼鏡の違いが出てしまいやすいところでもあって、そのところをネットワークをつくっていく。ネットワークをつくるときに、お互いに理解し合うということも田中康雄先生が前から言ってらっしゃいますけど、そのことをいかにしてやっていくかと。それは田中睦さんや三浦さんや田中康雄先生がやってこられている、そういう実践の中で、ここに聞きに来ていらっしゃる皆さんが、またその話を聞いて、新しい視点を発掘していかれるということの連続の中で、少しずつ実現していくのではないだろうかというふうに思っています。

(司会：田中) ありがとうございます。それではお2人の方前の方にどうぞ。いくつかご指摘もあつたと思えますが、何か手短にご意見とかございませんか。

(田中睦) 保健福祉課との連携ということで非常に驚かれたということ伺って、自分としては、そういえばどういうふうにつながったのかなとちょっと思い起こしてみました。

私が、この仕事に就いたのは10年ちょっと前なんですけれども、結局、子どもさんを待っているだけでは、今でこそ23名というお子さんに通っていただいているんですけれども、1人だったんです。週1回1時間1人で、私は何をしていたらいいのというようなすごく不安にかられまして、3歳児健診に参加させてくださいということで保健福祉課に申し出まして、それで自分の時間の空いているときに参加したというのが、保健福祉課とより深まったきっかけかなというふうに思っています。

でも3歳児健診をするに当たり、3歳までどういうふうに過ごしてきたんだろうというふうに思って、そうしたら1歳半健診があるということになって、じゃあ、1歳半健診も来ない？ という話になりました。1歳半というよりは半年後の経過を見ているので、ちょうど1歳6カ月健診の日に2歳のお子さんが来るようになっているので来ませんかということが、いうならばもう固定化されて、じゃあ、あなたはことばの相談ということで机を用意しますから、ぜひ座ってくださいというふうな場所まで作っていただきました。それまでは時々、ことばの先生が来ているからちょっと聞

きましようみたいな感じでやっていたんですけれども、そこからどんどんこうしよう、ああしようということで、年度ごとに新しくどういうふうにしていこうかということ、一緒にテーブルで考えてきたなというふうに思いました。

ただ、そういった中から、先ほどあったような特別支援教育という教育の現場での専門用語みたいなものが出てきたときに、「じゃあ、田中だよな」というような感じで出番が来たというような感じですか。ですから取りあえず困っていないというか、何もなくてちょっと寂しい思いをしていましたので、そんなことが自分で知りたい、3歳児ってどのぐらいの、自分でも子どもを育てましたけど、どんなだったかなというようなことで現場に出ていったというのが福祉課との連携のスタートだったのかなと思い起こしてみたところです。

(司会：田中) 三浦さん、なぜできたのかという。

(三浦) 今、田中睦さんがお話した逆のパターンが就学時の健診で、10月から11月までの間実施されます、これは法的なものです。その中に療育サイドの人間がお手伝いをしてくれるというのが1つあります。

それで私自身が午前の発表の中で地域療育推進協議会の専門部会、これに3年前から私は入っていると思います。入っている中で、それこそ専門的な知識を持っている人の方が、こういうような検討をしているんだということが初めて分かりました。じゃあ、これを使わない手はないと、何とか使いたいというので、タイミングも見ながら2年ぐらいずっと考えていました。

そのうちに神戸かどこかが文科省に対して、就学指導委員会の廃止についてという問いをしたんです。その答えが、従来の就学指導委員会に変わるような組織があるのなら、これは構わないという回答があったところでした。その情報を見まして、なぜかという、平成12年の中央分権という法律ができました。それによって、従来から使っていた文科省からの就学基準、それは各自治体に任せられているということになっています。それが1つあります。

道基準を待っていたんですけれども、道からは特に示されることはありませんでした。これは養護学校の、道立学校の就学基準はあります。それに準じるという形で、各地域ではやっていたはずなんです。1つ行政として苦手な分野というのは、一番先にものを変えるということはとても苦手です。先例があって、それが保証されるということが1つの条件になります。その先例を示して、こういうことである、法的な設置の規制はないんだよということを理解してもらおう。

そして動きやすさは何だろうというところを説明しながら、教育委員会内部、そして療育サイドの方の了解ももらいながら、就学指導委員会の廃止について。就学指導委員会というのは午前中もお話ししましたけれども、障害児、障害者の発見、それとその子の就学に関するいろいろなコメントを教育委員会に対して、諮問があったものに対して答申をするという形は、あまりにも行政的ではないだろう。そして就学指導委員会のやってきたことは、果たして諮問に対する答申に当たるのだろうかというような疑問も行政内部ではありました。

さまざまな背景は、裏事情でお話できないこともあるんですけれども、個人情報保護というような観点もちょっと表だって大きく出しながら、だからこういう形に切り替えましょうというような方向を出しました。そして道教委に対して文科省からのこういうような回答がほかの自治体でも

なされているので、石狩とすればこれを廃止して、こういうような専門的な知識を持っている方々の意見も聞くことが十分できるということで、こういう判断をしたのでというような一応お伺いなんですけれど、してみたら無回答です。

「どうぞ自由に」ということで、「じゃあ、自由にやらせてくださいね。余計なことは言わないでよ」というような形で何となくスムーズにスムーズに。タイミングがよかったというのも1つあると思うんです、すべてについて。私はそんなに口上手ではないので「いいからやらせろよ」と言ったら、「じゃあ、やれよ」というような、そんなものです。いいですか。

(司会：田中) 分かりました。そのような動きの中でやってきた地域実践ですが、これから約1時間ほど時間が取れましたので、どうぞフロアの方とやりとりをというふうに思います。ご意見とかございましたら、ぜひ手を挙げていただければと思いますが、いかがでしょうか。ございませんか。

(青山) 北広島から来ました教育委員会の青山といいます。今日は、どうもご苦労さまです。石狩市さんの三浦先生にちょっと聞きたいんですけども、石狩市さんで軽度発達障害のお子さんの実態把握をされたということで書いてありますが、そういうお子さんを把握するために、国の方の調査研究部会等のガイドラインという一応基準等がありますけれども、あれらを使ってやられたのか、それとも一般的な先生方の気づきという形で実態把握をされたのか。

北広島市ではまだこういった部分はやっていないんですけども、進んでいる学校では一部やられているところもありますけれど、なかなか慎重にしていかないと、そういったお子さんを判別するような形になるようにも感じますので、その辺は実態的には石狩市さんはどういうふうに行われていたのでしょうか、お願いします。

(三浦) 本来であれば、文科省の実施した形でやりたかったんです。ただ、それを分析するというような力は、実施しようと思ったときには持っていませんでした。それで簡易版です。これは学校現場だから、まずはLDというものを基礎に、A4の1枚物なんです、設問が5領域の23ぐらいのものにまとめて、どのぐらいの割合で気づきとして出るものか。

まず欲しかったのは、教員がこの特別支援教育というもので気づきというものを1つ持ってほしい。もう最低限のチェックシートでもいいのではないかと、どのぐらいの割合で出るんだろう。それについては、子どもの個人間の発達の違いによって教員が見るということも想定はしていました。おそらく1～2年、3年ぐらいの間ではどんと大きな山があって、ドーンと下がっていくんだろうなということは想定はしていました。もう1つ欲しかったのは学校間の開きというか、地域ごとの、または児童・生徒の大小の開きというものもあるのかと。そういうものまでもし見れたらいいと。最初はそのぐらいのことで本当に簡単なもの、これは後ほどお送りします。

これだけではやはり足りないかと、午前中も言ったんですけど、しかられたんです。「三浦さん、こんなのではだめだよ。これで何を見るの?」というようなこともありました。まずはちょっと私たちの手法でやらせてと。そして二次的なものについては、文科省とほとんど同じような形のもので、ピックアップしてしか、もうできないだろうというのが1つあります、時期的なものもありま

す。私の個人的なものもちょっとありまして、急いで調査をしたというのがあります。

これの実施に当たっては一次検査というか、アンケート調査をする前に、各学校ごとのPTAの会長さん、それと市P連の会長さんに説明をして、こういうことをやりますとご了解をいただきました。こういう了解も取りましたということで、各学校長にお願いをして実施をします。そして中心になるのは、コーディネーターの先生方ですというような流れでまずやって、そこからピックアップした二次検査をしてみて、二次検査だけではということもあって、ただ教員の意見も聞きたいなという先生の指導もあつたりしまして、そういうものを合わせた中で分析をしているというようなことです。答えになっていましたか。

（青山） そのときに実施、今のコーディネーターという話がありましたけれども、実際に担任されている先生方からは、こういったものをやるというのは、いかがなものかというような不協和音は出なかったのですか。

（三浦） そのためのコーディネーターだと思っております。それはまとめて、それは意見としてはいただいています。校長会の中でも説明もしますし、コーディネーターの学習会の中でもしました。そして私が学校説明を4月から始めた中でも、道の調査はあるかもしれない。でもこれも、待っていてもいつになったらなされるのかも分からない。特別支援を進めるに当たって、やはり学校の内部の状態というものも、それこそ、それぞれの先生方が知るべきです。これは医学確定でなくてもいいんじゃない？ 気づきとすれば、おおよそ6.3と言われているけれども、果たしてそうなの？ というような校内データを作ってみたらというような言い方です。それで発達の個人差がある子どもというものも想定しながら一次検査をしたわけです。

（青山） はい、ありがとうございました。

（司会：田中） ほかにご意見、ご質問とかございませんでしょうか。

（桜井） 札幌市内の普通科の道立高校に勤めております、養護教員の桜井と申します。田中睦先生と三浦主査にお尋ねしたいことがあります。中学校を卒業した後のことなんですけど、おそらくみんながみんな地元の高校に進学するわけではないと思うんですけども、就学前から小学校、中学校と当事者や保護者の方にいろいろな形で支援をされてきたと思うんですけど、その後のことは何かかわりを持っていらっしゃるのかどうかということが1つです。

それから2002年に6.3%という調査結果が出て、高校の進学率が今100%に近い形ですから、今どこの高校にも普通に軽度発達障害を持ったお子さんが在籍しているというのは、もう当然のように養護教員の研究会などではとらえています。ただ特別支援教育というと高校だけがすぼんと取り残されてというか、蚊帳の外になってしまっていて、高校がどんなふうにこのことに取り組んでいったらいいのか、どんなことを期待されているのか。期待されていないかもしれませんが、だからその辺をお聞かせ願いたいなと思います、お願いいたします。

(司会：田中) それでは田中さん。

(田中睦) 先ほど私が言いましたように、勤務10年ちょっとですので、初めてかかわったお子さんが、そろそろ義務教育を終えるのかというような時期に来ていると思います。実は私は別のことを地域でやっています、そこで高校の先生と触れ合う機会がありまして、私は懇話会やっているんだけど、ボランティアで高校生に来てもらえないかというふうにお願いをしたんです。それで「いいよ」と軽く返事をいただきまして、高校の先生にアクションを掛けられそうだなというふうに思ったことがありました。

それから地域で田中康雄先生にお越しいただいた私たちの方で、親の会で初めて企画したときに、実は高校に案内をしに直接伺いました。ぜひ、この軽度発達障害について聞いていただきたいんですけどもというふうにお話したんですが、一応出席をいただいたんですが、実際にはお忙しかったようでみえられなかったということです。名前をすでに申し込んでいただいたという、その行為がとてうれしかったので、ビデオテープを持参して、私は、ぜひ時間がありましたら先生方で見てくださいというふうに持っていきました。

それから、私は小学校と中学校の先生方以外に、確か高校の先生も養護の先生でつながりはないんですかというふうに、うちの小学校の養護の先生にお話をし、ぜひ養護の先生にもこういった懇話会に何とか声を掛けてもらえないかと、うちの学校の先生も懇話会に入っていますので、入ってもらえないかなという形で、今伺ったら、お互いにそう思っていたんだなということも感じまして、これからはもうちょっと積極的に、私自身が、これから地域の高校の先生方にも、いろいろな形で企画したものを紹介したいなというふうに今、勇気をいただきました。ありがとうございます。

(三浦) 桜井先生、昨日はお疲れさまでした、驚くような発表をなさいました。今年度については約80人ぐらいの停退学者というなお話があって、320いづらが240人ぐらいの在籍しかないという、えーっというなお話をなさっていました。

結論からいうと、義務教育と義務教育以外の部分の接点は、今まではほとんどありませんでした。ただ文科省が言っている平成17年度は、幼・保、それと後ろの方の高等学校へ対するモデル授業をするということが発表になっていますので、石狩としても道教委の担当の所管にお願いはしています。今の3市だけではなくて、形を変えてもいいからモデル事業をやらせると、それは大学との連携でもいいからということをお願いしました。

その授業の中で、もう1つの接点は、どちらの授業の名前でもいいんですけども、例えば高校との特別支援についてということで、もしそれが当たるのであれば、その中でいろいろな接点を見つけながら連携を図っていければと思っています。それがなくても石狩市では、もう4年ぐらいになります、夏の間にはサマーセミナーと称して、3日間から4日間で義務教育の教員対象にいろいろな教育研究的なものをしています。

延べで約2割ちょっとぐらいの人数しか集まらないんですけども、やはりそういうものの情報が高校の方にも行っています、石狩市には2校の道立高校があります。その生徒指導の担当の方や校長方が理解をしていただいて、このサマーセミナーへの参加ということもあります。そういうものをきっかけにしながら、17年度に行われる特別支援教育というものを、教育委員会が中心になっ

て構わないと思うんです、いろいろなやりとりをして幅を広げていきたいなと思っています。

(司会：田中) よろしいですか。ご質問、ご意見とかございませんでしょうか。

(松井) 今日は教員の立場で、余市沢町小学校のことばの教室の担当をやっています松井と申します。今日は本当に久しぶりに元気をもらうことができたなと思っています。2～3分、もうちょっと長くなるかもしれませんが、愚痴っぽい話になってしまうんですけども。

私は就学指導の担当をしていて、もう10年になるんですけども、ある程度推進役みたいな立場をずっととってきております。本当はこの特別支援教育というものを考えてきて、もう早くこの就学指導というものをなくしたいと、それがもう最大の願いです。特別支援教育になったら僕はもうこの就学指導というものの自体に意味がなくなるんだということを思って、何とかそういうところに早くたどり着きたいなというふうに思っております。

実際問題、教育委員会の担当といろいろな話をするんですが、やはりどうしても先ほど来から出ているように、先例的なものがないと、どこでそんなことをやっているんだと、いや滋賀県の津浦で、滋賀県の話は全然聞いてくれませんので、道内でどうなっているのかという話になるとなかなか例がないというところで、今日は本当に元気の出るお話を聞かせていただいたなというふうに思っております。

地域連携ということで余市町も大きな小学校が3つ、小さな併置校といいますが3校、それから中学校が3校ということで、面白い構図になっているんですけども、本当に連携をしようと思っただけですぐにでもできるような地域なんです。ところが私がずっと思っているのは、幼と小の連携が本当にできない。それからもう1つは、小学校と中学校の連携すらもできない。私もことばの教室を終了させてといいますが、中学校に送り出して、中学校で、まずこの子自体をきちんと理解していただくことが大事だから、ちょっとお話をさせてください。引き継ぎはいいんです、引き継ぎは受けるというんです。校内研修の中で先生方みんなに理解していただけないだろうか。もうだめなんです、入れてくれないというところで、非常にいろいろな思いをしているんです。

ある学校でも、やはりそのお子さんの保護者の方がじゃあ特殊学級に入りたいというのと、非常に積極的な動きを取る。そうではなくて、通常学級で何とか支援をしてもらえないだろうか。それはもう人手がないのでできませんということをもう何ケースも経験してきています。幼、小の連携といいますが療育の部分からも、私は過去4年ぐらい前まではことばの担当として幼児の指導も、通園センターと連携をして10人ぐらいを見ていたという時期があるんです。通園センターの方がI型に移行するという目標に取り組みをやってきましたので、そういう移行ができたということで、1人担当が増えるということで、これから学校教育の方も多岐に渡って忙しくなるので、幼児の方はそちらの方にお任せしますと。

それがあだになりまして、その連絡協議会といいますが、連携協議会のところからも呼びかけが掛からなくなってしまって、一切連携ができなくなってしまいました。子どもを主体にしたネットワークではなくて、利害がどうしても絡んでしまうといいますが、それで今まで終始してきてしまっていたということを感じています。

やはりキーパーソンとして仕事をやり切れなかったという後悔もあるんですけども、やはりこ

れから特別支援教育という方向性は、お金の方はどうなるのか分かりませんが、方向性はもう明確に示されているというところでの地域連携というところで、やはり成功例が私は非常にまだ少ないのではないかというふうに思っています。それを本当に広げていくということが、すごく今は重要なことというふうに思ってお話を伺っていました。

特に就学指導委員会をなくすというところで、私はいくつかの疑問と申しますか、この辺はどうするのかということがあります。まず1つは時期的な問題です。私の理想的な、と申しますか、できるだけ通年的に、当然カンファレンスをベースにしていきますから、短期集中では無理だということで、ある程度長期に渡ってということになれば、当然今までの学校保健法的な、10月1日がうんぬんということではなくて進んでいかなければいけないだろうと、まずそこに1つ壁があるのかなという気がしています。その辺を実際にどういうふうにお考えで、実際にできているのかということですか。

それから、やはりどの子どもにスポットを当てていったらいいんだろうかということですか。軽度発達障害のLD等の子どもたちの学校教育側の気づきというところからスタートをする手当てと申しますか、対応というのがもちろんあると思いますけれども、幼、小の連携の中で療育カンファレンスと、それから就学カンファレンスと申しますか、そこがきちんと連動できるということが、僕はあまりいい地域にないものですから想像がつかないんです。やはり療育関係の方と、どういような今まで積み重ねがあったのかというふうに思うんですが、その2点を聞かせていただければと思います。

(間宮) 今の方の質問なされたことに非常に関連しまして、先ほど私がコメントで織田信長を出しましたけれども、つまりそのぐらいに革命的にアクション、モーションをかけないと、そういう行動をしないとたぶんできないようなことだと類推しているんです。ところが三浦主査は先ほど、タイミングがよかったなどというふうにまとめられましたが、たぶんそうではあるまいと。もう少しその辺を広げるためにも、行政間で広げるためにもどういようなアクションをなされたのか、あるいはその動きの哲学のようなものを含めて、この際ご披露いただけないでしょうか。

(三浦) いや、困りました、松井さんからどういような質問をされるというのは。大先輩で、北後志でもう中心になってやられている方からの質問というのはとても緊張します。

まず幼、小の連携というところは、実際のところはこれからです。発達支援センターの中の専門部会が中心になって、毎年6月に市内の幼稚園、保育園に対してのアンケート調査をずっと続けてしているんです。だから数とすれば片手で50とか、そのぐらいのものは上がってきます。まずそれをベースにする。

教育委員会のサイドとしては幼・保育園に対して同じような形で、来年度就学にあたりといういような形の、やはりこれも観察表の提出というのを求めています。そういうものをベースに、発達支援センターがやはり中心になっていただいて、保護者との連絡を取り合っていただいて、どういような形でどういような人間がいる、今度小学校に上がるにあたって10月、11月ではなくて、今どういような時期にお話を聞いてみませんかというふうに振ってもらっています、というやり方をしていました。

こういうようなカンファレンスチームを立ち上げて、実際は成果という形のものはまだ挙がっていません。5月1日に一応設置していきますということになって、いろいろ都合もありまして、実際にという動きはもう9月からなんです。就学指導委員会的な10月1日基準の児童名簿でというようなこととなりますけれども、今回はまた就学児健診というのは11月にずれ込んで、とてもひどい目に遭ったといえますか、保護者面接は果たして十分にできたのかということもあります。たまたま人数的なものが少なかったのも、何とか保護者等への通知、12月20日までの分には間に合ったというようなこともあります。

これはやはり先ほど午前中にも言ったように、明日考えればいいわ、みたいな感じでまず動こうと、動いた中で気づきというのはたくさんあるだろう。そういうものをいろいろなスタッフの方からの意見としても、受けとめながら変えていこうというようなことが基本です、本当に格好がいいものは何もないです。

本当にこれもタイミングです、タイミングしかないです、ラッキーという感じですが。このことに関して、それこそ先はどうなるんだと言われても私自身も分からない。じゃあ就学指導委員会をこのまま残しておいて先どうなるのか、これも分からない。じゃあ、いいタイミングなんだからまず変えて、反省を含めながら、また改良しながら動いていけばいいじゃない。ただ行政的な不都合というよりも、ご本人と保護者、そして受け入れる学校としての不都合さえなければ、形はどうでもいいのではないかというのが発想です。

その辺をもう理解していただいたつもりです。批判があれば即来るだろう、例えば保護者から、学校からということがあると思います。今のところは、まだ就学通知が出たばかりで、そのお子さんの状態も学校は、来週あたりから入学説明会があるはずなので、それからのいろいろな反応があるかもしれません。うちでは受け切れないというケースもあるかもしれませんが、その辺は1月の入学通知と一緒に保護者面接で知り得た情報、それと幼稚園、保育園からの情報、それと発達支援センターに通っているお子さんからの情報をまとめて学校には通知しております。これは当然了解を取っております。

それ以外の細かいことといえますか、例えば医学的なもの、診断書が必要な場合、それは保護者が直接学校にお渡しくださいということにしています。あと療育ファイルから、今度は、就学になってからのファイルとかいろいろファイルの続きがありますが、それは今、私はいろいろな資料は持っていますけれども、道のモデル事業が一段落したときに、ファイルの形態はこういうものが使いやすいうように、きっと結果として発表されると思うんです。

それをベースに、できることであれば全道というよりも管内の中で教員が移動しますので、同じような様式にそろえてみたいという、今、思いを持っています。だから慌てて石狩としてこういうものはいかがでしょうというものは出していません。答えになっているような、なっていないような、何せタイミングだったと。言葉で説き伏せるということはまったくありません。

(司会：田中) 一番難しいところだろうなとは思いますが、どうでしょうか、ご意見はほかに。せっかくですので何かご意見、お話しなんでしょうか。あと30分ほどまだあります。はい、お願いします。

(竹森) 札幌市内の南郷小学校というところでことばと聞こえの教室を担当している竹森といいます。今日は非常に具体的なお話をたくさん聞くことができ、非常に勉強になりました。

私はたまたまですが、ことばと聞こえの教室関係の全道の研究会がありまして、道言協というのがあります。その事務局の仕事も今しています。室橋先生のお話にもありましたが、札幌は非常に大きな街で、行政もそうですし、現場もなかなかいろいろな情報はたくさん入ってはいても、すぐに大きく変化が出てくるということはないんです。

道言協の会員のいるいろいろな規模の市や町で、いろいろな取り組みがされているということを知り、会員から聞いたときに、非常に身近な方々とのつながりを大事にして、いい取り組みをされているなという話を聞いていたのですが、今日のお話はそれに加えて非常にまた、ボトムアップ、トップダウンというお話もありましたが、両方からのそういう具体的な取り組みの一番新しい様子を聞くことができ、非常に勉強になりましたし、非常にまた刺激を受けて帰ることができて、まだ帰っていませんが、帰れることになってよかったです。

それで特に思うのは、行政の保健福祉と教育委員会サイドということで、なかなかつながりができなかつたり、あるいは進まなかつたりということで、田中睦先生が立場としていらっしゃる幼児ことばの教室というのが、非常にその両方にまたがりやすい位置にいなから、でも所管は教育委員会というようなことで、道内にも何か所かそういう教室がありますが、福祉サイドで所管しているところがあったりとかさまざまです。

そういうところで場所的に非常にいい位置にいらっしゃるのかなとも思いますし、1点は同じ町内にある母子支援センターとの役割分担といいますか、その辺のことは今後の、先の見通しとしては、どのようなことをお考えなのかと。その辺は保健福祉の方のご担当の方といろいろ話題になったりもするでしょうし、また最近では北海道の早期療育システムの見直しということで、今日の北海道新聞にも2面あたりに出ていましたが、成人の方も含めて、そういう障害者の24時間の相談支援の機関を設けるというようなことが載っていました。

障害のある乳幼児の早期療育システムということにとどまらないで、乳幼児から成人まで含めた、そういう障害者福祉の制度が今大きく見直しされている中で、上富良野の田中先生のお立場などでは、そういう母子通園が上富良野と中富良野という所管、範囲ということも先ほどのご説明の中でありましたけれども、その辺を1つの自治体でやはりどういう方向を考えるのかという場合に、幼児の部門でどうするのかというあたりは、非常に大きなこれからの問題として出てくるのではないかと思います。その辺を一つ、お考えをお聞かせいただくとありがたいと思っています。

それとあと、私はたまたま実は石狩市民として、石狩市がそのようなカンファレンスチームという形で立ち上げたということは、市民としても非常に関心を持っていたわけですが、今日は詳しくお話を聞くことができ非常によかったです。

それで1つ、先ほど教育委員会の今のお立場になる前に、不登校のこととかいろいろな仕事に携わっていらしたということでお話があったんですが、支援教育という形で取り組んでいるような都道府県もあるようですけれども、先ほどのそういうタイミングがよかったというお話があるんですけども、やはり支障がないけれども、なぜ変えなければならぬのかということには、支障がないだけではなかなか新しいものに変えるということは非常に難しさがあるんだろうと思うんです。

タイミングがよかったからと、じゃあ、そのタイミングとは何なのかというあたりで、その辺は

三浦主査が先に不登校とかいろいろな分野を取り組まれていたことと、もしかしてつながりがあるのかなと思ったりしていたものですから、その辺のタイミングというあたりのことを、もう少し詳しくお聞かせいただけるとありがたいなと思いました。以上です。

(田中睦) 竹森事務局長にはいつもお世話になっております。時代の流れで、今だからこのお話ができたかなというふうには実は思っています。今後どういうふうになっていくんでしょうというとき、お話を今伺ってそうなんです、今度どうなっていくんでしょうと一緒に私も思っております。

ほとんどの幼児ことばの教室が、先ほども竹森先生の方からお話がありましたように、数が少なくなっただけで、いくつか残っているというふうな状況です。母子通園センターが充実してきたことに合わせて、地域によって異なり、合併したり、ことばの教室が母子通になったりというような形をこれまで見てきています。

ですから私の街の方には2つあるということがとても、ほかの地域の方々から見るとどうしてということがきつとあるのではないかというふうに思っています。タイミングを逸したということもありますし、そのときに、そういった母子通が拡大されたときに教育委員会の方で、ことばの幼児の方は先生方と一緒にやっているのでこれは残しますというふうに、教育委員会の方で判断して現在まで残っています。

これからということ考えたときにはどうなっていくかは分からないんですけども、福祉行政の方に、ある意味吸収されていくのではないかというふうなことも考えられます。支援・いうことが出てきた中で、まして私が1人で、それもただで23人というお子さんを、いうならば母子通に本来は行く方々が来ているのではないかという話もあります。であれば、また母子通に来てくれて、そうしたらというような予算絡みのことになっていきます。

ですからある意味で母子通は嫌だけど、小学校にあることばの教室だったらいいわという気持ちの親御さんたちの通園も多かったことは確かですが、徐々にその傾向が変わってきているというふうなこともありますので、タイミングではありませんけれども、そういった時期がいずれ来るであろうということで、準備だけはしておきたいといつも思っています。

(三浦) 本当にないと言ったら何もないといえますか。先ほどもちょっとお話したんですけども、重要な療育部門での対応というのがしっかりなされているということが1つ、確信として持ちました。それで私が足しげく、今日は担当も来ていますけれども通って、これから、りんくるという総合保健施設の中に入っているんですけども、そこに1時間行ってくると、その担当の彼女が来てくれる。こういう連携という形のものを目で見せるということが、まず大事だったということが1つあります。

確かに見せてきた。そして口頭でいろいろな報告をしていた。そして私は不登校と少年指導というふうな形のものでやってきていたんですけども、1つは午前中もお話した子ども相談センターという組織が保健福祉部と教育委員会とで、ほとんど主体は保健福祉部ですけども立ち上げることができた。それが今度は子ども室というふうな形のものに向かっているという情報も入っていた。

それで、まず療育部門のしっかりした基盤があるということが確認できて上司もそれを分かっている。今の部長が保健福祉部の前身の部長だったということも1つあると思います。それでやはり

基本は、そこの療育部門が1つある。そして不登校のところでは、就学指導委員会の中の専門部会に、実は2年ほど学校適応専門部会という形のものを作って試してみたということが1つあります。これは実質的な動きはなかなかできなかったんですけども、この中に入れて中学校あたりに対するアピールといいますか、そういうものを事前に行ってきたということが1つありました。

それとやはり根本的なのは、就学指導委員会の意味というのは何だろうということですね。相談というのは、なかなか言葉で乗っているか乗っていないかという自治体もあると思います。やはり発見が主なもので、それだけでこれだけの諮問、答申という形のもの、実は行政的な手続きとすればかなりのものがあるんです。例えば1枚出してそれに対しての答申、そして資料が付くと、ただそれだけのものではない。審議会的な要素がある。審議会的な要素を果たして就学指導委員会というのが持っているんだらうかということは、内部で結構話はしていました。

それに変わるものの一貫性を持ったというところに重きを置こうよという確認は、それぞれ、決済文書をあげるのではなくて事前に確認は取れてました。話題提供として教育委員会に5年ぐらいおまして、その中で方向性というものの確認を取っているから決済を上げてと。そして一部機構の改革があったので、私が持っていた特殊教育と不登校と少年非行の部分の、残ったのはその特殊教育の部分でした。

それだけで専門でやらせてという確認が取れたので、じゃあ、組織も全部一気に変えてしまおうと。だから就学指導委員会だけ1つ変えようと言ったら、かなりの抵抗があるかもしれないけど、みんな動いている中で、ぴよんところいうのを変えたら、大して気づかれないうと。20%ぐらいの割合での意識しかないかなというような勢いの中でやったというのは実は手法です。こんな答えでごめんなさい。

(司会：田中) かなりアバウトな展開で何とかなるといった事になってきてはいるんですけど、実際はきっと違うんです。どうでしょうか、ご意見はございませんか。

(コジマ) 札幌市内の高等養護学校に勤務していますコジマと申します。三浦先生にお伺いしたんですけども、石狩市にいる障害のある方々が中学校を卒業していくと、道立学校に行くパターンが多いと思うんですけども、そうなったときに市教委と道教委という教育委員会の橋渡しの部分があります。そこについて先生ご自身がどのような戦略を立てていらっしゃるのか、タイミングだけではうまくいかないのではないかという気がしていますので、そこら辺の今の思いをお聞かせ願えればありがたいなと思います。

それからもう1点なんですけれども、今日いろいろなお話を伺う中で、私自身もいろいろなことを頭の中で考えました。考えていくうちに訳が分からなくなったところが1点あるので、お2人の提言された先生方からもお聞かせ願いたいんですけども、連携とかネットワークというものは果たして、どう捉えたらいいんだらうかということが、1つ分からなくなってきました。

例えば相談とか困ったときの支援のサポートの流れが、ずっと続く形が確立できたのが連携なのか、それともこの人でないといけない、ほかの人でもその機関では対応ができる。人を増やしていくことも学校なり機関ではその機能を果たすことになるので、そういうことを増やしていくこと

が連携になっていくのか。理想論は両方なんですけれども、今新しくネットワークや連携を構築していく際に、どちらの方に重きを置かれているのか、あとどういうふうに考えていったらいいのか。

今日いろいろなお話を伺う中では、一教員ですので、個人的なネットワークはこういう機会を通じていろいろつながってはきているんですけども、それをネットワークというふうに学校として底上げしていくときには、課題は学校内にあるのではないかという気がして、どうもそこは他機関との連携とは切り離されたところに課題があるような感じがしているんです。それというのは、いいのか悪いのか訳が分からないという感じがあったものですから、そこについても一言お話を伺えればと思います。2点よろしく願いいたします。

(三浦) コジマさんらしいような質問でとても答えづらいです。義務教育が終わってから高等養護というのは、実際に私のところに連絡がないんです。今回ケースがあったと思うんですけども、それが学校からは来ていません。実は別の保護者からは入っています。学校側とすればきっと発表があってから、何らかの形で私のところに来るのかもしれませんが。そこまでは今の段階ではうまくネットワーク的なものは取れていません。

私の方も目がそこまではなかなか行き切れていなかったということもあります。そういうこともありますし、近々に作りたい就労絡みのカンファレンスチームにぜひ入ってほしいと思います。異動対象になっているかもしれませんが。今度、内輪での研修会をやります。その中で一番多い参加を誇っている高等養護です、11名でしたか。それは構いませんので。

それと連携とかネットワークというのは、ルールを敷いてしまってもどこかでやはり変更があるんだろうと思うんです。だから大筋のものだけ思い描いて、そして例えば学校に対しても、このような簡単なチャート、フローみたいなものを作ってお渡ししているというのが実際なんです。実のところは、ある程度進んでいったところで、1回実線で引いて、太い線で引いてみて、そこでまた見直しをしてみようかというのが、それこそ明日考えようというそんな雰囲気なんです。

やはりあちこちのいろいろな研究をしている方々とか、実践をしている方々とのネットワーク的なことは本当に必要だと思います。何を話したらいいんだろうという青木さんは、管内の担当者の協議会ではなくて、連絡、一杯会的なものでも、ひとつ立ち上げるのも必要なのかと。それぞれのやはり自治体によって事情がありますので、形が1つで決まったものは作れないと思います。

できることはなんだろうというような探し、そしてやはり自治体間でも、ある程度の競争的なものを検証してみるということも必要になっていくのかなと思うんです。1つ、管内には千歳がモデル地区になって、二通さんが中心になってやっていますので、忙しいんだろうけども彼が中心になってやってもいいし、それこそ四半期に1回ずつの連絡会議をして、どこに詰まったとか、これが連携かなと思うので、そういうものも必要になっていくのかなと思います。いかがでしょうということで投げ掛けをしながら睦さんに。

(田中睦) ちょっとした機会に町内の学校、先ほど小学校は5校あるというふうにご紹介いただきましたが、その中の3校を回られた先生とお話をする機会がありまして、その先生からお話を伺ったときに、自分の学校が町で1番なんだと思っているんだよと言ったときに、ちょっと非常に驚きました。何ていう驚きか分からないんですけども、1番だって思うんだってところが非常に

私は、えっという感じで、それじゃあ、1番になりたかったらいろいろなことを、困りを外に出すことができないんじゃないかなというふうに思ったんですね。

ある1つの小学校のお子さんも通じて、困りにながしかの形で違う視点からものを見ていただけないかなというふうにちょっと私の方からアクションを掛けさせていただいたんですけども、他機関も絡んでの学級のお話し合いを設けたことがあったんですけども、結果的にはそのお子さんが他校に転出という形で、あれだけいろいろな形で考えることを提案させてもらったけど、結果的には管理職の考えで、やはりそこにお子さんがいられなくなったんだというふうに思ったときに、非常に憤りを感じたんですけども。

何か、連携ということを考えてときに、それぞれ自分が1番というふうに考えているのかをもう1回見直しを、町内でネットワークをというふうに考えたときに、あ、難しい壁が意外にそこにあっただなというふうにちょっと、最近気づく機会がありました。私の方で、このように黙ってられないので、懇話会を立ち上げたところだったんですけども、どうして学校の通常学級の先生がいないんだろうねと、何人もいないよねって、こういう話って通常学級の先生が聞くととってもいいお話なのにねって、でも言っている仲間は私たちみたいなところをどういうふうに拡大していったらいいかなというところを今後生かしたらいいなという。

通常学級の先生が、この上富良野町の町から転出されたときに、「いや、あの懇話会には俺はつなげていくよ」というふうに彼が言ってくれたときにはすごくうれしくて、「現場にやはり役立つ話題がいっぱいあったよ」と言ったときには、何か転出入の多い街なので、親御さんもそうですけども、ここで元気を付けてもらったのを、ほかのところに行ったら元気を継続していくようにやっていくよというふうに転出入の多い街だからこそ、ずっといないかもしれないけれども、いい街であったというふうに思っていただけのようなことがどれだけできるかな、なんていうことを何かいつも考えながらです。

保健福祉課の保健師さんとも話はするんですが、「出生率は高いけど残る人は少ないよね」って、「これだけ一生懸命いろいろやっても何人残るんだろうね」なんていうようなことをいつも言いながらも、その目の前を一生懸命かけているというような私たちなので、ちょっとネットワーク連携というところに、どこまで迫られるか、私もちょっと見えない中で話をさせていただいていますけれども、そんなような日々の繰り返し必ずというふうに思います。

(司会：田中) まだ少しお時間があるんですけども、あとお1人かお2人、ご質問ございませんでしょうか。せっかくの機会です。

(石川) 北広島市内で中学校の特殊学級におります石川と申します。三浦先生どうもありがとうございました。私も就学指導の方に少しかかわっておりまして、ピネー検査とかを掛けたりすることがありますけれども、就学カンファレンスチームで学校から依頼のあった児童生徒の各種検査がありますけど、当然就学指導だと判定というか、軽度、中度とか、そういうところに生かすところが多いわけですけども、ここではピネー、WISC、K-ABCと入っていますけれども、ここでどういう場で依頼が、こういう検査をかけてほしいというのがあるのかとか、また検査を実施した後どのように指導に生かしていく場面とか、そういう例がもしありましたら教えていただきたい

いなと思います。

(三浦) 実際にやってみたのは小学校の例があります。取ってみたのはK-ABC、あと私はWISCじゃなくて、田中ビネーを取ってやってみます。そして、何人かのスタッフでそのやはりアセスメントをして、IEPミーティングという形の中で感想です。例えばK-ABCであれば認知処理様式がある程度はつきり出てくるだろう。それに沿った、例えば読みの遅れがあるという訴えがあったとき、じゃあ、それに対応するものは指導書的なものは実のところあまり出ていないんですよ。

ただ、よく講演会で先生方が使われているところを見ていたから、あ、これなんだということで取り寄せてみました。確かに、これは効果的な指導本だと思います。そういうものは確かにあります。それも基に実践をしてもらう。それはショートで例えば1カ月それをやってみてもらう、そうしたら非常に入っていた。またはK-ABCの結果でも、えーっというような、学校での気づきというものを、観察をしてもらってからお話が来ますので、えっ、この検査結果とはちょっと違うよねという。

じゃあ、原因は何だったの？ というところになれば、ああ、やっぱり経験不足だったのかなというのもアセスメントの気づきの中では出てくるなど。そして、実証をしてみたときというのは、実際に授業とか午後の何と言ったらいいのか、オープンクラスといたらいいのか、そんな中でもそういう形のもの1つ実証として出てきています。それを17年度から各学校で優先順位というのかな、ニーズとしての高い順位からそれぞれ手分けしてやってもらおうというのが今の構想です。

今までできなかったというのは、その検査を実施する人間が、できる人間がいなかったというのが大きな要因ですけれども、検査をできるスタッフがそろってきたよというのが背景にあります。

(司会：田中) どうもありがとうございました。10時から始めて、かなりいろいろな立場の話が聞けたのではないかなというふうに思っております。特に教育委員会という行政の人間がここまで話をするというのは、おそらく文科省の柘植さんの話と別に、現場の状況がよく分かった話になったんじゃないかなというふうに思っておりますが、まだまだ今後これがどのように進展していくのかというようなことや、幼児から、あるいは義務教育終了後、自立に向けてというような部分についての課題など、まだまだたくさん残しております。

このシンポジウムはあと1回、3月13日に第3回目のシンポジウムを予定しております。もう少しここで触れきれなかったことをそこで述べて、またシンポジストを立てて話をさせていただければというふうに思っております。

ネットワーク連携、つながりというようなことをどうやって言語化していくかということになりますと、とても難しく、あれこれ考えるんですけども、結局中心でやっている者は、タイミングだよ、運だよというか、そのとき、そのときにより仲間に出会えてというような、本当に何か具体化しにくい、言語化しにくいような状況がありますが、今日は実はそちらに帯広の第1回シンポジウムで来てもらった北川さんという方を覚えてらっしゃるかと思うのですが、おかゆの会を作っている、彼と一緒にやってくれている養護の、保健室の先生ですね。彼女も実は参加していただいていた。

意見を彼女に振ると慌ててしまうでしょうから、後でということ、でもきっと何かそういう動きや、今日の三浦さんや睦さんの話などを聞いていても、あまり本人は言わないんですけども、実はものすごく自分の中で持ち出しをしていて、さまざまな研修会、さまざまな機会を使って城西町というのは滋賀県ですし、そこに見学に行ったり、そのデータを集めたりというような、非常な自助努力をされているものですから、おそらく実証をして、実行をしてデータを持っているということなので、行き当たりばったりで言っているように見えても、かなりの経験を積んでいらっしゃる方です。

そういう状況の中でいう意見の発言力ということが、おそらく組織を動かしているのではないかなど。そちらの竹森さんもLD教育士、特別支援教育士になっておりますし、北海道は結構LD教育士、特別支援教育士の就任率が高いというふうに言われております。いわゆる職種を越えた形で、さまざまな技術を身につけて今の新しいテーマに沿って機動力を発揮しているというところがバグにあって動いているんだなというふうには思っています。

私たちはそれが本当にネットワークなのかというようなことの議論もいろいろ出てくると思いますが、別にそれをしなければいけないということでもないとは思いますが、そうせざるを得ない実情の中に、実は特別支援教育で何をしたいとかという、あるいは今の教育がどうだとかという前に、おそらく今日ここに立っておられる9人の方や今日のフロアの方もそうですが、やはり実際に子どもたちの今を放っておけないというような非常に素朴な思いから派生しているんじゃないだろうかというふうな。

そこがなかなか言語化しにくいので、特別支援教育とかシステムとしてどうだとか、就学指導委員会を廃止すべきか否かという議論の前の哲学、思いというところが、おそらく人を結び付けてこういった動きを綿々とさせているのではないだろうかというふうな思いを持っています。その辺がなかなか議論になりにくいところでもありますし、おのおのの思いというところ、それが参加を通して具体化しにくいと思うんですが、おそらく今後も何らかの形でこういう動きを発信していきたいなというふうに思っています。

3連休の真ん中でいろいろな行事が立て込んでいる中、しかも睦さんと三浦さんには私の不手際から短い準備期間の中で準備をしていただき、そのために皆さんへのいろいろな案内が遅れたということをおわびしたいと思います。お2人の指定討論の方にも非常に実りある、また大きなテーマをいただいたと思っておりますし、それを3回目に生かせるかどうかというのは、また検討させていただきたいなと思っております。

コマーシャルとしては3月13日に3回目、このテーマでの最後のシンポジウムを今のところの予定としては、えじそんくらぶの高山恵子さんに来ていただくということで内諾を得ております。彼女と一緒に東京の幼稚園で展開しているリソースルームという幼稚園でのIEPプログラム、個別保育プログラムを作ってリソースルームを運営している主任保育士に来ていただく予定でもあります。

それと今日のお話をずっと伺っていて、1つ大きく欠落していたのは今、話題に上がっている子ども自身の声が聞こえていないということでした。これはまた議論になるかと思うのですが、心理検査をする、特別支援教育をする、何らかの判断をするという我々と心理検査をされる、判断をされるという側の子どもの声というものは、やはりちゃんと聞かなければならないなと思いまし

て、予算と時間が許せば子どもたちの声をたくさん聞いているノンフィクションライターの品川裕香さんにちょっと声を掛けて、来ていただけないかというような思いを持っております。

第3回目に、またたくさんの方々が時間を作って参加していただけたらうれしいと思います。それとこれは間宮先生も先ほどちらっとお話していただいた虐待の問題の部分でチラシが1枚入っているといます。今年の9月3日、4日に北海道で初めて日本子ども虐待防止学会という研修会が始まります。

これは昨年までは学会ではなくて、日本子ども虐待防止研究会という名前で動いていたのが、今年度初めて学会活動として札幌で開かれます。虐待の問題もおそらく底辺にある子どもへ対する我々の考えというのは近接しているのではないかなと思っておりますので、お時間が許される方はぜひ、9月3日、4日多数参加していただければうれしいなというふうに思っております。

今日は本当に長丁場、非常にお疲れだったと思います。最後まで参加していただきまして、どうもありがとうございました。演者の方々と指定討論の方に拍手をしてねぎらうということで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

2.2.1. 第2回シンポジウムの解説

特別支援教育と地域連携

—小解題—

教育臨床講座（教育臨床心理学分野）

間 宮 正 幸

1.

2005年2月12日、場所を移した北海道大学学術交流会館において、「特別支援教育と地域連携」と題する私たちの第2回・シンポジウムが開催された。朝からの大雪の中、しかもほぼ直前の広報にもかかわらず、100人を大幅に越える関係者が参加し、会場は熱気に満ちたのである。参加者の顔ぶれを見ると、教育行政関係者、保健師、発達支援センター職員、療育・保育の関係者、教員、スクールカウンセラーなど実際にテーマにかかわる人々が目立った。研究者の参加も思いのほか多彩であったことが嬉しくもあり、また、驚きでもあった。

かく申すのは、1980年代、学習障害（LD）が話題になり、マスコミの取材が殺到した大集会でさえ、医療と障害児教育に関係する一部の専門職種が参加する以外、不安と不満の日々を過ごす当事者・家族の参加が大半であったと記憶するからである。なにより、学校の教師と学校教育関係者が登場しないということが惜しまれたのであった。当時、今日の特別支援教育につながる領域で、「連携」を謳うにはずいぶんと距離があった。それは、時期尚早ということだったのか、あるいは、わが国が抱える固有の制限であるのか、議論はいつも空回りなのであった。実際、今日に至ってなお同様であるけれども、人々の〈共同・協働・協同〉にかかわる議論は、往々にして少数派に与することになる。または、マイナーな位置を自覚せざるをえないのである。

そのようなわけで、20年来、この特別支援教育領域に若干のかかわりを保ってきた立場からは、第2回の報告がはじまる前から「成功の徴候」を感じたのではあった。もっとも、主催者側にいるものとしては、それが手前味噌ということになるのなら許しを請う以外にない。

2.

第2回シンポジウムでは、全体テーマを「特別支援教育と地域連携—実践現場からの報告」と題して、三つの報告がなされた。第1回（2004年11月23日）の北海道・十勝からの諸報告が少なからぬ波動を起こし、人によっては尋常ならざる興奮を感じたと聴くだけに、第2回も大いに期待されたのである。報告と議論の全容を、ぜひ本報告書でご覧いただきたい。

第一の報告は、上富良野町幼児ことばの教室・田中睦氏からで、「幼児から就学へ・その後の連携の試み」と題うったものである。これまでの経過を、順を追って、体系的に示された。これを「ボトムアップ的」と感じてそのように表現された会場の声を共有したい。誰が特別支援教育をやるのかと思案したら、やるのは私だと思い、そして大事なことは、皆で考えて実践することだと悟ったということになる。そのプロセスが甚だ貴重である。

筆者も指定討論者として述べた（というより感激してコメントしたといったほうが適切である）が、公開事例検討会の存在、保健・福祉と教育の普段からのつながりといった内容を聴くに及んでは、スライド最後に映されたラベンダーの花畠を思いおこさずにはいられない。あの色とりどりの

美しい花を咲かせるために、長い厳冬の季節を越し、それからいかばかりの下準備がなされるのであろう。学校の教師が、保健福祉課職員と日常のつながりがあるということひとつとっても、目下のわが国ではカモン・センス (common sense) とは言いがたい。普段からのつながりが下地にあるうえに、相当の努力をなさっていることが伺える。

田中睦氏は、最後に「既存資源での連携を考える」と述べられた。その土地で暮らしてきた人だけが発する強い響きがあった。かつて、富良野の子ども虐待対応の報告を聞いたときにも、同じような印象を受けたことを想起する。この場合、機関の連携は人々の連帯に通ずるのであろうか。

第二の報告は、石狩市教育委員会学校教育課・三浦高行氏のものである。これが、どれだけ只事でない実践報告であるかを了解いただけるだろうか。上富良野町でも、教育委員会の動向は今後を見るということだが、石狩市では、教育委員会が特別支援教育に、いわば主体的に取り組みだしたのであるから驚きに相違ないのである。教員には必ず転動がある。したがって、教育委員会レベルでしっかりしたシステムを形成しておくことは実に重要なことである。今後の市民への浸透とこの活動の発展が期待される。全国の関係者が、これを伝え聞いてインパクトを感ずることができるようになることを望みたい。

石狩市と上富良野町は地域の成り立ちがそれなりに異なる。そのぶん、それぞれに配慮すべき点や勘所が違ってくるだろう。筆者は、かねがね「こころの産毛」(中井久夫)が暮らしのなかから生えてくることを願ってきたけれども、ふたつの報告は、間違いなく地域からの声を聴いたという思いである。

第三の報告は、長きにわたって公立病院児童精神科医として北海道内を隈なく歩き、地域連携をあらゆる面で追及してきた田中康雄氏の現段階における専門的なまとめと提案である。ただし、題は、「地域連携の困難性について」となっている。内外の理論的検討を重ねてなおも、地域における実践は困難なことがあらためて理解される。その困難に分け入るのが私たちの研究の課題でもあると自覚する。

田中康雄氏は、ここでも最後に、「批判する前に、まず『大変だね、ご苦労様』と声をかける」ということを忘れていない。実質、そのような配慮が連携を生み出すのかも知れない。

3.

第1回の十勝の報告に続いて、このような企画が実現したことを素直に喜びたい。これは、人をつなげるにすぐれた精神科医である田中康雄氏や北海道障害児教育の発展に尽力する室橋春光氏ら私たちの同僚研究者に負うところが大きく感謝申しあげるしだいであるが、何より、すばらしい息吹を感じさせてくれる実践とその背景・基盤が北海道に存在することを見出したことが頼もしい。特別支援教育と地域連携というテーマの追求において、人間の成長を見守る地域づくりと共同という視点のない実践はまず考えがたいことが理解された。

ささやかなれども、長い冬を越して多彩な美しい花を広げるラベンダー畑と共に、嬉しく誇らしくなるシンポジウムであった。

2.2.2. あたらしい時代の〈人・地域・ネットワーク〉形成

特別支援教育と教育科学

教育臨床講座（教育臨床心理学分野）

間 宮 正 幸

はじめに

各所で特別支援教育関連の検討が行なわれている。筆者も、折を見て参加し、時にはシンポジストとして議論に加わってもきた。にもかかわらず、2004年度に、3回にわたって企画・実現した北海道大学大学院教育学研究科主催“「特別支援教育と地域支援プログラムの展開」研究プロジェクト・シンポジウム”は、実際、ほかに見られないほど充実した内容に思われたのである。主催者側の者としては、自画自賛の類は慎まなければならないけれども、何より、企画や議論の内容にもまして、そのように感じさせてくれる実践があることを共に喜びたいものである。これについては、〈小解題〉でもふれた。

本稿では、教育科学の過去・現在・未来という観点をふまえて、むしろ、積極的にその謂を考えることにしたい。

1. 特別支援教育と城戸らの教育科学

諸矛盾をはらみつつのスタートをきったかに見えた特別支援教育にかかわる議論が、一定の進展をもたらしている。初等教育から中期高等教育に関する限りは、教育実践の展開においてなにかのインパクトを与えることは間違いない。そして、特別支援教育が、学校教育における教育課程の検討をうちにふくむところの学校づくり・学級集団づくりの議論などに連なるのも当然のことであろう。さらには、これが、今後、学校教育内部から地域連携や人々のつながりを求める議論へと発展していくことが期待される。

しかし、当事者である軽度発達障害などがかかえる子どもたちの、人間生涯における成長という視点に立つならば、所与の課題は、人間生活の全体に及ぶものにならざるをえないことがただちに理解されてくる。彼らの人生展望は、決して易しいものではないのである。そのことをまずもって知っておいたほうがよいかもしれない。今般の一連のシンポジウムが与えた手応えとは、この点にかかわっている。

筆者が、このような子どもの成長とその支援について考える際、常々、われわれの先達、城戸幡太郎・留岡清男・奥田三郎らの研究と実践を回顧し参照しようとするのも、これとけっして無縁ではない。留岡（1964）や奥田が、北海道家庭学校の子どもたちの少なくない部分が知的障害をもち、尚且つ、人間形成に影響を及ぼす幼少期間の家庭環境の過酷さをあわせもつことに痛哭の涙を流して、教育と福祉の問題に取り組んだことが思い起こされる。留岡は、綿密な行動観察と記録の点検から、子どもたちに、異常な程度の破壊性、異常な程度の忘却性、さらには異常な程度の不平性をみたのであった。また、奥田は、同校卒業生の予後調査から「幼少時の人格形成の条件における欠陥」についてあえてふれている。これが、当時の非行少年の心理であり実態というのであれば、今日の発達障害と子ども虐待の問題にその類似を見ることはたやすいことに違いない。

このように見るならば、今日の特別支援教育の検討という場合においても、ある面で城戸・留岡・奥田らが考え実践した場合と同様のことが、全体としては課題となってくるように思われるのである。したがって、この問題を突き詰めていくなれば、かつて、教育科学研究会に集った城戸らの「教育科学」研究の現代における再生という課題がもちあがってくるのではあるまいか。城戸(1931)が掲げた「教育科学としての人間学」の立場にたつ研究と実践の必要、すなわち、「教育は人間を問題として社会を発達させる」という観点を自覚せざるをえなくなるということである。

ここでは、城戸・留岡・奥田らが果たした歴史的な功績とその評価については繰り返さない。北海道家庭学校を出自とする大泉(1979)の迫力の論考に再度学ぶことを勧奨するのみであるが、少なくとも、「日本の生活を問題にする」とした城戸(1951)の基本的スタンスは共有しておきたいのである。「地域連携」という実際の困難性は、われわれがわが国の地域における生活者であることに由来するからである。

さて、われわれのシンポジウムの成果があるとすれば、今という時代に、社会の継続・発展において重要課題であるところの〈つながり〉というテーマが、特別支援教育を通して具体的に見えてきたことかもしれない。諸科学の総合―つながり―によるのでなければ、特別支援教育がかかげる本来の目的である、各人の人間としての成長を保障する研究と実践はむずかしい。

われわれは、今日の特別支援教育について議論を行なっているが、ここで、過去に幾度か紹介・検討が行なわれてきた城戸(1950)の『北大教育学部の構想』他を思い起こして、創設の理念と使命についても一度議論に付しておくのも意義があろう。

城戸は、「北海道に教育学部が創設されたのは、北海道の開発にとって教育が重大な使命を有するからである。開発は科学、技術の問題であると同時に、それらを開発の目的に利用する人間の教養が問題である」と冒頭述べていた(原,1976)。第2次世界大戦後、数年が経過した時点における北海道開発を想定してのことであるから、今日のわれわれの課題がそのまま城戸の構想のなかにあるわけではなかろう。しかし、開発が、単に産業資源の掘り起こしでないこともあきらかであり、われわれが受け継ぐべきは、人間の教養を問題としたところにある。

自然と調和した人間の発達、という意味でのdéveloppementなるロマンス語系フランス語に託された深い意味合いを辿れば、それは人間の内に潜在する可能性の顕現化ということになるだろう。特別支援教育の研究と実践に際して、われわれが検討すべきは、究極的に、かかる意味での開発・発達の計画化と具体化であり、特別支援を必要とする人々、また、それを実現する人々の教養の問題にはかならないのではないか。

城戸の心理学における特徴のひとつは、全体へと統合する志向と、社会のなかで子どもを位置づけるところにある。戦前期の1930年代、城戸は、教育科学研究運動のなかで、いち早く「精神薄弱」問題を中心にした障害児教育(保育)研究部門を組織し、教育科学や心理学、児童学研究においても統合して研究しようとしたところみたのである。「普通教育学」と「特殊教育学」、「一般心理学」と「精神薄弱心理学」を分離・分化させてとらえるのではなく、統合しようというそのころみは、まさに先駆的なものであった。さらに、「現在の日本の生活を問題にする」ということこそ、城戸のひとつの到達点なのであったろう。これが、今日という時点においてはどのようなことであるか、われわれはこれを特別支援教育研究の一課題としなければならないように思っている。

そして、かかる観点から見れば、70年の後によりやくにして「特別支援教育」の議論が起こ

るのは、まさに、遅きに失するの感もある。少なくとも、城戸が指摘したような、「現在の日本の生活を問題にする」という基本的な視点を忘れまい。このような観点から彼らの成長・発達を考えるならば、その具体的なひとつのかたちとして、発達支援・地域生活支援のネットワークが、医療・福祉・教育が一丸となった行政と民間の区別のない実践が期待されることになる。

2. 職種間、専門の垣根を越えて

ここでいうあたらしい時代とは、必ずしも明るい徴候を示すものではない。むしろ、国際動向のなかで、経済指標をしかと見ればあきらかなように、わが国は「人口減少」「格差拡大社会」に向かっている。端的に言えば、現行の状況が持ち越されるならば、総人口が減少するなかで貧富の差が拡大していく時代だということである。ようやくはじまったばかりの特別支援教育に関する議論だが、それをけっして学校教育のなかに閉じこめてはならないということを冒頭からことさらに強調したのはこのことである。

議論の渦中にあるだろう子どもたち・若者たちが、貧富のどちらに属することになるだろうか。卒業後に彼らがどのように就労するか、どのような住宅に住むのか、結婚をするのか、子どもはもつのか。それらの結果が、一律に決まっているというわけではないにしても、われわれは、彼らの人生過程にまつわる多くのことを議論して、実際に手だてをうつ、すなわち保障するののでなければ何ら特別支援になりえないのである。

教育福祉論の青木ら(2003)が、現代日本の「見えない」貧困を、生活保護受給母子世帯調査をもとにあきらかにしている。北海道家庭学校の子どものたちの少なくない部分が、発達障害をもち、かつ、人格形成の条件の欠陥に苦しんできたことをわれわれは忘れることができないのだが、今議論されている特別支援教育の行く末が、社会と家庭の「貧困」の問題に大きく規定されていることもまた明瞭である。さらには、文化的再生産の理論から教えられるように、特別支援教育は、広く社会のシステムのなかで冷厳な眼差しを向けて議論される必要があるだろう。

分断・対立・競走は、今日の世界を席卷する潮流であろうけれども、われわれは、足元からこれを取り越えるのでなければ、ここで考える広い意味での「特別支援教育」をつくりだすことができない。遅れて議論がはじまったぶん、特別支援教育に関する議論は、全体を考え、統合を志すものでなければならないと言える。心理学・特殊教育学のほかに、思いつうだけでも、教育方法、教育福祉、社会教育、産業教育、教育社会学、高等教育、健康スポーツなど多くの研究領域がかかわっていることがわかる。地域に根ざした実践活動は、この問題が総合的なことであることを示唆している。職種間、専門領域間の垣根など一掃されなければならないことがわかる。

シンポジウムに一定の充実感をもたせたのは、このような意味での実践の重みであったろう。第1回(2004年11月23日)、第2回(2005年2月13日)における北海道内の各種の実践は、筆者には驚きでさえあった。

3. あたらしいネットワークの形成

高校教員の山田(2005)が、「思春期を支える教育と医療の連携—技の連携・仁の連携—」と題する修士論文を提出している。特別支援教育にかかわる問題が、丸ごと高等学校に持ちこまれているにもかかわらず、実際は、各校の裁量に委ねている現実を直視し、主に教育と医療の連携に焦点

をあてて実証しようとしたものである。

現実とは、「世間一般に考えられているより、遥かに多忙な現代の教育現場に、破格の専門性と人間力と実行力を要する教育相談が根付かないのも無理はない」というものであり、学校教育相談における連携がほとんど実現しないまま今日に至っていることである。そして、内外のあれこれの連携に関する議論を整理して、わが国における地域の独自の連携方法や連携の思想が求められることを指摘しているのが興味深い。筆者（間宮、2003）も、子ども虐待に対応する連携の問題にふれて、わが国の「世間」にじゅうぶん留意した動きが必要であることを述べたことがあるが、特別支援教育の推進における連携とてまったく同様である。

引用は筆者の責任で一部文言を変えてあるが、山田論文の結論部分要約を以下に掲げる。

1. 連携ができるかどうかは、そこに何があるかではなく誰がいるか、自分と個人的な人間関係が構築されているか、相互に信頼しあえるかが重要な鍵になっているのである。したがって、「組織ができた」「連携しよう」「そうしよう」と、瞬く間にできる性質のものではない。また、必ずしも、巨大な組織として成長しなくてよい。

2. 連携を構築しようとするなら、ある程度の時間と、積極的な努力と、他者を信頼していこうという前向きな姿勢と、利他的・肯定的・楽観的な思考が必要である。

3. 連携するまでには、「探す」「知り合う」「親しくなる」「助け合う」という段階を積み重ねなければならない。

ほかにも重要な結果が地域調査から得られており、以上の3点を指摘するに留めるのは無理があるけれども、「連携」研究において誰もがぶつかる混迷した実態をあえてこのようにまとめるのも意味があろう。山田が、ことさらに「技の連携」と並べて「仁の連携」というのは、われわれのシンポジウム企画・推進の中心にあった精神科医の田中（2001）が、連携とは、「子どもを取り巻くすべての関係者が、できるだけ情報を共有し、全員で悩み、苦しみながらも前進すること」ということに近いかも知れない。その際、田中は、①対等である、②目的が共有される、③連絡をとりあう、④協力しあう、⑤各自の役割を遂行する、といった基本的なことを踏まえている。

ここで、先の城戸構想に見る、「開発の目的に利用する人間の教養が問題」になる。又の引用になるが、城戸（1951）の古い発言を再現してみようと思う。

「将来を考えての現在の子どもなんでしょう。現在の子どもたちに自分たちの地域を知り、それを自覚して、こうしなければならないという自覚を与えることです。これが教育だと思うな。それが教師の力だが、自覚を与えるときに現実を理解しなければならないでしょう。その現実を教師が理解し、子どもたちに理解させることがつまり科学的方法だと思うんです。これには子どもの心理もしらなければならないし、社会的環境が子どもにどう作用するかというその社会的環境の性格もしらなければならない。そこにきびしい科学的方法が適用されるんです。」

ここでは当時の地域における第一の専門職であった教師が登場している。現在なら特別支援教育にかかわるすべての職種にあてはまる。子ども・若者の自立を促す教育における連携と連帯と科学的精神の涵養いうことにほかならない。現在の発達支援、地域生活支援の実践の基本はこのような観点にあり、まさに、「地域に立つ支援者」の観点というべきであろう。

引用文献

- 青木紀編著 2003 現代日本の「見えない」貧困 明石書店.
- 原 正敏 1976 生産教育—城戸生産教育論はどう生きているか— 城戸幡太郎先生80歳祝賀記念論文集刊行委員会編 日本の教育科学 日本文化科学社 242-288.
- 城戸幡太郎 1931 人間学としての心理学の問題 理想 (人間学特輯号), p 953.
- 城戸幡太郎 1950 北大教育学部の構想 北海道教育評論, 第3巻, 7号. (大泉溥監修 2001 文献選集 教育と保護の心理学 昭和戦後初期第7巻城戸幡太郎集 クレス出版収録)
- 城戸幡太郎 1951 対談: 教育科学運動 これまでこれから 教育, 再刊第1号, 40-46.
- 間宮 正幸 2003 ネットワーキングと渡る「世間」 北海道子どもの虐待防止フォーラム・専門職のための子どもの虐待に関する研修 (札幌学院大学)
- 大泉 溥 1979 日本の教育心理学—1930年代日本の教育科学運動から学ぶ— 心理科学研究会編 教育心理学試論 三和書房.
- 田中 康雄 2001 ADHDの明日に向かって—認めあい・支えあい・赦しあうネットワークをめざして— 星和書店.
- 留岡 清男 1964 教育農場五十年 岩波書店.
- 山田ゆかり 2005 思春期を支える教育と医療の連携—技の連携・仁の連携— 北海道大学大学院教育学研究科修士論文

執筆者紹介・執筆順（執筆分担）

吉藤さゆり	新得町立佐幌小学校養護教諭	2.1
北川 和博	幕別町立白人小学校教諭	2.1
内田 雅志	帯広大谷短期大学社会福祉科講師	2.1
佐々木浩治	足寄町役場福祉科福祉係長	2.1
青木 紀	北海道大学大学院教育学研究科教授	2.1
坪井 由実	北海道大学大学院教育学研究科教授	2.1
田中 康雄	北海道大学大学院教育学研究科教授	2.1.1 2.2
室橋 春光	北海道大学大学院教育学研究科教授	2.1.2 2.2
田中 睦	上富良野町幼児ことばの教室言語指導員	2.2
三浦 高行	石狩市教育委員会特別支援教育担当主査	2.2
間宮 正幸	北海道大学大学院教育学研究科助教授	2.2 2.2.1 2.2.2

編集に携わった人

朝比奈千絵
有本 裕美
上西 知子
葛西 康子
加藤 拓
今野 邦彦
坂東佳代子
藤田 真理
堀井 靖代

発達・学習支援ネットワーク研究 第4号（非売品）

特別支援教育と地域支援プログラムの展開

2005年8月29日 印刷

2005年9月1日 発行

発行者 〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

北海道大学大学院教育学研究科 鈴木 敏正

印刷所 北海道印刷企画株式会社